

中央ユーラシア東部における初期鉄器文化の交流

田中 裕子

目次

序章	中央ユーラシア東部における初期鉄器文化研究の狙い.....	1
	1. 研究の目的.....	1
	2. 新疆出土の初期の鉄器をめぐる研究.....	3
	3. 鉄関係の用語について.....	8
	4. 本論文の構成.....	11
第1章	中国における鉄器利用のはじまり.....	14
	1. はじめに.....	14
	2. 中原で出土する初期の鉄器.....	15
	3. 周辺地域での鉄器出土状況.....	21
	4. 考察 新疆から中原へ.....	23
	5. 結び.....	24
第2章	中国北方草原地帯における鉄器の受容と展開.....	28
	1. はじめに.....	28
	2. 隴東・寧夏南部地区.....	29
	3. オルドス・河套地区.....	36
	4. フフホト・岱海地区.....	41
	5. 結び.....	46
第3章	南シベリアにおける鉄器の受容と展開.....	50
	1. はじめに.....	50
	2. 最初期の鉄—隕鉄.....	52
	3. トゥバ.....	55
	4. アルタイ.....	59
	5. ミヌシンスク.....	60
	6. 結び.....	64
第4章	セミレチエとイリ河流域における初期遊牧民文化の交流.....	68
	1. はじめに.....	68
	2. 研究略史.....	69
	3. セミレチエの初期遊牧民文化.....	69
	4. イリ河流域文化.....	75
	5. 考察 鉄器利用の発展と交流.....	78
	6. 結び.....	80

第5章	新疆ウイグル自治区における初期鉄器時代研究の枠組みと出土鉄器の集成	83
1.	はじめに	83
2.	新疆の地域区分、時代区分に関する研究	83
3.	周辺地域との関係	88
4.	新疆出土の初期の鉄器をめぐる研究	92
5.	結び	98
第6章	新疆ウイグル自治区出土鉄の分類と編年による時期区分	103
1.	はじめに	103
2.	研究略史と課題	103
3.	分析の対象と方法	104
4.	分析	106
5.	考察	115
6.	結び	116
第7章	新疆ウイグル自治区における鉄器の受容と展開	121
1.	はじめに	121
2.	地域・時期区分と新疆出土の鉄器	124
3.	分析と考察	138
4.	結び	143
終章	中央ユーラシア東部における初期鉄器文化の交流	152

図版目次

図 1	紀元前 1 千年紀の中央ユーラシア.....	1
図 2	本論で対象とした地域.....	2
図 3	鉄と炭素の状態図.....	9
図 4	北京市平谷県出土遺物.....	15
図 5	台西村出土の鉄刃銅鉞.....	15
図 6	浚県辛村の銅鉄複合器.....	16
図 7	虢国墓地出土の隕鉄製鉄援銅戈.....	16
図 8	虢国墓地出土の人工鉄製銅鉄複合器.....	18
図 9	西北地域出土の人工鉄器.....	19
図 10	磨溝墓地出土の鉄器.....	19
図 11	ヤンブラク墓地出土の鉄器.....	20
図 12	中国における初期の鉄器出土範囲の拡大.....	22
図 13	本章の対象とする遺跡.....	28
図 14	隴東・寧夏南部地区の鉄器.....	31
図 15	隴東・寧夏南部地区における青銅器と鉄器の出土比率.....	35
図 16	オルドス・河套地区における出土鉄器.....	37
図 17	オルドス・河套地区における青銅器と鉄器の出土比率.....	41
図 18	フフホト・岱海地区における出土鉄器.....	43
図 19	フフホト・岱海地区における青銅器と鉄器の出土比率.....	45
図 20	南シベリアの鉄器出土遺跡.....	51
図 21	アフアナシエヴォ山隕鉄製ブレスレット.....	54
図 22	トゥバ出土の鉄器.....	56
図 23	ゴルノ・アルタイ出土の鉄器.....	59
図 24	タガール文化の鉄器.....	61
図 25	南シベリアにおける鉄器の受容と展開.....	65
図 26	セミレチエ及びイリ川流域文化の遺跡.....	68
図 27	前期サカ文化の遺構と遺物.....	70
図 28	後期サカ文化の遺構と遺物.....	72
図 29	烏孫文化の遺構と遺物.....	74
図 30	新疆の地域区分.....	85
図 31	出土鉄器 工具 刀子.....	93
図 32	出土鉄器 工具 錐.....	94
図 33	出土鉄器 工具 釘.....	94
図 34	出土鉄器 工具 針.....	94

図 35	出土鉄器 工具 鎌	95
図 36	出土鉄器 武器 短剣	96
図 37	出土鉄器 武器 鏃・戈	97
図 38	出土鉄器 馬具 銜・鑣	97
図 39	出土鉄器 装飾品	98
図 40	鏃各部の名称	105
図 41	分類の基準	105
図 42	メリューコヴァの分類	105
図 43	南タギスケンの編年	107
図 44	周辺地域の出土鏃	107
図 45	新疆出土の青銅有蓋鏃	112
図 46	新疆出土の青銅有鋌鏃・鉄鏃・骨鏃	113
図 47	新疆ウイグル自治区における遺跡の分布と地域区分	125
図 48	ヤンブラク墓地出土の鉄器と青銅器	127
図 49	クムル盆地・バルクル草原第二・第三期の鉄器	128
図 50	ヤンハイ I 号墓地 5 号墓出土の鉄器と青銅器	129
図 51	トルファン盆地出土の鉄器	130
図 52	チャウフIV号墓地出土鉄器と青銅器	132
図 53	チャプチガン、チュンバク墓地出土の鉄器と青銅器	133
図 54	イリ河流域ジュンガル盆地西北地区の出土鉄器と遺構	135
図 55	タリム盆地南縁出土の鉄器	136
図 56	武器・工具における青銅器と鉄器の比率	138
図 57	青銅器・鉄器の器種別変遷図	139
図 58	鉄器出土の変遷	142
図 59	新疆ウイグル自治区における鉄器の受容と展開	144
図 60	前段階 隕鉄利用の拡大	153
図 61	中央ユーラシア東部における人工鉄をめぐる交流	156
図 62	中央ユーラシア東部における初期鉄器文化の交流	157

表目次

表 1	隕鉄製鉄器.....	17
表 2	西周末春秋初の人工鉄器	20
表 3	春秋前期の出土鉄器.....	20
表 4	中原における初期鉄器のまとめ.....	21
表 5	隴東・寧夏南部地区.....	34
表 6	オルドス・河套地区.....	40
表 7	フフホト・岱海地区.....	44
表 8	中国北方草原地域における鉄器の受容と展開.....	46
表 9	初期遊牧民文化における南シベリア出土の鉄器.....	53
表 10	セミレチエと新疆イリ河流域の比較.....	78
表 11	安志敏（安 1996）の地域・時期区分.....	85
表 12	梅建軍（梅 2000）の地域・時期区分.....	85
表 13	鞏国強（鞏 1997）の地域・時期区分.....	86
表 14	韓建業（韓 2007）の地域・時期区分.....	87
表 15	分類の基準.....	105
表 16	鉄器出土遺跡の区分.....	137
表 17	鉄の器種別出土点数.....	139
表 18	第一期の青銅器と鉄器の比較.....	140
表 19	第二期の青銅器と鉄器の比較.....	140
表 20	第三期の青銅器と鉄器の比較.....	141

序章 中央ユーラシア東部における初期鉄器文化研究の狙い

1. 研究の目的

現在の中国西北部に位置する新疆ウイグル自治区（以下、新疆）は、中国の歴史書で西域と呼ばれ、中央ユーラシアの交易路として栄えた地域である。ここで言う中央ユーラシアとは、ユーラシア大陸の中央部に带状に続く草原・乾燥地帯を指し、モノやヒト、情報や思想が往来したシルクロード交流の舞台である。

中央ユーラシアは歴史地理学的にみて、サヤン山脈－アルタイ山脈－天山山脈を中心に、東西に二分できる（藤川編 1999）。新疆はその中央ユーラシアのほぼ中央に位置し、文化・地勢的に東部に属する。古来より独自の地域文化が栄えた地であり、また同時に、様々なモノ、人、文化の経路・交流地でもあった（図1）。

そうした中央ユーラシアの文化交渉史の中で、鉄器の利用と鉄冶金技術の伝播に着目する時、西アジアと東アジアの間に位置する新疆は、大きな意味を持つ地域である。新疆からは、1980年代以降発掘調査の増加に伴い、漢代以前の出土鉄器の報告が増加してきている。そしてその年代は早いもので紀元前1000年前後に相当するとされる（陳 1989）。これは、中国中原の西周時代前～中期に併行する時期である。そして、その後も継続して新疆の鉄器の出土が続いていく。

一方、中原における人工鉄は、西周時代末期から春秋時代初期の三门峡虢国墓地における虢仲、虢季墓の鉄援銅内戈や玉柄鉄剣が現在、周知される最も古い出土である（河南省文物考古研究所 1999）。新疆の他、甘粛・青海省を含む中国の西北地域に目を転じれば、

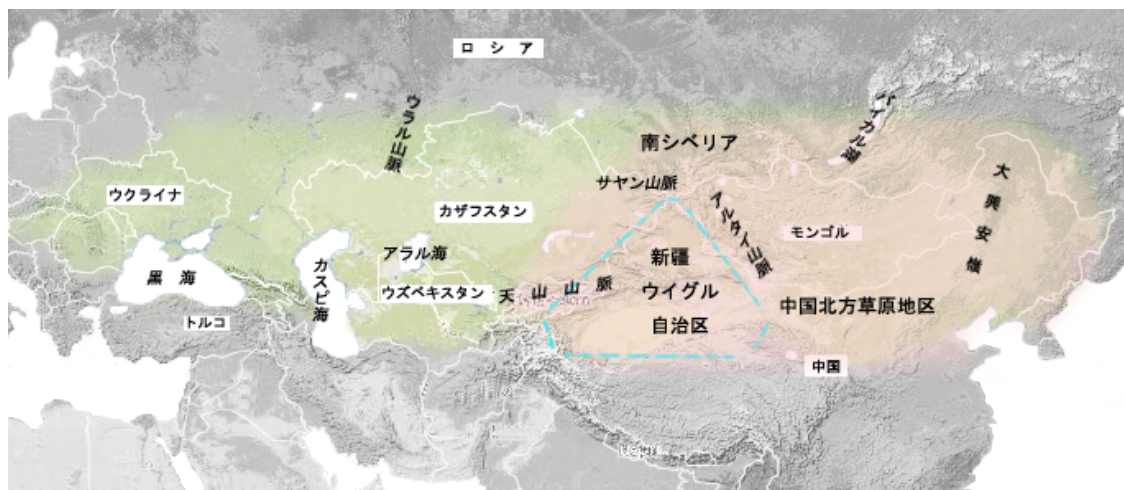


図1 紀元前1千年紀の中央ユーラシア（緑：西部、赤：東部）

甘肅省から紀元前 14 世紀という、極端に古い人工鉄の出土はあるが、その後継続しないので、この資料については一旦保留とする（後述）。西アジアから東アジアへと鉄利用の文化が伝播したのだとすれば、中国の西北地域、特に新疆出土の鉄器は非常に重要な意義を持つといえる。

また、新疆は中央ユーラシアの草原乾燥地帯に位置し、牧畜とオアシス農耕による独自の地域文化を築いてきた土地でもある。かつて江上波夫が指摘したように、黒海沿岸など中央ユーラシア西部、スキタイやサルマタイの文化圏においては、紀元前 1 千年紀初頭に鉄器が出現すると同時に、鉄器の利用が急速に拡大していく。その一方で、中国北方草原地帯や南シベリアといった草原乾燥地帯の東部では、鉄器の出現以降も青銅器の利用が盛んである（江上他 1936）。そのため、中央ユーラシア東部の紀元前 1 千年紀においても、「北方系青銅器文化」、あるいは「オルドス青銅器」の名が示す通り、青銅器に着目した研究が主体であった。しかし、青銅器に出土の中心があるとはいえ、鉄器も一定量以上の出土があり、時代は確実に鉄器文化へと移行している。特に新疆では近年、この時代の出土鉄器の報告が増加しており、紀元前 1 千年紀は地域文化における鉄器の利用は漸次、拡大しているといえる。

こうした状況を踏まえ、本研究は新疆を中心に中央ユーラシア東部における鉄器をめぐる文化と技術の交流を明らかにすることを目的とする。

新疆からは紀元前 1000 年頃という早い時期に鉄器の出土報告があるが、紀元前 1 千年



図 2 本論で対象とした地域 ■中央ユーラシア東部 □本論で取り上げた地域

紀の前半に溯る鉄冶金関係の遺跡は新疆では見つかっていない。新疆の鉄がいつ、どのような経路でもたらされ、拡大、発展していったのかを検討する為には、周辺地域の概要を整理する必要がある。よって、本論文では第1章で導入として中国における鉄利用の始まりについて、中原・西北地域（甘粛・陝西省）・新疆について論じる。第2～4章において、新疆の周辺に位置する、中国北方草原地帯、南シベリア、セミレチエといった各地域について論じる（図2）。本来ならば、新疆の東に位置するモンゴル国の状況についても考察すべきであるが、紀元前1千年紀の出土鉄器の報告事例も少なく、本論ではとりあつかっていない。第2～4章では、各地域における初期の鉄器の受容と展開について説明するため、紀元前1千年紀を中心に出土鉄器の集成を行う。その後、時期ごとに鉄器と青銅器の出土数の比較を行い、特に武器や工具といった利器が鉄へと置き換わっていく様相を検討した。こうした周辺地域の状況を踏まえ、第5～7章で新疆における鉄器の受容と展開について論じる。中央ユーラシア草原地帯東部における鉄をめぐる文化と技術の交流関係を明らかにしていく狙いである。

2. 新疆出土の初期の鉄器をめぐる研究

それでは、まず、本研究の背景として、新疆の鉄をめぐる研究史について整理する。

前節でも触れたように、現在の新疆は、中央ユーラシアを文化的に二分したときの中央東部に位置する。当地区からは、紀元前13世紀から前11世紀とされるヤンブラク墓地第一期の墓から鏃、剣先、指環、刀子などの鉄器の出土報告がある。特に鉄器については紀元前11世紀、西周時代前—中期併行期と考えられている（新疆維吾爾自治区文化庁文物処他1989）。これは、人工鉄では中国全土において最初期の出土例である。一方、中央ユーラシア東部の草原地帯に目を転じれば、紀元前7世紀とされるトゥバのアルジャン2号墳から、金象嵌の鉄製鏃と金柄鉄剣、金柄鉄刀が出土している（Gosudarstvennyi Ermitazh 2004 pp. 49-53）。南シベリア一帯で見て古い鉄製品の出土例となったが、それでも紀元前7世紀である。新疆の鉄器は、中国内地と比較しても、また、北西部に隣接する草原地帯との比較の上でも、その年代は大変古いものであるといえる。

新疆より出土する鉄器は、このヤンブラク墓地の例以降、小型の利器や武器、装身具が継続して出土し続ける（郭2007）。また、金属学的な分析の結果、初期の鉄器は塊鍊鉄に由来する鍛造技術の製品であることが分かってきている（Qian et al. 2002）。一方、中国の中原では、最古の鉄器は商代中期（紀元前14世紀）に、北京市平谷県劉家溝墓より出土した隕鉄製鉄刃銅鉞である（北京市文物管理所1977）。現在、同時期もしくは継続する時期に中原より出土する隕鉄は計7点が確認されている（第1章）。人工鉄については、2008年に甘粛省臨潭県磨溝遺跡の寺窪文化（紀元前1400～前700年）の墓から2点の鉄器が出土し、分析の結果、紀元前14世紀の塊鍊浸炭鋼であるとされた（陳他2012）。磨溝遺跡の資料については、中国内地の一連の人工鉄利用の流れから見ると遊離した資料であり、そ

の取り扱いは今時点では保留し、類例の増加を待ちたい。中国中原において年代、製品ともに確実に人工鉄の利用がみられるのは、西周時代末春秋時代初期の紀元前8世紀、塊錬鉄製の玉柄鉄剣が出土する三門峡虢国墓地である（河南省文物考古研究所1999）。この出土例以降、甘肅省・陝西省といった中国西北部を中心に人工鉄の出土が続く。そして、紀元前7世紀の天馬曲村墓地出土の鑄鉄の発見を先駆けとし、その後紀元前6世紀以降、鑄鉄製の農具や容器が利用されるようになる。

出土遺物の状況を整理すると塊錬鉄に基づく新疆の鍛造系の鉄冶金技術と、最終的に鑄鉄製の鉄器が中心となる中原とは、技術の系統が異なると考えられる。この点は、中原の製鉄技術が中国自発のものか、他からの導入によるものかという議論とも関連しており、新疆の鉄器は80年代後半より注目されてきていた。

新疆の鉄器は、中国や隣接する草原地帯と比較し、時代的に早く、技術的には西方系統といえるだろう。中原の初期鉄器文化の開始についての問題を考える一つの鍵が、中国の西北部にあることは確かといえる。しかし、新疆において、初期の出土鉄器は、保存状態などの問題もあり、年代や数量は不明瞭な部分が多かった。これまで全体的な傾向として触れられることはあっても、新疆より出土する鉄単独に着目して分析を行った研究は少ないのが現状である。

そうした中で、近年のダム開発に関連して、イリ地区などにおいて発掘調査が相次ぎ、初期の鉄器の出土事例が相次いで報告されている。また、自然科学の分野からの材料分析も行われ、若干の鉄製遺物に対して、技術的な検討も試みが行われはじめた（北京科技大学他2000）。初期の鉄器に対して、研究を進める上での資料が蓄積されてきたといえる。

よってここでは、新疆出土の鉄器に関する研究成果に検討を加え、つぎに周辺地域の初期鉄器文化研究についての研究史をまとめる。周辺地区の研究とは、主として新疆とかわる中国中原の初期鉄器に関してなされたものである。初期鉄器についての研究史を述べ、そこから導かれるさまざまな問題を提起する。

・新疆出土の初期の鉄器に関する研究

新疆より出土する鉄器についての研究は、青銅器の研究に比べるとあまり活発ではない。鉄はさびやすく、出土時に形態が不明瞭であることが理由の一つである。その他、青銅器や他の材質の出土品と比較し、鉄器は装飾性に乏しいものが多い。実用性が強く形態変化も少ないといえる。青銅器に見る装飾の伝播や地域性の研究が、鉄器では難しいこともまた理由の一つであろう。しかしそれでも、青銅器時代から初期鉄器時代の遺跡で、鉄製品はしばしば出土する。報告書中でその存在や意義についての言及は行われるのだが、時代を決定する要因の一つでとどまることが多いのが現状である。

そうした中で、若干ではあるが、鉄に焦点を絞った研究が陳戈（陳1989、陳1990）などを中心に進められてきた。

総括的な最初期の研究は、陳戈の1989年の論考による（陳1989）。陳は「新疆出土的早

期鉄器」という論文において1989年時点での新疆より出土する初期鉄器を集成した。この時点では、6遺跡のみで少数に限られた出土であったが、新疆では、前1000—前500年（西周時代から春秋時代併行）に鉄器の使用が見られるとした。1989年に論文が発表された段階では、新疆の初期鉄器の出土は、中原よりも古いものであるが、将来的には中国内地でも同時期の鉄器の発見があるだろうとした。

これは、新疆の鉄器に着目した最初の論考として注目できる。資料の集成と全体の年代に焦点があり、出土鉄器の時期的な多寡や起源などに関しては言及されていない。基礎研究の第一歩として、評価できる論考である。出土鉄器はまとめて鑄鉄であるとしているが（陳1990）、現在の金属学的な分析の結果は鍛造鉄器が主体であることを示している（Qian et al. 2002）。

その後、鉄に関する研究は低調である。出土報告に付随して、言及されるがのだが、基本的に遺跡の年代決定の根拠の一つにとどまる。例えば、鉄器が比較的豊富なチュンバク墓地（中国社会科学院考古研究所新疆工作隊他1991）でも、上記の陳戈（陳1989）を引用して、放射性炭素年代の年代値の照合を行うにとどまり、それ以上の考察は加えられていない。

新疆出土鉄器の起源に関する論考に水涛の記述がある。水は新疆の青銅器文化を論述するなかで、問題の一つとして鉄器の存在を挙げている（水1989）。新疆において鉄器は紀元前1000年前後より出土するとし、この年代を周辺の鉄器の出土時期と比較し、南西方面中央アジアからの影響を可能性としてあげている。ただし、未だ研究は不十分なので慎重さが必用であると付記している。

こうして、鉄器の研究はあまり進められてこなかったものの、陳の研究から20年以上経過し、新疆より出土する初期鉄器の総数も増加した。劉学堂は、2004年に中国文物報において、「中国冶鉄術的起源」という文章を発表している（劉2004）。記事中で、中国の初期の出土鉄器を列記し、中原での鉄器受容をまとめたのち、新疆の初期出土鉄器に言及する。中国で最も早い時期の鉄器は隕鉄製であるが、それに続くのが塊鍊鉄で新疆の初期の鉄器とも技術的に一致する。中国の冶鉄起源は西方にあるとした。

この論中では、技術的な面から中国全体の初期鉄器を区分し、特に塊鍊鉄に基づく鉄製品は、西方に由来するとした。中国全体で見ると、中原より西部の新疆のほうが出土が古いということを認めており、現在の出土に即した意見である。中国の冶鉄の起源となる「西方」の具体的特定等が今後の研究の課題であるといえるだろう。

また、郭物は「新疆及中原冶鉄術来源問題的探討」において、新疆出土の初期の鉄器の年代を整理し紀元前9世紀以前の明確な鉄器は見られないとする（郭2007）。一方で、その他の遺物の上では新疆と西アジアとの交流を指摘する。紀元前1200年頃、海の民の活動や気候の悪化が、小アジアにおける冶鉄技術を持つ文化に打撃を与え、鉄冶金技術の拡散につながったとし、新アッシリア帝国の拡張も後押しし、何らかの特殊な事情で、西アジアの楽器類とともに、鉄器が新疆へもたらされたと予測している。中国における人工鉄の

起源が新疆経由になるのか、中原が早いのかという問題を解く鍵は、紀元前10～前9世紀の鉄器が存在するか否かにあり、新疆における鉄器の年代問題の解決が最も重要であると指摘している。

郭の研究はこれまでの新疆出土の鉄器を再整理し、西アジア起源を直接述べたものである。郭の指摘するとおり、年代問題の解決が最も重要な点であることは間違いない。

以上、新疆での鉄器研究を紹介した。鉄器についての研究論文はまだまだ少ないといえる。現在、紀元前1000年前後、遅くとも中国の西周時代併行時期から新疆に鉄器が出現し、器種は小型の利器や武器、装飾品が中心であることは、共通認識である。そして、その起源は、中央アジアまたは西アジアの可能性が高い、といったことが現在予測されている。

・技術、分析に関する研究

新疆出土の鉄器に関して、数少ないながらも自然科学の方面からのアプローチがある。

最初期の鉄器であるヤンブラク墓地及びヤンハイ墓地出土の鉄器は、金属学的な分析がなされている。材料分析と顕微鏡による金属組織の観察により、ヤンブラク墓地出土の鉄製指輪は塊錬鉄製、その外の破片には鋼のパーライト組織が観察できた (Qian et al. 2002)。ヤンハイ2号墓地出土の鉄製刀子は塊錬鉄製であった (凌他 2008)。

また、北京科技大学によるケリヤ河流域出土の金属についても、青銅器のほか、16点ほどの鉄器の分析がおこなわれた (北京科技大学他 2000)。基本的に鍛造であるが、一部、園沙古城 (紀元前387～前56年) 出土のものは、鑄鉄がみられる、という結果であった。

現在、最初期の鉄は、炭素量の低い塊錬鉄、およびそれを熱処理した塊錬浸炭鋼である。その後、戦国時代後期～漢代併行期には鑄鉄が見られるといえる。鉄器研究は製作面、技術の伝播や発展も重要な研究要素であり、分析資料の今後の蓄積がまたれる。

・新疆ウイグル自治区の冶金遺跡について

初期の鉄製品に関する研究をこれまで述べてきたが、それでは、冶金遺跡はどのようなになっているのか。

現在鉄の冶金遺構についても若干の報告がある。天山南麓のクチャ地域で「古代亀茲地区鉄冶遺跡的考察与研究」という報告を李肖がおこなっている (李 2003)。これは、亀茲地区において青銅採掘冶金遺跡21箇所、採掘および冶鉄遺跡13箇所を踏査した報告である。遺物採集と分布の確認が主体となっている。製鉄遺跡は青銅器時代から初期鉄器時代のものがあるとされ、紀元前1000年ころから長期の利用が確認された。文献に記載された「亀茲能鑄冶」を確認したといえる。

そのほか、尼雅遺跡などでも報告があるが、これは漢代以降の新しいものである。

生産遺跡に関する調査は、まだ始まったばかりであり十分とはいえない。発掘調査の行われる遺跡が墓に集中しているため、見つかりにくいのが現状ではあるが、意識的に調査を重ねることで検出例の増加を期待したい。鉄器にかぎらず、技術や生産に着目した研究

は、新疆の考古学において、これからの課題である。

・中国における初期の鉄器に関する研究

新疆をとりまく、周辺地域の初期の鉄器に関する研究について整理する。中国の鉄器研究で特に新疆に言及している論文をここに紹介する。

唐際根による1993年の研究に、「中国冶鉄術的起源問題」がある(唐1993)。中国の鉄器は、新疆から塊錬鉄をつくる技術として、一～二世紀遅れて中原に導入された。その後、中原では鑄鉄を軟化する方法が見つけ出されたが、新疆では塊錬鉄による製錬方法のみにとどまっており、前漢の西域進出に伴って鑄鉄がもたらされた、と説明している。

新疆から河西回廊を経て中原へ、という塊錬鉄の技術の流れ(春秋時代)と中原から新疆へという鑄鉄(漢代)の流れを主張している。塊錬鉄と鑄鉄の二系統の動き、は非常に興味深い考えである。しかし、新疆から中原へ塊錬鉄が導入された時期を春秋時代とするのは、現在の虢国墓地の分析結果から考えると少し遅いと考えられる。

近年のまとまった研究では、白雲翔の『先秦兩漢鉄器的考古学研究』がある(白2005)。本書は白の博士論文であり、長年の研究の集大成といえる。論文中で白は、中原の人工鉄に関して、中国で独自に発展したという立場をとる。商代に中国で用いられた隕鉄製の鉄刃銅鉞や鉄刃銅戈は、鉄器の加工の知識を伴うものである。この隕鉄加工基礎と高度に発展した青銅器の製作技術の上に中原の人工鉄加工技術は誕生した。新疆とのかかわりを否定することはできないが、それぞれの器種構成などを比較すると「中原系統」と「西北系統」と分けることができ、直接的な対応関係は想定できない。なんらかのかかわりは考えられるものの、中原も新疆も独自の鉄器文化発展過程をたどっている、としている。

白の指摘するように、新疆と中原とは距離的にも、また鉄器加工の発展の様子をみても差異は大きい。二つの発展系統が存在するといえる。また、中原における鉄器の起源を考えると、隕鉄は自然鉄素材を鍛造加工する技術であるが、塊錬鉄は鉄鉱石からの製鉄である。高い火力と設備が求められる。隕鉄加工と鉄鉱石からの製鉄とは、技術レベルの乖離が非常に大きい。やはり、中原の人工鉄の起源は、他地域からの導入であり、その後の発展に独自性があるという主張は正しいといえるだろう。

中国の初期鉄器の金属学的な分析が「中国早期鉄器(公元前5世紀以前)的金相学研究」として韓汝玢によっておこなわれている(韓1998)。分析結果をまとめると、以下のようになる。

中原では、商代中期～西周時代(紀元前14～前9世紀)に、隕鉄を利用した銅鉄複合器が出土する。西周～春秋時代(紀元前9～前8世紀)には人工鉄の塊錬鉄と塊錬浸炭鋼が作られるようになる。兵器などが製作される。春秋時代中期(紀元前6世紀)に鑄鉄の鑄造が開始する。戦国時代(紀元前5世紀)、鑄鉄に退火処理が行われ、鉄器の工具や農具が現れる。この論の中で新疆については、特殊な地理にあり、中央アジアとの関連等を考える上で研究が待たれるとしている。

韓の研究は金属の組織観察に基づく分析に、歴史的な解析を加えたもので、中原での鉄器の技術的な発展に関して、非常に参考になる。この中原の鉄器の動きと新疆との研究とを比較しつつ、検討することが、初期鉄器の研究を進めるうえで必要だといえる。

中国の動きは新疆の出土状況とは、相違が大きい。しかし、鉄器の生産や加工は、複雑な技術であり、隣接地域の相互関係は常に注目する必要がある。どの時点で、相互影響が見られるか見極めていく必要があるだろう。

これまでの研究において、新疆ウイグル自治区から出土する鉄器について、以下の点が明らかになっている。

- ・ 紀元前 1000 年前後より鉄器が出土する。
- ・ その後も継続して出土が見られる。
- ・ 小型利器が主体で、武器や装飾品がある。
- ・ 中央アジア、西アジアに直接に起源するという見方が優勢である。
- ・ 冶鉄遺構も年代は絞り込めていないものの、見つかっている。

問題点としては、初期の鉄器の出現期や全体的な流れはつかめているが、個別の資料に即した詳細な様相について、どの器種が中心であるか、出土量の変化に画期はあるか、青銅器との関係はどうなっているのか、中原との関係、周辺地域との関連などは不明瞭な部分が多いといえるだろう。

3. 鉄関係の用語について

ここで、本論に入る前に鉄に関連する用語の定義を行う。

人類の最も古い鉄の利用は、紀元前 4 千年紀末頃、隕鉄の利用にはじまるとされる。紀元前 3500 – 前 3100 年エジプトのエル・ゲルゼー遺跡出土の鉄製ビーズは 7% のニッケルを含有する。また、紀元前 3300 – 前 3000 年のメソポタミア、ウルク遺跡出土の鉄片からも多量のニッケルが検出されており、最古に利用された鉄は**隕鉄 – 自然鉄**であったといえる（津本 2004）。**隕鉄**は自然界に金属状態で存在し、鉄 – ニッケル合金からなる隕石の一種である。約 5 ~ 25%（重量%、以下%のみ表記する）以上のニッケルを含み、他微量成分としてコバルトが検出される。

しかし、地球上で人類が利用できた隕鉄の量は非常に限られている。また、鉄は金や銅と異なり、そのままの金属の状態で自然界に存在することはほとんどない。普通は鉄鉱石として鉱脈中に、また砂鉄として海岸や河川流域に存在する。この鉄鉱石や砂鉄は、酸素や硫黄などの不純物と結合している。鉄鉱石や砂鉄を還元して不純物を取り除き、金属鉄を得ることを**製錬 (smelting)**という。そして、製錬により得られた鉄を隕鉄 – 自然鉄に対して、**人工鉄**とよぶ。基本的に人工鉄のニッケル含有量は低く（5%以下）、成分分析を

行うことで隕鉄と人工鉄の識別は可能であるとされる。

また一般に鉄は、鉄と炭素の合金であり、炭素の量により物性が異なる（佐原 1990、新日本製鉄（株）編 2004）。図 3 は鉄と炭素の濃度と温度の関係を示した状態図である。図 3 で点 A B C を結ぶライン以上の炭素濃度と温度の時、鉄は液体となる。一方、点 A D E B F を結ぶライン以下の場合、鉄は個体である。なお、炭素濃度が高いほど鉄は硬くてもろく、低くなるに従い柔らかくなる。炭素濃度によって、大きく 3 種類に分けることができる。

純鉄 (pure iron) : 炭素量 0.02% 以下。融点は 1536°C。

鋼 (Steel) : 鉄を主成分にする鉄と炭素の合金で、鉄の持つ性能（強度、靱性、磁性、耐熱性など）を人工的に高めたもの。炭素量 0.02 – 2.0% を差す。硬いが、展性があり、鍛造成形が可能である。焼入れにより強固な組織を得ることができる。このうち、含有炭素量によって、低炭素鋼（炭素含有量が約 0.3% 以下）中炭素鋼（炭素含有量が約 0.3 – 0.7%）、高炭素鋼（炭素含有量が約 0.7% 以上）に分類される。また、鋼は炭素濃度が 0.6% までは、濃度に比例して硬さが増す。硬さによる極軟鋼、軟鋼、硬鋼という分類もある。

銑鉄 (鑄鉄、Pig iron、Cast iron) : 炭素量 2.0% 以上。硬いが脆いため、鍛造には向かず、鑄造成形に用いられる。なお、炭素量が 4.2% の時、温度が 1147°C と最も低くなる。これが、完全に鉄を溶かすための最も低い温度条件である。

なお、点 G H I を結ぶ約 730 度のラインは、炭素濃度に関係なく一定であり、焼き入れ

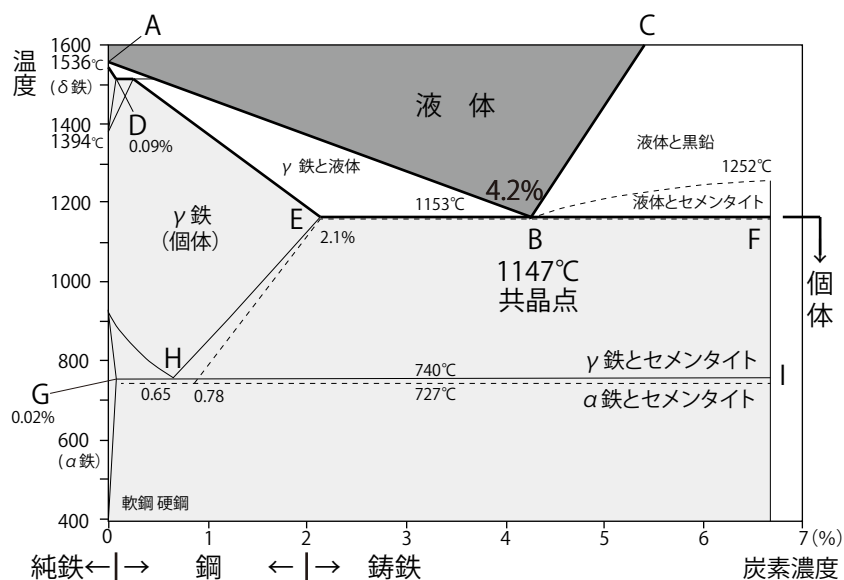


図 3 鉄と炭素の状態図

α鉄：炭素濃度が 0% では、温度が 910°C 以下の鉄、γ鉄：炭素濃度が 0% では、温度が 912 ~ 1394°C の鉄
共晶: 温度の下降に伴って液体から 2 種の個体が一定の割合で同時に出てくる現象、及びその結果生じた混合物。
鉄-炭素系の共晶点では炭化鉄（セメンタイト、Fe₃C）あるいは黒鉛（グラファイト）が同時に出てくる。

や焼鈍しといった熱処理をする上での、基準温度である。

この中で、共晶点温度（1147℃）以下で鉄鉱石を還元して得られた海綿状の個体の鉄を鍛造によって、不純物を取り除くことで得られる炭素量の低い鉄を塊錬鉄¹（Wrought iron）と呼ぶ。この海綿状の鉄を得るとい加工方法はいまだ検証が必要であるが、低温個体還元法と呼ばれる直接製鋼法の一つであり、新疆などで報告される初期の鉄は、この塊錬鉄である（凌他 2008）。なお、この低温個体還元法に対し、中国中原で発展変化した、高炉によって高温を得て、鉄鉱石を溶解し、不純物を比重差により分離除去する製鉄方法がある。これを高温液体還元法と呼ぶ。得られる鉄は銑鉄であり、鍛造可能な状態（可鍛鑄鉄）や鋼を得るためには、製錬後の熱処理を必要とする。よって、この熱処理によって鋼を得る方法を間接製鋼法と呼ぶ。

製錬によって得られた材料の純度を上げることを精錬（refining）と呼ぶ。鉄材料の場合、炭素量を調節し、必要な鉄合金に調整して地金を得ることを精錬鍛冶、大鍛冶という。

鉄鉱石の製錬から精錬を経て得られた地金は、様々な方法で成形加工される。成形方法は大きく鍛造と鑄造に分けることができる。

鍛造（Forging）とは、金属を叩いて打ち延ばし成形する方法である。鉄は常温で叩くと硬くなるが、赤熱状態で叩いても固くならない。これを**冷間加工（cold forging）**と**熱間加工（hot forging）**と呼ぶ。なお冷間鍛造により金属結晶が変形するが、熔融温度の約 0.4 倍ほどの再結晶温度で、変形した金属結晶が構造を整え直し、整然とした結晶に戻る。鉄は約 450 度である。また、鍛造に関する加工について「鍛錬鍛冶」、「小鍛冶」と呼ぶことがある。

一方、**鑄造（Casting）**は、金属を融点以上の高温で溶かし、鑄型に流し込むことで成形する方法である。この時用いられる鑄型の材質により、石型鑄造、砂型鑄造、金型鑄造などに類別できる。また、原型の種類によっても、ロストワックス鑄造などの種類がある。

さらに金属は**熱処理**を行うことで、必要に応じた性能を得ることができる。鋼の区分でも言及したが、炭素量が 0.6% 超えると硬さは変わらず、鋼材はもろくなってしまふ。鉄を実用的な金属材料として取り扱うためには、硬さや靱性（ねばり）を調節できなければならない。熱処理技術の発展こそが鉄器時代を迎える上での必須条件であろう。本研究に関する鉄関係の熱処理を以下に説明する。

浸炭（Cementation）：低炭素鋼の表面を硬化を目的として炭素を添加させる処理である。

表面が硬化するが、内部はもとの組織を保ち、柔軟な構造となる。得られた鋼を浸炭鋼と呼ぶ。

焼入れ（quench Hardening）：鋼を水や油などで急冷し表面を硬化させる方法。マルテンサイトという非常に硬い組織が得られるが、靱性（ねばさ）が低下するため、焼戻しが行われる。

焼鈍し（annealing）：加工による硬化を徐冷することで、軟化し延展性を向上させる方法。

脱炭（decarburization）：金属表面から炭素を酸化させて取り除く方法。鑄鉄を鋼の状態

にする技術。得られた鋼は鑄鉄脱炭鋼と呼ぶ。

人工鉄は紀元前3千年紀後半のトロイアやアラジャホユクといったトルコ国西北部アナトリアの遺跡から出土する。その後、カマン・カレホユク遺跡のII d層（紀元前12世紀）では、鋼の精錬滓が確認された。西アジアで利用がはじまった鉄器の利用と生産は、その後世界へと拡散したと考えられる（佐々木2002）。今日の私たちも主要な利器は鉄合金を用いており、考古学的な概念では鉄器時代の延長に生きているといえる。鉄器の利用のためには、鉄鉱石の採鉱の後、製錬および精錬を経て鉄材料となし、鍛冶により製品とする必要がある。さらに流通、使用、廃棄あるいは再加工といった一連のプロセスを伴う。鉄利用の伝播は、モノとともに、その一連の技術や技術保持者の交流が想定される。鉄をめぐる文化交流は、人類の歴史の中でも最も興味深いテーマの一つであるといえる。

4. 本論文の構成

本論は、中央ユーラシア東部の草原地帯各地域文化における鉄器の受容を論じる前半部分（第1～4章）と、新疆の地域文化と鉄器の受容と展開について論じる後半部分（第5～7章）に分けることができる。

まず、全体の導入、問題の提起として、第1章において、中国中原および陝西・甘粛といった西北地域における最古の鉄、隕鉄と人工鉄、新疆における鉄器の出現と利用の拡大を述べる。中原地域において鉄器が出土するのは、紀元前2千年紀半ばの商代中期からである。しかし、分析の結果、商代の鉄器はいずれも隕鉄製品であった。人工鉄の出土と増加は、西周時代末春秋時代初期になってからである。一方で新疆では西周時代前～中期併行期より人工鉄の出土が始まる。初期段階の鉄器について、その分布や技術の変化を論じ、中国における鉄器の導入を考える上でも新疆が重要な地域にある点を強調する。

次に第2～4章では、新疆の周辺に位置する草原・乾燥地帯のなかで、鉄器の出土が始まる紀元前1千年紀において、文化の中心であった地域を取り上げ、各地域における鉄器の出土時期、また利器の材質が青銅から鉄へと変化する様相、鉄器が一般化する時期について資料の整理を行った。

第2章では、新疆の東北部に位置する中国北方草原地帯について言及する。本論で述べる中国北方草原地帯とは、内蒙古と甘粛、寧夏地域を中心に、春秋戦国時代併行期、毛慶溝文化や桃紅巴拉文化、楊朗文化といった北方系青銅器文化が広がった地域を指す。鉄器の資料の集成とその利用の拡大について論じる。

第3章では、新疆の北部に位置し、タガール文化やパジリク文化といった紀元前1千年紀の初期遊牧民文化の栄えた南シベリア地域について検討する。各地の出土鉄器を概観した後、その特徴や地域間での交流について言及する。

第4章では、新疆の西部に位置し、新疆イリ河流域文化と密接な関係を持つセミレチエ地域について検討する。紀元前8世紀以降のサカ文化、烏孫文化に見られるセミレチエの出

土鉄器について紹介し、新疆との関係を考察する。

次に論文の後半部分（第5～7章）では、新疆に主眼をおいた研究を行った。

第5章では新疆における青銅器時代から初期鉄器時代の地域文化について整理する。同時に出土鉄器の集成を行った。新疆の紀元前1千年紀は、時期区分について問題を抱えている。新疆の遺跡は、墓地を主体として発掘調査が進められているが、墓同士の切り合い関係がほとんどみられず、遺物の順序を層位的に把握するのが難しい現状にあるといった点を指摘する。

第6章では、第5章の問題提起を受け、新疆の紀元前1千年紀に普遍的に出土する遺物を取り上げ、周辺地域との比較の上で年代区分を行った。遺物の編年を基に、新疆ウイグル自治区の初期鉄器時代の時期区分を検討する。

次に第7章では、その地域・時期区分の結果を踏まえ、新疆における鉄器の受容と展開について論じていく。第6章で区分した地域文化において、それぞれの鉄器受容の様相を検討した。その後全体として新疆の鉄器の受容と展開を論じ、周辺地域との交流について論じていく。

以上の検討を踏まえ終章では、中央ユーラシアの中心に位置する新疆における鉄器を通じた初期の文化交流について論じる。

（註）

1 この半溶融状態で滓を絞り出した鉄は、錬鉄あるいは海綿鉄ともよばれる（大和久保1984、フォーブス2003）が、本論では中国考古学の用語である、塊錬鉄を用いる。

引用文献

江上波夫・水野精一 1936『内蒙古・長城地帯』東方考古学叢刊乙種第一号、東亜考古学会

大和久重雄 1984『鋼のおはなし』日本規格協会

佐々木稔 2002「I 古代アジアの鉄と銅」、佐々木稔編『鉄と銅の生産の歴史』雄山閣、pp. 3-24

新日本製鉄株式会社編 2007『鉄と鉄鋼がわかる本』日本実業出版社

藤川繁彦編 1999『中央ユーラシアの考古学』同成社

佐原康夫 1990「漢代の製鉄技術について」『古史春秋』6、pp. 26-52

津本英利 2004「古代西アジアの鉄製品－銅から鉄へ－」『西アジア考古学』5、pp. 11-23

フォーブス著 平田寛他監訳 2003『古代の技術史・上－金属－』朝倉書房

原著：Forbes, R.J. 1964 *Studies in Ancient Technology*, E.J.Brill, Leiden. Netherlands

郭物 2007「新疆及中原冶鉄術来源問題的探討」『新疆文物』2007-2、pp. 70-87

河南省文物考古研究所 1999『三門峡虢国墓地』文物出版社

韓汝玢 1998「中国早期鉄器（公元前5世紀以前）的金相学研究」『考古』1998-2、pp. 87-96

新疆維吾爾自治区文化庁文物処・新疆大学歴史系文博干部專修班 1989「新疆哈密焉不拉克墓地」
『考古学報』1989-3、pp. 325-362

- 水涛 1989 「新疆地区青铜文化研究现状述评」『新疆文物』1989-4、pp. 60-63
- 中国社会科学院考古研究所新疆工作队·新疆巴音郭楞蒙古自治州文管所 1991 「新疆轮台县群巴克墓葬第二、三次发掘简报」『考古』1991-8、pp. 684-783
- 陈戈 1989 「新疆出土的早期铁器」『庆祝苏秉琦考古五十五年论文集』文物出版社、pp. 425-432
- 陈戈 1990 「关于新疆地区的青铜时代和早期铁器时代文化」『考古』1990-4、pp. 366-374
- 陈建立·毛瑞林·王辉·陈洪海·谢淡·钱辉鹏 2012 「甘肃临潭磨沟寺窪文化墓葬出土铁器与中国冶铁技术起源」『文物』2012-8、pp. 45-53
- 唐际根 1993 「中国冶铁术的起源问题」『考古』1993-6 pp. 556-565
- 白雲翔 2005 『先秦两汉铁器的考古学研究』科学出版社
- 北京科技大学他 2000 「新疆克里雅河流域出土金属遗物的冶金学研究」『西域研究』2000-4、pp. 1-11
- 北京市文物管理所 「北京市平谷县发现商代墓葬」『文物』1977 - 11、pp. 1-8
- 李肖 2003 「古代龟兹地区冶铁遗迹的考察与研究」『新疆文物』2003-3·4、pp. 16-26
- 劉学堂 2004 「中国冶铁术的起源」『中国文物报』2004年4月2日
- 凌勇·梅建军·李肖·張永兵·呂恩国 2008 「新疆吐鲁番地区出土金属器的科学分析」『吐鲁番学研究』2008- 1、pp. 20-26
- Gosudarstvennyi Ermitazh 2004 *Arzhan: Archeological discoveries in the Valley of the Kings, Tuva, artifacts from Arzhan Barrow*
- Qian,Wei. Chen,Ge. 2002 The Iron Artifacts unearthed from Yanbulake Cemetery and the Beginning of Use of Iron in China, *Proceedings of BUMA-V* (发表要旨) , Kyeongju in Korea, pp.189-194

図版出典

- 図1 Google map より筆者作成
- 図2 Google map より筆者作成
- 図3 新日本製鉄株式会社編 2007、p. 63 より筆者改変

第1章 中国における鉄器利用のはじまり

1. はじめに

鉄器の導入は、歴史の上で一つの大きなインパクトである。硬くて丈夫な鉄製品は、農具や工具として生産力を拡大し、武器として軍事力を強固なものとしていった。中国において戦国時代に農具として利用が拡大した鉄器は、その後、秦漢と続く国家成立の重要な要因と考えられている。

では、歴史において一つの鍵ともいえる鉄器は、いつどのような過程を経て中国で製造され、用いられるようになったのであろうか。近年、最初期の鉄器について金属学的な分析研究が進み、その技術の実態が明らかになりつつある。紀元前5世紀以前の出土遺物については、隕鉄、塊錬鉄、鑄鉄といった様々な鉄器が存在する様子が明らかになってきている（韓 1998）。さらに西北地域での出土鉄器の増加を受け、中国における鉄器の導入についても議論が増加している。やはり新疆を経て、西方から導入されたという視点が多い（唐 1993、趙 1996、劉 2004、郭 2007）。一方で、南方からの海上ルートという見解（Wagner 2003）や、中国での独自発見という説もある（孔他 1988）。

また、初期の出土鉄器に関する基本的な資料の集成も進められてきた。特筆すべき研究としては、秦漢以前の中国の冶鉄技術の発展についてまとめた白雲翔氏の論文がある。白氏は秦漢時代の冶鉄について言及する前段階として、中国全土より出土する春秋時代（紀元前5世紀中葉）以前の鉄器を網羅的に収集した。2005年時点で、39地点で140点以上の資料が出土する（白 2005）。白氏の集成により、中国全土における鉄器の出土地点が整理され、いっとういった資料がどこから見つかったのかを知ることができる。また、同じく春秋時代以前の銅鉄複合器について分析した佐々木氏の論考もある（佐々木 2000）。最初期の鉄器は、銅鉄複合器が主体であり、その製作方法は玉柄銅器と同様であったとされる。宝器として取り扱われていた初期の鉄の様子に分かってきている。

現在、春秋時代以前の主だった鉄器について、その資料の集成と材質について、金属学的な分析も増加し、注目されているテーマであるといえる。本章では、中央ユーラシア東部における鉄器文化の交流を考える上で一つの大きな存在である中国中原について、その最初期の鉄利用と発展について整理する。商周から春秋時代にかけて中国で出土する最初期の鉄器とその導入について、考古学の発掘成果をもとに検討を進めていく。

まず、中華文明の揺籃地、中原地域（現在の黄河中下流域）周辺で出土する初期の鉄器について述べる。そして、中原への鉄器の導入に関して、現在注目されている西北地域、新疆ウイグル自治区における初期の出土鉄器を紹介する。鉄器を通じた草原地帯と中原地

域の技術と文化の交流を考えていく。

2. 中原で出土する初期の鉄器

それでは、いつ、どこで、どのような鉄器が見つまっているのかをみていきたい。

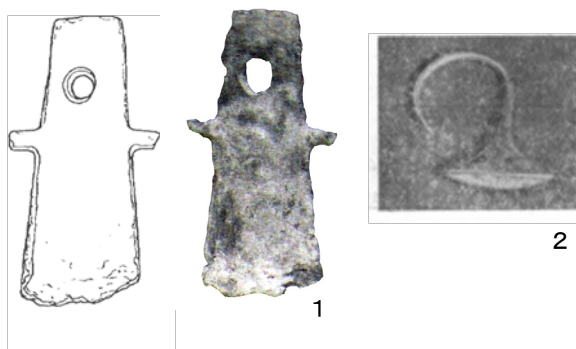


図4 北京市平谷県出土遺物

1. 隕鉄製の鉄刃銅鉞（図、写真）、2. 喇叭型金製耳飾

・中国最古の鉄器——隕鉄

中原周辺地域で現在までに見つかっている最も古い鉄器は、商代中期の墓より出土する。

北京市の北東部に位置する平谷県の劉家河墓からは、青銅の内¹部に鉄の刃を持つマサカリ、鉄刃銅鉞と呼ばれる銅鉄複合武器が見つまっている²。残長8.4cm、欄幅5cm、鉄刃部分は長さ1cm、厚さ約2mmである。鉄刃部分を鍛造成形したのち、青銅基部にはめ込んで鑄造している。なお、形状から合范ではなく、単范による鑄造とされる（図4-1、北京市文物管理所1977）。この鉄器を分析したところ、刃部の鉄からは多量のニッケルが検出され、隕鉄であることが判明した（張他1990）。隕鉄は、鉄隕石ともよばれる鉄分の多い隕石である。ニッケルと鉄との合金であり、鋼同様バランスの良い、硬さとしなやかさを備えている。

中国最古の鉄器は、鉄鉱石を製錬したのではなく、空から降ってきた隕石を利用、加工した自然鉄であった。さらに、この鉄刃銅鉞は、冷間加工³で整形されており、青銅器の加工と同じ技術の下、製造されたことが明らかになっている。

なお、劉家河墓からは二里岡期上層期の青銅礼器とともに、夏家店下層文化とされる土器片や金製品の腕輪、先端がラッパ状に開く耳飾りなどが出土する（図4-2）。金製の喇叭型耳飾りはアンドロノヴォ型と呼ばれる一群の遺物であり、ユーラシア草原地帯との関係が指摘される遺物である（高浜2000）。鉄刃銅鉞は草原世界と関係を持つ、中原の墓から出土している。

同じく商代中-後期の河北省藁城県台西村墓からも鉄刃銅鉞（M112:1）が出土している（図5）。刃部はほぼ欠損しており、残長11.1cm、欄幅8.5cmで、内部に1孔を持つ。蘭の両面に2列の乳釘紋がある。鉄刃は青銅の内部の中に残存しており、1cmほど嵌め込まれた状態であった（河北省博物館他1973、河北省文物研究所1985）。鉄刃部を鍛造成形した後、青銅の基部に鑄込んで製作されている。なおこの鉄刃部分は、当初人工鉄（塊練鉄）の可能性も考えられたものの、分析の結果、同

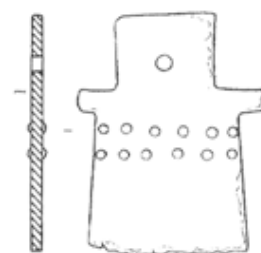


図5 台西村出土の鉄刃銅鉞

様に6mass%以上⁴のニッケルと0.4mass%のコバルトが検出され、刃部は隕鉄とされた(李1976)。しかし、加工技術は熱間鍛造⁵でありより鉄器に即した加工法が用いられていたことが分かる。

商代末西周時代初期の河南省浚県辛村の墓地からは12点の青銅武器類が出土し、内2点が銅鉄複合器であった(梅原1954)。これらの遺物は、現在アメリカのフリア美術館に収蔵されており、金属部分の分析が行われている(Gettens et al. 1971)。

鉄刃銅鉞(FGA34:10)は、内の部分に円孔と饕餮紋があり、欄に方形の2孔を持つ。内の背部も小円孔と饕餮紋で飾られている。残長17.1cm、幅7cmである。この鉄刃銅鉞のX線撮影によると、青銅にはめ込まれた鉄刃部分には3つの小孔が確認された。 casting時に孔の内部に青銅の湯が入ることで、鉞として鉄刃を止める役割をしていると考えられている。刃部は29.3%のニッケルを含み、隕鉄を熱間鍛造したものとされる(図6-1)。

鉄援銅内戈(FGA34:11)は残長18.3cm、援基部の幅は5.8cm、欄幅7cmである。刃部はほとんど残存していない。援の本体部分と背部は夔鳳紋で飾られている。鉄刃部分は、紀部が抉りをもち、「工」字状に加工され、青銅の援の内部に嵌め込まれていた。鉄刃を鋳型に組み込んで鋳造することで、抉りの部分に青銅の湯が入り、刃部と援部を固定する仕掛けとなっている。鉄刃部分は5.2%のニッケルを含有することから、隕鉄製と考えられている(図6-2)。

この刃部と基部の接合方法は、玉刃銅器の製作技法と同じである(中村他1975)。鉄は玉器と同様に、貴重な材質としてみなされ、用いられた様子をうかがうことができる。

さらに河南省三門峡の虢国墓地2009号墓からも鉄器が出土している。虢国墓地は西周時代の諸侯、虢氏の墓である。2009号墓は、国君虢仲の墓とされ、未盗掘で発見された。深さ20m、周辺に89基の車馬坑、祭祀坑を持つ大墓である。西周時代末期に位置づけられる。2009号墓からは銅鉄複合器が4点確認され、内3点が隕鉄製品であった(河南省文物考古研究所1999)。

鉄援銅内戈(M2009:703)は、残長19cm、内長7.2cm、厚0.4cmで、鍛接により鉄援と青銅の内を接合しているとされる。トルコ石を象眼した長鼻龍首紋で内本体の両面を飾り、また、後の背部にも、方形に象眼したトルコ石と山字紋を飾っている。ニッケルを6~27.4%含有する(図7-1)。

銅釜鉄鏃(M2009:720)は、残長11.3cm、釜径3.1×1.6cm

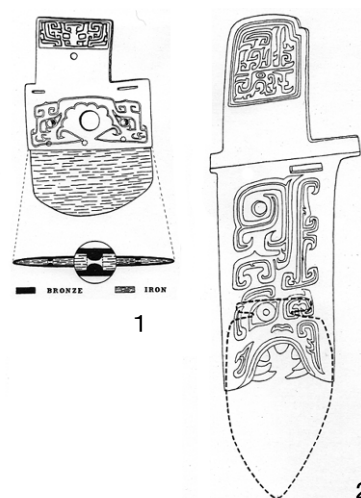


図6 浚県辛村の銅鉄複合器

1. 鉄刃銅鉞、2. 鉄援銅内戈

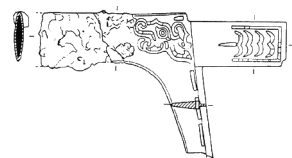


図7 虢国墓地出土の隕鉄製鉄援銅戈

である。木柄が残存しており、残長 8.8cm、ほぞ部分の残長 3.6cm、幅 0.9cm。鉄刃部分は残幅 2.6cm であった。青銅釜と鉄刃を鍛接でつなぎ合わせている。青銅釜部は、突線紋を数条巻いた下に、正面を曲体龍首紋、側面を変態龍首紋で飾る。柄部に牛頸状の突起を持つ。ニッケルを多量に含み、強磁性を示すことから、隕鉄製と考えられている。

銅柄鉄削刀 (M2009:732) は、残長 11.2cm、幅 2 cm、厚 0.3cm で、青銅製の柄と鉄製の削身部を鍛接で組み合わせたものである。出土時には鉄削部分はほとんど残っておらず、木製の鞘が遺存していた。鉄削部分からはニッケルが検出され、隕鉄製品とされる。

中原周辺において、最初に鉄器が出土するのは商代中期であり、隕鉄製の銅鉄複合武器である。隕鉄は、西周時代末期まで、副葬品として大型の貴族墓より出土する (表 1)。鉞は奴隸の首を切るための武器であり、権力の象徴という意味を持つ。戈は戦争において、車馬に乗る貴族が持つ武器である。いずれも、力を象徴する器物に対して、その刃の部分に隕鉄が用いられている。同様の青銅複合器としては、玉刃銅鉞があり、隕鉄は玉などと同様、青銅器を上回る貴重な材料として位置づけられていた様子を見ることができる。

なお、西周時代末の虢国墓地 2009 号墓からは、武器とともに、隕鉄製の工具類も出土する。銅釜鉄鏃、銅柄鉄削刀は墓の西南隅に他の青銅工具類とともに置かれていた。いずれにしても、装飾的な様相が強いが、武器のみではなく、工具に対しても鉄器の利用が拡大しているといえる。

また、商代中期の平谷劉家河墓において、隕鉄は冷間加工をうけたとされる。冷間加工は、青銅利器類にみられる加工方法であり、隕鉄の加工は青銅器と同じ方法が用いられたといえる。一方で藁城台西村墓、浚県辛村などの鉄刃部は、熱間鍛造が行われている。熱間鍛造は、加工硬化を起こさないため、鍛造中の割れが起きにくく、より鉄器の加工に適した方法が用いられるようになったといえる。

表 1 隕鉄製鉄器

省	県	遺跡	遺物	材質・加工	Ni 含有量	時代
北京	平谷県	劉家河	鉄刃銅鉞	隕鉄、冷間鍛造、鑄接	1.9-18.4%	商代中期
河北	藁城県	台西村	鉄刃銅鉞	隕鉄、熱間鍛造	0.8-2.8%	商代中-後期
河南	浚県	辛村	鉄刃銅鉞	隕鉄、熱間鍛造、鑄接	6.7-6.8% 22.6-29.3%	商末西周初
河南	浚県	辛村	鉄援銅内戈	隕鉄、熱間鍛造、鑄接	5.2%	商末西周初
河南	三門峡	虢国墓地 2009 号墓	鉄援銅内戈	隕鉄、鍛接	6.0% 26.8-27.4%	西周末春秋初
河南	三門峡	虢国墓地 2009 号墓	銅釜鉄鏃	隕鉄、鍛接	5.8-9.1% 12.5-14.8% 36.9-47.7%	西周末春秋初
河南	三門峡	虢国墓地 2009 号墓	銅柄鉄削刀	隕鉄	5.8-13.4% 31.4-35.6%	西周末春秋初

また、鉄刃部と青銅内部を接合する方法も、当初は玉器製作技法と同様の鑄接が行われていたが、鍛接で接合する方法へと変化している。

・人工鉄の利用——塊鍊鉄と鋼

西周時代末期の河南省三門峡虢国墓地 2001 号墓からは、鉄器が 2 点出土している。鉄援銅内戈と玉柄鉄剣である。2001 号墓は、青銅礼器の銘文より、国君虢季の墓とされる。副葬品は 5293 点を数える大型貴族墓である（河南省文物考古研究所 1999）。

出土した鉄援銅内戈（M2001:526）は残長 17.4cm、内長 7.5cm、内厚 0.5cm である。鉄援の本体部分にはトルコ石の象眼による長鼻龍首紋、背部には C 字形卷雲紋の装飾がある。鉄刃部分は鍛接により援と結合されている。分析の結果、塊鍊鉄⁶であることが分かった（図 8-2）。

虢国墓地 2001 号墓からは、玉柄鉄剣（M2001:393）が出土している（図 8-1）。鉄製の剣身、青銅製の柄芯、玉製の柄から成る。鉄剣に青銅の芯部を両面から接合し、青銅の表面にはトルコ石を象眼する。この青銅の柄芯を中空の玉柄にはめ込むことで刃部と柄をつなぎ合わせている。全長 34.2cm、柄長 12.2cm、剣身長 22cm、幅 3.8cm である。分析の結果、パーライト⁷の痕跡が検出され、塊鍊浸炭鋼であると分かった。塊鍊浸炭鋼とは、そのままでは硬さの足りない塊鍊鉄に炭素を補いえられた炭素鋼である。鋼は炭素量が 0.2 - 2.0% の炭鉄合金で、しなやかであると同時に、硬くて丈夫である。塊鍊鉄を、利器として優れた金属に変化させたものが鋼といえる。ただし、この玉柄鉄剣は、刃部の鉄は鋼であるが、鉄、青銅、玉の複合剣であり、構造的には実用に向かない。実用的な材料でありながら、装飾的な用途に使用されている点に留意したい。

先述した三門峡虢国墓地 2009 号墓から出土した 4 点の鉄器のうち、銅骹鉄葉矛（M2009:730）は分析の結果、人工鉄であるとされた。この銅骹鉄葉矛は、青銅製の骹部と鉄製の葉部を鍛造で組み合わせてつくっている。残長 12.7cm、骹上端厚 1.6cm、鉄葉幅 2.9cm である。出土時には鉄葉部と青銅骹部はほとんど残っていなかった。銅骹部はトルコ石が象嵌され、枝状の凹線紋で飾られている。鉄刃部からはパーライトの痕跡が検出されており、鍊鉄浸炭鋼である。

中原地域では、西周時代末期において、人工鉄の出土がはじまる。それは塊鍊鉄と、塊鍊浸炭鋼で、二つの技術が同時に見られるといえる。

春秋時代前期の出土鉄器のうち、金属学的な分析がなされているのは、秦国の墓とされ

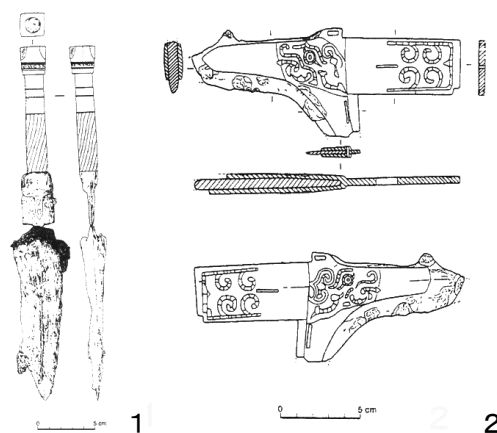


図 8 虢国墓地出土の人工鉄製銅鉄複合器
1. 玉柄鉄剣、2. 鉄援銅戈

る甘肅靈台景家莊1号墓出土の銅柄鉄劍である。銅柄鉄劍は残長17cm、青銅柄長8.5cm、鉄劍身残長9cm、幅3cm、厚0.6cm、刃部の断面はレンズ状で、格には獣面紋が施される。柄に縦に4列、透かし孔が並ぶ（劉他1981）。鉄刃部は分析の結果、塊鍊浸炭鋼とされた（図9-1、韓1998）。

こうした塊鍊鉄、塊鍊浸炭鋼を含む鍛造鉄器は、西周時代末から春秋時代前期において、陝西省や甘肅省といった、中国西北地域の遺跡を中心に出土する（表3、図8-2）。そのほか、分析は行われていないが山東省長清県（山東大学考古系1998）などからも鉄援銅

内戈が出土している。銅柄鉄劍や鉄援銅内戈といった銅鉄複合器が引き続いて出土している他、鉄のみを利用する鉄劍などの出土が中国西北地域を中心に始まる。

ここで、2008年に甘肅省で出土した鉄器について言及しておきたい。2008年、西北大学と甘肅省文物考古研究所の合同調査として、甘肅省甘南チベット族自治州臨潭県陳旗の磨溝遺跡にて発掘調査が行われた（陳他2012）。この調査において、寺窪文化に属する墓、M444とM633から鉄器が出土している（図10-2、3）。M444からは鉄条（棒状の鉄製品）が、頭龕の右側より土器とともに出土した（図10-1）。M633は、墓底近くの覆土中より錆びた鉄塊が出土した。M444出土の鉄条（M444:7A）は、北京大学の陳建立教授らによって、炭素量の極低い（場所によっては未検出、高いところで0.1～0.3%）、塊鍊浸炭鋼の鍛造製品であると分析され、人工鉄であると結論づけられている。また、M444は共伴する青銅斧鋸内の木柄と埋葬人骨からAMS測定を行っている。両者の樹輪校正年代はほぼ一致しており、紀元前1430-前1260年（2σ、94.3-95.4%）であった。M633も埋葬人骨よりAMS測定がなされ、紀元前1510-前1310年（2σ、95.4%）という数値が得られた。いずれも寺窪文化、紀元前14世紀に属するといえる。

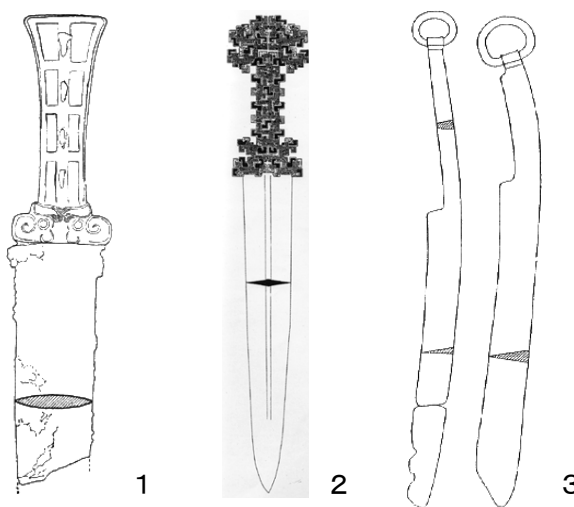


図9 西北地域出土の人工鉄器

1. 靈台景家莊1号墓出土の銅柄鉄劍 (M1:4)、
2. 宝鷄益門2号墓出土の金柄鉄劍、
3. 宝鷄益門2号墓出土の金環首鉄刀

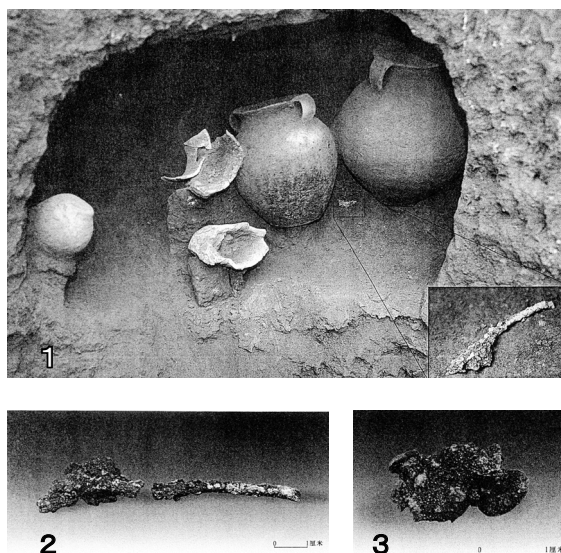


図10 磨溝墓地出土の鉄器

1. M444 頭龕および鉄条出土状況、
2. 鉄条 (M444:A7)、3. 鉄塊 (M633)

本資料は、これまでの調査で得られた中国最古の人工鉄である。これは、上記の商代中期の隕鉄とほぼ同時期に相当する。現在、商代併行期にさかのぼる人工鉄は、本資料のみである。寺窪文化は年代が紀元前 1400- 前 700 年と考えられている（謝 2002）。発掘調査で得られた資料であるが、本資料の取り扱いについては、共伴遺物の年代観なども含め、慎重でありたい。よって、資料の出土について言及するに留め、本論では保留とする。

表 2 西周末春秋初の人工鉄器

省	遺跡	遺構	鉄器	材質	時代
河南	三門峡	虢国墓地 2001 号墓	玉柄鉄剣	塊錬浸炭鋼	西周末春秋初
河南	三門峡	虢国墓地 2001 号墓	鉄援銅内戈	塊錬鉄	西周末春秋初
河南	三門峡	虢国墓地 2009 号墓	銅骸鉄葉矛	塊錬浸炭鋼	西周末春秋初

表 3 春秋前期の出土鉄器

省	県	遺跡	鉄器
山東	長清	仙人台 6 号墓	鉄援銅内戈
陝西	隴県	辺家荘	銅柄鉄剣
陝西	長武	春秋早期墓	鉄短剣
甘肅	霊台	景家荘 1 号墓	銅柄鉄剣
甘肅	礼県	秦公墓地 大堡子山 2 号中字形墓 南側 1 号車馬坑	鉄片
甘肅	礼県	秦公墓地 趙坪墓区 2 号墓	塗金鏤空銅柄鉄剣
甘肅	永昌	蛤蟆墩 M7	残鉄剣
甘肅	永昌	蛤蟆墩 M9	残鉄剣
山西	曲沃	天馬 - 曲村 84QJ7T12 ④ :9	鉄片 (白鉄)

・鉄器利用の拡大———鑄鉄

春秋時代中期の山西省にある晋国の墓地、天馬—曲村墓地から出土した鉄片は、分析の結果、共晶白鑄鉄であると分かった（韓 1998）。白鑄鉄とは、鉄を溶解して製造する鑄鉄（炭素量 2.0% 以上）の一種で、破断面が白く、結晶が密で硬くてもろい鉄である。天馬曲村出土鉄は、器種の同定が不明であり、偶然の産物の可能性も捨てきれない。現段階では、慎重に判断が必要である。しかし、鉄器の鑄造のきっかけが春秋時代中期にあったといえるだろう。

春秋時代晩期には、鉄器の出土地域が長江流域の楚・呉と呼ばれた地域にまでひろがり、鑄鉄もこの時期より出土がみられる。湖南省長沙楊家山 65 号墓地出土の鼎形器（長沙鉄路車站建設工程文物発掘隊 1978）や、江蘇省六合程橋 2 号墓出土の鉄丸（江蘇省文物管理

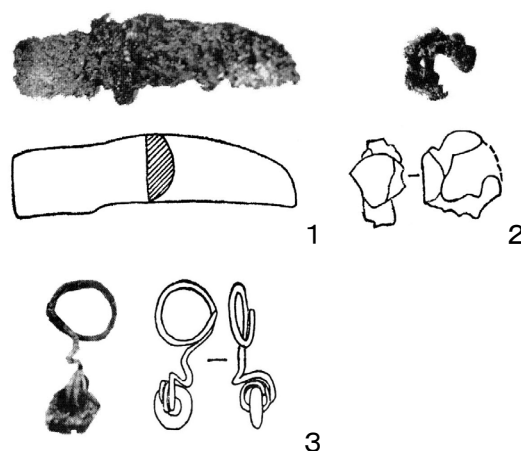


図 11 ヤンブラク墓地出土の鉄器

1. 刀子、2. 指輪、3. 耳輪（垂飾部分が鉄）

委員会・南京博物院 1965) は白銑⁸であった(韓 1998)。中原、長江周辺ともに、塊錬鉄、練鉄浸炭鋼が引き続き用いられるだけでなく、鑄鉄の利用も始まっていく。その後、戦国時代初期には、鑄鉄を脱炭する技術も出現し、中国は本格的な鉄器の量産、利用へと発展する(白 2005)。

中原の初期鉄器についてまとめる。商代中期より隕鉄の利用が始まる。西周時代末には隕鉄とともに、人工鉄が用いられるようになる。人工鉄は練鉄と連鉄浸炭鋼が同時に出現する。春秋時代前中期には、華北、特に西北地域を中心に塊錬鉄の利用が増加する。最初の鉄器は銅鉄複合器として、構造的にみて非実用的な宝飾品としての利用であった。その後春秋後時代後期には、華南を中心に鉄器の鑄造が始まり、中国全土へ拡大する(表 4)。

表 4 中原における初期鉄器のまとめ

時期	時代	材料	遺跡例	遺物	コメント
B. C. 14c	商中期	隕鉄	北京市平谷劉家河	鉄刃銅鉞	自然鉄の利用開始
B. C. 8c	西周末	塊錬鉄	河南三門峡虢国墓地	鉄援銅戈	人工鉄の出現
	春秋初	塊錬滲炭鋼	河南三門峡虢国墓地	玉柄鉄劍	鋼の出現。強度が青銅を越える
B. C. 7c	春秋中期	鑄鉄	山西天馬 - 曲村	鉄器残片	最古の鑄鉄?
B. C. 6c	春秋後期	鑄鉄容器	長沙楊家村 65 号墓	鼎形器	白銑
		脱炭鑄鉄	河南新鄭唐戸村南岡 7 号墓	板状器	白銑に脱炭処理
B. C. 5c	戦国前期	可鍛鑄鉄	河南洛陽水泥廠	鉄鍬	可鍛鑄鉄

3. 周辺地域での鉄器出土状況

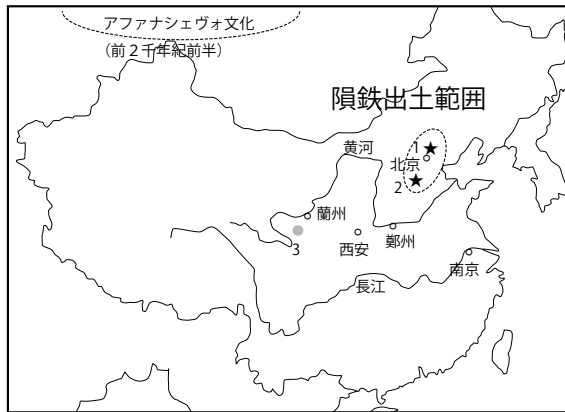
それではここで、中国の西端に位置し、後にシルクロードと呼ばれる新疆ウイグル自治区(以下、新疆)における鉄器の出土状況をみていきたい。

新疆の東部、ハミ地区にあるヤンブラク(焉不拉克)墓地からは、鉄製のナイフ、鉄劍の先、指輪などの鉄器が出土している(図 10)。鉄器の出土した墓は、当墓地の第一期にあたり、年代が紀元前 13 世紀から前 11 世紀と報告されている。これは、中原地区の商代末期から西周時代前期に相当する。鉄器は、西周時代前期に属するとされる(新疆維吾爾自治区文化庁文物処他 1989)。

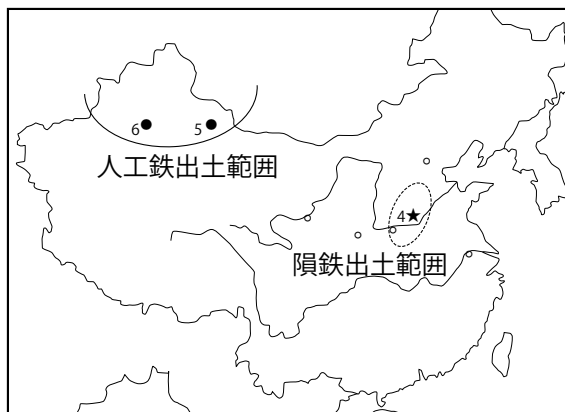
また、同じく西周時代併行期のトルファン洋海 I 号墓地からも、銅鉄複合帯鉤が出土している(新疆文物考古研究所他 2004)。その他、新疆各地の西周時代から春秋時代にかけての墓地より、鉄製刀子や劍、鎌といった武器や工具、さらに鉄製の指輪などの装身具が出土している(陳 1993)。

新疆の初期鉄器の特徴として、鉄製の装身具の利用がある。そのほか、刀子などの小型の工具が出土鉄器の中心である。武器が主体となる中原とは、異なる状況がうかがえる。

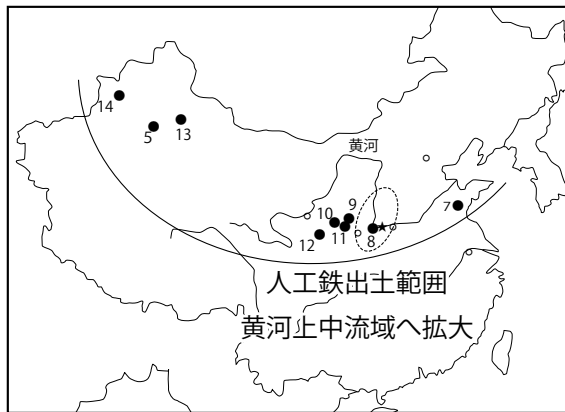
ヤンブラク墓地など初期に出土する鉄器は、北京科技大学の分析の結果、指輪が塊錬鉄



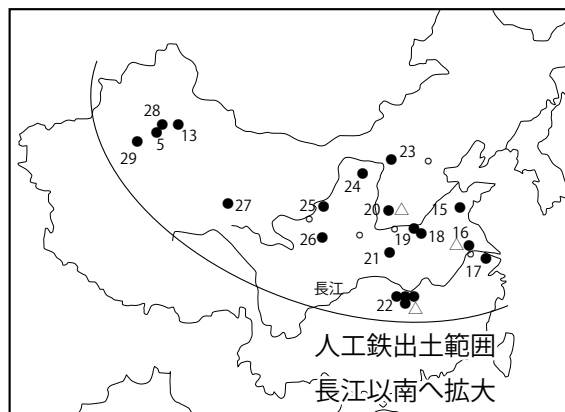
商代中～後期
★隕鉄
1 劉家荘、2 台西村、3 磨溝



商末西周前期
★隕鉄、●人工鉄
4 辛村、5 ヤンプラク、6 チャウフ墓地



西周後 - 春秋前期
★隕鉄、●人工鉄
7 仙人台、8 虢国墓地、9 長武県、
10 辺家荘、11 景家荘、12 大堡子山・趙坪墓、
13 ヤンハイ、14 チョンクク



春秋中後期
●人工鉄、△鑄鉄
15 沂水、16 程橋、17 僭尼山、18 南崗、19 王城崗、
20 天馬曲村、21 浙川下寺、22 楊家山、長沙楚墓、
龍洞坡、識字嶺、23 毛慶溝、24 桃紅巴拉、25 狼窩子坑、
26 益門、27 蛤漠墩、28 ハプチカン、29 チュンバク

図12 中国における初期の鉄器出土範囲の拡大

製であることが分かった。さらに時期は不明であるが、同墓地より得られた鉄片2点からはパーライト組織が観察され、鋼が利用されていたことも明らかになっている(図9、Qian et al. 2002)。

また、洋海墓地出土の鉄器で、2号墓地265号墓出土の鉄刀は、99.6% Feで、フェライトとパーライトが確認され、鍛造成形の低炭素鋼と分析された(凌他2008)。

新疆の最初期の鉄器は隕鉄の利用ではなく人工の塊錬鉄を用いたと判断できる。新疆における鋼の利用と技術については、出現年代も含めて、今後の研究を待つ状況にある。現在、新疆の遺跡は中原と比較し、年代を細かく絞り込めるものが少ない。それでも、中原よりやや先駆けて、鉄器を受容し、利用していた様子をうかがうことができる。新疆では西周時代前期の紀元前1000年頃鉄器の出土がはじまる。塊錬鉄由来の人工鉄と考えられており、小型の工具や装身具を中心とした鉄器の出土が続いていく。

4. 考察 新疆から中原へ

以上、中原と西北地域の初期鉄器について、各地の出土状況をのべた。

中国における鉄器の利用は隕鉄から始まる。隕鉄の出土する最古の墓は、河北省平谷県劉家莊墓である。この墓は、中原の青銅礼器とともに、アンドロノヴォ型の黄金製耳飾りを共伴する墓である。草原世界との関係性を見ることができる。なお、ユーラシアの草原地域に目を転じれば(第3章参照)、紀元前2千年紀前半、アンドロノヴォ文化に先行する、アフアナシェヴォ文化において隕鉄製ブレスレットの出土がある(第3章、図21参照)。中国最初期の隕鉄は、草原世界との接触の中でその利用が始められた可能性も考えられる。

商代から西周時代末にかけて、中原を中心に隕鉄製の銅鉄複合器が使用された。一方で、西周時代前～中期に、新疆において人工鉄の出土がはじまる。現在、甘粛省南部から商代中期に併行する時期の鉄器も報告されているが、類例が乏しく所属年代も検討が必要であるため、今回は保留とする。人工鉄は、西周時代末から春秋時代初期にかけて、新疆から、中原へと向かって、甘粛、陝西などの西北地域を経由しながら人工鉄が広がる(図11)。なお、この時点では、鉄器の出土範囲は黄河・渭河流域以北に限られ、長江流域へは達していない。また、出土鉄器の形態が各地で異なるため、初期の段階では、鉄素材が移動し、鉄器の成形、いわゆる小鍛冶は各受容地で行われたと考えられる。

春秋時代中期になると、白鉄の出土が天馬曲村墓地で見られ、春秋後期には長江流域の長沙楊家山65号墓、江蘇六合程橋2号墓などで鑄鉄製品の出土が始まる。鉄器の出土が長江流域に拡大すると同時に、鑄鉄の利用が始まるのである。

研究者によっては、新疆と中原の出土鉄器の器種の特徴が異なるため、新疆は西アジアから鉄器の技術を受容し、中原は中原で独自に隕鉄から製鉄技術を発展させたとする見解もある(白2005)。しかし、最初期の段階では、人工鉄は、やはり西アジアから新疆を経

由して中原へもたらされたと考えるのが妥当であろう。塊錬鉄（低炭素鋼）、塊錬浸炭鋼はともに西アジアで発見、発展した技術と考えられる。トルコ共和国に位置するカマン・カレホユック遺跡では、ヒッタイト帝国期の文化層（第Ⅲ a 層）から鉄器が出土している。分析の結果いずれも鍛造鉄器で、ナイフからは鋼の組織が観察されている。また、非金属介在物の分析によると始発原料は鉄鉱石であった（赤沼 1993）。鉄滓やインゴットと見られる資料の出土もあり、ヒッタイト古王国時代には、粗鉄の製錬とそれを素材とする鋼の製造、さらに鍛造鉄器へという一連の生産システムが整っていたという見解がある（赤沼・佐々木 1996）。こうした、鉄が貴重品として、流通、伝播し、東アジアへと到達したと考えている。

なお、伝播の経路については、北方草原経由と南方のインド方面経由の両者の意見がある。近年、北インドから出土する紀元前 1 千年紀の初期の鉄器についても集成が行われている（上杉 2004）。どちらか、というよりは両方の可能性も存在するだろう。しかし、ユーラシア草原地帯と中国の青銅器文化との交流を考えると、筆者は従来からの草原ルートについて注目する。

中原では、最初期の人工鉄が塊錬鉄であること、塊錬鉄、塊錬浸炭鋼がほぼ同時に出土することなどから、導入技術であるといえる。さらに、炭素量を調節して性能を増した鋼を、非実用的な構造を持つ玉柄鉄剣に利用しているなど、材料と機能が整合していない。独自の材料開発というよりは、貴重品として持ち込まれ、宝飾的な材料として扱われたとみる方が自然であろう。しかし、一旦、鉄器を導入した後、中原においては、青銅器工房での鉄器製造を経て、鑄造鉄器の開発へと独自の技術体系を打ち立てていったことは、確実である。

5. 結び

以上、中国における最初期の鉄器を集成し、その発展、変化の様子を概観した。中国において、自然鉄である隕鉄を加工することが商代中期にはじまった。その後、西周時代末になると、西アジアから新疆を経て、中原へと塊錬鉄が持ち込まれた。同時に鋼も持ち込まれた。鉄器を受容した後、中国では、鉄器鑄造技術の発明および鉄製農耕具の大量生産、それを受けて秦・漢と続く中華王朝が成立していく。

中国の初期鉄器の導入は、漢代以前のシルクロード、つまり中央ユーラシアの草原地帯を通り、もたらされたといえるだろう。草原地帯における初期の鉄器交流については、未だ明らかになっていない。遺跡や遺物の年代問題など、解決すべき課題が多いこと、また、遺跡の調査事例が中原に比べて少ないため、出土遺物においても数が限られる点などがその理由である。しかし、技術の交流や文化の発展を考える上でも鉄器をめぐる交流は非常に重要な研究課題であり、今後解決していくべきテーマである。

(註)

- 1 鉞の各部の名称は以下のように用いる。内：柄と接続する基部。欄：柄に固定するため、左右に出っ張った部分。
- 2 商代の鉄刃銅鉞は、報告書等では「鉞」として紹介される。佐々木氏は、これらの鉞が小型品であることから「戚」という名称を用いている。特に劉家莊出土品は小型であることから明器の可能性も指摘している（佐々木 2000）。本論では、中文の報告書の慣例に従い鉄刃銅鉞のまま用いる。
- 3 金属に常温で鍛造し成形する加工方法。
- 4 計測値は2.8%、腐食による損失を勘案し、ニッケル6%とする（李 1976）。
- 5 金属の塑性加工を再結晶温度以上で行うこと。冷間加工の対。金属は加工と同時に再結晶して軟化し、加工硬化が残らない。
- 6 練鉄は、本来は近代製鉄技術において、反射炉で鋼を得るとき用いられた炭素量の少ない鉄に対して用いた用語である。初期の製錬で得られた鉄を海面鉄と称する場合もあるが、本稿では中国考古学の用語を援用し、初期の低炭素の鉄に対し、塊練鉄を用いる。
- 7 パーライト pearlite とは鋼の組織の一種で、フェライト（ α 鉄、純鉄）とセメンタイト（ Fe_3C 、鉄の炭化物）が交互に重なった層状の組織を持つ。断面を顕微鏡で観察した時の光沢が真珠（パール）に似ているため、パーライトと称される。
- 8 白鉄 pig iron とは炭素がほぼすべてセメンタイトの板状結晶となっていて、破面が白色をしている銑鉄。結晶は密で、かたく、もろい。

引用文献

- 赤沼英男 1993 「カマン・カレホユック出土鉄器の金属学的解析（1）」『アナトリア考古学研究』2、pp. 61-73
- 赤沼英雄・佐々木稔 1996 「遺物の金属工学的解析結果からみたヒッタイト時代における鋼の製造」『アナトリア考古学研究』5、pp. 195-209
- 上杉彰紀 2004 「南アジアにおける鉄器—北インドを中心に—」『西アジア考古学』5、pp. 37-52
- 梅原末治 1954 「中国出土の一群の銅利器に就いて」『京都大学人文科学研究所創立二十五周年記念論集』京都大学、pp. 1-21
- 佐々木正治 2000 「殷周鉄刃利器の再検討」『製鉄史論文集』たたら研究会、pp. 429-458
- 高浜秀 2000 「前2千年紀前半の中央ユーラシアの銅器若干について」『シルクロード学研究叢書』3、pp. 111-128
- 中村三郎・高橋藤尾 1975 「中国古代の鉄刃青銅兵器に就て」『宮城工業高等専門学校研究紀要』12、pp. 1-14
- フォーブス著 平田寛他監訳 2003 『古代の技術史・上-金属-』朝倉書房
- 河南省文物考古研究所 1999 『三門峽虢国墓地』文物出版社
- 河北省博物館・文物管理所 1973 「河北藁城台西村的商代遺址」『考古』1973-5、pp. 266-271
- 河北省文物研究所 1985 『藁城台西商代遺址』文物出版社

- 韓汝玢 1998「中国早期鉄器（公元前5世紀以前）的金相学研究」『考古』1998-2、pp. 87-96
- 郭物 2007「新疆及中原冶鉄術来源問題的探討」『新疆文物』2007-2、pp. 70-87
- 孔令平・馮国正 1988「鉄器的起源問題」『考古』1988-6、pp. 542-546
- 江蘇省文物管理委員會・南京博物院 1965「江蘇六合程橋東周墓」『考古』1965-3、pp. 105-115
- 山東大学考古系 1998「山東長清縣仙人台周代墓地」『考古』1998-9、pp. 11-25
- 新疆維吾爾自治区文化厅文物処・新疆大学歴史系文博幹部專修班 1989「新疆哈密焉不拉克墓地」
『新疆文物』1989-3、pp. 325-362
- 新疆文物考古研究所・吐魯番地区文物局 2004「鄯善縣洋海一号墓地發掘簡報」『新疆文物』
2004-1、pp. 1-27
- 謝端琚 2002『甘青地区史前考古』文物出版社
- 趙化成 1996「公元前5世紀中葉以前中国人工鉄器的發現及其相關問題」、『考古文物研究』
三秦出版社、pp. 289-300
- 長沙鐵路車站建設工程文物發掘隊 1978「長沙新發現春秋晚期鋼劍和鉄器」『文物』、pp. 44-48
- 陳戈 1989「新疆出土的早期鉄器」『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』文物出版社、pp. 425-432
- 陳建立・毛瑞林・王輝・陳洪海・謝淡・錢輝鵬 2012「甘肅臨潭磨溝寺窪文化墓葬出土鉄器与中
国冶鉄技術起源」『文物』2012-8、pp. 45-53
- 張先得・張先録 1990「北京平谷劉家河商代銅鉞鉄刃的分析鑑定」『文物』1990-7、pp. 66-71
- 唐際根 1993「中国冶鉄術的起源問題」『考古』1993-6、pp. 556-565
- 白雲翔 2005『先秦兩漢鉄器的考古学研究』科学出版社
- 北京市文物管理所 1977「北京市平谷縣發現商代墓葬」『文物』1977 - 11、pp. 1-8
- 宝鷄市考古工作隊 1993「宝鷄市益門村二号墓春秋墓發掘簡報」『文物』1993-10、pp. 1-14
- 李衆 1976「關於藁城商代銅鉞鉄刃的分析」『考古學報』1976-2、pp. 17-34
- 劉学堂 2004「中国冶鉄術的起源」『中国文物報』2004年4月2日
- 劉得禎・朱建唐 1981「甘肅靈台縣景家莊春秋墓」『考古』1981-4、pp. 298-301
- 凌勇・梅建軍・李肖・張永兵・呂恩国 2008「新疆吐魯番地区出土金属器的科学分析」『吐魯番学
研究』2008-1、pp. 20-26
- Gettens, R.J., Clarke, R.S., Chase, Jr. and W.T. 1971 *Two Early Chinese Weapons with Meteoritic Iron
Blades*, Freer Gallery of Art
- Qian, Wei. Chen, Ge. 2002 The Iron Artifacts unearthed from Yanbulake Cemetery and the Beginning of
Use of Iron in China, *Proceedings of BUMA-V* (發表要旨), Kyeongju in Korea,
pp.189-194
- Wagner, D. B. 2003 The earliest use of iron in China, *Bulletin of the Museum of For Eastern Antiquities*.
Vol.75, pp.127-169

图版出典

- 图4-1 張先得・張先録 1990 p. 69 图四・北京市文物管理所 1977、图版式
- 2 北京市文物管理所 1977 p. 6 图一八
- 图5 河北省博物館 1973 p. 271 图五

- 图6 - 1, 2 Gettens etc. 1971
- 图7 河南省文物考古研究所 1999 p. 56 1 图一 1
- 图8 - 1, 2 河南省文物考古研究所 1999 p. 128 图一〇五 1, 3 · 4
- 图9 - 1 劉·朱 1981 p. 299 图二 7
- 2, 3 宝鷄市考古工作隊 1993 p. 4 图七 1, p. 6 图一一 1, 2
- 图10 - 1, 2, 3 新疆維吾爾自治区文化厅文物处他 1989 p. 348 图二六 10, 11, p. 346 图二四 8,
卷末图版拾参 7, 8, 图版拾式 5
- 图11 - 1, 2, 3 陳他 2012 卷頭彩版
- 图12 筆者作成

第2章 中国北方草原地帯における鉄器の受容と展開

1. はじめに

第2章では、中国北方草原地帯における初期遊牧民文化の墓から出土する鉄器について論じる。

中国北方草原地帯からは、春秋戦国期¹にかけて鉄製刀子や短剣などの武器・工具を中心とする鉄器の出土が始まる。草原地帯の鉄器は、その地域における青銅器の発展上であり、小型の武器・工具、装飾品などが主体となる。鉄製の鑄造農具などが中心となる中原とは異なる地域的な特徴を持っている。しかし、北方草原地帯では、青銅器文化が主な研究対象とされ、特に鉄器を対象とした研究はあまり進められてこなかった。また、中国における鉄器研究においては、鉄器の出土や鉄冶金関係の遺跡といった資料の豊富な中原および長江流域が主体となり、北部辺境地帯に目を向けた論考が少ないのが現状である。しかし、北方草原地帯の文化的特徴をより理解する上でも、また、中国における鉄器の導入を考える上でも、草原地帯の初期鉄器について研究は重要な意義を持つ。

よって、本論では、鉄器が春秋時代より出土する以下の三地区を対象に、鉄器の出土量と出土器種の変遷について分析を行った(図13)。①隴東・寧夏南部地区：甘肅省東部の慶陽および寧夏南部の固原県を中心とする地域、②オールドス・河套地区：包頭市および陝西省北部を含むオールドス高原、③フフホト・岱海地区、である。それぞれの地区における鉄器の受容と展開について比較することで、北方草原地帯の鉄器受容の様相を明らかにしていく目的である。

・研究略史

現在、北方草原地帯の初期鉄器について、北方系青銅器文化の一部という視点からの研究と中国の鉄器研究という視点からの2つの系統の研究がある。

北方系青銅器文化研究からのアプローチとしては、田広金や烏恩、楊

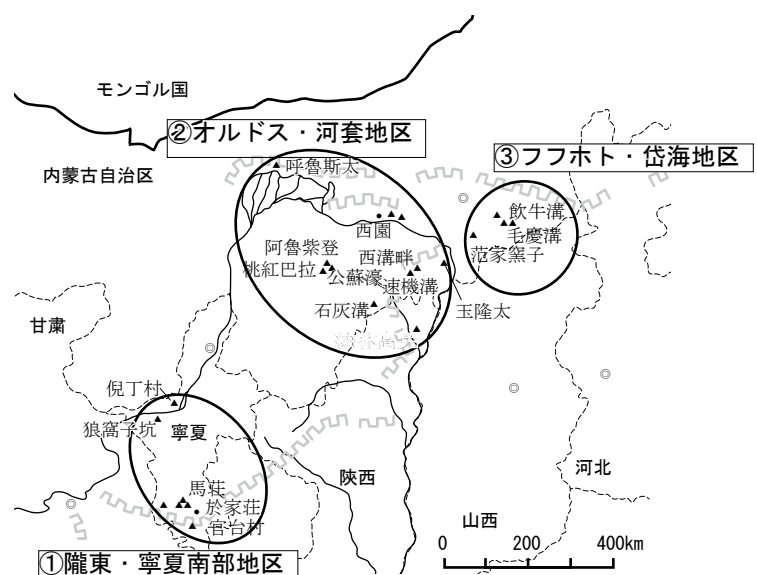


図13 本章の対象とする遺跡

建華などがあげられる。田広金・郭素秦はオルドス発見の青銅器を研究する上で、同時期の鉄器も併せて分析しており、刀子、短剣、鶴嘴斧など主要器種がいつ、どの段階で銅から鉄へ変化するのかを論じている（田・郭 1986）。楊建華は、北方草原地区に対して文化設定と時期区分を詳細に検討し、各地区のそれぞれの時期において、どのような鉄器が出土しているのか総合的な視点から述べている（楊 2004）。さらに、烏恩は、草原文化の地域文化を設定する上で、特に初期鉄器文化という概念の重要性について主張している（烏 2008, pp. 6-7）。

中国鉄器研究の方面からは、白雲翔の論考を代表的な研究とできる。白は中国の北方草原地帯に出土する鉄器について資料の集成を行い、「西北系統」の鉄器が出土の中心を占めるが、時代の経過に従い「中原系統」の鉄器も出土があると結論付けている。西北系統の鉄器は、装身具や小型の工具が中心をなし、中原系統の鉄器は鑄造の農具や武器などが中心であるとしている。北方草原地帯は初期鉄器文化において、西北系統と中原系統の二系統の交錯地であったことを、中原や西北地域との比較の上で明らかにした（白 2005, pp. 122-125）。

草原地帯の鉄器は、これまでの研究において、北方系青銅器文化の一部としての研究は豊富であるが、草原地帯の初期鉄器という視点からの論文は少ないのが現状であろう。また、中原との比較の上での全体的な出土鉄器の特徴は明らかとなっているが、北方草原地帯内での各地域個別の状況は、検討すべき課題である。よって、本論では上記①～③の三地区の草原文化の遺跡に対して、時期ごとの鉄器出土器種と数量を青銅器と比較し考察を加えていく。

2. 隴東・寧夏南部地区

甘肅慶陽と寧夏固原を中心とする当地区は楊朗文化が設定されている（烏 2007, pp. 357-386）。当地区において、鉄器が出土するのは春秋時代中期以降である。発掘調査を経た遺跡と鉄器が採集された遺跡を分析の対象とした。遺跡の年代は、楊建華の研究を参考とする（楊 2004）。

・春秋時代中期

寧夏中衛県の倪丁村墓地は、2基の墓からなり、124点の出土遺物がある。青銅短剣を始めとし、武器や工具、装飾品といった北方系青銅器を豊富に副葬する墓地である。寧夏西南部の北方系青銅器文化の最も早い墓地であるが、当墓地からは鉄器の出土はない（寧夏回族自治区博物館考古隊 1987）。

一方、中衛県狼窩子坑墓地では11基の墓から398点の青銅器が出土した。青銅武器や工具、車馬具、装飾品などがあり、いずれも北方系青銅器に属する。鉄器は、銅柄鉄

劍2点で、1号墓と3号墓から出土する(周1989)。3号墓出土の銅柄鉄劍(M3:12)は全長48.7cm、刃幅6.5cmで、鉄刃部は完存していた。青銅の柄頭は楕円形で、柄は螺旋状に装飾される。山字型の格を持つ(図14-11)。1号墓出土の銅柄鉄劍(M1:25)は、残長24.5cm、柄長10cm、鉄刃残長6.5cm、刃幅2.2cm、山字形の格を有する。

・春秋時代後期から戦国時代前期

春秋時代後期から戦国時代前期にかけて、鉄器の出土が増加する。

固原於家莊墓地からは、鉄製の短劍、環、飾板が出土する(寧夏文物考古研究所1995)。

固原県楊朗郷馬莊墓地は、春秋戦国時代の墓49基が調査され、2957点に及ぶ遺物が出土した大型の墓地である。楊朗文化として、当地を代表する墓地となっている。この墓地は、掘りこみ面の上下関係より、前後2時期に区分される。前期は甲組と称され、春秋時代末戦国時代初期で10基の墓が属する。前期の墓から出土する鉄器はわずかに5点でI M 3より鉄劍、鉄環2点、飾板2点が出土する。鉄劍は残長18cm、幅2cmである(図14-7、寧夏文物考古研究所他1993)。

彭陽張街村墓地では、6基の墓と1基の葬坑が調査された。副葬品86点のうち、鉄器が3点出土する。M2土洞墓には中年男性が埋葬されており、被葬者の右手付近からは青銅環首劍が、左手付近からは鉄劍が出土している。残長12.9cm、幅1.8cmで、錆のため形状不明である(図14-8)。M3土洞墓は老年女性の単人葬で、右腕付近から、鉄製の環が出土する。直径8.5cmで、環内に横棒が渡されている(図14-25)。もう1点は錆のため、形態不明である(寧夏回族自治区文物考古研究所2002)。

固原呂坪村で道路の修復時に村民によって発見された。墓は1基で竪穴土壙墓、仰臥伸展葬であったという。墓からは84点の遺物が出土し、青銅器は75点に達する。青銅武器、装飾品、馬具が出土するが、鉄器はみられなかった(固原博物館1992)。

慶陽県城北五里坡居城区において下水道の建設時に葬馬坑が発見された。攪乱のため、形状は不明瞭であるが、土坑は1.7×1.3m、深1.4mほどであった。出土遺物は73点あり、銅柄鉄劍が1点含まれる。青銅製の柄に、鉄製の刃部を持つが、鉄刃は腐食のため5.5cmほど残存するのみである。青銅柄部は残長17cm、山字形の格を持ち、柄は立体的な螺旋紋で飾られる。柄頭は楕円形状である(図14-12、慶陽地区博物館1988)。

慶陽正寧県後莊村において、農民が1基の墓と葬馬坑を発見し、翌年地区博物館によって遺物が回収された。墓の状況はよく分かっていないが、後述する寧県袁家村墓に類似するものであったと考えられている。出土遺物は32点あり、青銅武器・工具、車馬具が中心である。その中で1点、銅柄鉄劍がある。鉄刃はわずか0.7cmほど残っていた。銅製の柄頭は2羽の猛禽が向いあって環をなし、柄は扁平、中央に方形の孔があり、格は互いに外を向く獣面紋で飾られる。残長11.5cmであった(図14-16、劉他1988)。同様の銅柄鉄劍は、オールドス地域で1点出土し(図16-4)、2点ほど採集品(図14-15)が知られている。

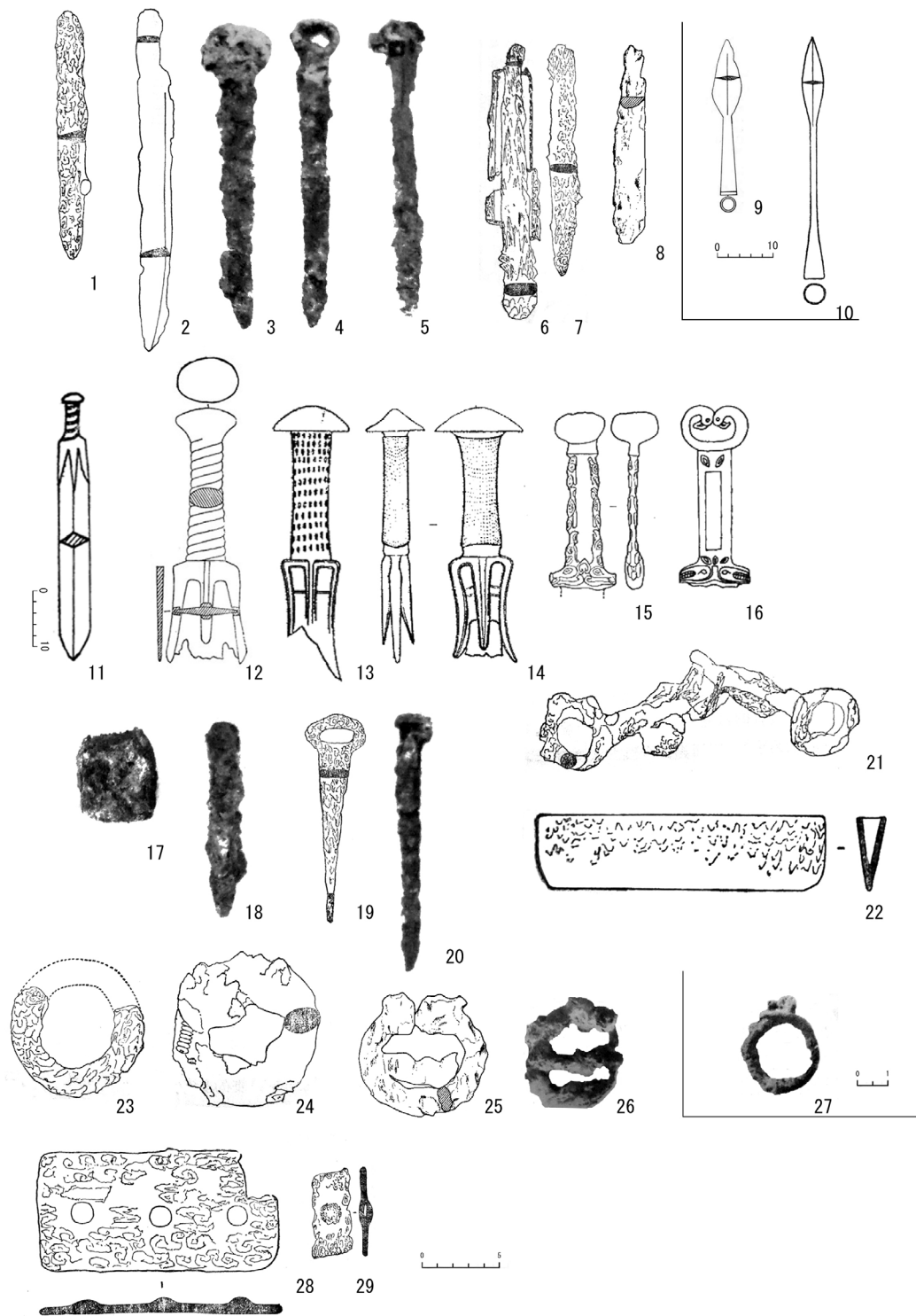


图 14 隴東・寧夏南部地区の鉄器

1-5, 鉄製刀子 (馬莊墓地 I M15:1, I M2:45, 倒墩子墓地 M26:2, M19:11, M18:15)、6-8. 鉄劍 (馬莊墓地 III M4:88, I M3:10, 張街村墓地 M2:50)、9. 10. 鉄矛 (袁家村, 馬莊墓地 III M4:13)、11-16. 銅鉄複合短劍 (狼窩子坑墓地 M3:12, 五里坡葬馬坑, 陳陽川村墓 M:01, 馬莊墓地 I M12:3, 內蒙古採集 E・6, 後莊村墓)、17. 鉄斧 (倒墩子墓地 M18:14)、18. 鉄鑿 (倒墩子墓地 M2:5)、19, 20. 鉄錐 (馬莊墓地 IT504 ③:3, 倒墩子墓地 M18:22)、21. 鉄銜 (馬莊墓地 III M5:22)、22. 鉄鋏 (馬莊墓地 IT504 ③:2)、23-26. 鉄環 (馬莊墓地 III M5:18, 26, 張街村墓地 M3:15, 倒墩子墓地 M7:8)、27. 鉄製指輪 (倒墩子墓地 M21:1)、28. 鉄製大型飾板 (馬莊墓地 III M5:16)、29. 鉄製小型飾板 (馬莊墓地 III M5:17)

・戦国時代中期

固原彭陽県官台村の河畔より1基の堅穴土壙墓が、農民により発見された。付近には馬、牛、羊の頭骨の殉葬があったという。青銅器、骨角器合わせて30点ほどが出土している。青銅器には武器、車馬具、装飾品がある。その中で、銅柄鉄剣が1点発見された。長剣で、復元すると50cmほどになるとみられる。現存する柄部は残長14cm、格幅4.2cm、また鉄製の剣先が残っており、残長8.4cm、幅3cmである。格は山字形で、山字の間に横線紋がある。柄部には突起で飾られる。柄頭は楕円形で、頂部に孔がある（羅他1993）。

慶陽寧県袁家村で、河畔より農民が1基の墓と葬馬坑を発見した。出土遺物は合計43点あり、その中で墓より22点が出土したという。墓は堅穴土壙墓で、木棺の痕跡があり、被葬者は仰臥伸展葬であった。頭骨の右側に鉄矛が置かれ、左点には銅戈、短剣、鏃等の青銅器が置かれていた。鉄矛は、全長28cm、幅4.8cm、銚長14cmで、銚は上部が狭く、下部が広い（図14-9、劉他1988）。

固原鴉爾溝墓地は、秦の長城の東南2km、断山頭という独立丘陵の南斜面に位置する。土壙内より人骨と馬骨、金属器が発見された。出土遺物は青銅装飾品が主体であるが、菱形の鉄器残片が発見されており、鉄剣の先端部と見られている。

・戦国時代晚期

固原馬莊後期墓地の後期の墓は8基ある。青銅器とともに鉄器が16点出土する。銅柄鉄剣が1点、I M12より出土する。鉄刃部は錆のためほとんど残っていない。柄部は全面を乳突紋で飾り柄頭がきのこ状で、山字形の格を有する。格の中央部に横線紋がある。残長18.9cm、格幅5.2cm、柄長11cmである（図14-14）。III M4からは鉄鏃、鉄剣（図14-6）、鉄矛が出土する。III M5からは飾板3点のほか、鉄銜、鉄腕輪、鉄刀、鉄環などの出土がある。III M4出土の鉄矛は全長43.2cm、幅4cmであった（図14-10）。鉄鏃は両端に環を持つ直条形で、長さ9.2cmであるIII M5出土の鉄銜は残長17.6cm、2つのパーツを連結しており、片方のみの長さは7.9cmであった（図14-21）。鉄飾板は長方形で、正面に3か所突起がある。全長15.4cm、幅7.6cmである（図14-28）。小型の飾板は、長5.9cm、幅2.7cmである。腕輪は円環形で数十点のトルコ石が象嵌されている。外径8.9cm、内径6.4cm、その他の環は外形8.5cm、内径4.7cm（図14-24、寧夏文物考古研究所他1993）。

・漢代

西吉県新営郷陳陽川村では、1基の土壙墓が農民により発見された。銅柄鉄剣が出土している。出土遺物は22点あり、1点銅柄鉄剣が含まれる。柄部は乳突紋で飾られ、残長19cm、幅5.5cm、官台村出土銅柄鉄剣と類似する。戦国時代末から前漢初期に位置づけられる（図14-13、羅他1990）。

同心県王団郷倒墩子墓地は、1983年に5基の墓が県文物管理所によって試掘、調査が行

われ、1985年、自治区博物館、県文管所、社会科学院考古研究所によって27基が共同発掘された。出土遺物は合計1千点を越える。墓は頭部に龕を持つ堅穴土壙墓が中心であり、単人仰臥伸展葬で、頭部が低く脚部が高いという、この地域特有の埋葬方式がとられていた。他、堅穴偏室墓6基、石棺墓1基がある。出土遺物の大半は五銖銭であり、その年代は前漢中晩期に属する。貨幣を除くと青銅器は58点出土するが、大部分が装飾品であり、21点出土した動物闘争紋の方形帯飾りが特徴的である。

鉄器は39点出土し、内11点は錆のため形態不明である。利器と装飾品があり、刀子が15点と最も多い。利器は他に斧1点、錐1点、鑿1点がある。保存が良好な鉄製刀子は5点あり、いずれも環頸、片刃で長短はさまざまである。2号墓出土刀子は全長15cm。18号墓出土品は保存が良好で、木製の鞘の痕跡が残る。鞘には石珠の象眼があった。全長は19.2cmである(図14-5)。鉄斧は長方形の有蓋式で蓋内には木材が残存する。全長6.5cm、幅6cmである。中原からの搬入品の可能性もあるだろう(図14-17)。鉄錐は全長16.9cm、断面楕円形を呈する(図14-20)。鉄鑿は錆が著しいが、片刃で断面は楕円形であった。全長12.5cm、幅0.7-2.2cmである(図14-18)。

鉄製装飾品としては鉄環6点、帯扣3点、耳環1点がある。鉄環で保存が良好なものは2点あり断面円形、18号墓出土品は外径3.8cm、21号墓は外形4.4cmである。2号墓からは鉄環3点が被葬者の足元付近より、鉄鑿や銅環とともに出土している。鉄製帯扣は円形で中間に舌のある形態が7号墓より出土する。直径は5.4-5.8cmで舌長4.2cmである(図14-26)。耳環は1号墓より出土し、直径2.3cm、直径0.35cmの針金をねじって形成している。一端には小環を作り、もう一端は尖る(図14-27)。同墓地出土の金耳環と類似する形態である(同心県文物管理所他1988)。

後漢初期は同心李家套墓地である。水路敷設時に破壊されており、5基の墓から遺物が出土している。墓は堅穴土壙木槨墓、長方形磚室墓、石棺墓が確認されているが、いずれの墓からも五銖銭あるいは貨銭が出土しており、後漢前期に位置づけられる。本墓地からは、鉄釜と鉄環が出土している。鉄釜(TLM2:1)は長方形磚室墓から見つかっており、墓室の東北隅に置かれていた。すぼまる口縁部に折腹、平底で、外面は錆化が著しい。口径25.2cm、高33cmである。鉄環(TLM1:8)は堅穴土壙木槨墓から出土しており、直径4.7cm、外面は錆が著しい(同心県文管所他1988)。

当地区から出土する鉄器は、武器・工具では刀子、短剣、銅柄鉄剣、錐、斧、鑿、矛、鍤があり、車馬具では銜、装飾品では環(腕環、耳環)、帯扣、飾板がある。特徴的な鉄器は銅鉄複合短剣である。青銅の柄部に鉄の刃部を備える。中でも山字形の格を備え、螺旋紋か乳突紋の柄を持つ短剣が6点出土している。この山字形格の銅鉄複合剣は、四川雲南地区の漢代併行期、滇文化に特徴的な剣である。格の型式に基づいた編年が行われている(今村1984)。慶陽・寧夏地区においては春秋時代中期の中寧狼窩子坑墓地より銅柄鉄剣の出土がある。当地域から出土する山字形格銅鉄複合短剣は、滇文化の短剣と比べ格の

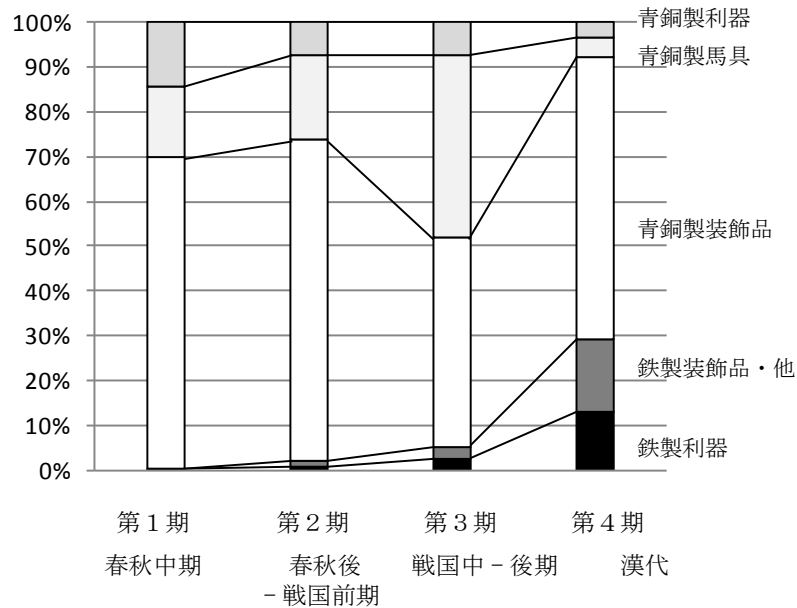


図 15 隴東・寧夏南部地区における青銅器と鉄器の出土比率

部分がシンプルであり、その古い形態を示しているといえる。

当地区において、時期ごとに青銅器と鉄器の出土量を比較したのが図 15、表 5 である（図 15、表 5）。鉄器の出土量により四期に区分できる。

第 1 期 春秋時代中期

鉄器の出土がはじまる。銅柄鉄剣が 2 点と破片が若干出土している。青銅器が出土の中心を占め、数量、器種ともに豊富である。青銅器は武器・工具で、刀子、短剣、鶴嘴斧、錐、斧、戈、矛、鏃等があり、車馬具では馬面、轆飾、竿頭飾、装飾品は帯鉤、管状飾、飾板、泡等がある。

第 2 期 春秋時代後期から戦国時代前期

鉄器の数量と器種が増加する。出土した鉄器は刀子、短剣、錐などの武器・工具、環、飾板などの装飾品がある。青銅器は第一期に引き続き器種、総数ともに豊富に出土している。

第 3 期 戦国時代中期から後期

鉄器の器種が更に増加する。銜と鏃など、装飾品を除く青銅馬具の出土がなくなり、かわって鉄器での出土が始まる。また、銅柄鉄剣の出土量が増加し、鑄造の鉄矛や鉄錘が新たに出土する。青銅器は依然として器種は多くあるが、徐々に武器・工具の出土量が減少しており、装飾品類が主体となってきている。

第4期 漢代

鉄器の器種と数量が更に増加し、武器工具や馬具がほぼ鉄器化する。新たな器種として鉄釜などの鉄製容器が出土する。青銅器は、装飾品や鍔など一部の鋳造品が主体となり、武器・工具では、ほぼ出土がなくなっている。

当地区では、春秋時代中期より銅鉄複合器²という形で鉄器の出土がはじまる。その後、鉄製利器、装飾品とも徐々に増加する。第4期の漢代併行期になると、利器の材質の割合は、鉄器が青銅器を超える。装飾品については、鉄器の割合も増加していくが、青銅器が大半を占める状態が、第1期から第4期まで続いていく（図15）。

3. オルドス・河套地区

内蒙古中南部の包頭周辺、オルドス高原、陝西省北部を含む河套地区は桃紅巴拉文化が設定されている（烏2007、pp.322-356）。当地区では、春秋時代晩期以降鉄器の出土が見られる。鉄器出土遺跡について、宮本一夫の土器編年（宮本2001）および楊建華（楊2004）の時期区分を参考にした。春秋時代晩期は、伊克昭盟杭錦旗桃紅巴拉墓地・公蘇壕墓地、戦国時代前期は烏拉特中後旗呼魯斯太墓地、准格爾旗西溝畔3号墓、戦国時代後期は、准格爾旗玉隆太墓地、速機溝墓、陝西神木納林高兔墓、准格爾旗西溝畔2号墓、石灰溝墓葬、東勝市碾房渠窖藏である。前漢中期は西溝畔4号墓、前漢末から後漢初が補洞溝墓地である。それでは、以下出土鉄器について紹介する。

・春秋時代晩期～戦国時代前期

イフ・ジョー（伊克昭）盟は現在のオルドス市で、ハンギン（杭錦）旗桃紅巴拉墓地・公蘇壕墓は標高1500mに位置する。1972年に農民によって動物紋金銀器が発見されたのを受け、1973年に内蒙古文物工作隊によって、桃紅巴拉で6基、公蘇壕で1基の墓が調査された。出土遺物は青銅器が主体で341点あり、武器・工具、馬具、装飾品がある。鉄器も4点ほど出土がある。2点は形態不明の破片で、2点は鉄製刀子であった。桃紅巴拉1号墓出土の鉄刀は木製の鞘の痕跡が残り、全長は22.5cm、幅2.4cmである。2号墓出土品は残長6.5cmである（田1986）。

なお、オルドス・河套地区では春秋時代晩期にトゥムド（土默特）右旗水澗溝門墓、ウラド（烏拉特）中後旗呼魯斯太墓地、ジュンガル（准格爾）旗西溝畔3号墓があるが、いずれも鉄器の出土はない。

・戦国時代後期

戦国時代後期になると、遺跡数が増加し、出土鉄器も器種、数量ともに増加する。

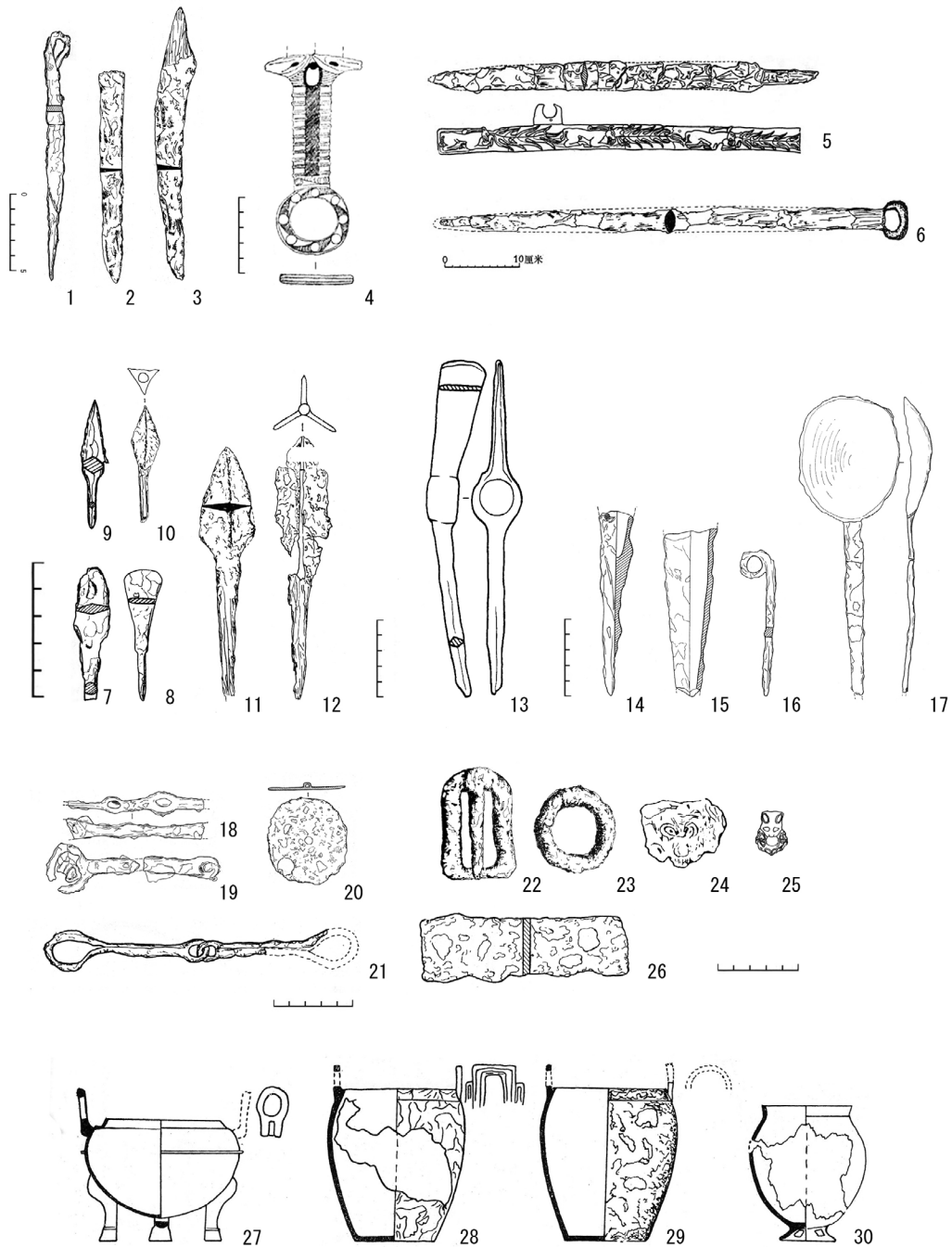


図16 オルドス・河套地区における出土鉄器

1-3. 鉄製刀子（西溝畔墓地採：34, 補洞溝墓地 M4:2, M1:4）、4. 銀鉄複合短剣（納林高兔墓）、5-6. 鉄製長剣（西溝畔戦国墓地 M2:20, 補洞溝墓地 M3:1）、7-12. 鉄鏃（西溝畔漢代墓地採：42, 43, 41, 補洞溝墓地 M3:6, M3:5, M4:4）、13. 鉄鶴嘴斧（玉隆太墓 2264）、14-15. 鉄鏃（西溝畔戦国墓地 M1:3, 2）、16. 鉄錐（2:22）、17. 鉄勺（西溝畔戦国墓地 M2:21）、18. 鉄鏃（西溝畔戦国墓地 M2:25）、19, 21. 鉄銜（西溝畔戦国墓地 M2:23, 補洞溝墓地 M6:3）、20. 鉄馬面（補洞溝墓地 M4:5）、22. 鉄帶扣（補洞溝墓地 M1:2）、23. 鉄環（補洞溝墓地 M1:4）、24-25. 鉄製鋪首（玉隆太墓 2233, 碾房渠窖藏）、16. 鉄製飾板（補洞溝墓地 M3:7）、27. 鉄鼎（補洞溝墓地 M2:1）、28-30. 鉄鍔（補洞溝墓地 M4:1, M5:2, M7:1）

ジュンガル旗にある玉隆太戦国墓からは、多数の青銅器の他、鉄器、骨製品が出土している。青銅器は、武器や工具のほか、車馬具や馬の装飾品が多いのが特徴である。鉄器は3点出土があり、鶴嘴斧、銜、鋪首である。墓壙内から人骨、馬、羊の骨などと共に発見された。鉄製鶴嘴斧(2264)は中央部に蓋があり、突端部は使用の痕跡が顕著である。全長23.5cm、刃幅3cm、蓋内径2.4cmである(図16-13)。鉄銜(2234)は残存不良であるが、二連式で、残長11.4cmである。鋪首(2233)はさびが著しいが、獣の目鼻は明瞭に識別できる。残長4.4cm、幅5.4cmである(図16-24、内蒙古博物館1986)。

ジュンガル旗北部、黄河の南に位置する西溝畔墓地は、戦国時代の匈奴墓が発掘調査されている。墓地からは金・銀製品、青銅器、鉛製品、土器類の他、鉄器が出土している。中でも保存状態のよかった2号墓からは数多くの鉄器が出土している。最も特徴的な遺物は鉄製長剣である。鉄剣は、断面菱形で狭い刃部、木製柄の痕跡があった。残長51.2cmである(図16-5)。他に、残長18.2cmの鉄勺(M2:21)がある(図16-17)。2号墓からは他に、数多くの金・銀製品が出土しており、トラとイノシシが描かれた動物闘争紋飾板(M2:26)には、「一斤五両四朱少半」、「故寺豕虎三」という銘文がある。また、トラの頭部を象った銀製節約(辻金具)にも、「(少府)二両十四朱」といった銘文が見いだせる。これらは、隣接する秦国よりもたらされたと考えられている(塔1986、p.364)。

イフ・ジョー盟速機溝は、墓とみられる土坑から戦国時代後期に属する青銅器が一括で採集されている。この採集品中には鉄器は見られない。ただし、解放初期の農民による発見のため、鉄器が見落とされた可能性もあるだろう(蓋1986)。

オルドス高原の南縁に位置する神木県には、秦代の長城が築かれ、秦が匈奴を防ぐ境界とした地である。納林高兔墓は長城の北側に位置する。1基の匈奴墓が見つかっており、金製品や銀製品、青銅器、動物骨などが出土した。注目すべきは銀製の剣柄である。剣身は鉄製であり、柄の部分は鉄製の芯を銀製の柄で包みこんでいた。銀製柄の内部には、鉄さびが残っている。柄は、環首で、格の部分には、反対方向を向いた羊が表現されており、その頭首部には鍍金が施されている。残長14cm、茎幅2.8cmである(図16-4、戴他1983)。

エジンホロ旗にある石灰溝墓からも、詳細は不明であるが若干の鉄器が出土している(伊克昭盟文物工作站1992)。

東勝市碾房渠窖藏は、金銀製品を中心とする窖藏である。金製飾板が多数出土するが、その中に獣頭形飾がある。猫の頭部を象った環状の装飾品であるが、芯を鉄で作し、その周りに金箔をかぶせている。全長2.65cm、下端部幅1.95cm、重さ6.5gである(図16-25、伊克昭盟文物工作站1991)。

・漢代

戦国墓が発見された西溝畔からは、漢代の墓地も見つかっている。4号墓は、農民による偶然の発見であり、残り8基はそれをもとに発見、調査された墓である。西溝畔は、壕

頼河の兩岸に位置する。現在は砂漠地帯であるが、墓は暗色土中にあり、当時は植生豊かな環境だったと考えられている。墓は基本的に竪穴土壙墓、単人仰臥伸展葬である。4号墓は副葬品の豊かな女性墓であり、金製飾板や石製佩飾が主体であるが、この飾板の中に鉄で芯や環をつくり、金箔で包んだ遺物がある。その外の墓からは、鉄刀2点が出土している。

また、この西溝畔漢代墓地から500mほどの地点で、住居跡が1基みつかっており、鉄器が15点出土している。鉄器は武器や工具が主体であり、鉄斧、鉄鋤、鉄刀、鉄小札、鉄鏃などがある。基本的に残存状態は良くない。鉄刀は、環首刀であり、残長16cmである(図16-1)。鉄鏃は3点あり、断面四稜、平面三角形の有鋌式で全長4.8cmの鏃(図16-9)、断面が扁平な四稜で幅の広い有鋌式で残長5cmの鏃(図16-7)、平頭、有鋌式で全長4.9cmがあった(図16-8、伊克昭盟文物工作站1986a)。

前漢末から後漢初期の補洞溝墓地は計9基の墓が調査されている。いずれも竪穴土壙墓である。男女合奏墓である1号墓からは、様々な器種の鉄器が数多く見つかっている。男性人骨の周辺からは鉄刀、鉄環、鉄帯扣が出土した。また、男性人骨の頭部付近には、馬の頭骨が殉葬され、その口元からは鉄銜が見つかっている。隣の女性人骨の周囲からも飾板などが見つかっている。その他の墓は単人葬であり、鉄刀や鉄製飾板、鉄環のほか、鉄製の環頭長剣(図16-6)、鉄鼎(図16-27)、鉄鍔(図16-28, 29, 30)など大型鉄器の出土がある。鉄器は計10種類35点におよび、中でも大型鑄造鉄器からは中原との密な接触をうかがうことができる(伊克昭盟文物工作站1986b)。

オルドス・河套地区から出土している鉄器は武器・工具で刀子、短剣、長剣、鶴嘴斧、鏃、錐、勺があり馬具では銜、鑣、馬面飾、装飾品として帯扣、飾板、環、その他鉄鼎、鉄鍔といった容器がある。特徴的な鉄器は鉄製長剣および鉄鼎など鉄製容器である。長剣、鼎など大型鉄器は、小型の工具や装飾品を主体とする北方系青銅器から発展出現したものとは系統が異なる。中原文化との接触の上で持ち込まれたと考えられる。

当地区において、青銅器と鉄器の出土量を時期ごとに比較した(表6)。鉄器の出土量に基づいて3期に区分ができる。各時期の特徴を以下に述べる。

第1期 春秋時代後期から戦国時代前期

鉄器の出土がはじまる。器種は刀子のみである。青銅器は種類、数量ともに豊富に出土し、刀子、短剣、鶴嘴斧、鏃などの武器・工具、銜、馬面、轅飾、竿頭飾などの車馬具、帯扣、管状飾、飾板、泡などの装飾品がある。

第2期 戦国時代後期

鉄器の器種が増加する。鉄剣や鉄錐、鉄製鶴嘴斧などの武器・工具類の他、鉄銜や鉄鑣などの馬具、装飾品などで鉄器が出土している。青銅器の出土量は第1期同様多いが、短剣、

表 6 オルドス・河套地区

鉄器の出現

利器は青銅器

遺跡	青銅器										鉄器										年代	出典
	墓数	計	刀	短	劍	子	斧	鐮	他	車馬具	裝飾品、他	武器・工具	馬具	裝飾品、他	年代	出典						
第1期	1	26	2				1	1	1	1	1	1	18	1	0					春秋後期	鄭 1986	
1	7	341	4	1	2	1	1	1	2	24	扁環 25	6	129	50	75	1	環 16	2		春秋後期	田 1986	
2	3	50	1	1	1	5	1		27	1	鈴 2	2	7	1	0				戦国前期	塔 1986		
	1	23	1	1		5						1	10	1	2	鳥頭飾 2			戦国前期	伊克昭盟文物 工作站 1986a		
	1	42	1	1	2	1	1	2	1	6	軛 2 鹿 5	2	3	7	1	環 4		1	輔首 1	戦国後期	内蒙古博物館 1986	
	3	15		1	2		1	2	1	4	1	4	1	1	8	鏡 1		1	2	戦国後期	塔 1986	
	1	21							4	5	鈴 4 鹿 6	2			0					戦国後期	蓋 1986	
	1	5										3			動物飾 2					戦国後期	戴・系 1983	
	1	15													若干					戦国後期	伊克昭盟文物 工作站 1992	
	-	0													1					戦国後期	伊克昭盟文物 工作站 1991	
第3期	1	50					1								4	馬 49				前漢前期	伊克昭盟文物 工作站 1986	
3	8	3										1			2	耳環 1 指環 1				前漢前期	伊克昭盟文物 工作站 1986a	
	-	2	1										1		15					前漢前期	伊克昭盟文物 工作站 1986a	
	9	6													35	鏡 1 耳環 2				前漢末後 漢前期	伊克昭盟文物 工作站 1986b	

利器の材質が
鉄主体になる

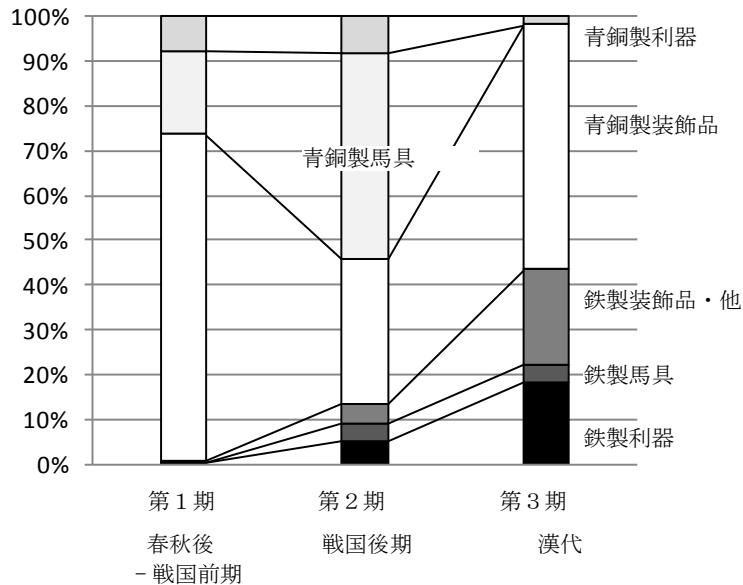


図 17 オルドス・河套地区における青銅器と鉄器の出土比率

鶴嘴斧、銜の出土がなくなり、材料が徐々に鉄器へと移行しはじめる。

第3期 漢代

鉄器の器種と数量が大幅に増加する。武器・工具類、馬具が基本的に鉄器になる。鉄製品では、新たに刀子、斧、鏃などの武器・工具、馬面飾、帯鉤、飾板、環などの装飾品、鼎、鍔といった容器の出土がある。さらに鉄鋤といった鉄製農具もまた出土している。鏃、刀子をのぞいては、青銅器は装身具か鏡のみとなる。

河套地区は、春秋時代晩期より鉄器の出土が始まり、徐々に鉄器が増加する。第1期の春秋時代後期から戦国時代前期では、利器の材質は基本的に青銅器であったが、第3期の前漢以降、武器・工具や馬具などの材質が基本的に鉄器が占める。青銅器は装飾品が中心となる。鉄製装飾品、鉄製馬具の出土量も増加し、全体の4割が鉄器となる（図17）。

4. フフホト・岱海地区

当地区は内モンゴル地区中南部にあたり毛慶溝文化が設定されている（鳥 2007、pp. 300-321）。今回対象とした遺跡は、興和溝里頭墓、涼城崢嶸窯子墓地、涼城毛慶溝墓地および白雨廟圪旦遺跡、和林格爾范家窯子遺跡、飲牛溝墓地である。

遺跡の年代については、河套地区同様先行研究を参考に決定していく。毛慶溝墓地は、1986年の報告で、四期に時期区分がなされている（内モンゴル文物工作隊 1986、p. 227-315）。2001年には、宮本により、土器の編年と、墓地における墓の立地を基に、三期に編年の再

整理が行われた（宮本 2001）。本論では、宮本の時期区分に基づいて、毛慶溝墓地の第一段階を春秋時代後期から戦国時代前期、第二段階を戦国時代前期から戦国時代後期、第三段階を戦国時代後期として区分する。また、飲牛溝墓地は、1997 年の調査の報告で、出土した帯鉤の型式や墓の立地により、戦国時代後期前段、戦国時代後期中段、戦国時代後期後段（末期）と三段階に区分されている（岱海地区考察隊 2001、p. 278-327）。本論では、戦国時代後期として一括する。

・春秋時代中～後期

春秋時代後期に属する興和溝里頭墓は 7 基の墓が調査され、青銅短剣や青銅鏃、その他青銅製装飾品は出土するが、鉄器は見られない。

同様に春秋時代中後期～戦国時代初期の墓地である涼城嶗県窯子墓地からは、大量の青銅器が出土するが、鉄器は見られない。

・春秋時代後期～戦国時代前期

春秋時代晩期の毛慶溝 63 号墓からは S 字形小型飾板が 6 点出土している。長 5.3、幅 3 cm である（図 18-22, 23, 24）。一方で和林格爾范家窑子遺跡では、21 点青銅器が見つかったものの、鉄器の出土はない。

・戦国時代前～中期

毛慶溝墓地戦国時代前中期の 4 基の墓からは 5 点ほど虎紋飾板が出土している。鏽のため文様ははっきりしないが頭部や四肢の形態から虎が横を向いて立っている図案と判断できる。31 号墓出土の飾板は長さ 18.6、幅 7cm であった（図 16-25）。

毛慶溝墓地の調査後、墓地と関係するとみられる遺構が調査された。白雨廟圪旦遺跡である。灰坑や窯跡を含み、調査トレンチの中からは、鉄刀と鉄帯鉤が出土している。鉄刀は柄頭を環状に丸める。全長 16.1cm である。鉄帯鉤は琵琶型で、扁平、鉤部分が失われている。残長 10cm（図 18-13）。出土した層位と、共伴遺物から戦国時代前～中期とされる。

毛慶溝墓地第 3 期墓からと飲牛溝墓地から小型の鉄製帯鉤が出土する。全長 4 - 5 cm で尾部に紐がある（図 18-14 ~ 21）。他に飲牛溝墓地からは、刀子、短剣、鶴嘴斧、斧、鉤といった多種の鉄器が出土する。鉄斧（97YM8:1）は、上面に長方形の蓋を持ち、正面長方形、側面楔形を呈する。全長 14.4cm、刃幅 4.6cm、蓋口 5.2 × 3.1cm である。蓋深 8 cm であった（図 18-11）。同様の鉄斧（97YM22:1）は鏽が著しく原形から形がくずれているが、推定全長 14cm、刃幅 4.9cm、蓋口 5.4 × 3.1cm、蓋深 10.6cm である（図 18-12）。いずれも鑄造製品である（内蒙古文物工作站 1984、岱海地区考察隊 2001）。

当地区から出土する鉄器は、武器・工具では刀子、短剣、鶴嘴斧、斧、鉤、また装飾品としては帯鉤、飾板、珠がある。特徴的な器種として鉄製短剣がある。飲牛溝墓地からは

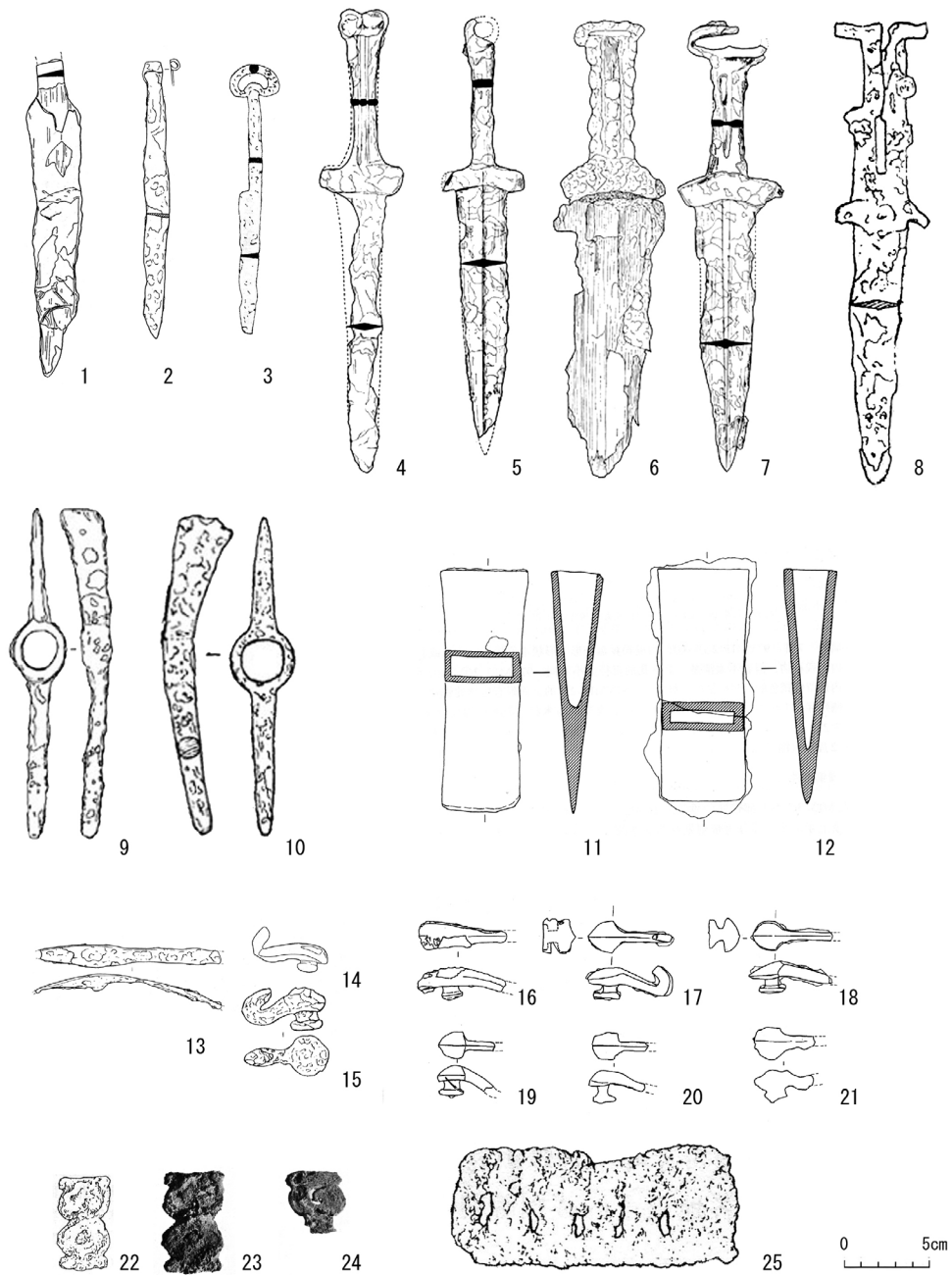


図 18 フフウト・岱海地区における出土鉄器

1-3. 鉄製刀子（毛慶溝墓地 M75:9, 白雨廟圪旦遺跡 H5:6, 飲牛溝墓地 81EM1:4）、4-8. 鉄製短剣（毛慶溝墓地 M6:12, M29:1, M18:4, M38:4, 飲牛溝墓地 81EM1:2）、9-10. 鉄鶴嘴斧（毛慶溝墓地 M38:1, 飲牛溝墓地 81EM1:3）、11-12. 鉄斧（飲牛溝墓地 97YM8:1, 97YM22:1）、13-21. 鉄帶鈎（白雨廟圪旦遺跡 H5:7, 毛慶溝墓地 M39:7, 飲牛溝墓地 82EM12:1, 97YM3:2, 97YM9:2, 97YM17:1, 97YM12:6, 97YM21:2, 97YM16:1）、22-24. 小型飾板（毛慶溝墓地 M63:5, M63:5, M27:4 ①）、25. 大型飾板（毛慶溝墓地 M31:3）

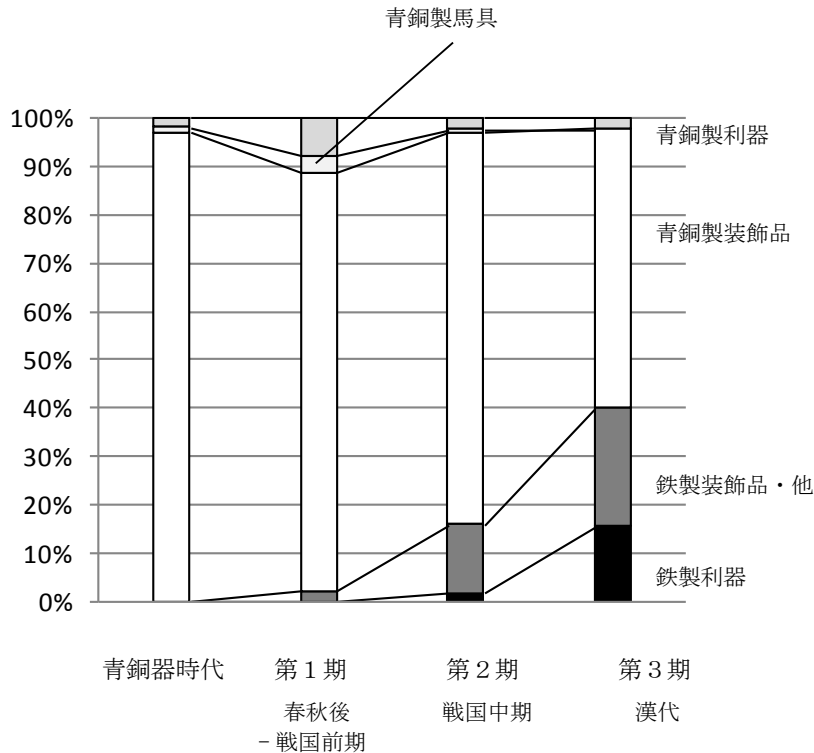


図 19 フフオト・岱海地区における青銅器と鉄器の出土比率

単環、双環の鉄製短剣が出土している（図 18-8）。この鉄製環頭短剣は、柄頭柄、格の形態が類似する青銅製短剣が毛慶溝墓地などの同一墓地中の同時期もしくは先行する時期の墓より出土する。これは、北方系青銅器の短剣が形態はそのまま材質のみ鉄へと変化した例である。例えば、毛慶溝墓地 6 号墓の鉄製短剣は、柄頭が双環で柄中央に 2 本の溝が走る。格は長方形で剣身は扁平な菱形、全長 29.5、刃長 14.4cm である（図 18-4）。同様の青銅短剣が春秋時代晩期の毛慶溝墓地 60 号墓より出土している。

また鉄製装飾品の出土も多い。小型の鉄製帯鉤が毛慶溝墓地と飲牛溝墓地から出土している。鉄製飾板も毛慶溝墓地からベルトの装飾としてまとまって出土している。当地区において、青銅器と鉄器の出土量を時期ごとに比較した（表 3）。鉄器の出土量により三期に区分することができた。各時期の特徴は以下ようになる。

第 1 期 春秋時代後期－戦国時代前期

鉄器の出土がはじまる。小型飾板 6 点が毛慶溝墓地の第一期墓より見ついている。青銅器は刀子、短剣、鶴嘴斧、鏃などの武器・工具、銜、馬面、轅飾、竿頭飾などの車馬具、扣、管状飾、飾板、泡などの装飾品で、器種、数量ともに豊富である。

第 2 期 戦国時代中期

鉄器の出土器種が増加する。新たな鉄器として、刀子、短剣、鶴嘴斧などの武器・工具、帯鉤・飾板など装身具が出土する。青銅器の出土器種、数量は依然として多いが、鶴嘴斧

は鉄器へと材質が移行している。

第3期 戦国時代晩期

鉄器の器種が更に増加する。武器・工具、馬具などが基本的に鉄器化する。新たに鉄鉤や鑄造鉄斧（図 18-11）が出土する。青銅器は鏃を除き、武器・工具、馬具類の出土はなくなり、装飾品や印章のみとなる。

当地区は春秋時代後期～戦国時代前期に鉄器が出現する。その後、時代が下るにしたがい、鉄器の出土総量、器種が増加する。他の地域と比べて、短期間内に武器・工具における鉄器への材質変化が進んでいる。

5. 結び

以上、それぞれの地区における初期鉄器の受容と展開の状況を整理した。三地区をまとめたのが下の表である（表8）。三地区の中で、鉄器の出土は隴東・寧夏南部地区が最も早く春秋時代中期である。銅鉄複合器である銅柄鉄剣の出土からはじまる。続く春秋時代晩期にオルドス・河套地区より鉄製刀子の出土があり、春秋時代末戦国時代初期にフフホト・岱海地区で鉄製飾板が出土する。初期鉄器の出現は西から東へと時代を追って変遷している。しかし、導入後の初期鉄器については、逆に東から西への発展をうかがうことができる。隴東・寧夏南部地区は戦国後期まで依然として青銅器の利用が主体であり、鉄器も器種、量が若干増えている状態である。その一方で、岱海地区では、戦国時代後期にはす

表8 中国北方草原地域における鉄器の受容と展開

	隴東・寧夏南部地区		河套・オルドス地区		フフホト・岱海地区	
春秋中期	第1期	鉄器の出土開始： 銅柄鉄剣				
春秋晩期	第2期	鉄器の器種、量 の増加	第1期	鉄器の出土開 始：鉄刀子	第1期	鉄器の出土開始：鉄飾板
戦国前期					第2期	鉄器の器種、量の増加
戦国中期	第3期	馬具 鉄器化	第2期	鉄器の器種、量 の増加	第3期	武器・工具 鉄器化
戦国後期						
前漢	第4期	武器・工具 鉄器化	第3期	武器・工具、馬 具 鉄器化		
後漢初期						

でに武器・工具、馬具類がすでに青銅器から鉄器へと材質変化を完了しており、鉄器の導入から利器類の鉄器利用へとスピーディーに進んでいる。主要な器種の材質が青銅器から鉄器へと変化すること鉄器化と呼ぶならば、武器・工具における鉄器化は、北方草原地帯の東部において戦国時代後期に完了し、中西部では前漢時期に完了する。

中国北方草原地帯の西部に位置する新疆ウイグル自治区では、西周時代前期併行の紀元前 1000 年前後より鉄器の出土報告があり、継続して鉄器が出土している。そして、春秋時代中期ごろより寧夏で鉄器の受容がみられ、春秋時代晩期にオルドス地区で鉄器最初の鉄器の出土がある。ユーラシア草原地帯の紀元前 1 千年紀は初期鉄器時代であり、中国北方草原地帯は鉄器が西から東へ拡大する東側の経路上にあたるといえる。シルクロードのステップルートとして、鉄器が春秋時代に西から東へ伝わった様子をうかがうことができる。そして、逆に鉄器の利用拡大は東から西へ向かう流れがあったことも明らかとなった。鉄器利用の拡大、武器・工具類の鉄器化には、秦や趙といった中原の地域との接触が大きく影響しているといえるだろう。

以上、中国北方草原地帯の初期鉄器の受容と展開について整理を試みた。春秋時代中期から晩期にかけて、寧夏から内蒙古中南部へと鉄器が伝播していき、その後、東から西へと鉄器の受容が進行していった様子を明らかにできた。

(註)

- 1 春秋時代前期は、紀元前 770 - 前 665 年、中期は紀元前 664 - 前 560 年、後期は紀元前 559 - 前 455 年、戦国時代前期は紀元前 454 - 前 350 年、中期は紀元前 349 - 前 245 年、後期は秦代を含む紀元前 244 - 前 203 年とする。
- 2 寧夏出土の銅柄鉄剣は現在 2 点の成分分析が行われており塊錬鉄製の人工鉄である。

引用文献

- 今村啓爾 1984 「滇西の剣」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 3 号、pp. 59-98
- 宮本一夫 2001 「顎爾多斯青銅文化的地域性及変遷」『岱海考古(二)』科学出版社、pp. 454-481
- 烏恩岳斯図 2007 『北方草原考古学文化研究』科学出版社
- 烏恩岳斯図 2008 『北方草原考古学文化比較研究』科学出版社
- 白雲翔 2005 『先秦兩漢鉄器的考古学研究』科学出版社
- 楊建華 2004 『春秋戦国時期中国北方文化地帯的形成』文物出版社
- 伊克昭盟文物工作站 1986a 「西溝畔漢代匈奴墓」『顎爾多斯式青銅器』文物出版社、pp. 375-395
- 伊克昭盟文物工作站 1986b 「補洞溝匈奴墓地」『顎爾多斯式青銅器』文物出版社、pp. 394-402
- 伊克昭盟文物工作站・内蒙古文物工作隊 1986 「西溝畔戦国墓」『顎爾多斯式青銅器』文物出版社、pp. 351-365
- 伊克昭盟文物工作站 1991 「内蒙古東勝市碾房渠発見金銀窖藏」『考古』1991-5、pp. 405-408
- 伊克昭盟文物工作站 1992 「伊金霍洛旗石灰溝発現的顎爾多斯式文物」『内蒙古文物考古』1992-1・2、pp. 91-96

- 蓋山林 1986 「准格爾旗速機溝出土的銅器」『顎爾多斯式青銅器』文物出版社、pp. 372-374
- 慶陽地区博物館・慶陽県博物館 1989 「甘肅慶陽城北發現戰國時期葬馬坑」『考古』1988-9、
p. 852, 860
- 固原博物館 1992 「寧夏固原呂坪村發現一座東周墓」『考古』1992-5、pp. 469-470
- 周興華 1989 「寧夏中衛縣狼窩子坑的青銅短劍墓群」『考古』1989-11、pp. 971-980
- 崔利明 1994 「內蒙古興和縣溝里頭匈奴墓」『考古』1994-5、p. 473
- 鍾侃 1978 「寧夏固原縣出土文物」『文物』1978-12、pp. 86-90
- 戴宻新・孫家祥 1983 「陝西神木縣出土匈奴文物」『文物』1983-12、pp. 23-30
- 岱海地区考察隊 2001 「飲牛溝墓地 1997 年發掘報告」『岱海考古(二)』科學出版社、
pp. 278- 327
- 塔拉・梁京明 1986 「呼魯斯太青銅器墓葬」『顎爾多斯式青銅器』文物出版社、pp. 223-226
- 田廣金 1986 「桃紅巴拉墓群」『顎爾多斯式青銅器』文物出版社、pp. 203-219
- 田廣金・郭素新 1986 『顎爾多斯式青銅器』文物出版社
- 同心縣文管所・寧加文物考古研究所 1988 「寧夏同心縣李家套子匈奴墓清理簡報」『考古與文物』
1988-3、pp. 17-21
- 同心縣文物管理所・寧加文物考古研究所・中國社會科學院考古研究所寧夏考古組 1988a 「寧夏同
心墩倒子匈奴墓地」『考古學報』1988-3、pp. 333-356
- 內蒙古自治區文物工作隊 1984 「涼城飲牛溝墓葬清理簡報」『內蒙古文物考古』第 3 期、pp. 26-32
- 內蒙古博物館・內蒙古文物工作隊 1986 「玉隆太戰國墓地」『顎爾多斯式青銅器』文物出版社、
pp. 366-371
- 內蒙古文物考古研究所 1986 「涼城崞縣窯子墓地」『考古學報』1989-1、pp. 57-82
- 內蒙古文物工作隊 1986 「毛慶溝墓地」『顎爾多斯式青銅器』文物出版社、pp. 227-315
- 寧夏回族自治區博物館考古隊 1987 「寧夏中衛縣青銅短劍墓清理簡報」『考古』1987-9、
pp. 773-777
- 寧夏回族自治區文物考古研究所 2002 「寧夏彭陽張街村春秋戰國墓地」『考古』2002-8、
pp. 689-696
- 寧夏文物考古研究所・寧夏固原博物館 1993 「寧夏固原楊郎青銅文化墓地」『考古學報』1993-1、
pp. 13-56
- 寧夏文物考古研究所 1995 「寧夏彭堡於家莊墓地」『考古學報』1995-1、pp. 79-108
- 羅豐・延世寧 1993 「1988 年固原出土的北方系青銅器」『考古與文物』1993-4、pp. 17-21
- 羅豐・韓孔樂 1990 「寧夏固原近年發現的北方系青銅器」『考古』1990-5、pp. 403-419
- 李逸友 1986 「和林格爾縣範家窰子出土的銅器」『顎爾多斯式青銅器』文物出版社、p. 222
- 劉德禎・許俊臣 1988 「甘肅慶陽的春秋墓葬的清理」『考古』1988-5、pp. 413-424

圖版出典

圖 13 筆者作成

圖 14 - 1, 2, 6, 7, 10, 19, 21, 22, 23, 24, 28, 29

寧夏文物考古研究所他 1993 p. 43 圖二五 12, 13, 1, 2, 4, 3, 11, 10, 9, 8, 5, 6

- 3, 4, 5, 17, 18, 20, 26, 27 同心県文物管理所他 1988 图版玖 9 上・中・下, 4, 5, 6,
图版式拾 4, 11
- 8, 25 宁夏回族自治区文物考古研究所 2002 p. 692 图一〇 12, 11
- 9 劉・許 1988 p. 414 图二 14
- 11 周 1989 p. 974 图四 1
- 12 慶陽地区博物館 1988 p. 852 图 1-1
- 13 羅・韓 1990 p. 404 图 1-4
- 14 宁夏文物考古研究所他 1993 p. 29 图一六 6
- 15 田・郭 1986 p. 10 图五 2
- 16 劉・許 1988 p. 415 图 5-6

图 15 著者作成

- 图 16 — 1, 7-9 伊克昭盟文物工作站 1986a p. 386 图七 11, 16, 17, 15
- 4 戴・孫 1983 p. 24 图二 1
 - 5 伊克昭盟文物工作站他 1986 p. 357 图六 1, 2
 - 13, 24 內蒙古博物館他 1986 p. 368 图二 10, 5
 - 14-19 伊克昭盟文物工作站他 1986 p. 362 图一〇 1-6
 - 2, 3, 6, 10-12, 27-30 伊克昭盟文物工作站 1986b p. 397 图三 6, 10, 9, 5, 7, 8, 1, 4, 2, 3
 - 20-23, 16 同上 p. 399 图四 4, 4, 1, 3, 2
 - 25 伊克昭盟文物工作站 1991 p. 407 图四 4

图 17 著者作成

- 图 18 — 1, 9 內蒙古文物工作隊 1986 p. 262 图三三 4, 5
- 2, 13 同上 p. 295 图五六 4, 3
 - 4-7 同上 p. 260 图三一 1、p. 261 图三二 1-3
 - 14 同上 p. 270 图三八 2
 - 22-25 同上 卷末图版七九 15, 16、图版七三 3
 - 3, 8, 10, 15 內蒙古自治区文物工作隊 1984 p. 29 图七 3, 1, 4、p. 30 图 13
 - 16-21 岱海地区考察隊 2001 p. 313 图三〇 7-12
 - 11, 12 同上 p. 316 图三三 1, 2

图 19 著者作成

第3章 南シベリアにおける鉄器の受容と展開

1. はじめに

・研究目的

第3章では、ユーラシア草原地帯の初期の鉄器をめぐる交流を明らかにする為、新疆の北側に位置する南シベリア出土の鉄器について論じる。

西アジアに起源する鉄器は、青銅器の伝播と比べ、格段に速い速度でユーラシア全土へひろがったとされる。しかし、その具体的なルートや各地域の伝播の時期など細かい問題は未だ解決していない。黒海北岸などスキタイ文化の地域では、紀元前1千年紀前半に青銅器文化から鉄器文化へと移行する。それに対して、南シベリアでは青銅器時代が長く続く。現在のところ、紀元前8―前3世紀にかけて、ユーラシアの草原地帯では緩やかに鉄器が受容されたと理解されるにとどまる状況である。

草原地帯の中央部や東部で鉄器研究があまり活発でない背景としては、青銅器と比べて鉄器の保存があまりよくない点、また、青銅器と比べると鉄器は型式差が出にくく、比較研究が行いづらい点などの要因が考えられる。しかし、近年トゥバにおけるアルジャン2号墳の金装鉄器の発見や、新疆西部イリ地区での大量の出土など、出土鉄器資料の蓄積が進みつつある。

加えて鉄器は、西アジアに起源する塊錬鉄とその浸炭によって鋼を得る技術、東アジアで中国を中心に発展した鑄造鉄器と脱炭による製鋼の技術など、東西で明瞭な技術の差異があり、技術やものの伝播を考える上での興味深いテーマを内包する。本章では東アジアと西アジアの中間に位置する南シベリア地域を対象に、初期の鉄器の受容と展開をみていきたい。当地域は初期遊牧民文化において、黒海北岸のスキタイや天山地域のサカとならぶ中心地域の一つである。南シベリアの鉄器の受容と導入を明らかにすることは、草原地帯の初期鉄器を巡る交流について考えるひとつの重要な鍵となるであろう。

・地理的範囲 (図 20)

今回議論の対象とするのは、ユーラシア草原地帯の中央部に位置する南シベリアである。この地域は、初期遊牧民文化の中心の一つであり、豊富な青銅器が出土することから発掘と研究が盛んに行われている。東アジアと西アジアをつなぐ、シルクロードのステップルートとして着目される地域である。

具体的な地理的範囲として、ミヌシンスク Minusinsk 盆地およびゴルノ・アルタイ

Gorno-Altai 共和国、トゥバ Tuva 共和国をとりあげる。ミヌシンスク盆地は、ハカス Khakassia 共和国とロシアのクラスノヤルスク Krasnoyarsk 州にまたがる地域で、クズネツ・アラタウ Kuznetsk Alatau 山脈、アバカン Abakan 山脈および東西サヤン Sayan 山脈に囲まれた地域である。この3地域はエニセイ Enisei 川の上・中流域に位置し、アルタイ Altai 山脈によって西シベリア平原から区切られる。東西サヤン山脈が走る高原地帯であり、草原と森林の交錯する地域である。南はカザフスタン、中国の新疆ウイグル自治区、モンゴル国に隣接し、現在でも牧畜の盛んな地域である。

・研究史

南シベリア地域においては、特に初期の鉄器を取り上げ論じた研究というのは少ない。地域文化を理解する一つの要素として、鉄器が理解されている状況である。当地域は、18世紀にピョートル大帝の意を受けたメッサーシュミット D. G. Messerschmidt による調査を嚆矢とする。19世紀以降も、テプロウホフ S. A. Teploukhov、キセリヨフ S. B. Kiselyov、グリャズノフ M. P. Gryaznov といった研究者らによって古墳の発掘が行われ調査が進められた (Bokovenko 2006)。ミヌシンスク盆地を中心にタガール文化が設定され、最終的に4期区分された。現在は豊富に遺存する木材の放射性炭素年代の測定値を基に、各時期の年代が定められている。タガール文化の出土遺物や収集品は、チレノヴァによって集成、整理されており、その中に鉄器も若干確認することができる (Chlenova 1967, Badetskaia 1986)。時代が下るにつれ出土量が増加することから、タガール文化期を通して徐々に鉄器がミヌシンスクで受容されていたと理解されている。

また、トゥバではアルジャン1号墳、2号墳の発掘成果を中心に研究がすすめられ、ウユク Uyuk 文化が設定されている。ゴルノ・アルタイではパジリク Pazyryk 古墳やウコック Ukok 古墳を中心とする凍結墓出土遺物を中心とした研究が盛んであり、マイエミール



図 20 南シベリアの鉄器出土遺跡

Maiemir 文化やパジリク文化が設置されている (Moshkova 1992)。いずれにしてもミヌシンスクの場合は青銅器に、トゥバの場合はスキタイ動物紋様の起源に、また、ゴルノ・アルタイでは凍結墓から良好な形で出土した有機物に研究の中心があり、鉄器が研究対象として取り上げられることは少ないといえる。

なお、草原地帯でも西部、西シベリアから東ヨーロッパにかけては、2007 年に出版されたコリャコヴァの研究があり、西部地域の状況を詳しくしることができる (Koryakova 2007)。

・方法

本章では、南シベリアにおける初期の鉄器の受容を検討するため、資料の集成に重点をおいた。まず、草原地帯で最も早く現れる鉄、隕鉄について紹介する。あわせて、全体の理解のために、コリャコヴァの研究によるユーラシア西部地域の鉄器の受容について概要を述べる。その上で南シベリアの初期遊牧民文化における鉄器をみていきたい。研究史でもふれたとおり、南シベリアにはミヌシンスクのタガール文化、トゥバのウユク文化、ゴルノ・アルタイのパジリク文化などが設定されている。よってこの3地域に分けてそれぞれの出土鉄器を整理する。紀元前1千年紀の南シベリア地域の鉄器の導入と展開についてまとめた後、隣接する周辺地域との比較をおこなう。

2. 最初期の鉄—隕鉄

草原地帯における最初の鉄利用について、コリャコヴァの研究をもとに以下に紹介する (Koryakova 2007)。

ユーラシア草原地帯で発見されている最初期の鉄器は隕鉄製である。隕鉄は隕石鉄とも呼ばれ、宇宙から地球へ落下した隕石の一種である。金属状態で存在し、鉄鉱石から製錬・精錬過程を経て得られる人工鉄とは異なる。ニッケルを多量に含有することから、鉄鉱石由来の人工鉄と容易に判別がつく¹。紀元前3千年紀の草原地帯は初期青銅器時代であり、ウクライナのヤームナヤ (Yamnaia 土壙墓) 文化 (紀元前3000—前2200年) とウラル地域のカタコンブナヤ (Katakombnaia 地下横穴墓) 文化 (紀元前2600—前1900年)、さらに南シベリアのアファナシエヴォ (Afnasievo) 文化 (紀元前3100—前2700年) 等が設定されている。これらの地域から現在のところ、計46点の隕鉄製品および4点の銅鉄複合器 (bimetal) が確認されている。

西シベリア、東ヨーロッパ地域では、紀元前3千年紀ヤームナヤ文化でも特に副葬品の豊かな首長層の墓から隕鉄が出土する。刀子や錐といった小型の生産工具が中心である。その後、中期青銅器時代になり、初めて人工鉄である塊錬鉄の銅鉄複合刀子が現れる。東ヨーロッパのゲラシモフカ Gerasimovka 墓地から出土するが、コーカサス地域からの搬入

表9 初期遊牧民文化における南シベリア出土の鉄器

	場所	遺跡名	遺物	本文図	出典
アフアナシ エヴォ文化 (隕鉄)	ミヌシンスク	Afanasyeva gora, grave26	隕鉄製ビーズ 20 点 (腕輪)	図 21	Badetskaia 1986
	ゴルノ・アルタイ	Kor-koba 1, kurgan9	隕鉄製ビーズ		Stepanova 1997
	ゴルノ・アルタイ	Karban	隕鉄製バックル		
	ゴルノ・アルタイ	Russkii Log1, kurgan2	隕鉄製飾板		
ウユク文化	トゥバ	Arzhan2	金象嵌鉄剣	図 22-4	Ermitazh 2004
	トゥバ	Arzhan2	金柄鉄剣	図 22-7	
	トゥバ	Arzhan2	金柄刀子	図 22-5	
	トゥバ	Arzhan2	金柄刀子	図 22-6	
	トゥバ	Arzhan2	金象嵌鉄鏃	図 22-3	
	トゥバ	Arzhan2	鉄製鶴嘴斧	図 22-2	
	トゥバ	Aimyrylg Tab. 74-15	鉄短剣	図 22-8	Mandelshtam 1992
	トゥバ	Aimyrylg Tab. 74-24	鉄短剣	図 22-9	
	トゥバ	Aimyrylg Tab. 74-4	鉄製鶴嘴斧	図 22-13	
	トゥバ	Aimyrylg Tab. 76-32	鉄製刀子	図 22-11	
トゥバ	Aimyrylg Tab. 76-33	鉄製刀子	図 22-12		
トゥバ	Aimyrylg Tab. 77-6	金装飾製櫛	図 22-17		
トゥバ	Aimyrylg Tab. 77-49	鉄飾	図 22-18		
トゥバ	Aimyrylg Tab. 77-33	鉄垂飾	図 22-16		
パジリク文化	ゴルノ・アルタイ	Kysyl Dazhar1Tab. 63-10	鉄柄銅剣	図 23-1	Gryaznov 1992
	ゴルノ・アルタイ	Pazyryk II	鉄製刀子	図 23-2	
	ゴルノ・アルタイ	Kok-Su 1 Tab. 63-21	鉄製刀子	図 23-3	
	ゴルノ・アルタイ	Kok-Su 1 Tab. 63-22	鉄製刀子	図 23-4	
	ゴルノ・アルタイ	Kok-Su 1 Tab. 63-26	鉄製留め針	図 23-5	
	ゴルノ・アルタイ	Kyzyl-Dzhar I Tab. 63-17	鉄銜	図 23-6	
タガール文化	ミヌシンスク	Minusinsk tab. 11-2	銅柄鉄剣	図 24-1	Chlenova 1967
	ミヌシンスク	Uct'-Epa tab. 11-1	銅柄鉄剣	図 24-2	
	ミヌシンスク	Baikaloba tab. 11-6	銅柄鉄剣	図 24-3	
	ミヌシンスク	Minusinsk tab. 11-3	鉄柄銅剣	図 24-4	
	ミヌシンスク	Ochury tab. 11-4	鉄剣	図 24-5	
	ミヌシンスク	Minusinsk tab. 11-14	鉄剣	図 24-6	
	ミヌシンスク	Minusinsk tab. 11-7	鉄剣	図 24-7	
	ミヌシンスク	Minusinsk tab. 11-12	鉄剣	図 24-8	
	ミヌシンスク	Beteni tab. 11-11	鉄剣	図 24-9	
	ミヌシンスク	Beteni tab. 11-9	鉄剣	図 24-10	
	ミヌシンスク	Abakan tab. 11-10	鉄剣	図 24-11	
	ミヌシンスク	Biria tab. 11-8	鉄柄銅剣	図 24-12	
	ミヌシンスク	Minusinsk tab. 11-5	鉄柄銅剣	図 24-13	
	ミヌシンスク	Minusinsk tab. 11-13	鉄剣	図 24-14	
	ミヌシンスク	Minusinsk tab. 11-14	鉄剣	図 24-15	
	ミヌシンスク	Minusinsk tab. 11-15	鉄剣	図 24-16	
	ミヌシンスク	Bal'shaia Ilia tab. 11-19	鉄鶴嘴斧	図 24-17	
	ミヌシンスク	Minusinsk tab. 11-20	鉄鶴嘴斧	図 24-18	
ミヌシンスク	Minusinsk tab. 11-18	銅柄鉄刀	図 24-19		

品と考えられている。後期青銅器時代の初頭には、ユーラシアの東西草原地帯において鉄器の出土がみられず、コリャコヴァは、ここでヤームナヤ・アフアナシエヴォの隕鉄製品の伝統が途絶えたと考えている。その後、後期青銅器時代後半に至り、塊錬鉄が草原地帯へ広がっていく。西シベリアおよび東ヨーロッパのスルブナヤ Srubnaya 文化とサバティノフカ Sabatinovka 文化において青銅を模した鉄製の錐や刀子が出土するようになる。引き続くヴァリコヴァヤ Valikovaya 土器文化圏において鉄および、鉄と青銅のバイメタル製品の出土が増加し、紀元前 8 - 前 7 世紀には、各種鋼の精錬、溶接、浸炭など鑄造を除く主要な熱処理と鍛冶技術がそろそろとされる。そして、紀元前 8 世紀以降鉄器の利用が拡大する。こうした背景として、コリャコヴァは紀元前 10 - 前 9 世紀にかけて東ヨーロッパ森林草原地帯での寒冷化を挙げている。気候の寒冷化にともない経済が遊牧へとシフトし、これまでの青銅器を中心とする文化圏が崩壊する。銅や錫の原材料の入手が困難になり、ユーラシア西部では鉄器化を説明している (Koryakova 2007, p. 190)。

それでは上述した西部地域の状況を踏まえた上で、今回議論の対象となる南シベリア地域に目を向けていこう。

やはり最初の鉄器は隕鉄製である。南シベリア地域ではミヌシンスク盆地の周辺やゴルノ・アルタイ地区から隕鉄の発見がある (表 9)。

ミヌシンスク盆地の北に位置するチュリィモ=エニセイスク Chulymo Eniseisk 盆地アフアナシエヴァ山 Afanas'eva Gora 遺跡では 39 基の墓が調査されている。この 26 号墓から、隕鉄製のビーズが見つかった。隕鉄製ビーズは 20 点ほどで一連に繋がり、30 点の白色泥岩のボタンとともに、腕輪として腕の骨の周りから出土している (図 21、Badetskaia 1986)。

ゴルノ・アルタイ地区では、コル・コバ Kor-kova 1 遺跡 9 号墳より鉄製ビーズが、カルバン Karvan 遺跡より鉄製バックルが、そして、ルースキー・ローク Russkii Log 1 遺跡 2 号墳より不定形の鉄製飾板が出土している (Stenpanova 1992)。また、ウスチ・クユム Yct'e Kuyuma 遺跡 6 号墓出土の飾板も隕鉄製との記載がある。アフアナシエヴォ文化の鉄器の特徴としては、装身具が中心であるといえる。

南シベリア地域は、初期青銅器時代にアフアナシエヴォ文化、その後ミヌシンスクではオクニョフ Okuniev 文化、そして中期青銅器時代にアンドロノヴォ Andronovo 文化、後期青銅器時代にカラスク Karasuk 文化が設定されている。アフアナシエヴォ文化は広い分布域を示しており、上記のように隕鉄の出土がみられるが、その後のアンドロノヴォ文化、カラスク文化からの鉄製品の発見はない。再び鉄器が出土するのは紀元前 1 千年紀の初期遊牧民文化に入ってからである。

それでは以下トッパ、アルタイ、ミヌシンスクの地域ごとに出土する初期鉄器について概観していく。

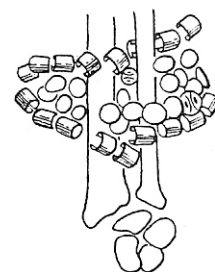


図 21 アフアナシエヴォ山
隕鉄製ブレスレット

3. トゥバ

トゥバ共和国は、エニセイ河上流に位置し、南シベリアの南東部にあたる。当地域の紀元前1千年紀には、先スキタイ時代に相当するアルジャン Arzhan 期（紀元前9世紀）、スキタイ文化期に相当するウユク Uyuk 期（紀元前7 - 前3世紀）、それに続くシュルマク Shurmak 期が設定されている。トゥバ地区で鉄器が出土するのは、ウユク期初頭の紀元前7世紀になってからである。

2000年から2002年にかけて、ドイツ考古学研究所とエルミタージュの共同でアルジャン2号墳が発掘された (Ermitazh 2004)。ここから、壮麗に金で装飾された鉄製品が見ついている。アルジャン2号墳は、トゥバ共和国の首都クズル Kyzyl から北西100Kmの地点に位置する。近くにスキタイ動物紋様の起源を考える上で重要なアルジャン1号墳がある。2号墳は、直径80m、高さ2mの積石塚で、墳丘下に複数の墓壙が確認された。主体部とされるのは、墳丘の中心からはずれた北西部にある5号墓で、丸太を積み上げた木槨の中に、男女が合葬されていた。墳丘中央下に墓壙がなかったため、副葬品は盗掘を免れており、出土総数9300点、そのうち黄金製品は5700点に及んだ。墓室の中心軸上には男性が横たわっており、身につけた豪華な黄金装身具とともに、この男性がアルジャン2号墳の墓主であると考えられている。埋葬姿勢は、男性が右、女性が左の左側臥屈肢葬で、並んで横たわっていた。当時の服装などは、布や革は腐食して残っていなかったが、衣類の装飾に用いられた金属から復原が可能であった。また周辺には木製容器や武器類などが副葬されていた。

この5号墓から大量の金製品とともに、鉄製品が出土している。鉄器の出土位置は大きく二つに分けることができる。まず、墓室の東北隅で、ゴリュトスなどの武器類がまとめ置かれている場所から、弓や鞭等とともに鉄製鶴嘴斧と鉄鏃が見つかった。また、男女被葬者の太ももの上から木製の鞘にはいった状態で鉄剣と鉄製刀子が見ついている (図22-1)。この墓の年代は、動物紋様の様式や馬具の型式および、墓室の木材の放射性炭素年代測定 (紀元前619 - 前608年) に基づき、ドイツ考古研究所の見解として紀元前7世紀末とされている。では、以下出土した鉄器を見ていきたい。

・鉄剣、刀子

金象嵌鉄剣 (図22-4) は男性の遺体の右大腿骨上から、木製の鞘の痕跡とともにみつかった。全長38.2cm、柄部の幅は7.2cmである。全体が鉄製で、柄と刃部には金が象嵌されている。柄頭は、体を丸めた二頭のトラが透かし状に金象嵌で表現され、中央に同じく金象嵌の雄ヒツジを挟んで向かい合う。報告者は、トラがヒツジを引き裂く場面であるとしている。柄頭と柄部との間にも1段帯状の紋様帯があり、同様に2頭のトラがヒツジを挟んで向き合っている。柄体部は、3列に紋様が分かれ、両端は2頭の雄ヒツジが並び、中央

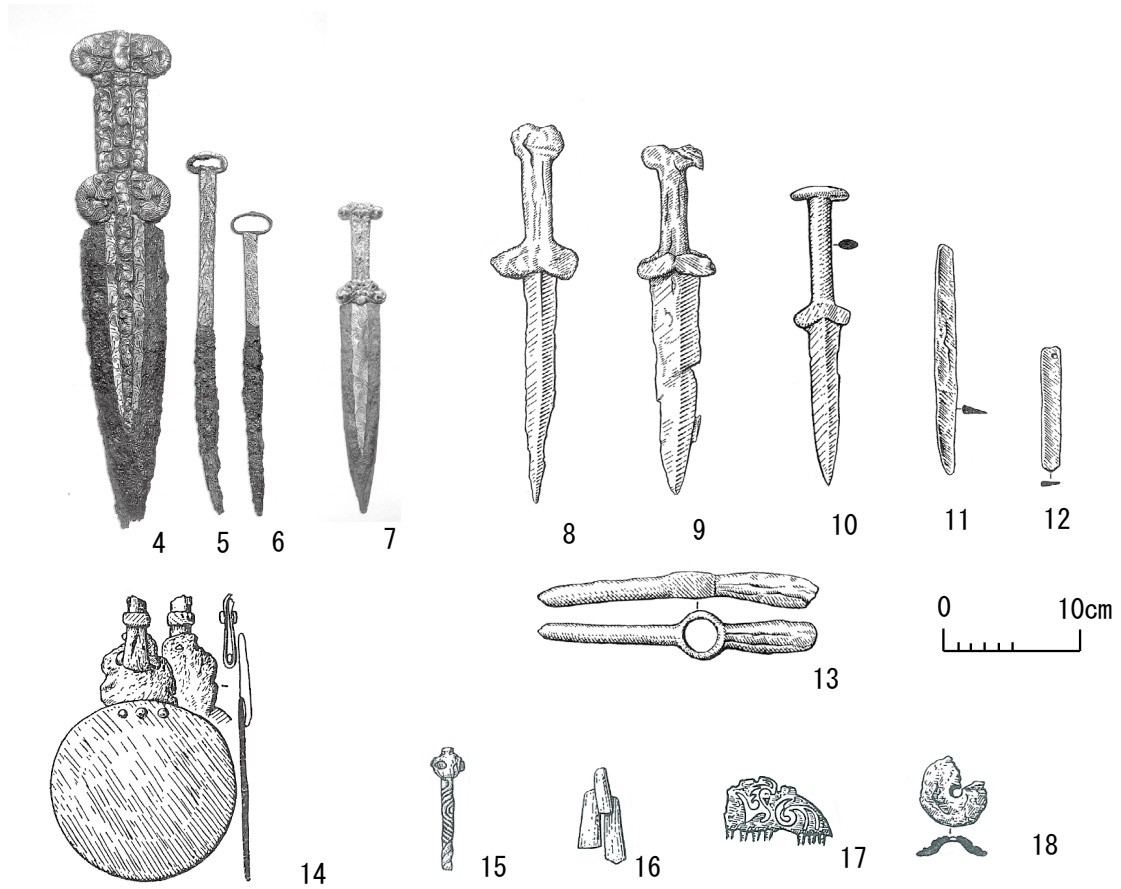
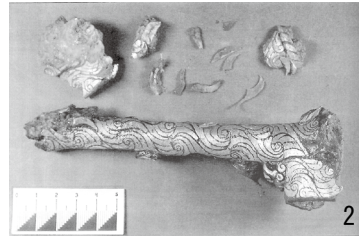


図 22 トウバ出土の鉄器

1. アルジャン 2号墳 5号墓出土状況、2. 金象嵌の鉄製鶴嘴斧、3. 金銀象嵌の鉄鎌、4. 男性埋葬に付属の金象嵌鉄剣、5. 6. 男性埋葬に付属の金象嵌鉄製刀子、7. 女性埋葬付属の金柄鉄剣、8. 9. 10. 鉄製短剣、11. 12. 鉄製刀子、13. 鉄製鶴嘴斧、14. 鉄柄銅鏡、15. 17. 金鉄複合器、16. 鉄製装飾品、18. 鉄釦（1-7. アルジャン 2号墳、8-18. アイムィルリグ） ※ 14-18 縮尺不同

部は先頭にヒツジ、後ろからトラが追う様子を表現している。鏝の部分は、柄頭と同じ紋様表現である。剣身にも、中央に三角形に金の装飾帯が設けられ、トラとヒツジが交互に、柄体部にまで続く形で縦方向に配置される。

この鉄剣とともに鞘に収められていたとされるのが、2本の鉄製刀子である。1本は長さ28.3cmで、環頭、柄部に波状の紋様が金象嵌されている。もう1本は長さ23.7cmで、同じく環頭、柄部は渦巻紋の金象嵌が施されている（図22-5、6）。

同じく女性の遺体の右大腿骨附近からも同様に鞘に入った状態で、鉄製短剣と鉄製刀子、さらに青銅製の錐と球状の頭部を持つ青銅のピンが出土した。

金柄鉄製短剣（図22-7）は、男性の鉄剣と比べ小型であり、全長23.7cm、柄部の幅が3.6cmである。男性の鉄剣と異なり、柄部は金の鑄造で、刃部のみが鉄製である。柄頭は、体を丸めたネコ科の猛獣が2頭向かい合う様子が立体的に表現されている。柄体部は、3列の紋様構成になっており、中央にネコ科の猛獣が並ぶ。鏝は、柄頭と同様に向かい合う猛獣である。鉄製の刃部は、渦巻紋様の金の三角状のプレートが中央に象嵌されている。

鉄製刀子は保存状態が非常に悪く、環頭であったというが、装飾等、その他の詳細は不明である。

・鶴嘴斧、鏃

墓室の北東隅よりまとまって出土した武具類のなかに、鉄製鶴嘴斧（chekan）と金象嵌の鉄鏃がある。

鉄製鶴嘴斧（図22-2）は、火炎紋様の金象嵌が施されており、木製の柄とともに見つかった。柄の全長は70cmである。釜から援の部分にかけて鉄地に金象嵌が施されているが保存状態が悪く、復原は困難であった。

同じ場所から、金の装飾を付けたゴリュトスや金箔で飾られた弓とともに、鉄鏃が出土している（図22-3）。鏃は矢筒に入った状態で、矢柄の破片とともに数十点が見つまっている。全長は3.1－4.2cm、平面、断面ともに三角形である。表面は金や銀の象嵌があり、火炎状の紋様のほか、猛禽がシカを爪で鷲づかみにする表現もある。

以上が、アルジャン2号墳より出土した鉄器の詳細である。出土鉄器はいずれも、金や銀の象嵌で華麗に装飾されており、豪華な奢侈品であった様子が窺われる。また、アルジャン2号墳は墳丘下に、主体部であるこの男女合葬墓室以外にも複数の殉葬壇がある。殉葬壇からも青銅製品のほか金製品が出土しているが、主体部以外からの鉄器の出土はない。さらに、男女ともに金装飾の鉄剣を帯びているものの、男性に属するものは柄、刃部とも全体が鉄製で装飾として金象嵌をしているのに対し、女性に属するものは柄が金製で刃部のみが鉄製という違いがある。当時の社会において、金よりも鉄の方が貴重である、あるいは格が高かったと考えられる。

アルジャン2号に続いて鉄器の出土があるのは、ウユク文化後期に入ってからである。トゥバ地域の初期遊牧民文化であるウユク文化は二期に区分されている。前期は紀元前7

—前6世紀、後期は紀元前5—前3世紀とされる。上記のアルジャン2号墳は、ウユク文化の前期前半に属する。前期はアルジャン2号墳を除くと、青銅器しか出土していない。他の遺跡からは、後期になって鉄器の出土が確認できるようになる。後期の墓から出土する鉄器は、数量は少ないものの、武器や工具、装身具などの器種がある (Mandel'shtam 1992)。

ウユク文化の武器は、短剣、鶴嘴斧、鏃であるが、このうち後期段階において、短剣と鶴嘴斧で鉄器が現れ始める。後期においても短剣は大多数が青銅製であるが、若干の鉄器の出土がある。また、1点のみ銅柄鉄剣も確認されている。青銅器、鉄器ともに蝶形の鏢を持つスキタイ式の短剣で、青銅短剣の場合、柄頭は触角式や渦巻、動物紋様など様々である。一方、鉄製短剣は、現在確認されているものは柄頭が左右に二つ平たい円形を呈し、触角式の退化したものと考えられる (図 22-8)。2点ともアイムイルリグ Aimyrlyg 遺跡から出土しており、全長 27.4cm、28.2cm と同時期の青銅短剣よりやや大きい。そのほか、蝶形の鏢にブロック形、渦巻形、動物形の柄頭や、真っ直ぐ横へ伸びる鏢に円盤形、環状の柄頭がこの時期の鉄製短剣として知られている。

鶴嘴斧も大部分が青銅製で、若干の鉄製品が知られている。銅鉄複合器も1点見つまっている。銅鉄複合の鶴嘴斧は古くなった青銅鶴嘴斧の援部を取り去り、鉄に置き換えたと説明される。鉄製鶴嘴斧 (図 22-13) は、鉄製短剣同様アイムイルリグ遺跡から出土している。刺突部の断面は円形を呈する。

工具では、刀子と錐があり、大多数は青銅製であるが、いずれも若干の鉄製品が見られる。鉄製刀子は、基本的に青銅刀子の形態を模倣して作られている (図 22-11、12)。保存状態が良くないが、アイムイルリグ墓地出土の鉄製刀子は2点ともほぼ真っ直ぐな形態で、柄部と刃部に明瞭な差を持たないタイプ、柄頭部分に小孔を持つタイプがある。鉄錐は、全て茎を持ち、断面が方形、円形ともにみられる。

そのほか、鉄柄銅鏡 (図 22-14)、金装飾の鉄製留めピン (図 3-15)、同じく金装飾の鉄櫛 (図 22-17)、鉄製耳環、鉄製垂飾 (図 22-18) などが見つまっている。

続くシュルマク Shurmak 期は、短剣や刀子がほぼ鉄製になるだけでなく、鉄鏃なども出土し、バックルなども鉄器に変わる。ほぼ鉄製品が出揃うことになり、武器や工具の鉄器化が完成する時期となる。

以上、トゥバ地域における出土鉄器の概要を示した。当地域では、紀元前7世紀末のアルジャン2号墳より、壮麗な金象嵌の鉄器が出土する。その後、少し期間が開いた後、紀元前5—前3世紀にかけて短剣、刀子、錐など工具の一部および装飾品などに鉄器が現れ始める。紀元前2世紀以降のシュルマク文化期には、武器や工具の鉄器化が完了する。

4. アルタイ

アルタイ地域はゴルノ・アルタイ共和国を中心とする山岳地帯に位置する。本章では、グリヤズノフの時期区分に従い、当地域の初期遊牧民文化を、前期のクルムスコ・マイエミール (Kurmusko-Maiemir) 文化期 (紀元前8 - 前6世紀)、中期のパジリク (Pasyryk) 文化期 (紀元前5 - 前3世紀)、後期のシベ (Shibe) 文化期 (紀元前2 - 後1世紀) に分けて考えていきたい。

アルタイ地域では、アフアナシエヴォ文化の隕鉄の出土以降、鉄器が新たに出現するまでに時間を要する。初期遊牧民文化の前半段階では、鉄器の出土はない。中期以降になって出土がみられるようになる。パジリク文化期のいくつかの古墳からは、鉄製短剣や鉄製刀子、鉄製のピン等の破片がみついている。クズル・ダジャル (Kyzyl-Dzhar) 1遺跡より出土した鉄剣は、木製の鞘に入った銅鉄複合短剣である。柄頭は長方形で、鏢はやや端が下がる長方形である (図 23-1)。コク・スー (Kok-Su) 1遺跡からは、2点鉄製刀子が出土している。柄頭部に小さな孔をもち、全体に直線状を呈し、柄部と刃部との境が不明瞭である (図 23-3、4)。他に、パジリク2号墳からも、金と鉄の刀子が出土している (図 23-2)。これらの鉄製刀子は、形態的な特徴が青銅製の刀子と類似し、鉄器製作の際には、青銅製品の模倣がうかがわれる。また、金と鉄の留め針もコク・スー1遺跡より出土している (図 23-5)。柄頭が球状の飾りをなし、ピン体部の先端が尖る。また、鉄製銜が鑣や鞍などその他の馬具とともに出土している。クズル・ダジャル1遺跡から出土した鉄銜 (図

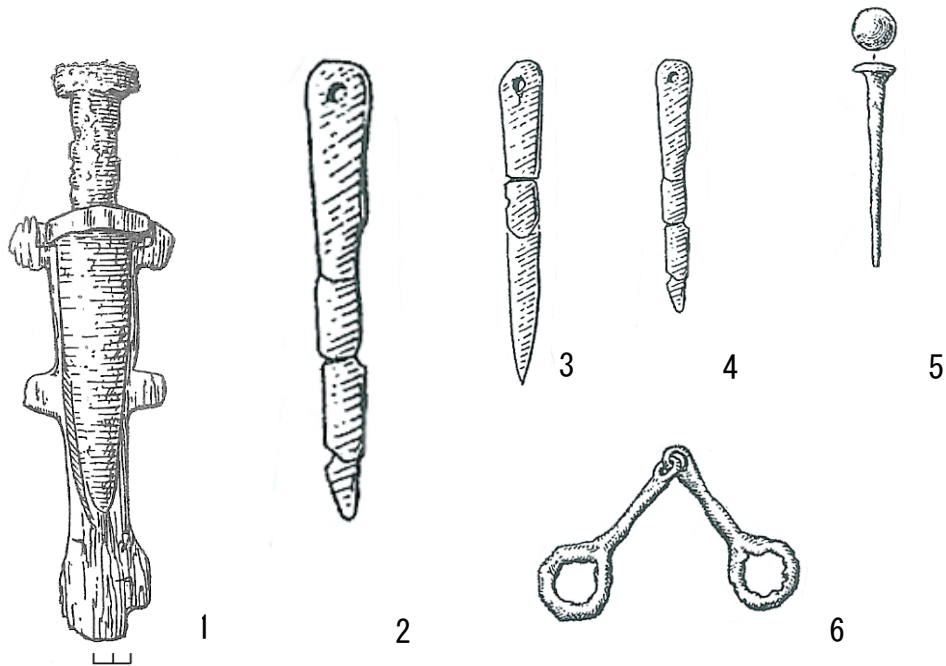


図 23 ゴルノ・アルタイ出土の鉄器

1. 鉄製短剣 2. 金象嵌鉄製刀子 3. 4. 鉄製刀子 5. 金鉄製留め針 6. 鉄銜
(1. 6. キジル・ダジャル1遺跡 2. パジリク2号墳 3-5. コック・スー遺跡)

24-6) は、両端が丸い環状になるタイプであり、ユーラシア草原地帯に流行する最初期の鉄銜である。

後期になると、上記の鉄銜のほか、鉄鏟も出土するなど、鉄器の出土が増加する。

アルタイ地域では、紀元前8 - 前6世紀まで鉄器の出土はみられず、紀元前5世紀以降徐々に出土が見られる。この現象をグリャズノフは、アルタイ地区は銅が豊かであり、西部の草原地帯が鉄器を輸入していく中で、青銅器を製作し、使い続けたためとみている (Griaznov 1992)。

5. ミヌシンスク

ミヌシンスク盆地は、中央部にエニセイ川が流れ、アバカン共和国とクラスノヤルスク州にまたがる地域である。古来よりスキタイ・シベリア式青銅器の出土地として有名であり、現在でも当地域出土の青銅器が世界各地の博物館でコレクションされている。

この地域の初期遊牧民文化であるタガール文化は4つに時期区分されている。最近の放射性炭素年代のあらたな成果によると、バイノヴォ Bainovo 期が紀元前10世紀末 - 前8世紀、ポドゴルノエ Podgornoe 期が紀元前8 - 前6世紀、サラガシュ Saragash 期が紀元前6 - 前3世紀、テシ Tes' 期が紀元前2 - 後1世紀とされる (Bokovenko 2006)。

タガール文化の遺跡から鉄器が出土するのは、サラガシュ期以降である (Badetskaia 1986)。

サラガシュ期の遺跡から出土した鉄器は限られており、武器、工具があるのみである。武器は、ノーヴィイ・サラガシュ Novyi Saragash 墓地より鉄製鶴嘴斧が出土している。また、カムイシタ Kamyshta 2号墳からは、鉄製刀子の破片がみついている。

テシ期に入ると、鉄器の出土量、出土数ともに格段に増加する。短剣、刀子、装身具などの鉄器が発掘されたほぼ全ての墓から出土している。特に鉄製刀子の出土量が多い。

上記は発掘調査で得られた遺物であるが、このほかにタガール文化は非常に多くの青銅器と若干の鉄器が採集されている。以下、採集品の鉄器について説明する。

チレノヴァによるタガール文化の遺物集成によると、短剣や鶴嘴斧、刀子などで鉄製品がみついている。とくに最も多い短剣については、銅鉄複合短剣が15点、鉄製短剣が16点知られているという。銅鉄複合短剣15点のうち、4点が鉄柄銅剣であり、11点が銅柄鉄剣である。銅鉄複合短剣と鉄製短剣は形態が類似しているため、ここではあわせて論じていく。柄頭の形により本章では、A類：扁平な楕円形・方形、B類：環頭向かい合うグリフィン、C類：触角式、D類：その他、に分類する。

・A類

断面が扁平で、平面楕円形、方形の柄頭をもつ短剣である。

A - 1類。柄頭が扁平な方形もしくは楕円形で、柄は透かし状の溝をもつ。鏢は方形も

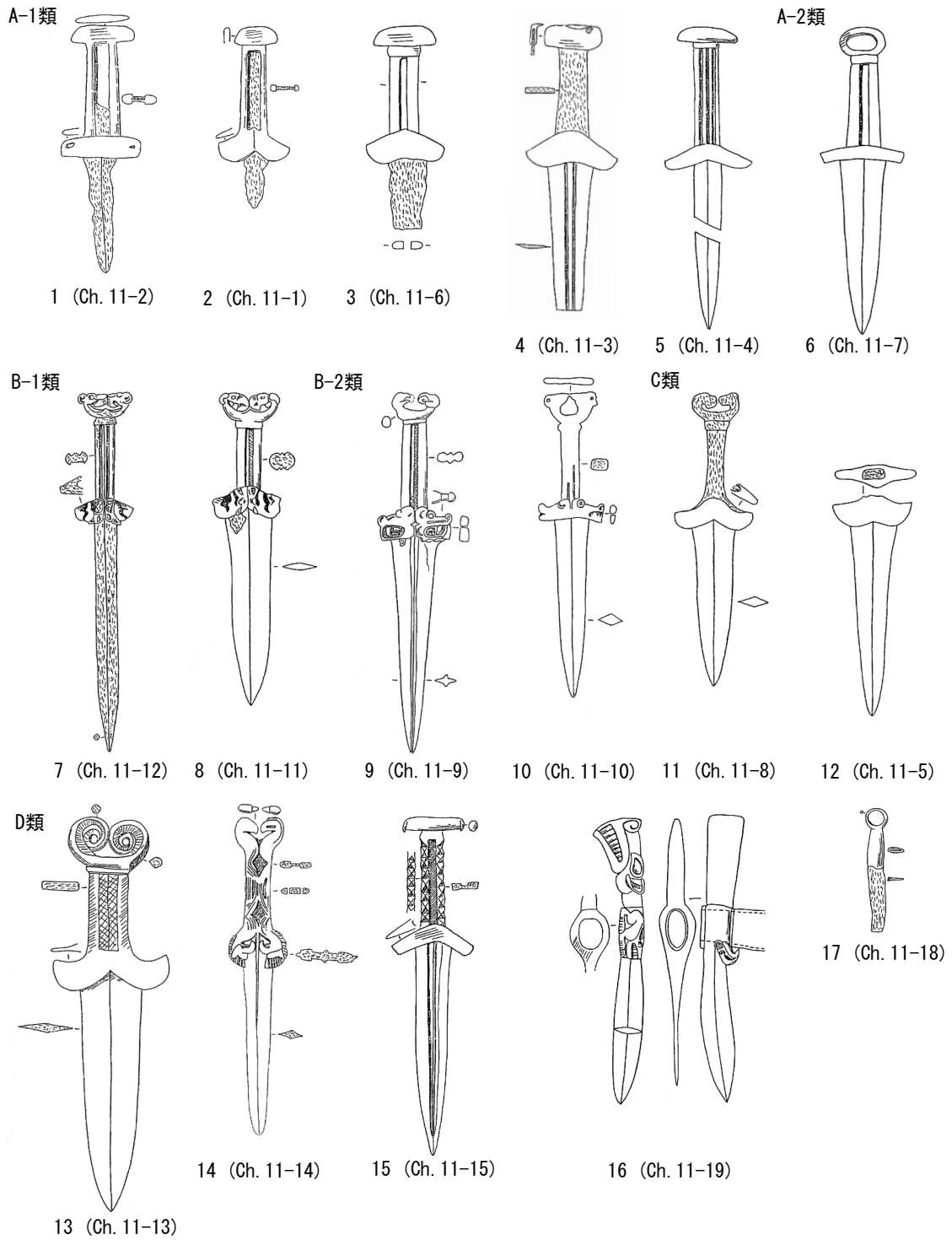


図 24 タガル文化の鉄器

1-15. 短剣 16. 鶴嘴斧 17. 刀子 (1, 4. ミヌシンスク・エニセイ 2. ウスチエルバ 3. パイカロバ
5. オチュリイ 6, 7, 11-15. ミヌシンスク 8, 9. バテニ 10. アバカン 11. ビリャ) S=1/5

しくは蝶形である。銅柄鉄剣の場合、柄の透かし溝から剣身からのびた鉄の茎が見える。鉄製剣身の保存状態は総じて悪い。ミヌシンスク・イエニセイ周辺採集の No. 2 は、扁平楕円形の柄頭に方形の鏝をもつ。柄頭、柄の縁、鏝が青銅製で、刃部が鉄製の銅柄鉄剣である（図 24-1）。ウスチエルバ（Ust' Erba）発見の No. 1 も同様に、鏝が蝶形を呈する（図 24-2）。バイカロバ（Baikalova）発見の No. 6 も同様の銅柄鉄剣であるが、楕円形の柄頭に、段がつく。柄の透かし部分からは、鉄製の茎は見えない。鏝は三角形状である（図 24-3）。No. 3 扁平長方形の柄頭に平たい柄、三角形の鏝を持つ。柄体部のみが鉄でそのほか青銅製の鉄柄銅剣である（図 24-4）。No. 4 オチュリイ（Ochury）発見の短剣は、完全に鉄剣である。楕円形の柄頭に柄下部に段を設け、柄には 3 本ほど溝が走る。長めの三角形の鏝をもつ（図 24-5）。

A - 2 類。No. 7。柄頭が楕円形の環頭で、段があり、柄は 1 本の透かし溝が走る。両端がやや下がる長方形の鏝をもつ。ミヌシンスク州での採集品がしられる（図 24-6）。

・B 類

柄頭が向かい合うグリフィンで、鏝が 2 頭の動物紋様をなす。さらに鏝の動物の形から二種類に細分できる。

B - 1 類。柄頭がくちばしを接して向かい合う鷲グリフィンで、柄頭と柄との間にキャップ状の段が生じる。柄は中央に溝が 2 本走る。鏝は、牙を剥いた狼とされ、全身が頭を接して向かい合うよう表現されている。刃部の断面は菱形を呈する。ミヌシンスクより採集された No. 12 は柄部刃部ともに鉄製で、全長 30cm、図の注釈によると鏝の部分のみが青銅である（図 24-7）。バテニ（Bateni）より見つかった No. 11 は、全長約 26cm で柄部の両枠のみが青銅製である（図 24-8）。

なお、筆者が 2009 年 6 月にアバカン博物館を訪れた際、実見することのできた同様の鉄剣がある。現在展示されているこの剣は、柄部の溝が幅の広い 1 本で、鏝も鉄製であった。また、柄部側面に鑄造の際生じた鑄型の合わせ目を確認できた。柄と刃部を鑄造した後、挟み込む形で鏝を付けた様子が窺われる。紋様表現の細かさなどを考慮しても、おそらくこの A - 1 類の短剣は、鑄鉄製であるといえる。

B - 2 類。柄頭が向かい合うグリフィンで、鏝は外向きに頭を接する、牙をむいた二頭の狼の頭部である。柄頭と柄の間に段があり、柄は溝が走る。バテニ発見の No. 9 は、全長 30cm、柄の枠の部分のみが青銅で、柄頭、透かし状に見える茎部分、鏝、刃部は鉄製である。刃部中央に脊が走り、断面は十字型を呈する（図 24-9）。No. 10 は、アバカンで採集されている。柄頭は図面が模糊としているが、向かい合わせのグリフィンであったと考えられる。柄の体部が青銅製で、その他の柄頭、鏝、刃部は鉄製である。刃部の断面は菱形を呈する（図 24-10）。A - 2 類もまた細かい動物紋様などを考えれば鑄鉄製であるといえるだろう。

チレノヴァは、青銅短剣にも B - 1 類、B - 2 類とほぼ同じ装飾の短剣があることなどから、上記の一部青銅を含む鉄剣は、銅剣から鉄剣への中間形態であるとし、紀元前 5 -

前4世紀ごろに属するとしている。しかし、柄頭や鏢の表現から考えれば、サラガシュ期に相当するといえるだろう。また、この立体的な向かい合うグリフィン、高浜秀による青銅短剣の型式分類では、F II類に相当する。F II類の柄頭は中国北辺から黒海北岸まで広く分布する型式であり、内蒙古の桃紅巴拉や范家窯子出土と比較可能であるとする（高浜1983）。柄や鏢の形は異なるものの、グリフィンの表現で考えるならば、本短剣も高浜分類のF II類に属するといえる。桃紅巴拉や范家窯子は春秋後期の墓地である。No. 12などは、特にその精密な表現から紀元前6世紀末ごろまで遡る可能性もあるだろう。

・C類

触角式の柄頭と蝶形の鏢をもつ。ビリヤ Biria で採集された No. 8 は、柄頭、柄が鉄で、鏢と剣身が青銅製の鉄柄銅剣である（図 24-11）。他にアバカン博物館では、柄頭、柄、鏢が鉄で剣身が青銅製の鉄柄銅剣も展示されていた。No. 8 と類似する資料が複数存在している。また、鉄の柄の痕跡があり、青銅の刃部のみがのこっている No. 5 も C類に分類できる（図 24-12）。

・D類

その他。No. 13 の鉄剣は、柄頭が刻み目のある大型の渦巻紋で、柄が格子紋様、蝶形の鏢をもち、断面菱形の剣身を備える（図 24-13）。No. 13 の鉄剣に類似する青銅短剣はミヌシンスク盆地からの出土はない。中央アジアや西アジアに見られる特徴であり、ペルセポリスのレリーフにも描かれている。紀元前6—前5世紀後半である。

No. 14 は、柄頭と鏢が向かいあうグリフィンの頭部で表現される（図 24-14）。このグリフィンは頭にとさかをつけており、アケメネス朝の特徴を備えた図像様式である。やはり、ミヌシンスク盆地での類例はない。

No. 15 は、撞木形の柄頭に、両端を小さなピラミッド状のレリーフを並べた柄、下垂する長方形の鏢を持つ（図 24-15）。上記の No. 14 と同様にミヌシンスクの青銅短剣には類例がない。柄の枠のピラミッド状レリーフは、紀元前5世紀のペルセポリスのレリーフに描かれたアキナケス剣との類似がみられる。

A類からC類は、タガール文化の短剣である。類似する特徴が同地域出土の青銅短剣にもみられる。銅柄鉄剣、鉄柄銅剣、鉄剣の3種類がある。特に、鉄柄銅剣の存在は非常に珍しく、実用よりも装飾としての当時の鉄器の役割を考えさせられる。また、紀元前6—前5世紀という比較的早い時期から鑄造の鉄剣が出土していることも注目に値するだろう。

D類としてまとめたものは、いずれもミヌシンスク盆地では他に例がなく、むしろ類似品は西アジアに求められる。チレノヴァは、このD類の鉄剣は、西アジアかあるいは中央アジアのサトラップを経由して、ミヌシンスクに搬入されたものであろうと考えている（Chlenova 1967, p. 22）。

短剣以外の鉄器では、鉄製鶴嘴斧（図 24-16）、環頭の銅柄鉄刀子（図 24-17）がごく少数知られている。

6. 結び

以上、南シベリアの初期遊牧文化における出土鉄器を集成した。

最初期の鉄は、ユーラシア西部地域同様、隕鉄の利用からはじまる。南シベリアにおける隕鉄は、ブレスレットや飾板など装身具としてのみ利用されたところに特徴がある。その後、中期青銅器時代、後期青銅器時代において鉄器の利用には空白が生じる。隕鉄から人工鉄へと技術の連続は見られない。そして、トゥバの紀元前7世紀、アルジャン2号墳の鉄器の出土を契機として、鉄製の武器、工具、装身具が再び徐々に出現しはじめる。アルジャン2号墳出土の鉄器は、壮麗な金象嵌が施され、王墓とされる5号墓壇のみから出土している。当時の社会において、金よりもさらに貴重な金属としての鉄の位置づけをうかがうことができる。

その後は、トゥバではウユク文化後期（紀元前5－前3世紀）、アルタイではパジリク文化期（紀元前5－前3世紀）、ミヌシンスクでは、タガール文化のサラガシュ期（紀元前6－前3世紀）より鉄が出土し始める。出土器種は3地域ともほぼ同じであり、武器類では短剣、鶴嘴斧、工具では刀子、さらに装身具が鉄器もしくは銅鉄複合器の状態でも出土している。

この中で注目すべきは、タガール文化の鉄製短剣である。本章でD類とした短剣はいずれも、西アジアに類似が見られる搬入品である。年代もペルセポリスのレリーフとの比較から紀元前6－前5世紀とされている。鉄器の増加がはじまる比較的早い時期に、搬入品が見られるということは、南シベリアへの鉄器導入ルートを探る手がかりの一つとなるだろう。その後5世紀以降の鉄器は、在地の青銅器との類似が多く、鉄材料の製錬は不明であるが、製品の加工や仕上げが現地で行われるようになったと考えられる。また、鉄柄銅剣が製作されているということは、この段階において鉄の性能がまだ十分に青銅を上回ってはいないことを示している。初期の塊錬鉄の場合、浸炭加工を経て鉄素材を鋼にすることではじめて利器としての実用的な価値がでる。おそらく、南シベリアにおいてこの時期はいまだ鉄は装飾品としての扱いを受け、実用面では青銅器が重視されていたと考えられる資料である。

さらに、C類として示したタガール文化サラガシュ期に相当するグリフィンの柄頭の鉄剣は、鋳造品であると考えられる。紀元前6－前5世紀に属すると考えられる資料であり、中国の春秋末から戦国時代初期にかけて、中原をはるか離れた草原地帯において鋳造鉄器が出土していることは重要である。現在中国において、商代中期から西周末期（紀元前15－前8世紀）にかけて、隕鉄製の銅鉄複合器である銅柄鉄鉞や鉄援銅内戈が出土する。その後、西周末春秋初期（紀元前8世紀初頭）に、三門峡の虢国墓地から塊錬鉄製の鉄援銅

	西アジア・西シベリア		南シベリア			東アジア
	黒海北岸	ゴルノ・アルタイ	ミヌシンスク	トゥバ	中国中原	
前3千年紀		隕鉄の利用		※出土なし	隕鉄の利用	
前10世紀			気候の寒冷化			
前9世紀	先スキタイ		バイノヴォ	アルジャン	西周	
前8世紀	鉄器出現 浸炭・製鋼 溶接・熱処理 各技術が出揃う	マイエミール	ポドゴルノエ		塊錬鉄・浸炭鋼 虢国墓地	
前7世紀				ウユク前期	鉄器出現	
前6世紀	スキタイ	塊錬鉄	鉄器出現 鉄短剣		春秋	
前5世紀		鉄器出現	D類・B類	ウユク前期	鉄器出土	
前4世紀		パジリク	A類・C類 鶴嘴斧ほか	ウユク後期	鉄器出土	
前3世紀	サルマタイ	剣・鶴嘴斧・ 装身具	サラガシユ	シニルマク	戦国	
前2世紀		鉄器の増加	鉄器の増加		鉄器の増加	
前1世紀		シベ	テシ		鉄器の増加	
					前漢	

図 25 南シベリアにおける鉄器の受容と展開

内戈や、塊錬鉄浸炭鋼の玉柄鉄剣といった人工鉄が出土する。新しい技術としての铸造による鉄器は、紀元前6世紀ごろ南方の楚を舞台に製作が始まったとされ、出土が増えるのが紀元前5世紀以降である（韓 1998、Wagner 2003）。この流れのなかで、C類の铸造鉄剣の年代および対中国関係上の位置づけは今後の重要な課題である。特に、柄頭のグリフィンや鏢の狼などの装飾は完全に草原地域のモチーフである。かつて陝西省の冶金工人の墓から北方系のバックルの鑄型が出土し（陝西省考古研究所 2003）、オルドス地域のバックルを中原の工人が製作していた証拠となっている。この铸造鉄剣がどこで、誰の手によって作られたかは非常に興味深い問題である。

その後の紀元前1千年紀末期には、南シベリア全土において鉄器の出土が格段に増えていく。これまで青銅でしか作られなかった鍔なども鉄製品が現れ始める。ごく少数出土していた鉄製短剣や鉄製刀子、鉄錐などは大部分が青銅器から鉄器に変化し、馬具なども鉄器化がすすむ。背景としては、やはり鉄の物理的な性能が青銅器を上回ったといえるだろう。

以上、南シベリアにおいては、初期遊牧民文化の中期（紀元前6—前3世紀）に鉄器の出土が徐々にはじまり、後期（紀元前2世紀以降）より本格的な鉄器時代へと入っていくといえる（図 25）。

最後に、南シベリアと周辺地域との関係について、ここでもう一度検討しておきたい。

南シベリア地域の特徴として、初期の鉄器の器種が短剣、鶴嘴斧といった武器を中心としたものに限られるのが一つの特徴であるといえる。早くから鉄器化が進む西シベリア地域では、短剣のほか槍先が初期の鉄器の主要器種であった。また、近年ダム建設に伴う発掘調査により資料の蓄積が著しい天山北部の新疆イリ地域からは、鉄製刀子の出土が最も

多く報告されている。南シベリアは採集品が多いなど、収集資料のバイアスがかかっていることに注意は必要である。しかし、周辺地域の資料と比較すると、鉄器の実用性よりも装飾性への志向が強かったのではないかと考える。さらに、装身具よりもむしろ、武器を装飾的に仕上げるために銅鉄複合器や金鉄複合器といったバイメタルとしての鉄器の利用がうかがわれる。武器を美しく飾るというある種の習慣をうかがうことができ、初期遊牧民社会での戦争の社会的な役割を考える材料にもなるだろう。

また、鉄器の導入ルートについては、チレノヴァの指摘する西アジアもしくは中央アジアにあったアケメネス朝のサトラップ経由というのが、従来考えられてきた説である。しかし、南シベリアの南部に隣接する新疆ウイグル自治区は、さらに古い鉄器の資料が出土しており、紀元前 1000 年前後とされる墓から、鉄器の出土がある。新疆東部のハミに位置するヤンブラク（焉不拉克）墓地で、紀元前 1300 – 前 900 年とされるヤンブラク墓地第一期の墓から鉄製刀子、鉄製剣先、鉄製指輪、青銅耳環の鉄製垂飾、破片数点が出土している（新疆維吾爾自治区文化庁文物処 1989）。その後、初期サカ文化の銜などが出土するチュンバク（群巴克）墓地（紀元前 8 世紀）からも、銅鉄複合短剣や鉄鎌などが出土する。新疆ウイグル自治区は鉄器の出土をめぐり、中国内地とも異なる状態にあるが、ミヌシンスク盆地と比べても時期的な乖離が大きい。ただし、チュンバク墓地の鉄剣は、柄頭と鏑が青銅で、つばの形はミヌシンスクの青銅器に多い蝶形を呈する銅鉄複合短剣である。相互に影響があることは確実であり、広い視点に立った資料の集成と整理が今後の課題である。

（註）

1 ただし、鉄鉱石由来の人工鉄においても、5%まではニッケルを含む場合があり、含有量が少量の場合、隕鉄と人工鉄の区別は困難である。

参考文献

- 高浜秀 1983 「オルドス青銅短剣の型式分類」『東京国立博物館紀要』18号、pp. 95-131
- 韓汝玢 1998 「中国早期鉄器（公元前5世紀以前）的金相学研究」『考古』1998-2、pp. 87-96
- 新疆維吾爾自治区文化庁文物処・新疆大学歴史系文博干部專修班 1989 「新疆哈密焉不拉克墓地」、
『考古学報』1989-3、pp. 325-362
- 中国社会科学院考古研究所新疆工作隊・新疆巴音郭楞蒙古自治州文管所 1991 「新疆輪台群巴克
墓葬第二、三次發掘簡報」『考古』1991-8、pp. 684-783
- 陝西省考古研究所 2003 「西安北郊戰国鑄銅工匠墓發掘簡報」『文物』2003-9、pp. 4-14
- Badetskaya Бадецкая Э.Б. 1986 Археологические памятники в степях среднего Енисея,
Ленинград
- Vokovenko 2006 The emergence of the Tagar culture, *Antiquity* 80, pp. 860-879
- Chlenova Членова Н. Л. 1967 Происхождение и ранняя история племен тагарской культуры,
Москва
- Ermitazh Эрмитаж 2004 Аржан, Санкт-Петербург
- Gryaznov Грязнов М. П. 1992 Алтай и прятгайская степь, in Мошкова 1992, pp. 161-178

- Koryakova 2007 *The Urals and western Siberia in the bronze and iron ages*, Cambridge World Archaeology
- Mander'shtam Мандельштам А. М. 1992 Glava pervaiia Altai I Tuva, in Мошкова1992, pp. 161-205
- Moshkova Мошкова М. Г. 1992 Степная полоса Азиатской части СССР в Скифо-Сарматское
Время, Наука, Москва
- Stepanova Степанова Н.Ф. 1997 инвентарь из погребени афанасьевской культуры Горного
Алтая, Социально-экономические структуры древних обществ Западной Сибири,
Altai University , pp. 32-36
- Wagner, D. B. 2003 The earliest use of iron in China, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*.
Vol.75, 2003, pp. 127-169

図版出典

図 20 筆者作成

図 21 Badetskaia 1986, p. 20, fig. 2-5

図 22 — 1-7 Ermitazh 2004, p. 18, p. 49, p. 50, p. 53, p. 54

図 23 — 1-5 Moshkova 1992, fig. 63-10, 7, 21, 22, 26, 17

図 24 — 1-17 Chlenova 1967, Tab. 11

図 25 筆者作成

第4章 セミレチエとイリ河流域における初期遊牧民文化の交流

1. はじめに

中央ユーラシア草原地帯の中央部、カザフスタン南東部からキルギス北部にかけて、セミレチエとよばれる地域が広がる。ロシア語のセミレチエ、カザフ語・キルギス語のジェティス Jeti-Suu は「7つの河」という意味を持ち、バルハシ湖以東のイリ河、チュー河といった河川やイッシク湖が広がる一帯である（図26）。セミレチエはユーラシアの北部に広がるステップ地帯に位置する。紀元前1千年紀にはサカ文化、烏孫文化と命名された考古学文化が設定されている。

本稿では草原地帯における初期遊牧民文化の交流を検討するため、セミレチエについてその遺跡と文化を整理し、隣接する中国新疆ウイグル自治区（以下、新疆）イリ河流域との関係について論じる。まず、セミレチエと新疆のイリ河流域の諸遺跡を概観し、次に墓や一括埋納、また土器や青銅器、鉄器などの利用について両者を比較し、交流の様相を明らかにする。

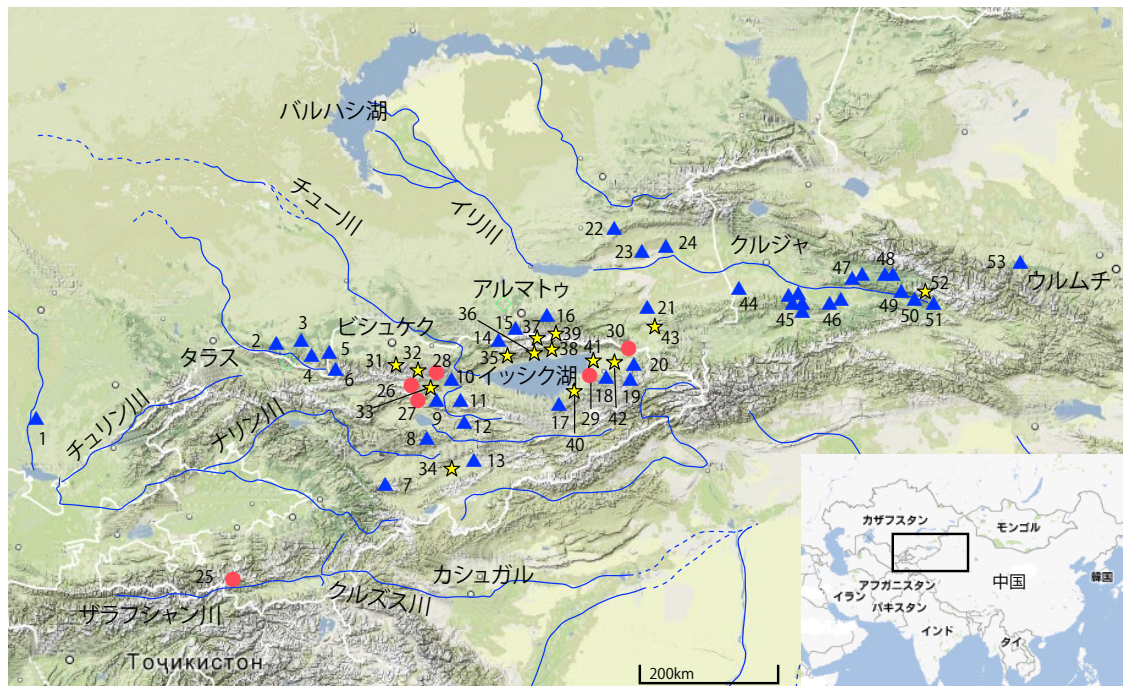


図26 セミレチエ及びイリ河流域文化の遺跡 ▲墓地、★一括埋納、●集落

1 Aktobe, 2 Kzyl-Kainartobe, 3 カラシヤ 2, 4 Talas, 5 Tasharyk, 6 Tosh-bashat, 7 Dzhergetal, 8 Aigyrdzhal, 9 Kum-aryk, 10 ブラナ, 11 Kyz-art, 12 Turasu, 13 Alamyshik, 14 カルガルウ, 15 イッシク, 16 Talgar, 17 Tuura-Su, 18 Chil'pek, 19 Sokolovka, 20 Dzherges, 21 ジュバントベ, 22 ビジェ, 23 Kzulauz, 24 ベスシャトル, 25 Daraut-Kurgan, 26 Karabalty, 27 Kum-aryk, 28 Alamendin, 29 Tyupskoe, 30 Aktas, 31 belovodskii altar', 32 Chu, 34 narynskii zhertvennik, 35 Kargalinskii, 36 Kyrchinskii, 37 Alma-Aty Klady, 38 Kamenka, 39 イッシク, 40 Barskoon, 41 Tyup, 42 Chil'penskii, 43 テンリク, 44 スドンブラク, 45 チプチハイ・イエシクリク・山口・一牧場・波馬, 46 イルグダイ・紅旗磚廠, 47 チョンク・カラトパ, 48 チレントハイ・ジャルクスカイント, 49 キュネス種羊場, 50 黒山頭, 51 トムルク, 52 七十一団一連漁塘, 53 南山 ※片仮名表記は本文中に言及のある遺跡

2. 研究略史

セミレチエの考古学研究は、19世紀末、偶然の発見による遺物の収集からはじまる。1928年－1942年にはロシア人の調査隊によって研究が進められ、文献に記された烏孫と現地考古学文化の比較という形でグリヤズノフやベルンシュタムらによる発掘調査が行われた。1943年－1967年には、ベルンシュタムの指導による、時期区分を目指した発掘調査が行われる。また、1954年にはイリ河流域の考古学調査がカザフスタン共和国科学アカデミーによって行われるようになり、現地カザフスタンの学者によるサカ文化、烏孫文化を総括する研究も進められた。1968年以降は、旧ソ連全体の考古学会議が行われ、セミレチエの考古学的な位置づけも論じられる。イッシク古墳などの大規模な発掘調査も行われ、アキシエフらによる総合的な研究書も出版されるようになった。考古学的な調査成果の蓄積も進み、初期遊牧民文化の編年が以下のように組み立てられている。前期サカ文化、紀元前8－前6世紀。後期サカ文化、紀元前5－前3世紀。前期烏孫文化、紀元前3－前1世紀。中期烏孫文化、紀元後1－3世紀。後期烏孫文化、紀元後3－5世紀(Moshkova 1992)。近年では、近隣の東カザフスタンのベレリ古墳におけるAMSの年代の研究も進められ、従来の年代観とほぼ一致する結果となっている。

新疆における地域文化の研究は、発掘調査の蓄積が進んだ1990年代前半より活発に行われるようになる。イリ河流域地域も新疆内の一つの地域文化圏として、「イリ河谷（水1993、安1997）」、「西北地域、イリ溪谷・タルバガタイ（Mei2000）」といった区分で取り上げられてきた。さらに、陳戈によってイリ河流域文化が提唱され（陳2002）、新疆の土器による地域差を論じた韓建業にもイリ河流域文化の名称が継承されている（韓2007）。また、イリ河流域においては、しばしば青銅鍔と呼ばれる大型青銅容器が偶然に発見されることがあった。中でも三脚を有し、ユーラシア草原地帯に展開する青銅鍔のなかでも特徴的な形態を呈することから、類似品の出土するカザフスタンのセミレチエ地域との交流が論じられてきた（王1987、張他1991、王1993）。

新疆における研究ではしばしばセミレチエとの関係が指摘されているが、具体的にセミレチエとイリ河流域を詳細に比較した研究は少ないのが現状である。青銅鍔（柳生2011）や青銅盤（邵2008）など、個別の特徴的な器種については、比較検討がなされているが、総合的な研究は未だほとんどないといえる。よって、本研究では、両地域の遺跡、遺構、遺物について個別に紹介した後、比較を行い、両地域の交流について検討していく。

3. セミレチエの初期遊牧民文化

それでは、セミレチエの初期遊牧民文化の遺跡をみていきたい。本項で取り上げたセミ

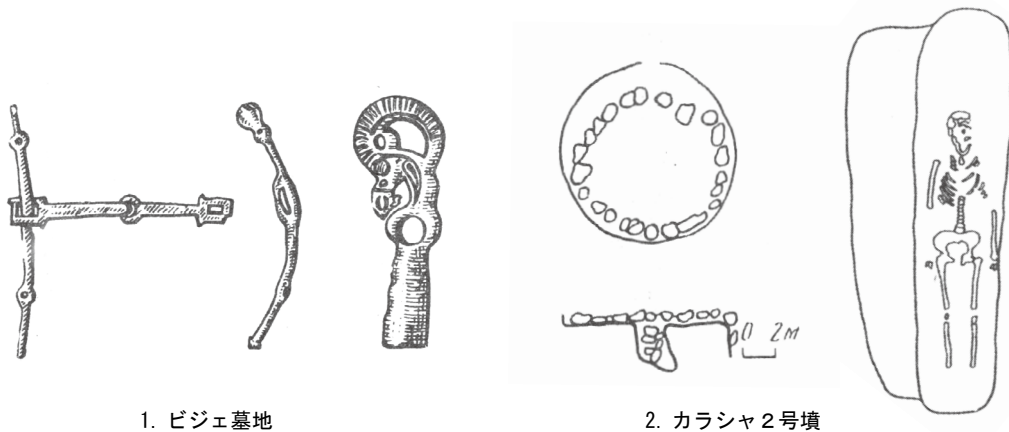


図 27 前期サカ文化の遺構と遺物

レチエの諸遺跡は、旧ソ連アジア・ロシア地域の初期遊牧民文化を詳説した『スキタイ・サルマタイ期におけるソビエト連邦アジア地域の草原地帯 (Moshkova 1992)』より引用した。

1) 前期サカ文化 (紀元前 8 - 前 6 世紀)

カルガルィ Kargaly 墓地：カザフスタンの旧首都アルマトゥから西へ 50Km ほど離れた谷に位置する。板石の石槨墓で、頭位は北東であった。青銅刀子、青銅錐、丸底壺が出土する。ベルンシュタムは紀元前 8 世紀に編年し、アキシエフは前 7 - 前 6 世紀と考えている。

ビジェ Bizhe 墓地：タルディ・クルガン市の南西 50Km に位置する 3 基の古墳群で、いずれも盗掘を受けていた。石槨墓で、頭位方向は西である。墓からは遺物の出土はなかったが、近くで馬具の埋納が発見された。馬具は青銅製の銜と鑣が 2 セットあり、山岳山羊をかたどったポールトップが 1 対出土している。馬具の型式から紀元前 8 - 前 7 世紀と見られる (図 27-1)。

ジュバントベ Dzhuvantobe 古墳群：チリク河流域に並んで配置する古墳群である。青銅銜を装着したウマの陪葬が確認されている。また、他の墓では頭位方向西の仰臥伸展葬の埋葬があり、青銅刀子や骨製の櫛、丸底の土器が出土している。紀元前 7 - 前 6 世紀と見られる。

カラシャ Kapasha 2 号墳：キルギス・アラタウ山麓のタラス河中流域に位置する。セミレチエで最古の竪穴偏室墓であり、南西に墓道があり、北東に墓室を設ける。頭位方向は北西で、仰臥伸展葬であった。青銅刀子、銀製飾板のほか、鉄製ピンが出土している。紀元前 6 - 前 5 世紀と考えられている (図 27-2)。

チュプスキー Chupskii 埋納：イッシク湖東岸のチュプ市で、馬具の一括埋納が 20 点確認された。青銅の銜、鑣、環、節約、刀子などが出土し、型式からみて紀元前 8 - 前 6 世紀であるとされる。

前期サカ文化では、墓は石槨墓、少し遅れて堅穴偏室墓がみられる。頭位は西、北西、北東で仰臥伸展葬が主体となる。馬の陪葬や一括埋納も若干見られる。遺物は少なく、馬具や装身具が主体であり、青銅刀子や青銅錐など利器の材質は青銅器である。鉄器もやや新しい堅穴偏室墓から鉄製ピンが出土しており、装身具として鉄器が出土する。馬具や鏃の形態から、紀元前9世紀末のアルジャン古墳やヴィソーカヤ・モギーラよりは新しいとされる。

2) 後期サカ文化（紀元前5 - 前3世紀）

セミレチエの初期遊牧民文化で主体となる時期であり、古墳や一括埋納が増加する。南シベリアのタガール文化や黒海北岸のスキタイ文化に併行する時期であり、初期遊牧民文化の中で富の蓄積が進み、墓の規模や副葬品においてで階層化が現れる。

ベスシャトル Besshatyr 古墳群：イリ河流域に広がる100か所以上の古墳群の一つであり、アルマトゥから東に180kmに位置する。31基の古墳からなり墳丘規模により大・中・小に分けられる。大・中規模の古墳は盗掘を受けていたが、小規模の古墳からは、2人合葬の墓が見つかった。墳丘下に堅穴土壙墓があり、被葬者は頭位西向きの仰臥伸展葬で、鉄製短剣、青銅鏃を伴う箆、鉄製飾板などが出土している。短剣や鏃の型式より紀元前5世紀とされる（図28-1）。

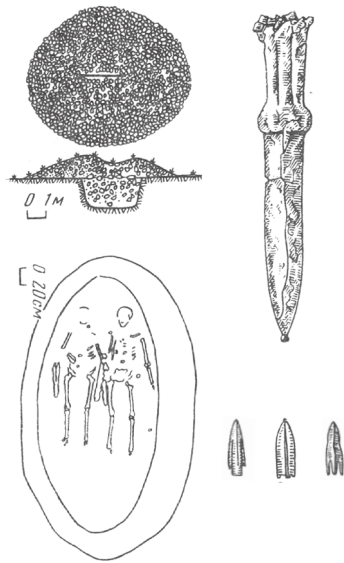
イッシク Issyk 古墳：アルマトゥ市から東に50km、イッシク河左岸で40基の古墳が発見された。有名な黄金人間は16号墳で見つかった。墳丘は直径60m、高さ6mの土混じりの石である。墳丘下には2基の埋葬主体部があり、中央の1基は完全に盗掘を受け、南15mほどはずれたもう1基の木槨内で黄金人間が発見された。4000点におよぶ金製飾板の他、鉄製長剣や鉄製短剣（アキナクス）も出土した。木槨の西壁と南壁付近では、木製、銀製、青銅の容器や丸底の土器などが31点見つかったほか、青銅鏡や青銅炉も出土している。紀元前3世紀とされる（図28-2）。

イリ河流域の古墳群：この一群の古墳は、基本的に頭位は西で、1 - 2点の土器と羊の骨、また、鉄製・青銅製の装身具が出土する。一例として、ベスシャトル古墳群より20km離れたイリスク市から東に80kmに位置するキズウイラウス1号墓地などが知られている（図28-3）。

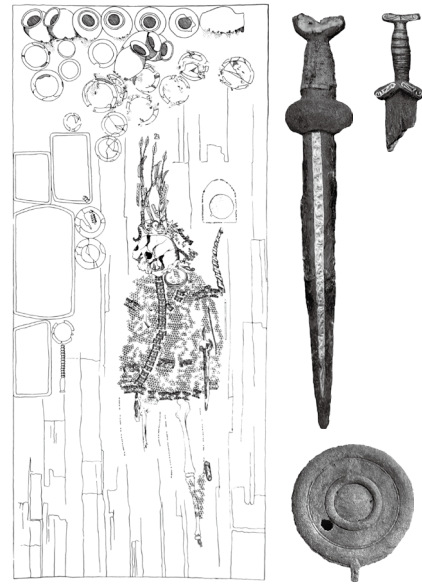
チュー河、タラス河流域の古墳群：基本的にイリ河流域の古墳群に類似する。副葬品には1 - 2点の土器があるほか、青銅有茎三翼鏃、有蓋三角鏃がみられる。また、アキナクス型の青銅短剣も採集されている。

チャニシャヤ周辺の古墳群：一般的に盛土の古墳に、堅穴土壙墓が主で、石槨墓も見られる。イッシク湖南岸のトゥラ・スー墓地では15基の墓が発掘されている。土器が出土するほか、東西方向の龕を持つ石槨墓が見つかったり、青銅のブレスや鉄製刀子、鉄環、金製飾板が出土している。

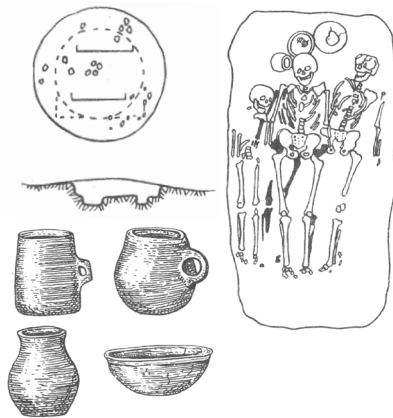
アラムイシク Alamyshik 墓地：ナリン河流域、ナリン市の西に位置する。4基の墓がみ



1. ベスシャトル古墳群



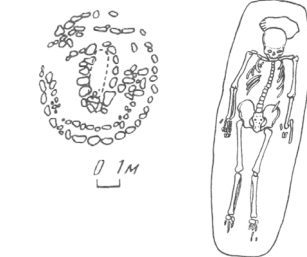
2. イッシク古墳 16号墓



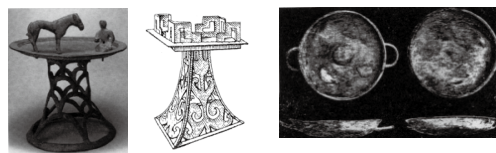
3. イリ川流域の古墳群



5. イッシクの一括埋納 (1958年)



4. ジェルゲタル墓地



6. イッシクの一括埋納 (1953年)

図 28 後期サカ文化の遺構と遺物

つっており、そのうち1基は、青銅器文化の延長とみられる屈肢葬をとる。墓からは青銅刀子と砥石が出土している。副葬品の乏しい墓は、同様にジェルゲタル Dzhergetal 墓地などでも見られる。この墓は副葬品をほとんどもたず、わずかに青銅の刀子か錐が出土する（図 28-4）。

イッシク河流域の一括埋納：アルマトゥ州のイッシク市で1958年に発見された。横方向に把手を持つ青銅鍔とともに、青銅剣、青銅矛、青銅銜2点が一括埋納されていたという。青銅短剣は先端が破損しており、銜にも使用紺がみられた。青銅鍔は天山北方地域の青銅鍔をまとめた柳生氏のC類（胴部横方向に把手をもつ）にあたり、紀元前5—前4世紀とされる（柳生2011、図28-5）。

イッシク湖岸の一括埋納：1953年、イッシク湖岸で、胴部に横把手と一対の環を持つ青銅鍔（柳生D1類）1点と三脚鍔（柳生D3類）2点、青銅製灯明台1点、青銅製杯2点、鉄製鍔1点、鉄製灯明台1点の計8点が直径2m深さ2.5—3mの穴に埋納された状態で出土した。紀元前4—前3世紀とされる（図28-6）。

アルマトゥ市郊外の一括埋納：1912年にD2類とD3類の青銅鍔が大小1点ずつと、鉄製鍔1点、鉄製灯明台1点の計6点が出土した。D類鍔があることから紀元前4—前3世紀とされる。

アルマトゥ市南方の一括埋納：1951年、D2類青銅鍔1点、口縁装飾を持つD3類青銅鍔1点がその他複数の器物とともに出土している。同様に紀元前4—前3世紀とされる。

セミヨーノフカ Semenovka の一括埋納：キルギスのセミヨーノフカ村郊外で1937年に発見された。D類青銅鍔2点、青銅製灯明台2点、青銅製奉献台2点、コブウシの小像2点が深さ1.5—2mの土坑中より出土している。同様に紀元前4—前3世紀とされる。

後期サカ文化では、イリ河流域からチュー河・タラス河流域にかけて、数百におよぶ古墳が築かれる。副葬品の多寡が顕著であり、大型墓や副葬品の多い墓は、数千点の金製飾板が出土する。墓室は大型の木槨墓がみられる。一方で、副葬品の少ない墓は、わずかな土器や青銅器を持ち、堅穴土壙墓や石槨墓である。全体として頭位は西を中心に仰臥伸展葬で埋葬される。また、後期後半には大型の青銅鍔と铸铁製¹の容器を伴う一括埋納がイッシク湖周辺で出現するのも特徴的である。

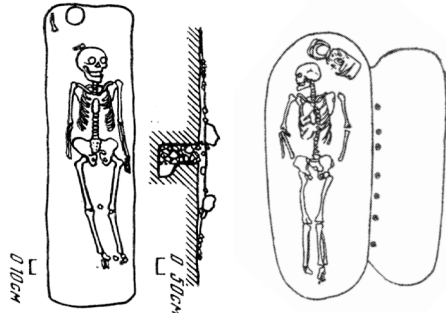
3) 前期烏孫文化（紀元前3—前1世紀）

アイギルジャル Aigyrdzhal グループ：イリ河およびチュー河流域に位置する。盛土の墳丘下には、堅穴偏室墓がある。副葬品には基本的に鉄製刀子、土器、羊の骨が伴う。しばしば鉄鏃や骨鏃、骨製の弓弭なども見られる。装飾品は少ない。その他、鉄鍋、鉄製長剣が出土する場合もある。紀元前3—前2世紀とされる（図29-1）。

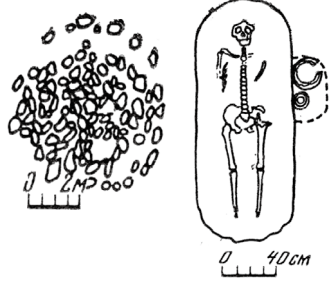
カプチャガイ Kapchagai 墓地：イリ河中流域に位置し、南北に鎖状に52基の墓が連なる。古墳の直径は5—20mで、高さ2m、地上に墳丘を持つものと墳丘の下半部に葺石を施したもの、地表面に環状の石囲いを施したものがある。被葬者は仰臥伸展葬で北西頭位であ

前期烏孫文化

後期烏孫文化



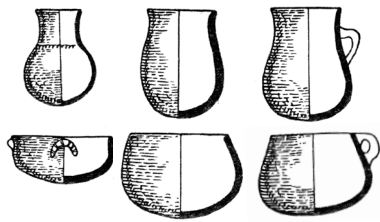
1. イリ河流域



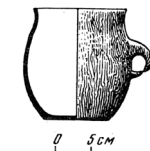
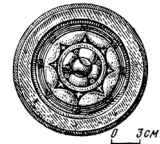
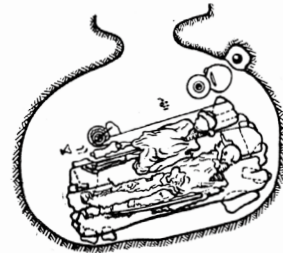
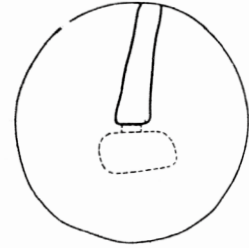
2. チュー川西部タラス川中流域



3. プラーナ墓地
出土の彩陶



4. 前期烏孫文化
出土の鉄刀と土器



5. ケンコール墓地出土遺物

図 29 烏孫文化の遺構と遺物

る。副葬品は青銅製柄鏡や刀子、ピン、鉄製刀子などである。

ブラナ Burana 墓地：チュー河流域のトクマク市より南に位置する。大型の古墳の下には3基の埋葬があり、いずれも頭位は西である。盗掘を受けていたが30点の金製飾板が出土している。その他の墓からは、鉄鏃や土器が出土する。赤色顔料で模様が描かれた丸底壺もある。後期サカ文化の要素をもつ墓地である。紀元前3－前1世紀とされる（図29-3）。

タルガル Talgar 墓地：ザイリスキー・アラタウ及びイリ河周辺には20か所以上におよぶ烏孫文化の墓地が広がる。タルガル村の郊外にある墓地では、大型墓から500点以上の金製飾板が出土している。他、鉄製刀子や丸底土器の出土もある。紀元前2－前1世紀とされる。

カルガルウ Kargalu 埋葬：アルマトウより30Kmの溪谷で、女性の埋葬跡が偶然発見された。300点以上の金製飾板とディアデムがみついている。紀元前2－前1世紀とされる。

チリペク Chil'pek・グループ：チュー河西部の古墳群を指す。タシ・アルイカ、トシ・バシャトなどの墓地が知られており、100基以上の古墳が見ついている。タラス河中流域、キルギスキー・アラタウ北麓の4か所の墓地では、60基以上の古墳が発掘されている。古墳は盛土の下に通常2基の埋葬がある。小さな龕を持ち、土器が納められている。副葬品には丸底の土器、鉄製刀子や鉄製飾板および羊の骨がある（図29-2）。

烏孫文化の墓は、墳丘の下に2－3基の埋葬を持つ。堅穴土壙墓が主体であり、堅穴偏室墓が全体の2割近くを占める。副葬品は少なく、1－2点の土器と青銅製または鉄製の刀子を伴う。土器は無紋で、無耳の丸底壺、丸底鉢が多い。しばしば単耳をもつものもみられる（図29-4）。女性の墓には青銅鏡や鉄針、飾板などの装身具が出土する。武器は少なく、鉄製長剣と骨鏃が見られるのみである。雄羊の骨がしばしば出土する。

また集落跡も調査されており、チュー河流域のカラ・ベルタなどがある。青銅刀子や青銅錐、鉄製短剣や鉄製刀子、骨製有茎鏃などが出土している。

4) 中期・後期烏孫文化（紀元後1－5世紀）

ケンコール Kenkol 墓群：タラス河流域、ケンコール河左岸に位置し、100基以上の墓が発掘されている。大部分が斜坡洞墓（カタコンベ）で、木製の葬具を持つ。男性の埋葬には武器が副葬され、鉄製長剣や鉄製有茎三翼鏃、骨鏃、弓などがある。女性の埋葬には、青銅鏡や装飾品、紡錘車が伴う。青銅鏡は漢式連弧紋鏡などが出土している。また、各埋葬には2－3点の土器、鉄製刀子、羊の骨が伴っている。土器はロクロ成形平底土器が主体である。他、鉄製銜や鉄製帯扣などもみられる。頭骨変形が見られる場合もある。民族移動期の紀元後4－5世紀とされる（図29-5）。

4. イリ河流域文化

イリ河流域文化は、新疆西部に流れるイリ河およびその支流で発展した、青銅器時代

から初期鉄器時代の地域文化を指す。発掘調査が増加し新疆において地域文化が設定されていく中で、2002年に陳戈によって提唱された(陳 2002)。その後、イリ河流域の吉林台ダム開発による大規模な発掘調査が行われ、ニルカ県を中心に資料が蓄積し、その具体的な様相もより明確になってきている。

当文化は窮科克(チョンクク)墓地や索墩布拉克(スドンブラク)墓地を代表とできる。墓地の特徴は共通性が高く、上部構造が石堆墓か環状の葺石を持つ古墳で、堅穴土壙墓あるいは堅穴偏室墓であり、頭位方向が西向きで仰臥伸展単人葬を基本形態とする。墳丘下に墓壙が1-3基ある。副葬品は少なく、被葬者の頭部付近か体の横においた土製または木製の容器上に羊の骨とともに鉄製刀子をのせている。土器は無耳の壺や鉢、盆が多いが、単耳罐もあり、夾砂紅陶と彩陶がある。彩陶は、白衣褐彩、紅衣黒彩で三角紋、格子紋、平行線紋などの幾何学紋が主体である。

イリ河流域文化の年代は、陳戈によって放射性炭素年代を参照として紀元前800-紀元前後に位置づけられている(陳 2002)。しかし、陳の年代はイリ河流域文化としてパミール高原の香宝宝墓地なども含んだ結果であり、イリ河流域のみの年代をみれば基本的に紀元前6世紀以降である。また、新疆の青銅器時代から初期鉄器時代の土器の変遷を整理した韓建業はイリ河流域文化を4時期に区分している(韓 2007)。第1期を青銅器時代とし、第2期を紀元前1100-前800年、前3期を紀元前800-前500年、第4期を紀元前500-前100年に区分する。しかし第2期としてあげた墓は鉄器の出土する堅穴偏室墓であり、紀元前1千年前後まで溯りえない。むしろ、第3期に組み込まれた方が自然であろう。

筆者もかつて、新疆の鉄器利用の展開について考察する中で紀元前6-前1世紀を前後2期に区分した(田中 2010)。イリ河流域文化の墓は全期間を通じて類似性が高く、変化は少ないが、第一期は土器や金属器などの副葬品、埋葬方法から時期区分を行い、彩陶が多く堅穴土壙墓を主体に、堅穴偏室墓もみられる時代とする。第二期は無紋土器を副葬する偏室墓が主体で、頭骨変形などが行われる。山口墓地を代表とし漢代以降とできる(新疆文物考古研究所 2006)。本論では初期遊牧民文化として全体をとらえるため、イリ河流域文化を前・中・後期と区分する。

イリ河流域文化前期：尼勒克(ニルカ)県チョンクク1号墓地52号墓を代表とする(新疆文物考古研究所 2002)。墳丘は直径6.5-9.7m、高さ0.3mで、深さ2.4の堅穴石槨木簡墓である。被葬者は20歳前後の男性単人葬で、北西方向の二次葬である。副葬品は乏しく、骨鏃4点、銅の鏃に覆われた羊の蹠の骨19点、革紐が出土する。放射性炭素年代では紀元前1040-前906年とあるが、そこまで溯るのかは不明である。むしろ、出土する有茎断面三角形の骨鏃は、タギスケンなどで出土する紀元前7-前6世紀の青銅鏃(B類1型)に類似し、年代もほぼそれに近いといえる(Itina1997)。また、同墓地2号墓、25号墓は墳丘下地表面上に板石状の石槨を持つ。ユーラシアの草原地帯において墓室は地上から地下への変化が指摘されており相対的に古いと考えられる。2号墓地からは青銅刀子が出土する。

イリ河流域文化中期：ニルカ県チョンクク I 号墓地の竪穴土壙墓・竪穴偏室墓、哈拉図拜（カラトパ）墓地、加勒克斯卡茵特（ジャルクスカイント）山北麓墓地、奇仁托海（チレントハイ）墓地、鞏留（トックズタラ）県伊勒格代（イルグダイ）・紅旗磚廠墓地、山口墓地、察布查爾（チャプチャル）県スドンブラク墓地、新源（キュネス）県黒山頭、鉄木里克（トムルク）墓地、石河子市南山墓地である。一部、第二期まで継続する墓地もあるが、区分が困難なため第一期に含めている。年代はチョンクク墓地の竪穴偏室墓 M11 が放射性炭素年代で紀元前 981 - 前 830 年と、新疆全体の竪穴偏室墓からかけ離れて早いのでここでは保留する。スドンブラク墓地が放射性炭素年代より紀元前 5 - 前 3 世紀、ジャルクスカイント山北麓墓地が放射性炭素年代より紀元前 6 世紀から漢代とされる（新疆文物考古研究所 2002）。全体として中期の年代を前 6 世紀以降漢代より前とする。

一例として、チョンクク 1 号墓地 15 号墓をあげる（新疆文物考古研究所 2002）。墳丘は直径 7.4m で、高さ 0.4 m、墳丘上面に不整形の環状に葺石がある。墓室は 2 基あり、北側を A 室、南側を B 室とする。A 室は径 2.9 × 2 m、深さ 1.4 m の墓道を南にもつ竪穴偏室墓で、頭位は西である。40 歳以上の女性の単人葬で、仰臥伸展葬であった。被葬者の頭部右側に彩陶の鉢と壺が置かれ、木製盆と鉄製刀子、羊の腰骨があった。B 室は、A 室より南に 1.7m に位置する。墓室は 3 × 2.5 m で深さは 1.14 m、同じく南側に墓道を持つ竪穴偏室墓である。埋葬は頭位を西に持つ 25 - 30 歳の男性単人葬で、頭骨には穿孔があった。被葬者の頭部右側に、彩陶鉢、木製盆、木製容器と鉄製刀子が置かれてあった。チョンクク 1 号墓地は、出土鉄器は鉄製刀子が中心で、50 点以上出土する。武器は短剣が主体である。女性の墓からは青銅簪が出土している。

また、テクス県七十一団一連漁塘遺址（新疆維吾爾自治区博物館文物隊 1987）からは、青銅鍔と青銅盤を含む一括埋納がみつまっている。

イリ河流域文化後期：ニルカ県恰甫其海（チプチハイ）墓地、山口墓地、キュネス種羊場墓地である。彩陶はほぼみられなくなり、頭骨を變形した遺骨が見つかるなど、前時期とは区別される。竪穴偏室墓が主体で漢代併行期である。鉄器は鉄製刀子が 30 点以上出土するほか、鉄錐、鉄釘、鉄製手斧などがあり、武器では鉄製短剣がある。鉄鍬の出土はまだ見られない。青銅刀子が若干使用されている。しかし、山口墓地では彩陶と相伴しており、この墓は前段階に属する可能性もある。

代表例として、山口墓地 34 号墓を紹介する（新疆文物考古研究所 2006）。墳丘は直径 7.5m、高さ 0.8m、二重の葺石を持つ墳丘中央下 2m に竪穴偏室墓がある。墓室は北東側にあり、頭位は北西で、成人男性の仰臥伸展単人葬であった。頭部右側に土器壺、羊の脊椎骨、鉄製刀子が出土している。

中・後期を通して当地域では、鉄製刀子の出土状況が共通しており、西向きの仰臥伸展単人葬に、羊の肉と刀子をセットで副葬する習慣が確立していたといえる。

表 10 セミレチエと新疆イリ河流域の比較

セミレチエ

	前期サカ文化	後期サカ文化	前期烏孫文化	中・後期烏孫文化
年代	紀元前 8 - 前 6 世紀	紀元前 5 - 前 3 世紀	紀元前 3 - 前 1 世紀	紀元後 1 ~ 5 世紀
墓	石槨墓、竪穴偏室墓	木槨墓、石槨墓、竪穴土壙墓、竪穴偏室墓	竪穴土壙墓、竪穴偏室墓	竪穴土壙墓、斜坡道墓
埋葬	単人葬、仰臥伸展葬	単人葬、合葬、仰臥伸展葬	単人葬、仰臥伸展葬	単人葬、合葬、仰臥伸展葬
頭位	北西、西、北東	西、北西	西、北西	北西、西、北東
土器	丸底無紋	丸底無紋、平底、単耳	丸底無紋、彩陶、平底	ロクロ平底土器
利器	青銅刀子・錐	青銅短劍・矛・鏃・刀子・錐、 鉄製長劍・短劍・刀子	青銅刀子、 鉄製長劍・刀子	鉄製長劍・鏃・刀子
馬具	青銅銜・鏢・環・節約・ 竿頭飾	青銅銜・環・節約		鉄銜
装飾品	銀製飾板、骨櫛、 鉄製ピン	青銅鏡、青銅飾板 金・鉄製飾板	青銅鏡、青銅ピン、 金・鉄飾板	鉄製簪、鉄製帯扣
埋納・他	ウマの殉葬、馬具 20 点	青銅鍍・灯明台・奉獻台 鉄製鍍・灯明台・奉獻台		

新疆イリ河流域

	イリ川流域前期	イリ川流域中期	イリ川流域後期
年代	紀元前 7 - 前 6 世紀	紀元前 6 - 前 3 世紀	紀元前 3 - 前 1 世紀
墓	竪穴木槨墓、石槨墓	竪穴土壙墓、竪穴偏室墓、 仰臥伸展葬	竪穴土壙墓、竪穴偏室墓、 仰臥伸展葬
埋葬	二次葬	二人合葬、単人葬	二人合葬、単人葬
頭位	長軸東西方向	西・北西	西・北西
土器	彩陶	彩陶、無紋丸底	無紋丸底、平底
利器	青銅刀子	青銅鏃・刀子・針、 鉄製短劍・刀子・錐	青銅鏃・刀子、 鉄製短劍・長劍・刀子・錐
馬具			
装飾品		青銅製簪・環・飾板、青銅鏡	青銅簪、青銅環、青銅鏡、 鉄簪・鉄環、鉄飾板
埋納・他		青銅鍍単独 青銅鍍と容器類	

5. 考察 鉄器利用の発展と交流

それでは、セミレチエの初期遊牧民文化の発展と、新疆のイリ河流域文化について両者を比較し、その交流を検討する。両者の各要素を並べたものが表 10 である（表 10）。

土器：セミレチエでは、無紋の丸底土器を主体に平底もしばしば見られる。烏孫文化後

期には平底の轆轤製になる。烏孫文化前期では若干の彩陶もあるが、全体を通じて基本的に無紋土器である。無耳の壺や鉢が多く、次いで単耳壺や単耳杯が見られる。

一方新疆では、イリ河流域文化の前期・中期は、彩陶が多く出土する。幾何学文様が主体で下半部全体を彩色し、上半部に紋様を描くか、全面に幾何学紋を施す場合がある。器形は無耳の丸底が主体で、罐、壺、鉢などがある。まれに単耳罐や単耳杯もみられる。イリ河流域文化後期になると、無紋土器が中心となる。前・中期同様に無耳の丸底が中心で、器種も同様である。イリ河流域では土器は彩陶から無紋陶へと変化している。

セミレチエと新疆の差異は、彩陶の有無である。イリ河流域文化の彩陶は、同時期の新疆の地域文化における彩陶の広がりの中で理解できる（韓 2007）。新疆を中心とする彩陶文化は、セミレチエまで広がらなかったということもできるだろう。土器は在地的な要素をより反映していると考えられる。セミレチエとイリ河流域は、無耳・丸底という共通点もあり、器種としては類似するが、装飾の点で差が大きい。

墓制：セミレチエにおいて前期サカ文化では木槨墓、石槨墓などがみられた。後期サカ文化では墓に明確な階層差が出現し、大型墓は木槨墓が主体で、金製品が豊富に副葬される。副葬品の少ない墓は堅穴土壙墓が中心となる。いずれも、頭位は西を中心に仰臥伸展葬をとる。烏孫文化になると、西頭位で単人仰臥伸展葬、副葬品として鉄製刀子、羊の骨、容器というセット関係が定着する。

イリ河流域文化の前期は石槨墓で二次葬が見られる。中期には、西・北西頭位、単人仰臥伸展葬で、土器もしくは木製容器に青銅か鉄の刀子、羊の骨をセットとする埋葬が増加する。土器は彩陶土器が含まれる。後期には、このセット関係がより定着する。ただし、後期は堅穴偏室墓が増加し、鉄製刀子と無紋土器が多く見られる。全体に階層差の少ない墓が連続して営まれるといえる。新疆においても、紀元前1千年紀の前・中期段階は墓地の間に極端な階層差は見受けられない。漢代併行期に入り、トルファンなどでいわゆる「王墓」が出現する。イリ河流域地域では、紀元前1千年紀には明確な階層差のある墓は出現しない。紀元後の民族移動期になると、ボマのように黄金のマスクを伴う、副葬品の豊かな墓が出現するようになる。

西頭位の単人、仰臥伸展葬に、土器、金属刀子、羊の骨というセットの埋葬は、イリ河流域文化の中期を中心に広がりを見せ、セミレチエでは前期烏孫文化期に、多く見られるようになる。イリ河流域からセミレチエへという東から西の墓制の拡大を見ることができ

る。墓の階層化という視点で見ると、イリ河流域文化は新疆の地域文化の延長上にあるといえ、「王墓」が出現するセミレチエとは様相を異にしているといえる。

一括埋納：セミレチエでは後期サカ文化に青銅鏡・青銅盤、鉄鏡・鉄製灯明台などの一括埋納がイシク湖畔を中心に分布する。新疆のイリ河流域でも、同様の型式の青銅鏡や青銅盤がしばしば単独で見られるが、一括埋納は1例のみで、昭蘇県の七一団一連漁塘で見られる。

銅鍔を埋納する習慣はユーラシア草原地帯の各地で見られる。新疆における鍔の単独出土は、鍔の単体埋納の可能性をもつ。しかし、青銅大型容器や鉄鍔を伴う一括埋納はセミレチエの特徴であり、後期サカ文化期に集中する。後期サカ文化の中でも、とくに儀礼的な意味合いをもつ一括埋納がイリ河流域まで広がっていった様子をうかがうことができる。

鉄器利用の拡大：セミレチエで鉄器の出土がはじまるのは、前期サカ文化の紀元前6世紀のカラシャ2号墳である。出土する鉄器は鉄製ピンであり、装身具である。後期サカ文化にはいると鉄製短剣、鉄製長剣など鉄製武器類が出現する。鉄製飾板など装身具もみられる。鉄器の出土量も増加するが、並行して青銅刀子など青銅利器の利用も続いている。また、鉄製武器類などが出土するのは、イシク古墳など副葬品の豊富な墓が多い。馬具は青銅製である。一括埋納が増加するが、青銅鍔のほか、鉄製の灯明台、奉献台といった鑄鉄製品が現れる。前期烏孫文化期に入ると、同様に鉄製刀子、鉄製短剣などの出土が増加するが、青銅工具の利用も継続する。烏孫文化の中・後期になると、基本的に利器類は鉄器化し、鉄鏃も出現する。

イリ河流域では、中期に鉄製刀子、鉄製短剣、鉄環、鉄簪などが出土している。同時に青銅鏃、青銅刀子や青銅錐、青銅針など青銅利器も並行して出土している。後期になると若干の青銅刀子の利用もあるが、基本的に鉄製刀子が出土し鉄製長剣も見られる。青銅器の主体は、簪、鏡、環など装飾品が中心となっていく。

セミレチエとイリ河流域では、鉄器の利用はほぼ同じ時期に始まるといえる。初期は鉄製の装身具が認められるが、徐々に鉄製刀子、鉄製短剣など武器・工具類を中心に出土量が増加する。その一方で青銅刀子の利用も継続するが、青銅製品は鏡や装飾品が主体となっていく。武器・工具類にみる青銅器から鉄器への移行は、セミレチエもイリ河流域もほぼ同じ進捗で進んでいるといえる。

後期サカ文化の後半において、セミレチエでは一括埋納という形で、鑄鉄製容器が出土している。鉄鍔、鉄製奉献台、鉄製灯明台といずれも大型の製品である。出土状況から祭祀的な用途が想定され、非日用品である。この鑄造鉄器は新疆ではみられない。器形や装飾から見て、セミレチエの金属器文化の製品であり、搬入品ではなく在地の遺物であるといえる。紀元前3世紀、すなわち中国の戦国時代後期―前漢初期の併行期に大型の鑄鉄製品が中央アジアに存在することというのは、生産地や技術の伝播を含め、非常に興味深い問題を内包するといえる。

6. 結び

以上、各要素のセミレチエとイリ河流域の要素を比較してきた。ここで、両者の交流という視点で全体をまとめる。

隣接するセミレチエとイリ河流域文化は、紀元前1千年紀前半、古墳を築き、頭位方向

は西を中心に、石槨墓に埋葬するなど、一部共通性のある墓制を持っていた。セミレチエでは、青銅武器や青銅工具、青銅馬具を副葬する。紀元前1千年紀中葉になるとセミレチエでは数千点の黄金製品を持つ、いわゆる「王墓」が出現する。一方で、イリ河流域では、西頭位の単人、仰臥伸展葬に、土器もしくは木製容器、金属製刀子、羊の骨というセット関係の墓が出現し、分布が拡大する。同時にセミレチエへも広がっていく。このタイプの墓はイリ河流域を中心に西方へ向かって拡大し、前期烏孫文化期にはセミレチエでも定着していく様相を見ることができる。

一方でセミレチエを中心に、青銅鍔を含む大型容器類の一括埋納が現れる。新疆でもこれまでに青銅鍔は単独で出土していたが、特に特徴的な三脚鍔と大型容器の一括埋納は、紀元前4-前3世紀、セミレチエを中心に西から東へ向かって新疆イリ河流域地域まで拡大したといえる。

青銅器は、草原地帯一般に広がる直線状の青銅刀子や、短剣が見られるほか、三脚鍔が前4-前3世紀に、両方の地域に広がる。鉄器はほぼ同じタイミングで鉄製刀子や鉄製簪の出土が見られるが、鑄造鉄器など複雑な形態の鉄製品はセミレチエに限られる。

全体で見ると墓制の東から西への流れと、一括埋納の西から東への流れがあるといえる。青銅器や鉄器で見ると、イリ河流域で出現する器種や加工方法はセミレチエでもみられる。一方でセミレチエでは出土するものの、同時期にイリ河流域には存在しない鑄鉄容器などもある。一括埋納はセミレチエに中心があり、東へと拡大していくなかで、新疆の七一団一連魚塘などが出現するようになったといえる。

紀元前1千年紀の初期遊牧民文化において、双方向の交流の様子をうかがうことができた。こうした交流の背景となる社会の変容や集団の移動について、今後より詳細に検討していきたい。

(註)

1 鉄製鍔や鉄製灯明台については、分析は行われていないが、その形態から鑄造製品であると判断した。

引用文献

田中裕子 2010 「新疆ウイグル自治区における鉄器の受容と展開」『中国考古学』10、pp. 187-218

柳生俊樹 2011 「天山北方地域における前1千年紀の鍔」草原考古研究会編『鍔の研究』雄山閣、pp. 191-253

安志敏 1996 「塔里木盆地及其周围的青銅文化遺存」『考古』1996-12、pp. 70-77

王博 1987 「新疆近十年發現的一些銅器」『新疆文物』1987-1、pp. 45-51

王炳華 1993 「古代新疆塞人歴史鈎元」『絲綢之道考古研究』新疆人民出版社 pp. 210-230

韓建業 2007 『新疆的青銅時代和早期鉄器時代文化』文物出版社

邵会秋 2008 「新疆發現的早期銅盤研究」『新疆文物』2008-3・4、pp. 58-63

新疆文物考古研究所 2002 「尼勒克県窮科克1号墓地考古發掘報告」『新疆文物』2002-3・4、pp. 13-53

- 新疆文物考古研究所 2006 「2005 年度伊犁州鞏留渠山口水庫墓地考古發掘報告」『新疆文物』
2006-1、pp. 1-40
- 水涛 1993 「新疆青銅器時代諸文化的比較研究」『国学研究』1、pp. 447-490
- 張玉忠・趙德榮 1991 「伊犁河谷發現的大型銅器及有關問題」『新疆文物』1991 - 2、pp. 42-48
- 陳戈 2002 「新疆伊犁河流域文化初論」『歐亞學刊』2002、pp. 1-35
- Akishev Акишев К. А., Кушаев Г. А. 1963 Древняя Культура Саков и Усуней Долины Реки Или,
Издательство Академии наук Казахской ССР, Алма-Ата
- Акишев К. А. 1978 Курган Иссык, Искусствфыво, Москва
- Итина Итина, М.А., Яблонский, Л.Т.1997 Саки Нижней Сырдарьи, Росспэн, Москва
- Moshkova Мошкова М.Г. 1992 Степная полоса Азиатской части СССР в Скифо-Сарматское
Время, Наука, Москва
- Mei, Jianjun 2000 *Copper and Bronze Metallurgy in Late Prehistoric Xinjiang*, BAR International
Series 865

図版出典

- 図 26 筆者作成 (Google マップ -©2012 Google 地図データ @ 2012 SK M&C, ZENRIN- に加筆)
- 図 27 - 1 Moshkova 1992 p. 376 fig. 26-2, 3
- 2 Moshkova 1992 p. 376 fig. 26-35
- 図 28 - 1 Moshkova 1992 p. 376 fig. 26-18, 19, 20, 21, 22
- 2 Akishev 1976 p.14 fig.5, p.105 fig.24, p.113 fig.33
- 3 Moshkova 1992 p. 376 fig. 26-26, 27, 28, 29, 33
- 4 Moshkova 1992 p. 376 fig. 26-36
- 5 Akishev 1976 fig. 85
- 6 柳生 2011 p. 216 図 7 D3003, D3004, p. 225 図 10-2, p. 227 図 14
- 図 29 - 1 Moshkova 1992 p. 378 fig. 28-2, p. 380 fig. 30-3
- 2 Moshkova 1992 p. 378 fig. 28-4
- 3 Moshkova 1992 p. 378 fig. 28-17
- 4 Moshkova 1992 p. 378 fig. 28-15, 16, 19, 22, 25, 28, 30, 32
- 5 Moshkova 1992 p. 381 fig. 31-1, 9, 10, 20, 26, 32, 33, 38, 41

第5章 新疆ウイグル自治区における初期鉄器時代研究の 枠組みと出土鉄器の集成

1. はじめに

第5章以降では、新疆ウイグル自治区（以下、新疆）に主眼をおいた研究を行った。

本章では、新疆における青銅器時代から初期鉄器時代の出土金属をめぐる研究史上の問題を整理し、本論文の対象とする漢代併行期以前の鉄器について集成を行った。特に、新疆の紀元前1千年紀は、時期区分について問題を抱えている。新疆の遺跡は、墓地を主体として発掘調査が進められているが、墓同士の切り合い関係がほとんどみられず、遺物の順序を層位的に把握するのが難しい現状にある。現在、遺跡や遺構、遺物の年代は放射性炭素年代の値により決定されるが、遺物の編年による検証を経ず、放射性炭素年代の結果のみが独り歩きしている傾向がある。まず、この年代問題について研究史を整理する。その次に、現在の新疆における周辺地域との関係について言及し、最後に以下の章で問題となる出土鉄器の集成を行った。

なお最初に、新疆の地名表記に関して注意しておきたい。現在中国の行政上、新疆の都市名や地域名称は、現地のウイグル語やモンゴル語、カザフ語などの地名に、現代中国語の漢字を当てている。新疆の遺跡等の発掘調査報告書は、『新疆文物』や『西域研究』、『吐魯番学研究』といった漢語表記の出版物で報告される。そのため、遺跡等の名称も、現地の音を漢語表期した名称となる。

本論文では、遺跡の名称は可能な限り現地読みを採用する。よって、現地のウイグル語やカザフ語に近い音のカタカナ語表記を用いる。各章や節での初出の場合は、漢語表記と併用している。例えば、チャウフ（察吾呼）墓地とする。ただし、中国語名称の場合は、そのまま漢語表記とした。例えば、石河子などである。なお、ウイグル語の音については、「ウイグル地域における場所、人、遺跡名称 (Mair1998, pp. 857-864)」を参考にするとともに、トルファン学研究院のエクベル・ニヤズ氏にアドバイスを受けた。

2. 新疆の地域区分、時代区分に関する研究

新疆における青銅器時代から初期鉄器時代の枠組みについての研究史をまとめる。まず、簡単に研究の状況を説明した後、具体的な地域区分と時期区分を紹介する。その上で、

今後の研究に取り組むべき課題を述べる。

新疆は天山山脈を含む北部草原地帯の北疆と、タリム（塔里木）盆地を中心にタクラマカン砂漠を包括する南疆に大きく分けることができる。両者は草原と砂漠という環境の違いがある。現在、青銅器時代から初期鉄器時代にかけての調査は墓地が主体で、住居址や銅鋳遺址の報告数は非常に少ない。調査は天山山脈の南麓から北疆に集中している。また、発掘調査のほか、採集による遺物も多数見つかっている。こうした遺跡や遺物の報告の蓄積に伴い、地域差や時期差がしだいに明らかになってきている。

青銅器時代から初期鉄器時代における地域と時期の枠組み設定は、近年、いくつかの論考がある（王 1985、陳 1995、水 1993、安 1996、龔 1997、叢 2001、韓 2005・2007 ほか）。地域区分は、現在の省境界を境に、新疆内を7から10地域に分ける。研究者間で依拠するものが異なるため、区分には若干の差がある。しかし、基本的な認識として大きな違いはない。各遺跡の時期は放射性炭素年代を根拠としており、遺跡の所属時代は共通した見解の下にある。しかし、約2000年におよぶ青銅器時代から初期鉄器時代をどのように位置付けるかは意見が別れている。

まず地域を設定し、その後時期にふれる方法として水涛（水 1993）や安志敏（安 1996）、叢徳新（叢 2001）の研究がある。ここでは、詳細に地域区分がなされた安の例をあげる（図30、表11）。

安や水、叢の区分は、新疆内の各地域において考古学文化を設定し、相互の関係を検討する目的がある。よって、分類している項目は個々の遺跡が中心となる。安の10地域区分に対し、水はタリム盆地の東縁とコンロン（崑崙）山南麓を取り扱っておらず8地域に区分する。一方叢は、バリコン（巴里坤）とハミおよび、トルファン（吐魯番）と天山中部山谷区を同一地区とし、アルタイ（阿勒泰）地区はとりあげていない。また、安がコンロン南麓とした地域をタリム盆地南縁としジャンプラー（山普拉）より古い時期のザホンルク（托洪魯克）を例示しているなど、細かな点で相違がある。しかし、基本的な構成は両者とも安と同様である。

安や水、叢による文化区分では、地域枠がまず重視される。そのため、時期別で見ると、遺跡の存在しない地域がでてくる。例えば紀元前2000年ごろ、安の前期とした時代において、遺跡があるのはタリム盆地東縁のみである。この区分からは、時期差による遺跡の多寡や変遷といったものが見えてこない。また、地域内での時間軸上の動きも提示されていない。新疆の青銅器時代から初期鉄器時代を全体的に把握するならば、10地域区分は有効である。しかし、より具体的に地域間の相互関係などを考えていくためにも、時期を同時に考慮した枠組みが必要であろう。

ここで梅建軍（Mei2000、p.5）の区分にふれる（表12）。梅は、新疆の青銅冶金技術に関する論考の枠組みとして、青銅器時代から初期鉄器時代の遺跡を区分している。各地域の遺跡を、遺構や出土遺物の特徴から青銅器時代に8地域、鉄器時代に8地域を設定する。両時代に重複する地域があるので計10地域になる。梅の設定する10地域も、地域名称は

表 11 安志敏（安 1996）の地域・時期区分

地域	遺跡
1. 塔里木盆地東縁	孔雀河古墓溝、鉄板河墓地
2. 哈密盆地	焉不拉克、五堡水庫（焉不拉克文化）
3. 吐魯番盆地	艾丁湖、蘇貝希、洋海、喀格恰克
4. 焉耆盆地	察吾呼、群巴克、包孜墩（察吾呼文化）
5. 天山中部山谷	阿拉溝、魚兒溝
6. 巴里坤草原	四道溝、半截溝、南湾
7. 阿勒泰草原	克爾木齊（塔城地区、巴里坤草原と類似）
8. 伊犁河谷	夏台、索墩不拉克、哈拉図拜、鉄木里克
9. 帕米爾高原	香宝宝、阿克塔拉
10. 崑崙山南麓	山甫拉

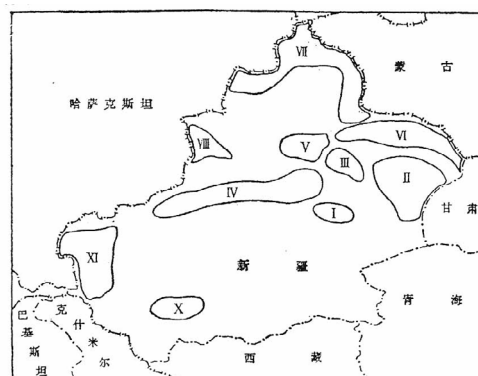


図 30 新疆の地域区分

前期	前 2000- 前 1500 年	孔雀河古墓溝
中期	前 1500- 前 1000 年	焉不拉克、五堡水庫
後期	前 1000- 前 300 年	察吾呼、群巴克

表 12 梅建軍（梅 2000）の地域・時期区分

	地域	文化圏と主な遺跡	
		青銅器時代	鉄器時代
1	東パミール	蘇勒塘巴俄、阿克塔拉：哈拉玉爾袞	香宝宝
2	タリム盆地東縁	古墓溝	
3	タリム盆地南縁		扎滾魯克
4	天山南麓	新塔拉：曲惠、哈拉墩	察吾呼溝、群巴克、豹子溝
5	トルファン盆地	カラホージャ	艾丁湖：蘇貝希、洋海、喀格恰克
6	ハミ盆地	天山北路、五堡、焉不拉克：拉甫喬克	寒氣溝、廟爾溝
7	天山北麓	南湾：蘭州湾子、石人子、卡爾溝 水道溝：半截溝 水泥廠	大龍口：大草灘
8	天山西北 塔城・イリ河流域	阿ガ爾生 薩孜：衛生学校	鉄木里克：索墩布拉克、種羊場、奴拉賽 夏台
9	アルタイ山	克爾木齊	
10	天山中央溪谷		阿拉溝 I：東風廠 阿拉溝 II 烏拉泊

若干異なるが安と同様である。両時期は、紀元前 1000 年を境界に、紀元前 2000—前 1000 年を青銅器時代、紀元前 1000 年以降を鉄器時代として分けている。ヤンプラク墓地やクルムチ（克爾木齊）墓地など一部両時期にまたがるものもあるが、地域ごとの様子がさらに整理されたといえる。青銅器時代と鉄器時代に境界を設ける方法は、陳光祖（陳 1995）などにも見られる。

青銅器時代から初期鉄器時代というのは、孔雀河古墓溝墓地のような青銅器が若干出土

表 13 鞏国強（鞏 1997）の地域・時期区分

	第 1 期（紀元前 3000- 前 2000）	第 2 期（紀元前 2000- 前 1000 年）	第 3 期（紀元前 1000- 前 500）	第 4 期（紀元前 500- 紀元 1 年）
哈密盆地		焉不拉克一期、拉甫喬克 M1、五堡	焉不拉克 2, 3 期、五堡、沁城白山、寒氣溝	
天山北麓東段		巴里坤南湾、石人子、木壘四道溝下層、南郊	巴里坤奎蘇、蘭州湾子	巴里坤南湾、木壘郊東城四小隊、四道溝上層、吉木薩爾大龍口、米泉大草灘、阜康北農場
天山中部山谷				烏拉泊、板房溝、阿拉溝、南山
天山南麓中西段			察吾呼、群巴克、拜城克孜爾水庫	
焉耆盆地		新塔拉下層、曲惠		
吐魯番盆地		哈拉和卓	鄯善蘇貝希	艾丁湖、洋海、蘇貝希
准噶爾盆地北縁		阿勒泰克爾木齊		阿勒泰地区
伊犁河谷地		鞏留阿格爾森		鉄木里克、黒山頭、鞏乃斯河南岸、71 团 1 連、種羊場、山口、天山牧場、索墩布拉克
塔城盆地				托里県採集
羅布泊地区		孔雀河		
タクラマカン西北縁	疏附県烏帕勒塘巴俄	阿克蘇哈拉玉爾滾		庫蘭薩日克、包孜東、香宝宝
タクラマカン南縁				洛浦県山浦拉、加瓦艾日克

する段階からその後一般化する段階、あるいはヤンプラク墓地などの鉄器の初源段階から一般化段階など、変化に富む。梅や陳の研究で、鉄器の出現を一つの画期としている。

一方、初期の青銅器に注目する鞏国強（鞏 1997）の区分は、上記とは相違する点がある。青銅器の発展段階を研究するため、墓地等の遺跡のみならず採集された遺物も対象としている。そのため 4 時期に区分し、各時期内での遺跡と出土青銅器およびその材質の変化を検討している（表 13）。最終的に設定された地域区分を通観すると、安や梅らとほぼ一致する。

ここで鞏の示す枠組みは、青銅器の発展と変遷を示すものであり、地域文化を規定するためのものではない。しかし、新疆地区内の各地域と時期間での遺跡群と呼べる枠組みの変遷を提示している。第 1 期は採集品からの年代である。青銅器の初現の可能性があるが、青銅製品の数は少ない。遺跡から地域区分を求める他の研究者はこの鞏の第 1 期を扱ってはいない。第 2 期は梅のいう鉄器時代であり、他の研究者と共通する。第 3 期と第 4 期はいわゆる青銅器時代になるが、2 時期に区分しているのは鞏独自の分類である。この差を発展期と盛行期とするが、その画期をどこで設けているのかは示されていない。前 500 年を境とし区分するには、根拠が不明瞭である。

鞏の区分は、金属器の発展段階という明確な基準のもと、時期と地域の両側面を検討していることが評価できる。各地域の設定理由が明記されず、自明のこととして墓地と出土遺物のみが述べられているところなど、説明を欠く部分もある。しかし、時期の変遷から地域を整理することは、青銅器時代から初期鉄器時代の新疆の枠組みを検討する上で必要

表 14 韓建業（韓 2007）の地域・時期区分

		青銅器時代	初期鉄器時代			
		紀元前 1900-前 1300 年	紀元前 1300-前 1100	紀元前 1100- 前 800 年	紀元前 800- 前 500 年	紀元前 500- 前 100 年
		第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期
1	タリム盆地	新塔拉（早期）、曲惠、哈拉墩、喀拉玉爾袞	新塔拉（晚期）、察吾呼五号、一号（M236）、四号（M221）、哈布其罕一号（M38）、二号（M5）	察吾呼一号（M237）、四号（M20）・二号（M4）、拜勒其爾（M 206）、哈布其罕一号（M5）、二号（M4）、群巴克一号（M3）、二号（M7）、克孜爾吐爾（M27）、喀日バ依（M15）、麻札甫塘、哈拉墩、阿克熱克城堡	察吾呼二号（M223）、上戸郷（M3）、群巴克一号（M18）、二号（M4）、哈布其罕二号（M3）	包孜東（M41）、庫蘭薩日克（M2）
2	トルファン盆地-中部天山北麓	坎兒子	半截溝	四道溝早期、洋海一号（M1002）、英垂依拉克、南郊、哈拉和卓	四道溝晚期、洋海二号（M239）、蘇貝希一号（M8）・3号（M15）、茈丁湖（M20）、三個橋（M18）、喀格恰克（M13）、大龍口（M5）、柴窩堡一号（I M1）、二号（II M3）、3号（III M1）、阜北農場基建場、阿斯塔那、烏拉泊	洋海三号（M372）、交河故城溝北（M05）、溝西（M7）、蘇貝希一号（M3）、阿拉溝（M30）、博斯坦、南泉、三工郷
3	ハミ盆地-バリコン草原	天山北路、蘭州湾子、南湾、石人子、卡爾桑、五堡	拉甫喬克（M1）	焉不拉克早期（M75）、中期、艾斯克霞爾（M1）、五堡（M151）	焉不拉克晚期（M2）	寒氣溝（M2）、廟爾溝一号（M8）、新森林場臨時營地、黑溝梁
4	イリ河流域	窮科克早期、薩爾不拉克、阿克不早溝、大西溝		窮科克一号（M9）	索墩布拉克（M32）、奇仁托海（M7）、黑山頭	哈拉凶拜（M2）、種羊場（M1）、鉄木里克（M2）、薩爾霍布、種馬廠、特克斯、波馬、夏台、喀拉蘇、71 団一連漁場
5	タリム盆地南縁	尼雅以北			扎滾魯克 1 期（M61）	扎滾魯克一号（M4）・二号（M2）、加瓦芟日克、山普拉二号（M6）、円沙古城
6	石河子-烏蘇	水泥廠（M01）、総廠良種場一連墓地（M01）、西洪溝			南山（M2）、安集海村（M1）、水泥廠（M03）	安集海村（M2）
7	パミール	下坂地二号（M062）		香宝宝（M10）、下坂地二号（M018）、阿克塔拉、温古洛克、庫魯克塔拉、德沃勒克	下坂地一号（M10）、香宝宝（M21）	
8	アルタイ					
9	ロブノー					
10	塔城					

な作業といえる。

他、呂恩国・常喜恩・王炳華は北疆のみを対象とし（呂他 2001）、中部天山地区・東部天山東段南北・タリム盆地北縁・ジュンガル盆地周縁の4地域に区分する。その上で、地域内での遺跡の時期変遷を詳しく述べている。チャウフ墓地や、天山北路墓地などは4時期に区分し、墓や遺物の墓地内における時間ごとの特徴も述べている。地域と時期、両方からみた特徴を詳細に区分し、まとめてあるといえる。

この論考では、各地域内における規模の大きな遺跡の時期を区分していることが評価できる。しかし、全体として見ると、「青銅文化」としてまとめられており、個別検討の段階に留まる。個々の地域という視点に留まり、新疆北部という広い視点でまとめることが欠けている。そのため、各地域、各段階がどのように他の地区と結びつくか等に触れられないこともない。

こうした論考を踏まえ、特に土器に着目し、地域と時期区分を設定したのが、韓建業（韓 2005・2007）による枠組みである。韓は新疆出土の土器をもとに、地域別に時期区分を行った。青銅器時代から初期鉄器時代までを3段階5期に区分し、それぞれの期間内における文化の相互影響をまとめる。1. 青銅器時代、2. 初期鉄器時代前半、3. 初期鉄器時代後半とし、各時期の経済的な特徴と影響のある地域について述べている（表 14）。これまでの研究を踏まえた形で、新疆全域の遺跡を整理した時期区分であるといえる。

以上、具体的に研究例をあげた。地域の枠組みは、細分するか否かの問題はあるが、各研究者間で基本的に一致する方向にある。問題となるのは時期である。新疆内での文化圏の特徴を具体的に見るためには、時期の細分が求められる。資料の豊富なチャウフ墓地などで実施されているように、個々の遺跡での時期区分をそれぞれ行い、その結果を地域文化圏内でまず比較する必要がある。

現時点で最も全体を整理した研究は、韓建業の土器に基づく時期区分である。各地域に共通する青銅器の器種や土器などを比較検討し、各地域間の時間的な対応関係を検討している。鉄器の発展段階を考える上では、紀元前5世紀以降が、第5期として細分されていない点に問題はあるが、新疆の全体的な地域区分と時期区分を把握する上では、参考にするべき枠組みである。

3. 周辺地域との関係

新疆より出土する遺物が周辺地域とどういう関係にあるのか。遺物に限らず、人骨であるとか、墓の形態であるとか、その関係を考察する論文は非常に多い。金属に関する研究も、時代や地域が多岐にわたる。現在の研究動向として、その中で特に金属に関する論考を取り上げて紹介する。

まず、その前に周辺という言葉の問題にふれておきたい。ここでいう周辺地域とは、現

在の新疆からみた周囲の地域をさす。つまり中国内では甘肅省や青海省、中国外では、モンゴルやロシア、カザフスタンやキルギス、タジキスタン、ウズベキスタンなどの諸国、南シベリア、西シベリア、セミレチエ、アルタイ、トゥバといった地域を挙げることができる。しかし、これは現在の行政上の境界による。新疆の中央をはしる天山山脈はキルギス、カザフスタンへとつづき、イリ河やイルティシュ河はカザフ高原のバルハシ湖、ザイサン湖へと流れていく。環境、立地的条件としては新疆と連続しており、周辺とすること自体に違和感があるのだが、ここでは新疆に対して、その他の地域として一括して周辺と呼ぶ。

では、具体的な研究事例、特に青銅器時代から初期鉄器時代の金属について紹介する。

青銅器

墓より出土する副葬品として土器について多いのが青銅器である。また、採集品や一括埋納として収集された遺物も相当数ある。青銅容器が主体となる中原地区に対し、新疆は小型の武器、工具、装飾品が主である。銅鍍など、若干容器も存在するが、全体にみる割合は少ない。

1). 鏡

新疆の墓からは、鏡がしばしば出土する。裏面に紐のつく小型の鏡は、南シベリアのカラスク文化に見られる特色である。また、チャウフ4号墓地で出土する、体を丸めた獣を表現した鏡はアルタイのマイエミール文化でも出土がある。これらは草原・乾燥地帯の初期遊牧民文化に特徴的な遺物として、考えられている（藤川他 1999、p. 144）。

特に新疆出土の鏡に関しては、劉学堂の研究がある（劉 1993）。円形鏡、柄付鏡などいくつもの種類の鏡が出土しているが、出土遺跡を6地域に区分し集成している。劉は、ミスシンスク盆地の影響を受けて成立した鏡が、新疆から中原へと伝わったという仮説を唱えている。中国国内の研究者からの批判もあるが、新疆の立地を考えると、妥当ではないかといえる。

鏡は、中国や北方草原地帯各地でその後も出土する。草原の鏡の他、漢式鏡も出土しており、漢の辺境支配のための道具として解釈される場合や、草原のシャーマンの装具と推定されるなど、様々な意味合いを含む。中央ユーラシアという視点の新疆における鏡のあり方も検討課題の一つである。

2). 馬具

新疆地区からは、青銅製、鉄製の銜や鑣が出土している。この銜は両端が鐙型と呼ばれる草原地帯に一般的なものの他、羊頭型の骨角製鑣などは、中央アジアの初期サカ文化との関連も指摘されている（藤川編 1999、p. 144）。

また、スバシ（蘇貝希）一号墓地からは、銜や鑣のほか鞍を含む馬具一式が出土してい

る。鞍は、アルタイのパジリク古墳と構造が同様の軟式鞍である。

馬具には、銜や鑣、節約といった金属の部品以外に、騎馬利用、牧畜の発展にも問題は拡大していく。相互の習慣や文化の伝播を研究するためには重要な要素といえるが、新疆の馬具、銜や鑣に関する単独研究はとぼしい。草原地域との関係、農耕地帯である中原地域とのあり方の違いなど、今後検討すべき要素は多い。

3). 銅鍍

銅鍍は、中央ユーラシアの草原地帯より広範囲に出土する青銅製の釜であり、新疆でも30点近くが出土、採集されている。いわゆる北疆地域から主に出土し、圈足のもとと3本足のものが出土している。梅建軍 (Mei 2002) は、これらを4型式に分類し、成分を分析した上で南シベリアとの合金成分の類似を指摘する。

ジュンガル盆地西部のイリ地区で青銅製の武士像等とともに一括出土した銅鍍や銅盤は南シベリア早期の青銅器文化であるサカ文化との関連も指摘されている (第4章)。

4). 鍬

新疆からは三翼鍬、両翼鍬が副葬品としてしばしば出土する。チャウフ墓地やヤンブラク墓地、チェンバク (群巴克) 墓地など大型の墓地からは一定の量が出土する。ソケットのある有釜式や有茎式、茎部にかえりのついたものなど、さまざまである。出土する青銅製の鍬について、黒海沿岸の編年に照らし合わせると先スキタイ時代に相当する古式の鍬があるとの指摘もある (藤川編 1999, p. 144)。また、隣接するカザフスタンなどでは、出土鍬による編年もある (Itina 1997, pp. 166-167)。比較研究を行う上での材料として適している。第6章では、鍬を集中的に取り上げ、その型式分類と編年を行った (第6章)。

5). その他

イリのアガルション (阿尕爾生) 遺跡から出土する鎌や斧、シンタラ (新塔拉) 墓地から出土する斧がアンドロノヴォ文化の影響をうけていることは、頻繁に指摘されている (Mei et al. 1999)。また、動物文様の装飾は、スキタイ文化として語られることが多く、アルタイ地区のクルムチ墓地はミヌシンスク盆地のカラスク文化と関わりとする (穆他 1985)。また、東部ではチャウフ墓地の双頭鳥文青銅飾板と類似するものが甘粛省の沙井文化で発見された。ヤンブラク墓地から出土する銅泡が青海省の卡約文化の墓からも出土する (陳 1995, p. 93)。このように、周辺地区の文化と関連する遺物は非常に多い。

また、歴史上にみる青銅器の初現は、西アジアと考えるのが一般的である。しかし、中国の冶金技術は、中国独自に発展したという説もある (李 1998)。新疆の青銅器の来源についても、北方ユーラシアからの影響と中原や甘粛、青海からの影響とを考える説とがある (陳 1988)。新疆の青銅器文化の源を考察するに当たっては、今後、遺物の型式の関係

のみならず、技術や材料といった多角的な視点からの検討も必要であろう。

鉄器

第1章で言及した通り、中国の人工鉄製品¹の初現は、紀元前8世紀の西周期である²。しかしその後もあまり一般化せず、戦国時代以前の資料は非常に限られている（韓1998、pp. 89-90）。一方、新疆での鉄器は、紀元前1000年頃のヤンブラク墓地から出土しており、中原地区よりもその初出時期は早い。鉄剣や鉄の指輪などが出土している。

鉄の製錬、加工、利用は西アジアが早く、中国はやや遅い。西アジアから東に進み、中原へ達する手前には、新疆がある。中国内地でも西部、甘粛省などがやはり鉄器の出現は早い。技術の交流という点でも、鉄は非常に多くの問題をふくんでおり、今後、さらに西側の資料も集成しつつ研究を深めるべき課題である。

金製品

金製品は、副葬品としてしばしば出土している。新疆において初期に出土するのは指輪や耳飾りなど、小型品である。これは、紀元前1300年頃、青銅器時代から現われはじめる。その後、アラコウ（アラ溝）墓地やクランサリク（庫蘭薩日克）墓地などに代表されるアニマル・スタイルの飾板や花卉型の飾板、鎖などの細工品が広く出土するようになる。

こうした金製品は、初期の耳飾りからその後の飾板まで、類似品の検討によりロシアのアルタイやトゥバ、カザフスタンといった草原地帯との関係が指摘されている（高浜2002）。初期の耳飾りなどは、中国国内でも甘粛省や内蒙古、河北省でも出土がある。また、スキタイの装飾の特徴である捻体表現やグリフィン、西方のロゼッタ文様が原型と考えられる花卉型飾板など、東西交渉の象徴といえる出土遺物である。

以上、現在の金属器研究のいくつかを述べた。現在、新疆の金属器について、周辺地区との関連が頻繁に指摘されている。しかし、こうした研究を見ていくと、イリ地区の出土遺物をサカ（塞）人と結びつけて解釈する論考（王1985、中国社会科学院考古研究所新疆工作队他1991）が多い。類似する遺物同士の関係から文化伝播の経路、変革といったものを取り上げた論考もあるが（水1993、陳1995）、研究例は少ない。

これは、地域と時期区分の章でも触れたが、新疆内での時間軸がまだ定まっておらず、新疆内での時期的な相互関係が十分に検討されていないことが原因であろう。時間軸の変遷を検討するには、土器を用いる他、鏃や青銅刀といった広範囲に出土し、ある程度数量のある遺物からの検討を加えることも必要であろう。

具体的なアンドロノヴォ文化や沙井文化といったものとの対比が成立しているので、今後は、それがどういった流れで新疆まで達したのか。到達した後、さらに周辺にいかなる影響をあたえたのか。文化伝播の経路を考察するべきであろう。それらが、鉄器やその制作技術の伝播、青銅器の起源の問題といったものを解釈するアプローチへとつながる。そ

こからさらに、中央ユーラシアという視点から見た新疆の存在意義を掘り下げる研究に繋がると考える。

4. 新疆出土の初期の鉄器をめぐる研究

上記で見てきたように鉄器は新疆と周辺地域との交流を考える上で重要な材料の一つである。それでは、以降の章で分析の対象となる新疆出土の初期の鉄器について、資料の集成を行い、器種ごとにその特徴を整理する。

鉄は非常にさび易い。遺跡より出土する鉄器は、明確にその器種を判断するのが難しい場合が多い。報告書中でも、鉄製品の存在は確認できるのだが、器種の特定が可能なほど残存していない場合、残鉄塊と記される。この残鉄塊も含めると、新疆の青銅器時代から初期鉄器時代の遺跡で、収集できた鉄器は全部で、46 遺跡 334 点にのぼる。

これらの出土した初期の鉄器について、用途と形態の上で分類をおこなった。紀元前の遺構から出土する鉄器は、1. 工具、2. 武器、3. 馬具、4. 装飾品に分けることができる。それぞれの特徴をのべていく。

工具

新疆の初期鉄器で最も多く出土する器種である。具体的に、刀子、錐、鎌、針、釘などがある。

・刀子 (図 31)

刃が片方につき、長さが 10cm - 20cm ほどである。初期の青銅製刀子では、柄まで一鑄の場合が多いが、鉄製だと刃部のみ出土もある。

初期鉄器の中で最も多く出土し、形の確認できるもので総数 61 点を数える。初期の鉄器の約 30% を占める。最初期のものは、ハミ (哈密のイエンブラク 〈焉不拉克墓地〉 75 号墓東南隅遺構より出土する (図 31-1)。形態は直線形で柄まで作られるものにチュンバク 〈群巴克〉 墓地 (図 31-2) や、スバシ (蘇貝希) 墓地 (図 31-3)、同じく柄まであり直線形で先端に孔のあるものでシャンババイ (香宝宝) 墓地 (図 31-6) やヤンハイ (洋海) 墓地、刃部のみのもとしてスドンブラク (索墩布拉克) 墓地 (図 31-10) などがある。他、形ははっきりしないが、片刃部が確認できるので刀子と分類されるものとしてチャウフ (察吾呼) 墓地や南山墓地 (図 31-12) からの出土品がある。特にまとまった出土はイリ河流域地区で確認できる。チョンクク (窮科克) 1 号墓地では、羊の骨と鉄製刀子、土器または木製容器といったセット関係をなす副葬品の一部として出土する。

鉄製刀子の形態は、直線状を示す。最初期の青銅刀子が柄と刃部に角度を持つのに対し、鉄器はほぼ柄から刃までまっすぐな形状である。青銅器は、商代に併行する刀子にこの柄部と刃部との角度がみられ、その後は直線的な形態をしめすので、鉄器は青銅器が直線的になって以降の出現とする梅建軍の見解もある (Mei 2000)。梅の意見は、鉄器の形態が青

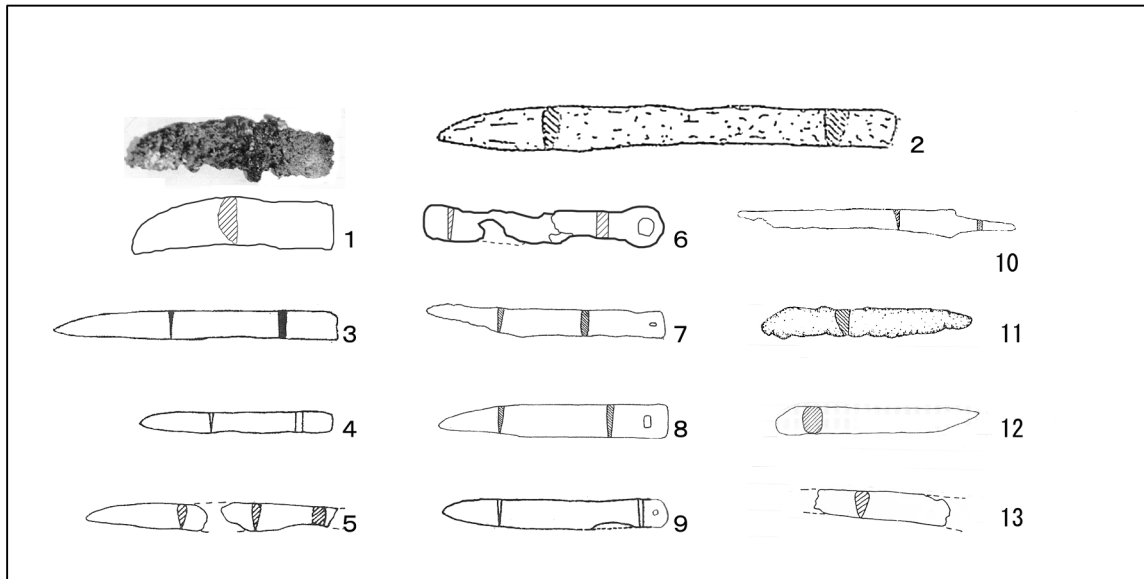


図31 出土鉄器 工具 刀子

1. イエンブラク M75:5(残長 7.7、幅 2)、2. チュンバクⅡ M4D:3(長 23.6、幅 2.2、厚 1.2)、3. スバシⅠ(長 14、幅 1.35、厚 0.5)、4. スバシⅢ M18:3(長 9.2、幅 1)、5. シャンミャオルⅠ M14:61 幅 1.4)、6. シャンババイ M10:11(長 12.2、幅 1.5)、7. ヤンハイⅡ M243:11(長 11.2、幅 1.2、厚 0.4)、8. ヤンハイⅢ M319:9(長 12.2、幅 1.8、厚 0.3)、9. スバシⅢ M27:13(長 11.1、幅 1.5)、10. スオトンブラク M20:2(柄長 3.7、刃長 13.4、幅 1.3、厚 0.3)、11. チャウフⅣ M 98:23(残長 10、幅 1.4)、12. 南山 M3.3(長 10.3、幅 1.4、厚 1.0)、13 シャンミャオルⅠ M14:13(残長 8.1、幅 1.8)、縮尺不同、単位 cm

銅器を模倣してつくられた前提に立つものである。また、鑄造して基本的な形を作る青銅の刀子と、インゴットを鍛造で成形していく鉄器の技法とは、それぞれ異なるものである。両者の時代的な重なりは認められるものの、形態的な関係については検討を要するものだと考える。

また、鉄製刀子の柄部は長ささまざまである。保存状態の問題もあるが、基本的に柄部に厚みがなくほぼ平らであることから考えて、何らかのこしらえを備えていたことが考えられる。初期の青銅刀子は柄部に装飾をつけるなど、柄と刃の一鑄式であるのとは異なる特徴を示す。

・ 錐 (図 32)

錐は、木や布、革などに穴をあけるための道具である。遺跡より出土する遺物に対し、先端が尖っていて厚みのあるものと定義する。

現在、15点ほど出土が確認できる。利器の中では、刀子について出土量が多い。断面が三角を呈するもの(シャンミャオル墓地、図 32-4)、丸くなるもの(チュンバク 2 号墓地、図 32-1)、断面が方形のもの(スバシ 1 号墓地、図 32-2) 木製の柄がつくもの(ヤンハイ 3 号墓地、図 32-3) など多様な形態をとる。大きさも鉄の残存部分が、5cm から 13cm までと違いがある。穿孔する対象が、例えば木材のような大きく厚いものから革などの薄いものまで、さまざまであったと考えられる。

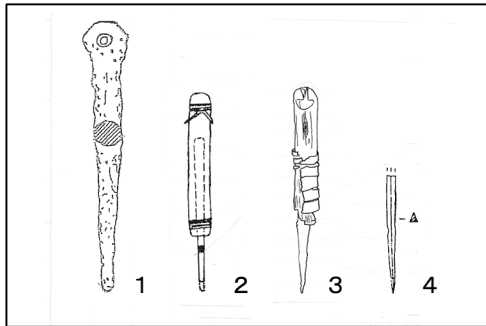


図 32 出土鉄器 工具 錐

1. チュンバクⅡ M12:3(長 13.8、径 0.5-1.5)、
2. スバシⅠ M11(全長 10.2、幅 0.3)、3. ヤン
ハイⅢ M376:8(全長 10.9、刃長 3.7)、4. シヤ
ンミヤオルⅠ M6:2(残長 4.8)、縮尺不同、単
位 cm

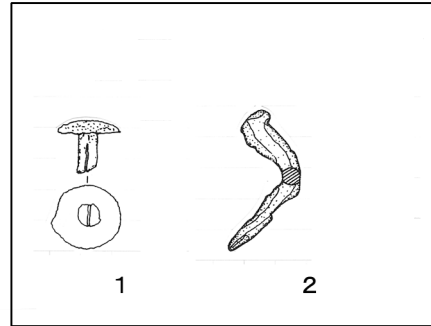


図 33 出土鉄器 工具 釘

1. チャイオブⅡ M1A:8(残長 1.7、釘帽径 2.1、
桿 径 0.6)、2. チャウフⅢ M7:2(全長
7.8)、縮尺不同、単位 cm

青銅製の錐も、断面が円形や三角形、四角形などがあり、形態は多様である。青銅器は 90 点もの出土がある。材質にかかわらず、副葬品としての埋納が盛んであるといえる。

・ 釘 (図 33)

3 点ほど出土している。ウルムチ市のチャイオブ〈柴窩堡〉林場 2 号墓地から出土した釘は、頭部が直径 2.1cm で直径 0.6cm の胴が伸びている (図 33-1)。青銅器の釘は出土総数 4 点ほどであり、出土数は他の器種と比較しても少なめである。

・ 針 (図 34)

3 点のみの出土である。スバシ 3 号墓地の 5 号墓から出土した針は、全長 5.2cm と 2.7cm であり、針目 (穴) も備わっていた。青銅器は 34 本ほど出土する。小さく細いので、錆びやすい鉄では保存も非常に困難であり、出土もごくわずかといえる。

・ 鎌 (図 35)

鉄製の鎌が 2 点ほど出土している。いずれも、ルンタイ市のチュンバク遺跡からで、基本的に曲刃で、内側に刃がある。全長は 20cm から 28cm、刃部の広さは 3 cm 前後で、細身でやや大きい形状を呈する。

青銅製の鎌は、イリ河流域から採集品で報告がある (Ke1998)。アンドロノヴォ文化に属する青銅製の鎌で、刃部の幅が広く、直線状の形態である。チュンバク墓地より出土した鎌とは、形態的にまったく異なるものであり、別系統の道具であるといえる。

青銅器ではあるが、鉄器では未確認のものとして斧、

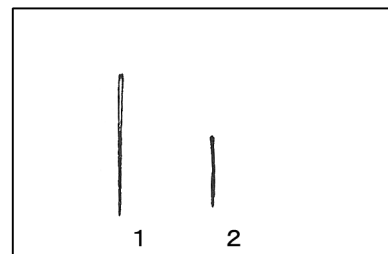


図 34 出土鉄器 工具 針

1, 2. スバシⅢ M5:1.2(1:長 5.2cm、
2:長 2.7cm)、縮尺不同、単位 cm

鑿、彫刻刀などがある。斧や鑿など初期の青銅器は、軸との連結にソケットがつく鑄造式が主体であり、鍛造鉄器の製品は、この青銅器時代から初期鉄器時代にかけては未確認である。彫刻刀などの小型品は、錆びやすい鉄では、明確に識別されなかった可能性もある。

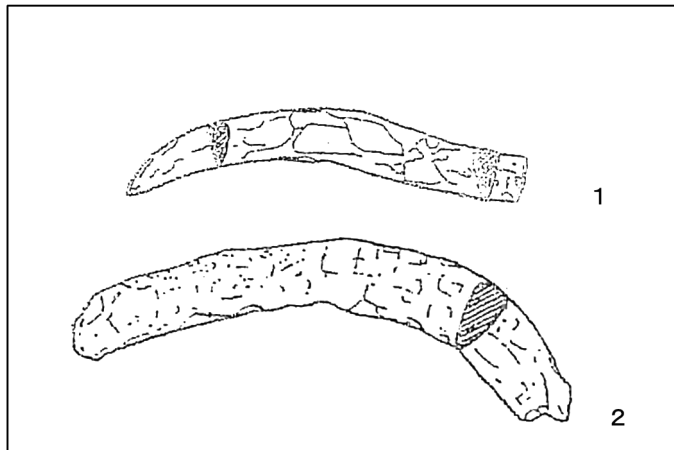


図 35 出土鉄器 工具 鎌

1. チュンバク I M27A:8(長 21、幅 2.5-2.7、厚 1.1)、
 2. チュンバク II M10:25(残長 27.8、幅 2.6-3.6、厚 1.4)、
- 縮尺不同、単位 cm

武器

青銅器時代から初期鉄器時代に出土する武器は、短剣、鏃、矛など、個人が身につける小型のものである。

・ 短剣 (図 36)

両刃で、全体が 30cm 程度までのものをさす。青銅器では、柄と刃が一体となって鑄造されるものが多い。鉄器の場合は、①刃部のみのもの、②柄と刃は鉄であるが鏃など一部が青銅器のもの、③全て鉄製のものがある。初期の鉄器では、9 点の出土がある。

①刃部のみの出土は、保存状態が悪く、先端しか残っていない場合と柄が木や骨などの他の物質で作られ、刃部のみが鉄の場合と、二つの状況がある。

刃の先端しか残っていなかったものとしては、イエンブラク墓地 75 号墓の出土例 (図 36-1) があり、残長 6.7cm である。一方、刃部のみが鉄製であったと判断できるものとして、チャウフ 3 号墓地 10 号墓より出土した短剣 (図 36-4) がある。刃部は幅が 3.0cm で長さが 15.4cm、それに対して柄部が長さ 3.4cm で幅が刃の 3 分の 1 ほどとなっている。

②柄と刃は鉄であるが鏃など一部が青銅器の短剣は、ルンタイ市のチュンバク 1 号墓地より出土している (図 36-2)。柄の先端とハート型の鏃が青銅製で、柄の基部と刃部が鉄製である。全長は 26.5cm で木製の鞘の痕跡があった。

田広金はオールドス地区で採集された銅柄鉄剣に対して、青銅器との形態的な比較から、戦国早期 (紀元前 5 世紀) の年代を与えている (田 1986 p14)。

③すべて鉄製の短剣は、ハミ地区小東溝南口より出土する全長 28cm のものである (図 36-3)。柄の先端が向かい合い、鏃がやや盛り上がる形状を示す。鏃の形が類似する短剣は、内モンゴの匈奴墓である毛慶溝墓地より出土している。紀元前 4 世紀ごろと考えられる (田他 1986、p.9 図四 - 4)。

・ 鎌 (図 37)

21 点の出土があり、刀子について出土量の多い器種である。両翼鎌と三翼鎌があり、ハミ地区の小東溝南口より採集された鎌は、平らな両翼鎌である (図 37-1)。スパン 1 号墓

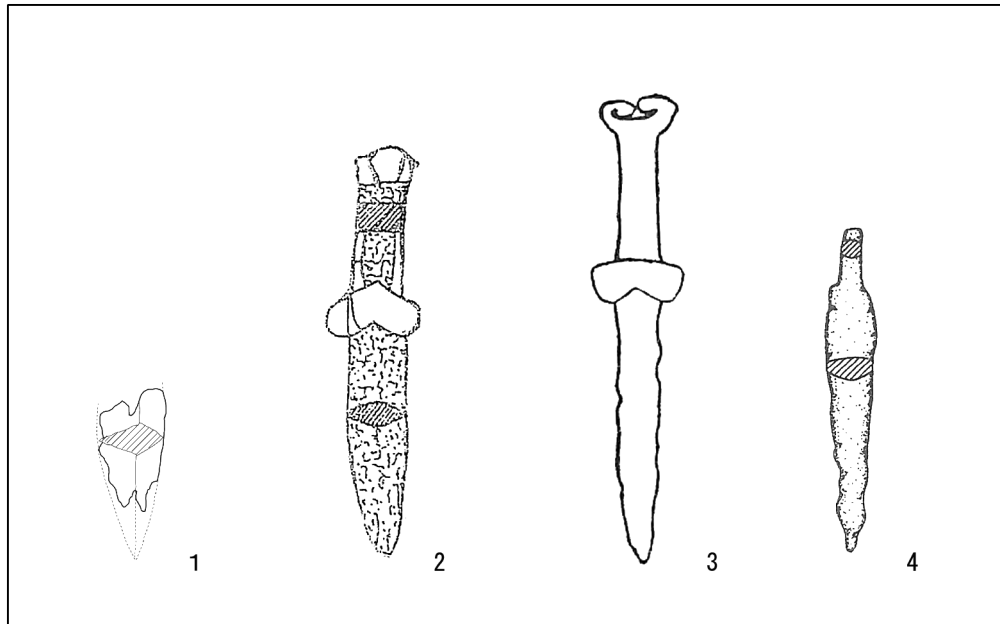


図 36 出土鉄器 武器 短剣

1. イエンブラク M75:28 (残長 6.7、幅 3.3)、2. チュンバク I M17:28(全長 26.8、刃長 14.5、幅 3.8)、3. 小東溝南口(全長 28、刃幅 2.6、柄幅 5.5)、4. チャウフ III M10:1(残長 18.8、刃長 15.4、幅 3.0、茎長 3.4)、縮尺不同、単位 cm

地や 3 号墓地からは三翼鏃の出土がある(図 37-4)。

青銅製の鏃は、やはり両翼鏃、三角鏃、三翼鏃などの形態があり、鉄製の鏃と形態的に類似する。青銅製の鏃の材質を置換した形で、鉄製鏃が作成されたといえる。ただし、鉄製で盃式のものは無く、鑄造製の青銅器との相違点である。

・ 矛 (図 37)

鉄製では、1 点のみクランサリク墓地から出土する(図 37-5)。鍛造製で板状であり、刃部の一部のみ残っている。

馬具 (図 38)

馬具は馬を操縦するために開発された専用の道具である。当初は、青銅製であったが、時代がくだるに従い、鉄製へと変化する遺物のひとつである。主に出土するのは、銜と鑣である。ただし、鑣は、骨や角など金属以外の材質が利用されることが多い。

・ 銜

基本的に二枝式の銜で、鉄製の場合は、軸が細く、両端に大きな環のつく鍛造製のものが主体となる。5 点ほど出土があり、全て戦国期末から漢代に並行する時期の遺跡より出土する。

青銅の銜も、二枝式の銜で、両端が 1 つの大きな環になるほか、中央アジアのサカにみられる両端が鐙型のもの、大小 2 つの環がつくものなど多種ある。これと比較すると、鉄製の銜は、形はほぼ 1 種類であるといえる。

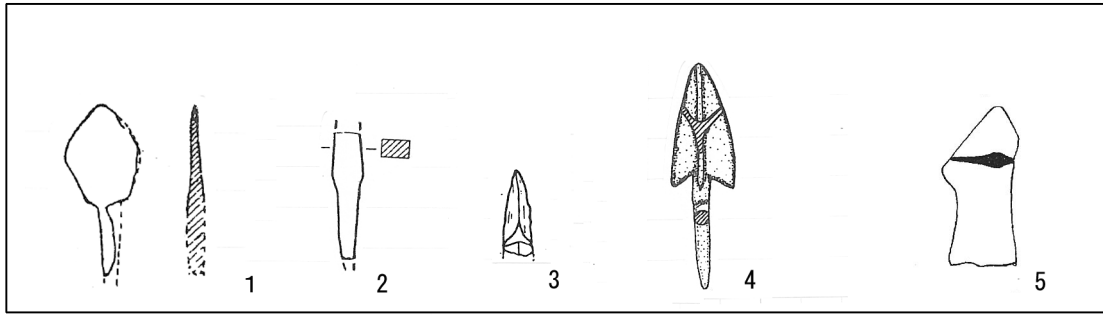


図 37 出土鉄器 武器 鏃・戈

1. 小東溝南口(残長 7.5)、2. シャンミヤオル I M14:57(残長 5.2)、3. スバシ III M12:7(残長 3.3)、4. チャウフ III M9:5(長さ 7.6、翼長 4.1)、5. クランサリク M5c:2(残長 5.3、幅 2.4)、縮尺不同、単位 cm

特に、ヤンハイ墓地採集(図 38-2)やスバシ 1 号墓地(図 35-3)の銜は、洛陽焼溝漢墓(洛陽區考古發掘隊編 1959)から同様のものが出ており、時代の特定できる遺物である。

・ 鑣

基本的にペアで出土する。総数は 4 点で、2 ペアの出土である。銜同様、戦国末から漢代に並行する時期の出土である。一つは、ハミ地区の小東溝南口で中央部に環が二つある(図 38-4)。もう一つはヤンハイ墓地の採集品で、両端が羽のような形をした S 字型の漢式の鑣である(図 38-5)。全体が S 字で、二つの孔があり、両端に飾のある鑣も、洛陽焼溝漢墓や拓跋鮮卑の墓である榆樹老河深などから出土しており、漢代の遺物である(吉林省文物考古研究所 1987、p. 116)。

青銅器の鑣は、現在確認されていない。青銅製の銜に対しては、骨角製や木製の鑣がセットとなって出土する。

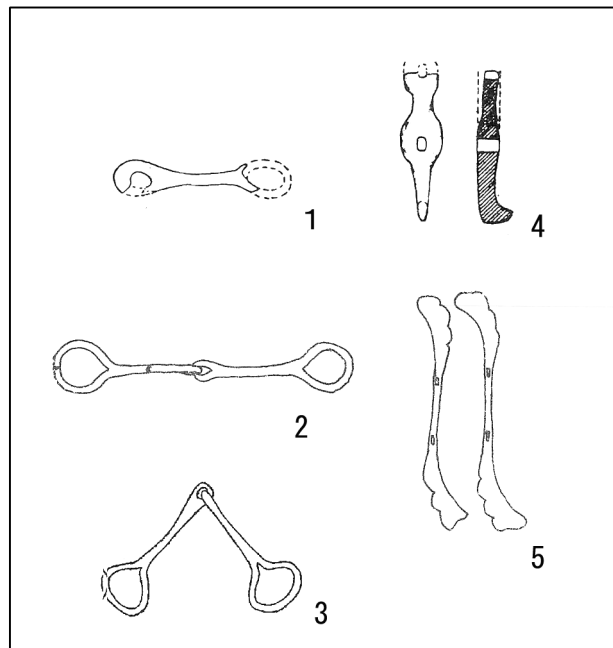


図 38 出土鉄器 馬具 銜・鑣

装飾品(図 39)

初期鉄器時代において、鉄は装飾品としても出土する。環や簪、泡、帯鉤など種類は多様であるが、数量は少ない。

・ 環

耳環、指環、腕輪、その他環類として出土する。総数 15 点の出土がある。指環では、イエンブラク墓地 75 号墓より出土するもの(図 39-1)が最も古い。鍛造した鉄板を長めに切り、丸めた形態をとる。

1. 小東溝南口(残長 8.8cm)、2. ヤンハイ 87CYP: 130A(全長 23cm)、3. スバシ I M10:8(全長 17.6cm)、4. 小東溝南口(残長 7.9cm)、5. ヤンハイ 87CYP: 130B(長 17.5、17.7cm)、縮尺不同、単位 cm

・ 簪（かんざし）

鉄製の簪は4点ほど出土している。形状としては、青銅製の簪とほぼおなじである。全長は10cmから20cmほどで、先端に球状の飾がつく。スバシ3号墓地(図39-5)や石河子市南山墓地(図39-6)からの出土がある。

・ 泡

円形のボタンを泡という。鉄器では3点のみ出土がある。背面に衣服などに取り付けるための、橋がかかる。スバシ3号墓地などから出土がある(図39-4)。

・ その他

牌(図39-11)、管(図39-12)、巻、垂飾など形はさまざまであるが、装飾品の一部と考えられる。鍛造による薄い鉄板を基本として、穴をあけたり、立体的にまるめたりしたものである。他に1点のみ鉄製容器が出土する。ヤンハイ3号墓地から出たも杯である(図39-10)。

以上、新疆の青銅器時代から初期鉄器時代の遺跡より出土する鉄器を、利器、武器、馬具、装飾品にわけてそれぞれ説明した。

初期鉄器は、利器が中心で武器の出土総数がそれに次ぐ。青銅器に比べ、器種のバリエーションは、それほど豊富ではない。青銅器にはみられず、鉄器のみのものは馬具の鑣である。一方、青銅器にはあって、鉄器には確認できていないものは、斧、戈、鈴、珠、鏡、貝など装飾品に多い。鉄器は鍛造による製品がほとんど全てである。鉄、青銅共通の器種のうち、形態のみ、青銅器を模倣したものもある。刀子や短剣などは、青銅製品の特徴を受け継ぎながら、鉄器へ利用が置き換わり、鉄器に即した形態へと変化していくといえるだろう。

5. 結び

以上、新疆の青銅器時代から初期鉄器時代における研究史と問題を述べた。特に時期区

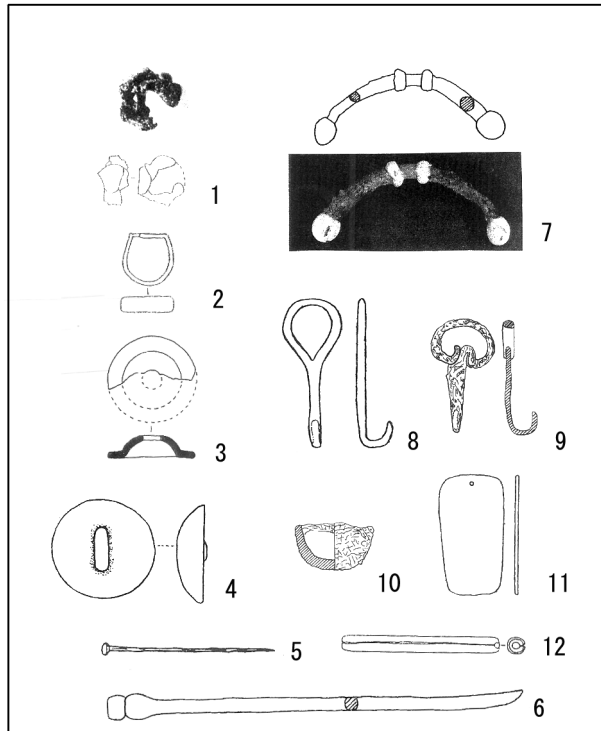


図39 出土鉄器 装飾品

1-2. 指輪. イエンブラク M75:26(径2.3)、シャンパオパオ M4:1(径2.1、幅0.7)、3-4. 泡. チャイオプ II M8:6(径3.8、高1)、スバシ III M13:10(径5.8)、5-6. 簪. スバシ III M8:3(長21、径0.7)、南山 M2:6(長8.8、径0.2)、7-9 帯扣. ヤンハイ I M5.4(全長9.6、径0.8)、スバシ III M13:11(径9)、ヤンハイ III M335:7(長5.8、幅3.2、厚0.5)、10. 杯. ヤンハイ III M350:5(口径4.8、高2.7)、11. 牌. スバシ III M6:8(長7、幅3.8)、12. 管. シャンミヤオル I M 14:56(長9、径1.0)、縮尺不同、単位 cm

分及び周辺地域との関連について、金属製品に着目しつつまとめた。その結果、現在、地域的な、空間的な研究は進んでいるが、時期的な考察がまだ十分でないということが明らかになった。確かに、調査密度や報告の多寡といった問題は多いが、チャウフ墓地やヤンブラク墓地、天山北路墓地といったいくつかの大型墓地内における分期の研究（王他 1990、陳 2001、呂他 2001）は、確実に進行している。これらを基盤に同一区分される地域内の時期変遷へいかに関連させるかが課題である。

新疆は、中央ユーラシアの中間地点に位置する。西アジアと中国の間にあり、金属器の加工技術の問題だけでなく、家畜化や牧畜文化の伝播あるいは馬車の伝播の問題、ムギ栽培の問題など検討すべき要素は多岐にわたる。周辺地域との関わりの中でそれらを捉えるためにも、時期変遷を明らかにすることは今後の研究を進める上で、非常に重要な基礎作業となるだろう。そのためには、各墓地内での墓の切り合いや放射性炭素年代に基づく土器や金属器などの遺物の変化、あるいは墓の形態変化などの検討と、それに基づく時期的な枠組みの同一地区内への拡大、現在設定されている隣接地域同士の相互比較等が必要である。

また、金属器の研究に関する現在の動向は、周辺地域との関連の中からの検討が現在の研究の主流となっている。ハミ地域と甘粛・青海、イリ地域とカザフスタンなど具体的な地域同士の関連は明らかとなりつつある。今後は、伝播の経路、到達の時期などの研究が課題である。また、青銅器や鉄がどこから伝わってきたのか。材料はどういった交易ルートで入手していたのか。まだ明確にされていない問題も多い。現在、合金組成や加工技術などを、科学技術による分析で調べる研究も北京科技大学や梅建軍などを主体に進行中であり、成果の蓄積が期待される。こうした研究を生かすためにも、時期区分の研究の早急な整理が必要である。そして、常に南シベリア、西シベリア、カザフスタン、タジキスタン、アフガニスタンや甘粛、青海と比較検討しながら、新疆の青銅器時代と初期鉄器時代を検討すべきであろう。

（註）

- 1 この年代は放射性炭素年代に基づくものであり、一部紀元前 3000 年まで遡る報告もあるが、遺跡・遺物が集中するのは紀元前 2000 年以降であるため、紀元前 2000 年を時代の境界として用いる。紀元前 2000 年以前は、出土遺物の主体が細石器と細石器核であり、細石器時代が設定されている。
- 2 中原地区の最初の鉄製品は、紀元前 14 世紀の隕鉄による鉄刃青銅戈や鉄刃青銅鉞である。ここでは、隕鉄は扱わず、冶金技術の伴う人工鉄を対象とする。

引用文献

- 藤川繁彦編 1999 『中央ユーラシアの考古学』 同成社
高浜秀 2002 「新疆における黄金文化」 『シルクロード—絹と黄金の道』、pp. 184-190
安志敏 1996 「塔里木盆地及其周围的青銅文化遺存」 『考古』 1996-12、pp. 70-77

- 烏魯木齊文物保護管理所·新疆文物考古研究所 2003「烏魯木齊市柴窩堡林場Ⅱ号地点墓葬的發掘」
『考古』2003-3、pp. 27-37
- 王炳華 1985「新疆地區青銅時代考古文化試論」『新疆社會科學』1985-4、pp. 40-60
- 韓建業 2005「新疆青銅時代－早期鐵器時代文化的分期和譜系」『新疆文物』2005-3、pp. 57-99
- 韓健業 2007『新疆的青銅器時代和早期鐵器時代文化』文物出版社
- 韓汝玢 1998「中國早期鐵器（公元前5世紀以前）的金相學研究」『考古』1998-2、pp. 87-96
- 龔國強 1997「新疆地區早期銅器略論」『考古』1997-9、pp. 7-20
- 新疆維吾爾自治區文化庁文物處·新疆大學歷史系文博幹部專修班 1989「新疆哈密焉不拉克墓地」
『考古學報』1989-3 pp. 325-362
- 新疆社會科學院考古研究所 1981「帕米爾高原古墓發掘報告」『考古學報』1981-2、pp. 199-216
- 新疆考古研究所 1989「鄯善洋海、達浪坎爾古墓群清理簡報」『新疆文物』1989-4、
轉載新疆文物考古研究所編『新疆文物考古新收穫』新疆人民出版社、pp. 186-193
- 新疆文物考古研究所 1995「阿合奇庫蘭薩日克墓地發掘簡報」『新疆文物』1995-2、pp. 20-28
- 新疆文物考古研究所 1999「新疆察布查爾縣索墩布拉克古墓群」『考古』1999-8、pp. 17-28
- 新疆文物考古研究所編 1999『新疆察吾呼』東方出版社
- 石河子市軍墾博物館·新疆大學歷史系·新疆文物考古研究所 1999「石河子市南山古墓葬」
『新疆文物』1999-1 pp. 1-9
- 水濤 1989「新疆地區青銅文化研究現狀述評」『新疆文物』1989-4
- 水濤 1993「新疆青銅器時代諸文化的比較研究」『國學研究』1、pp. 447-490
- 叢德新 2001「近年新疆地區早期考古學文化研究的成果と課題」『シルクロード国際シンポジウム
～蘇るシルクロード～』予稿集、pp. 43-53
- 中國社會科學院考古研究所新疆工作隊·新疆巴音郭楞蒙古自治州文管所 1991「新疆輪台群巴克
墓葬第二、三次發掘簡報」『考古』1991-8、pp. 684-783
- 陳戈 1989「新疆出土的早期鐵器」『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』文物出版社、pp. 425-432
- 陳戈 1990「關於新疆地區的青銅時代和早期鐵器時代文化」『考古』1990-4、pp. 366-374
- 陳戈 2001「察吾呼溝口文化的類型割分和分期問題」『考古與文物』2001-5、pp. 30-39
- 陳光祖（著）·張川（訳）1995「新疆金屬時代」『新疆文物』1995-1 pp. 83-97
- 陳良偉 1988「試論西域冶金文明的起源」『新疆文物』1988-1
- 吐魯番地區博物館·新疆文物考古研究所 1994「鄯善蘇貝希墓群三號墓地」『新疆文物』1994-2、
pp. 1-20
- 吐魯番地區文管所·新疆文物考古研究所 1993「鄯善蘇貝希墓群一號墓地發掘簡報」『新疆文物』
1993-4、pp. 1-13
- 吐魯番地區文物局·新疆文物考古研究所 2004a「鄯善縣洋海一號墓地發掘簡報」『新疆文物』
2004-1、pp. 1-27
- 吐魯番地區文物局·新疆文物考古研究所 2004b「鄯善縣洋海二號墓地發掘簡報」『新疆文物』
2004-1、pp. 28-49
- 吐魯番地區文物局·新疆文物考古研究所 2004c「鄯善縣洋海三號墓地發掘簡報」『新疆文物』
2004-1、pp. 50-68

- 哈密地区文管所·新疆文物考古研究所 1994 「哈密—巴里坤公路改線考古調查」『新疆文物』
1994-1、pp. 5-11
- 哈密地区文管所·新疆文物考古研究所 2004 「1996 年哈密黃田上廟爾溝村 I 号墓地發掘簡報」
『新疆文物』2004-2、pp. 1-28
- 穆瞬英·王明哲·王炳華 1983 「建国三十年新疆考古的主要收穫」『新疆考古三十年』
新疆人民出版社、pp. 1-26
- 李肖·党彤 1995 「准噶爾盆地周緣地区出土銅器初探」『新疆文物』1995-2
- 李伯謙 1998 「中国青銅文化的發展段階与分区系統」『中国青銅文化結構体系研究』、pp. 1-13
- 劉学堂 1993 「新疆地区早期銅鏡及相關問題」『新疆文物』1993-1
- 呂恩国·常喜恩·王炳華 2001 「新疆青銅時代考古文化淺論」、宿白編『蘇秉琦与当代中国考古
学』科学出版社、pp. 172-193
- Itina Итина, М.А., Яблонский, Л.Т. 1997 Саки Нижней Сырдарьи, Росспэн, Москва
- Mair, V.H., Dolkun Kamberi 1998 *Place, People, and Site of the Uyghur Region : Pertinent to the
Archeology of the Bronze Age and Iron Age, The Bronze Age and Early Iron Age Peoples
of Eastern Central Asia, The University of Pennsylvania Museum Publications*
- Mei, Jianjun 2000 *Copper and Bronze Metallurgy in Late Prehistoric Xinjiang*, BAR International Series
865
- Mei, Jianjun 2002 *The Metal Cauldrons Recovered in Xinjiang, Northwest China* 『草原考古通信』
No.13
- Mei Jianjun & Colin Shell 1999 *The existence of Andronovo cultural influence in Xinjiang during the 2nd
millennium BC, Antiquity 73*, pp. 570-578

图版出典

- 图 30 安 1996、p. 71 图一
- 图 31 — 1 新疆維吾爾自治區文化庁文物処他 1989、p. 348 图二六 10
— 2 中国社会科学院考古研究所新疆工作队他 1991、p. 701 图二四 3
— 3 吐魯番地区文管所他 1993、图八 11
— 4, 9 吐魯番地区博物館他 1994、图一八 9, 7
— 5, 13 哈密地区文管所他 2004、p. 14 图一一 4, 6
— 6 新疆社会科学院考古研究所 1981、p. 208 图一四 18
— 7 吐魯番地区文物局他 2004b、p. 47 图三八 5
— 8 吐魯番地区文物局他 2004c、p. 65 图二六 1
— 10 新疆文物考古研究所 1999、p. 25 图一四 5
— 11 新疆文物考古研究所編 1999、p. 151 图一〇四 12
— 12 石河子市軍墾博物館他 1999、p. 6 图八 2

- 图 32 - 1 中国社会科学院考古研究所新疆工作队他 1991、p. 701 图二四 9
 - 2 吐鲁番地区文管所他 1993、图八 7
 - 3 新疆文物考古研究所他 2004c、p. 65 图二六 6
 - 4 哈密地区文管所他 2004、p. 14 图一一 16
- 图 33 - 1 乌鲁木齐文物保护管理所他 2003、p. 35 图一二 4
 - 2 新疆文物考古研究所编 1999、p. 270 图二〇七 3
- 图 34 - 1, 2 吐鲁番地区博物馆他 1994、图一八 -4
- 图 35 - 1, 2 中国社会科学院考古研究所新疆工作队他 1991、p. 693 图一四 5, p. 701 图二四 4
- 图 36 - 1 新疆维吾尔自治区文化厅文物处他 1989、p. 348 图二六 1
 - 2 中国社会科学院考古研究所新疆工作队他 1991、p. 613 图一四 15
 - 3 哈密地区文管所他 1994、p. 7 图二 8
 - 4 新疆文物考古研究所编 1999、p. 207 图二〇七 1
- 图 37 - 1 哈密地区文管所他 1994、p. 7 图二 5
 - 2 哈密地区文管所他 2004、p. 14 图一一 11
 - 3 吐鲁番地区博物馆他 1994、图一八 -3
 - 4 新疆文物考古研究所编 1999、p. 207 图二〇七 -2
 - 5 新疆文物考古研究所 1995、图一三 6
- 图 38 - 1, 4 哈密地区文管所他 1994、p. 7 图二 6, 9
 - 2, 5 新疆考古研究所 1989、p. 191 图六 7, 8
 - 3 吐鲁番地区文管所他 1993、图九 -4
- 图 39 - 1 新疆维吾尔自治区文化厅文物处他 1989、p. 348 图二六 11
 - 2 新疆社会科学院考古研究所 1981、p. 208 图一四 9
 - 3 乌鲁木齐文物保护管理所他 2003、p. 35 图一二 8
 - 4, 5, 8, 11 吐鲁番地区博物馆他 1994、图一八 -2, 5、图一九 -2、图一八 -1
 - 6 石河子市军垦博物馆他 1999、p. 6 图八 -4
 - 7 吐鲁番地区文物局他 2004a、p. 23 图四三 -2
 - 9, 10 吐鲁番地区文物局他 2004c、p. 65 图二六 -1, 4
 - 12 哈密地区文管所他 2004、p. 14 图一一 -21

第6章 新疆ウイグル自治区出土鍬の分類と編年による時期区分

1. はじめに

第5章では、新疆ウイグル自治区（以下、新疆）における時期区分の問題について検討するため、出土鍬を対象に型式分類と編年を行った。

新疆は中国の西北部に位置し、シルクロードの要衝として栄えた地である。当地の青銅器時代から初期鉄器時代の遺跡より出土する特徴的な遺物に鍬がある。この鍬はユーラシアの草原地帯で見られる鍬と形態的に類似し、相互に影響関係があったことをうかがわせる。

本章では、新疆出土鍬を取り上げ、形態による分類を行い、その変遷を周辺地域と比較の上で検討した。最終的にその結果を当地域の遺跡、遺構の時期区分の参考とする狙いである。また、あわせて鍬を通じた周辺地域との交流についても考察する。

2. 研究略史と課題

新疆の出土鍬について主体的に取り上げた研究は少ない。これまで、地域文化を検討する際に、特徴的な遺物の一つとして、紹介されることはあった（水 1993）。また、発掘調査された個々の遺跡の報告書内で、形態上の分類はなされるものの（新疆文物考古研究所編 1999 など）、新疆を通じた分類や編年は行われていない。

一方で、新疆に隣接するユーラシアの草原地域において、鍬は年代決定の重要な要素として、分類および型式編年の研究が活発に進められてきた。黒海北岸のスキタイの古墳からは、鍬が箆のセットとして数十点まとまって出土する。特に三翼鍬は「スキタイの三要素」の一つとされるほど、スキタイ文化の特徴的な遺物である。出土鍬は一括遺物として型式の比較が可能であり、メリュウコヴァを代表として分類と編年が確立している（Meliukova1964、図 41）。

その他の地域では、ウラル地方のサウロマタイの鍬を対象に、スミルノフが分類（Smirnov1961）を行っている。新疆の西側のカザフスタン、セミレチエ地域ではアキシエフら（Akishev1963）が、アラル海流域のサカ文化の鍬についてはイティーナら（Itina1997）による分類と編年があげられる（図 42）。新疆からアルタイ山脈をはさんだ北側に位置する南シベリアには、紀元前1千年紀にタガール文化が展開していた。タガール文化では1つの墓からスキタイほど鍬がまとまって出土することはない。また採集品も多い。そのた

め、メリューコヴァやスミルノフの分類に依拠しつつ、タガール文化の鏃編年をチレノヴァが行っている (Chlenova1967)。

現在、年輪年代や AMS 等の利用により、ユーラシア草原文化の暦年代は従来の説より溯る傾向がある。しかし、メリューコヴァをはじめとするスキタイ鏃の編年組列は今日でも有効であり、現在も墓の時期決定において重要な指標となっている。

一方、中国の北方草原地帯では、田広金らによりオルドス地域出土・採集の青銅鏃に対して集成と分類が行われている。特に有鋌鏃について、断面円形の鋌を主体とする中原系統に対して、断面が扁平な方形の鋌をもつオルドス周辺の地方系統を明確に分離している (田他 1986)。また、華北を中心とする地域の出土鏃を対象に、集成と分類、編年を行った石岩の研究もある (石 2008)。石の研究は中原の資料が主体であるが、北方草原地帯の資料の年代を考える上で比較が可能であり、暦年代決定の参考となる。

その他、新疆の年代研究についても、問題が指摘できる。新疆では青銅器時代から初期鉄器時代において発掘される遺跡は墓地が中心であり、墓同士は切り合い関係をほとんどもたず、新旧関係の把握が難しい。そのため、遺構、遺跡の年代は、基本的に放射性炭素年代により決定される。しかし、遺構の層位による前後の関係や、遺物の組合せや形態の変遷を伴っていないため、提示された放射性炭素測定による年代の検証が難しいのが現状である。韓健業の土器による時期区分も行われているが、土器の型式編年の確立には至っていない (韓 2007)。ここにおいて新疆出土の鏃の変遷順序を確定できれば、新疆の遺構、遺跡の年代を定める上で、決定根拠の一つとすることが可能である。

よって、本章では、鏃の分類を行い、その形式と型式を定めて、隣接地域より出土する鏃と比較を行い、その変遷を検討した。

3. 分析の対象と方法

新疆出土鏃について、青銅器時代から初期鉄器時代 (漢代併行期以前) と考えられる資料を収集し、その形態から分類を行った。その結果、青銅鏃 56 点、鉄鏃 42 点、骨鏃 34 点、他石鏃と木製鏃などが集成できた。その中で、中央ユーラシアの草原・乾燥地帯における初期遊牧民文化圏で比較可能な、青銅鏃、鉄鏃、骨鏃を分析の対象とする。なお、鏃の各部の名称は石璋如 (石 1950) を参考とした (図 40)。矢柄に接続する部分の形態がソケット状のものを「釜」、棒状のものを「鋌」とする。鏃の身部先端を「前鋒」、末端を「後鋒」、刃部を「翼」、中央の隆起を「脊」、身部と鋌の段を「関」とする。釜に附属するかえりの部分は、腸挟りとも呼ばれるが、本章では「逆刺」に統一する。

鏃の分類基準は、材質、矢柄との接続形態、断面形態、平面形態の順に属性を定めた (表 15、図 41)。まず、材質により、一. 青銅製、二. 鉄製、三. 骨製に分ける。次に矢柄との接続部分により、I 有釜、II 有鋌に分ける。さらに断面形態から、A 円形、B 両翼、C

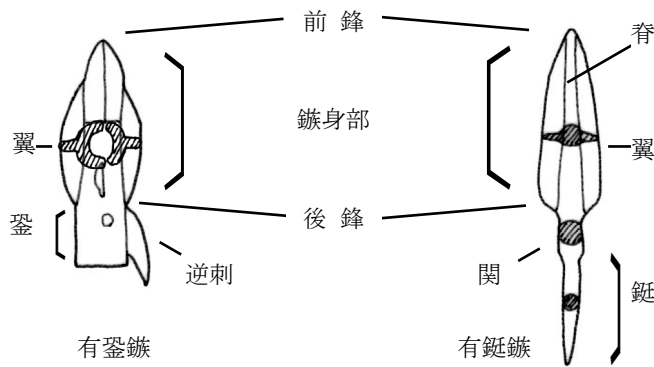


図40 鏃各部の名称

表15 分類の基準

材質	矢柄との接続	断面形態
一 青銅製	I 有銚	a 無凸
二 鉄製		b 管銚
三 骨製	II 有銚	a 扁平銚
		b 円銚
		A 円形
		B 両翼
		C 三翼
		D 三稜
		E 四稜

材質			
一.青銅製	二.鉄製	三.骨角製	
矢柄との接続			
I 有銚		II 有銚	
a 無凸	b 管銚	a 扁平	b 円
断面の形態			
A円形B	両翼	C三翼D	三稜
			E四稜

図41 分類の基準

時期	主要な型式	代表的な遺跡 () 数字は右図対応
先スキタイ期	1類：両翼鏃 (有銚、平面菱形)	エンジャ (1) シンフェローポリ (2) マーラヤツインバルカ (3, 骨鏃)
スキタイI期	1類：両翼鏃 (2型；管銚平面楕円) 2類：三翼鏃 (1型；管銚平面楕円)	ジャボチン K524 レンコフツィ (4) メリグノフスキー (6) ポポフカ K4 スタールシャヤ・モギーラ (5, 7)
スキタイII期	2類：三翼鏃 (5型；有銚平面三角)	プトキ K478 (8, 10) オリビンスキー (9) チャスティフ (11) シンフェローポリ黄金塚、
スキタイIII期	2類：三翼鏃 (4型；管銚平面長三角) 5型、6型； 有銚平面三角長下翼)	ツインバルカ付近 (12) ポボピチャ (13) ニコポリスキー・モギーリニカ K1
スキタイIV期	2類：三翼鏃 (4型、8型； 有銚平面長三角) 3類：三稜鏃 (7型；有銚平面 長三角後鋒突出)	ソローハ (14) オグズ バシマチカフ K6

図42 メリユーコヴァの分類

三翼、D三稜、E四稜とし、平面形態や逆刺の有無によりさらに細分を行う。新疆の組合せの事例を示したのが表 15 である。

ここで、スキタイ鍬の分類について言及する。メリューコヴァは、出土した鍬を翼部の断面形態、矢柄との接続部分の形態、平面形態などで分類し、共伴するギリシア陶器と対比させることで編年を行った（図 42）。

紀元前 8 世紀に相当する先スキタイ期には、1 類 1 型（両翼鍬；管釜平面菱形）が主として利用される。代表的な鍬の出土する墓は、マーラヤ・ツィンバルカなどである。続く、スキタイ I 期は紀元前 7 世紀中、後半－前 6 世紀前半とされ、1 類 2 型（両翼鍬；管釜平面月桂樹葉形・楕円形）、2 類 1 型（三翼鍬；管釜平面楕円形）が主体となる。代表的な墓地はジャボチン 524 号墳などである。スキタイ II 期は、紀元前 6 世紀後半－前 5 世紀前半とされ、2 類 5 型（三翼鍬；有釜平面三角形）が主体となる。シンフェローポリ黄金塚などが代表である。スキタイ III 期は紀元前 5 世紀後半－前 4 世紀初頭とされ、2 類 5 型ほか、2 類 4 型（三翼鍬；管釜平面長三角形）、2 類 6 型（三翼鍬；有釜平面三角形、後鋒突出）が主体となる。スキタイ IV 期は紀元前 4 世紀前半－前 3 世紀前半で、2 類 4 型、2 類 8 型（三稜鍬；有釜平面長三角形、後鋒突出）が主となる。

その後のサルマタイ期は、2 類 4 型、8 型、3 類 7 型が主となる。先スキタイ、スキタイ I 期、II 期はそれぞれ時期的な特徴が明瞭であるが、III 期と IV 期、その後のサルマタイ期は、鍬の上での変化は乏しいとしている。

また、初期サカ文化の大型墓地である南タギスケンにおいても、鍬の分類と編年が行われている（図 43）。南タギスケンからは計 139 点の鍬が出土している。イティーナらは先行研究を踏まえ、材質、矢柄との接続部分の形態、鍬身部断面、平面形態により鍬の分類を行った。ウイガラクやサカルチャガといったアラル海周辺の出土鍬をはじめ、スキタイやサウロマタイの鍬との比較の上で年代の決定を行い、鍬の出土する墓を紀元前 8－前 6 世紀前半の第一グループ（32、55 号墓など）と紀元前 6 世紀後半－前 5 世紀の第二グループ（53 号墓など）に分類した。

こうした周辺地域の成果を踏まえ、新疆出土鍬の変遷を論じていく。

4. 分析

新疆出土の鍬を分類し、類例と比較することでその時期を検討する。

一．青銅鍬

・ I aA 式（青銅有釜円形鍬：図 45-1）

断面が円形で、平面が砲弾形を呈する。後鋒が凹字状にくぼむ。チャウフ（察吾呼）墓


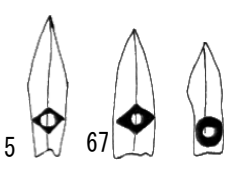

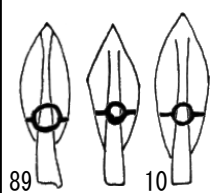



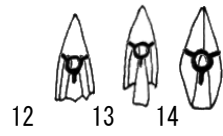
		第一組	第二組			第一組	第二組	
		紀元前 8 - 前 6 世紀	紀元前 6 - 前 5 世紀			紀元前 8 - 前 6 世紀	紀元前 6 - 前 5 世紀	
青銅 1有銚	A. 兩翼 1型 先端アーチ形			A. 菱形 1型 砲弾形、無凸銚 2型 アーチ型、無凸 3型 アーチ型 管銚				
	b. 三翼 1型 先端広いアーチ形			b. 兩翼 1型 月桂樹形、管銚 (8) 2型 非対称の菱形、管銚 (9, 10)				
	b. 三翼 2型 先端狭いアーチ形			B. 三稜				
	B. 三稜			D. 三翼 1型 アーチ型、無凸 2型 アーチ型、管銚 3型 月桂樹形 無凸				
				青銅 2有銚				

図 43 南タギスケンの編年

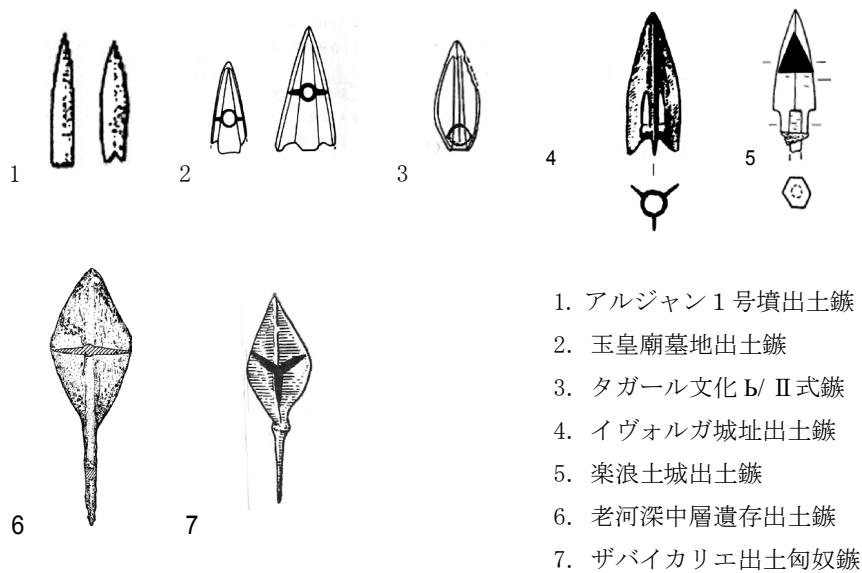


図 44 周辺地域の出土鏃

地一期のIV号墓地 212 号墓より 2 点出土している。M212:5 は直径 1.0cm、全長 3.2cm である（和静県文化館他 1988）。

類例は、トゥヴァにある紀元前 9 世紀後半、先スキタイ文化のアルジャン I 号墳より出土し、4 号埋葬から 3 点見つかった（図 44-1、Griaznov 1980）。当型式は先スキタイ文化で利用された鏃であるといえる。同様の形態の鏃は、骨鏃としても出土しており、黒海北岸の先スキタイ期シンフェローポリ古墳（Meliukova1964: т а б .1 B -10,11）等で出土がある。

・ I aB 式（青銅有蓋両翼鏃）

I aB 式 1（図 45-2）

平面三角形を呈する。蓋は短く、翼は直線状である。ヤンブラク（焉不拉克）墓地より 2 点出土している。M75:42 は、長 2.4cm、幅 1.5cm である（新疆維吾爾自治區文化庁文物処他 1989）。類例は、新疆以西では少なく、中国北方草原地帯の延慶玉皇廟墓地の春秋時代前期の III b 型 I 式および春秋時代後期の III a 型 III 式があげられる¹。紀元前 8 世紀後半—前 5 世紀前半の幅をもつ（図 44-2、北京市文物研究所編 2007）。スキタイ文化では I 期において、平面が三角形の三翼の出土はある（図 42-6、II 7 式）。しかし、一般的に有蓋両翼鏃の平面形態は、菱形、楕円形、月桂樹形が多く、三角形を呈する鏃はあまり見られない。

I aB 式 2（図 45-3）

後鋒に挟りが入る。中央に太めの脊が隆起する。シャンババイ（香宝宝）墓地 M29:2 は、全長 3.6cm（新疆社会科学院考古研究所 1981）。類例は、黒海北岸のオリビンスキー古墳などから出土があり、メリュウコヴァのスキタイ II 期（1 類 6 型）に相当する（図 42-9）。

I aB 式 3（図 45-4）

平面は葉形で、最大径は後鋒に近い。後鋒はまるくすばまる。中央に脊が隆起する。ヤンブラク墓地 M6 などより 2 点、オタンリク（柴窩堡）林場 II 号点墓地 M9 からも出土する。柴窩堡出土鏃は、全長は 4.0cm、幅は 1.6cm（烏魯木齊文物保護管理所他 1999）などから 1 点出土がある。蓋の突出しない平面葉形の有蓋両翼鏃は青銅器時代末の北タギスケンなどからも出土する。しかし、青銅器時代の形態は鏃身部の中央に最大径があり、本型式とは異なると判断した。本型式の類例は、最大径は後鋒にあり全体的に細身の鏃が、ウイガラク墓地 84 号墳の両翼鏃 III 1 式に見られる。南シベリアからも b / II 式として紀元前 6 世紀に年代づけられている（図 44-3）。

・ I bB 式（青銅管蓋両翼鏃）

I bB 式 1（図 45-5）

やや長い管蓋をもち、平面は左右非対象の菱形である。脊が隆起し、後鋒は丸くすばまり、関を持つ。ヤンハイ（洋海）墓地 1987 年調査時に採集（87CYP:91）されている。全長 5.9cm である（新疆考古研究所 1989）。

長い管釜の両翼鏃は、黒海沿岸の初期スキタイ文化に代表的な鏃である。メリューコヴァ分類の先スキタイ期に属する。類例はエンジャ（図 42-1）やシンフェローポリ古墳（図 42-2）などより出土している。

I bB 式 2（図 45-6）

平面は菱形に近い葉形で左右非対称である。ヤンハイ墓地 1987 年調査時に採集（87CYP:91）されている（新疆考古研究所 1989）。図では円孔に表現されているが、実際には管釜部が破損しており（吐魯番博物館編 1992 図六六）、逆刺がついていた可能性もある。全長 4.8cm。メリューコヴァ分類では、スキタイ 1 期の代表的な型式とされる。1 類 2 型に相当する（図 42-5）。また、南タギスケンの紀元前 7 世紀に年代づけられる 55 号クルガンからも類例があり、b 類 2 型とされる（図 43-9、Itina1997. p167, рис.706-21, 22）。

I bB 式 3（図 45-7）

平面は菱形に近い葉形で、管釜に逆刺をもつ。阜康三工郷墓地から 2 点出土があり、98FSM5:1 は長 3.8cm、幅 1.4cm である（新疆文物考古研究所 1999）。管釜はやや長く、後鋒に接する管釜上に逆刺がつく。阿勒泰のチェムルチェック墓地 M17 出土鏃は、短い管釜に短い逆刺がつく。上記のヤンハイ出土鏃と同様、メリューコヴァの 1 類 2 型に相当するといえる。スキタイ I 期のレンコフツィ古墳などから出土している（図 42-4、Meliukova1964:таб.6 3-1,И-1）。

I bB 式 4（図 45-8）

腐殖酸廠墓地より 3 点（C:12）採集がある。管釜は長めで、平面形態は楕円形を呈する。全長 3.7 cm（張他 1998）。メリューコヴァの 1 類 3 型に相当するといえる。スキタイ II 期のプトキ 478 号墳などより類例が出土する（図 42-8）。

I bB 式はスキタイ文化やサカ文化の初期段階に広く用いられた型式である。先スキタイ文化は平面菱形の有釜両翼鏃が中心であるが、その次のスキタイ前期には葉形あるいは楕円形の有釜両翼鏃が主体となる。ユーラシアの鏃利用の拡大の中で、本型式の鏃が新疆より出土したといえる。また新疆においては、時代が下るに従い、この型式の鏃は小型化しているといえる。メリューコヴァの分類図においても同様の傾向をうかがうことができる。

・ I bC 式（青銅管釜三翼鏃）

I bC 式 1（図 45-9）

長い管釜をもち、平面が葉形を呈する。前鋒は直線状に尖り、脊が隆起し、後鋒は丸くすぼまる。善鄯ヤンハイ墓地 I 号墓地から 2 点（M150:3、4）報告されている。断面は図示されていないが、本文中の記載によると三翼鏃である。M150:3 は全長 4.5 cm、釜長 1.0cm である（吐魯番地区文物局他 2004）。

類例はスキタイ I 期のスタールシャヤ・モギーラ等で、1 類 1 型に分類される（図 42-7）。

1bC 式 2（図 45-10）

平面は緩やかに弧を描く三角形で、円形の脊をもち、銚が少し延びる。チャウフ溝口 I 号墓地 M16:3 は、全長 2.6cm、幅 1cm である（中国社会科学院考古研究所新疆工作队他 1988）。

メリュウコヴァの 2 類 4 型に相当する。スキタイ III 期に流行する形である（図 42-10）。南シベリアにおいても、A/ VIII 式に分類されている。

・ I aC 式（青銅有銚三翼鏃）

I aC 式（図 45-11）

楼蘭故城採集 C:82 ②は、翼が広く大きく下方に伸び緩やかな弧状である。脊部分が三角形の血溝状になり、細い三角形の透かしがはいる。銚は翼先端より短い。全長 3.0cm である（新疆考古研究所楼蘭考古隊 1988）。翼部が緩やかな弧状を呈する類例は、前漢中期の西岔溝匈奴墓や紀元前 1 世紀のイヴォルガ城址（図 44-4、Davydova1995）で出土している。

・ I aD 式（青銅有銚三稜鏃）

I aD 式 1（図 45-12）

平面が葉状を呈する。端部はやや抉れる。全長 2.5cm、幅 1.1cm。オタンリク林場 II 号点墓地 M9:6、チクチハイ（恰甫其海）A 区 XV 号墓地 M68:31 は木製の矢柄が残存する。

スキタイ III 期から IV 期に流行するメリュウコヴァの 3 類 7 型と類似する（図 42-13）。ほか、紀元前 6 - 5 世紀の南タギスケン 63 号墓（1-1-B1 式）などで出土している（図 43-11）。

I aD 式 2（図 45-13）

平面が幅の狭い葉状を呈する。端部はやや抉れる。チクチハイ A 区 XV 号墓地から計 4 本出土しており、M68:31 は木製の矢柄が残存している。全長 3.5cm（新疆特克斯県文物管理所他 2005）。上記同様にメリュウコヴァ 3 類 7 型に分類され、スキタイ IV 期ソローハ古墳出土鏃等と類似する（図 42-14）。

・ I aD 式（青銅管銚三稜鏃）

I aD 式 1（図 45-14）

平面が長三角形で、銚がやや突出する。阿勒泰のクルムチ（克爾木齊）墓地などから採集されている。メリュウコヴァの 3 類 2 型と類似する。

I aD 式 2（図 45-15）

円孔断面六角形の長銚をもつ。全長 3.0cm。楼蘭故城から採集されている。C:80 ②、F0:13B などである（新疆考古研究所楼蘭考古隊 1988）。銚部が六角形を呈する三稜鏃は、朝鮮半島の前漢の楽浪土城、ザバイカルのイヴォルガ古城などで出土しており、弩に伴う鏃と考えられる（鄭 2002）。

・ I aE 式 (青銅有蓋四稜鏃)

I aE 式 (図 45-16)

平面が幅の狭い葉形で、身の両端部が突出する。全長 2.7cm 前後、幅 1.0cm 前後で、ヤンブラク墓地 M6:4 や、チュンバク (群巴克) I 号墓地 M3E:1 などがある (中国社会科学院考古研究所新疆工作隊他 1991)。類例はタギスケン M33 (1-2-A-1) など (図 43-6) である。

・ I bE 式 (青銅管蓋四稜鏃、図 45-17)

平面が木葉形で、蓋が下方に伸びる。全長 3.5cm、幅 1.25cm で、水泥廠墓地 M03:3 より出土する (石河子博物館他 1994)。類例はタギスケン M54 (1-2-A-3) など (図 43-7) である。

・ II aB 式 (青銅製有鋌両翼鏃、図 46-1)

平面が矢羽型で鏃身部の鋌が隆起する。クルムチ古墳 17 号墓より出土する。全長 4.6cm (新疆維吾爾自治区文物管理事業管理局他 1999)。南タギスケンでは、65 号墓より出土があり、1-1-A-1 式に分類されている (図 43-1)。南シベリアでも青銅器時代末からタガール文化の初期にかけて知られている。

・ II aC 式 (青銅製有鋌三翼鏃)

青銅製有鋌三翼鏃は、スキタイ地域での出土の希であるが、アラル海周辺の初期サカ文化において主体となる型式である。青銅器時代の末より出現するとされ、ウイガラク、サカルチャガ、南タギスケンにおいて数量、種類ともに多く出土している (Itina1997)。新疆ウイグル自治区においても、バリエーションが多く、使用期間も比較的長い。平面形態と大きさにより 4 種類に細分できる。

II aC 式 1 (図 46-2)

鏃身部は幅の広いアーチ形で、全長は 3.0-3.5 cm。扁平な鋌をもつ。チュンバク I M27:30 は全長 3.0cm、バルチル (拜勒其爾) 墓地 M207 出土鏃は全長 3.4cm である (和静県民族博物館他 1999)。

南タギスケンでは 1-1- b -1 式に分類される。タガール文化では A/ II 式となる。

II aC 式 2 (図 46-3)

鏃身部は緩やかな直線状の三角形で、全長は 4.0-4.5 cm。オタンリク (柴窩堡) M12 は全長 4.0cm、オタンリク林場 II 号点墓地 M9 出土鏃は全長 4.1cm である。南タギスケン 1-1- b -2 式に類似する (図 43-3)。

II aC 式 3 (図 46-4)

鏃身部は幅の狭いアーチ形で小さい。全長 4.5-5.5 cm。チャウフ II 号墓地 M216 から全長 4.8cm、大草灘 M3 では全長 5.1cm の鏃の出土がある (新疆社会科学院考古研究所 1986)。翼部は南タギスケン 31 号墓、32 号墓などより類例が出土する (図 43-4)。

II aC 式 4 (図 46-5)

一. 青銅鏃

<p>新疆 第1期</p>	<p>前9世紀</p>	<p>I aA 式 I bB 式</p>
<p>新疆 第2期</p>	<p>前8— 前7世紀</p>	<p>I aB 式 I bC 式</p>
<p>新疆 第3期</p>	<p>前6— 前5世紀</p>	<p>I aD 式 I aE 式</p>
<p>新疆 第4期</p>	<p>前4— 前3世紀</p>	<p>I bD 式 I bE 式</p>
<p>新疆 第5期</p>	<p>前2— 前1世紀</p>	<p>0 3 cm</p>

圖 45 新疆出土の青銅有銚鏃

一. 青銅鍬

三. 骨鍬




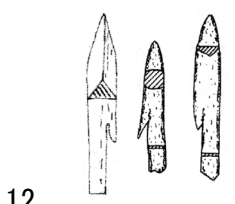
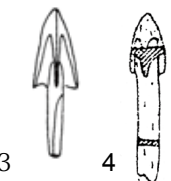
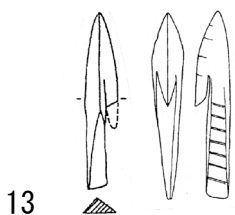
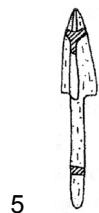

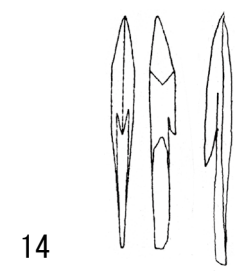




<p>新疆 第1期</p>	<p>前9世紀</p>	<p>II aB 式</p>  <p>1</p>		<p>II aD 式</p>  <p>11</p>
<p>新疆 第2期</p>	<p>前8— 前7世紀</p>	<p>II aC 式</p>  <p>2</p>		 <p>12</p>
<p>新疆 第3期</p>	<p>前6— 前5世紀</p>	 <p>3 4</p>	<p>二. 鉄鍬</p> <p>II bC 式</p>	 <p>13</p>
<p>新疆 第4期</p>	<p>前4— 前3世紀</p>	 <p>5</p>	 <p>7</p>	 <p>14</p>
<p>新疆 第5期</p>	<p>前2— 前1世紀</p>	<p>II bB 式</p>  <p>6</p>	 <p>8</p>	 <p>9</p>  <p>10</p>

図46 新疆出土の青銅有鋌鍬・鉄鍬・骨鍬

鍬身部は幅の狭いアーチ形で大きい。全長 5.5-6.5 cm。察吾呼Ⅱ号墓地 M309 より全長 5.9cm の鍬が出土している。

新疆において当型式の鍬は、時代が下るに従い大型化している様子を観察できた。

その他に青銅有鋌三稜鍬も若干見られるが、分類し得なかった。

二. 鉄鍬

鉄鍬は、現在確認できるだけで 60 点ほどの出土がある。哈密上廟爾溝村や和静チャウフⅢ号墓地などより出土している。有鋌の鉄鍬は出土量が少なく、大多数が有鋌式である。鉄鍬については、青銅鍬ほど分類と編年が確立しているとはいえない。よって、出土遺物の共伴関係や類例が出土する遺跡の年代などを手掛かりに編年を試みる。

・Ⅱ b B 式 (鉄製有鋌両翼鍬)

平面は菱形を呈する。断面がレンズ状になるものもある。

Ⅱ b B 式 1 (図 46-6)

平面が菱形を呈する小東溝南口墓地採集品は、残長 7.5cm (哈密地区文管所他 1994)。類例は紀元前 1 世紀のイヴォルガ古城や榆樹老河深墓地の中層などから出土している (吉林省文物考古研究所 1987)。

・Ⅱ b C 式 (鉄製有鋌三翼鍬)

Ⅱ b C 式 1 (図 46-7)

平面三角形で、後鋒が丸く突出する。短い円鋌を持つ。蘇貝希Ⅰ号墓地 M10 より箆のセットで出土した (吐魯番地区博物館他 2002)。M10 からは馬具一式が出土している。出土した鞍はゴルノ・アルタイのパジリク 1 号墳出土の鞍と同じ構造であり (Rudenko, S. I. 1970)、当墓の年代もパジリク古墳と併行するといえる。

Ⅱ b C 式 2 (図 46-8)

平面が三角形で、後鋒が鋭く突出する。鋌は関をもち、円錐状にのびる。察吾呼Ⅲ号墓地 M9 出土鍬は、全長 7.6cm、幅 2.1cm (新疆文物考古研究所編 1999)。デレストイなど匈奴の墓で典型的に出土する (Moshkova 1992)。

Ⅱ b C 式 3 (図 46-9)

平面が菱形で鍬身部のほぼ中央で屈曲する。鋌は関を備える円鋌である。察吾呼Ⅲ号墓地 M9:6 は全長 7.0、幅 4.1cm である。紀元前 1 ~ 後 1 世紀の匈奴の遺跡から出土する (Moshkova 1992)。

・Ⅱ b C 式 4 (図 46-10)

平面が菱形で鍬身部の下半部で屈曲する。交河故城溝西墓地 M16 より 2 点出土する。M16:16 は全長 6.5cm。武帝期の五銖銭と共伴している。

三. 骨製

現在 38 点の出土が確認できる。本来はもう少し多いと考えられる。新疆における骨鏃は有鋌式が主体である。

・ II D 式 骨製有鋌三稜鏃

II D 式 1 (図 46-11)

骨鏃の中では、有鋌三稜式が最も多い。

平面三角形で、後鋒がのびる。短い円鋌で先端がとがる。チャウフ I 号墓地の M237 などから出土する。全長 6.1cm (新疆文物考古研究所編 1999)。類例は多くの草原地帯の墓から出土しており、内モンゴル包頭市の西園墓地 (春秋晩期から戦国早期) などがある。

II D 式 2 (図 46-12 ~ 14)

平面柳葉形は、一部の後鋒が長く伸びる刀子形である。翼部や鋌部に刻線文が施される場合もある。全長は 6.0 - 8.7cm。早い時期の遺跡から出土している。四道溝遺跡の早期のトレンチ T5:34 は全長 6.4cm (図 46-12)、オタンリク II M9:10 は全長 6.6cm、石河子紅溝からは 4 点採集 (図 46-13)。寒気溝墓地 M1:8 は全長 8.7cm など (図 46-14)。出土数は多い。時代が下るに従い、大型化していく傾向がある。

5. 考察

以上の分類を通して、新疆における鏃の変遷を整理し、各時期における特徴をまとめた。

第 1 期 紀元前 9 世紀以前

砲弾形有蓋鏃 (I aA 式) や、平面菱形を呈する管蓋両翼鏃 (I bB 式)、また平面矢羽形の扁平鋌両翼鏃 (II aB 式 1)、平面三角形の有鋌骨鏃 (II D 式) が出土する。先スキタイ期のアルジャン I 号墳などより類例が見つかっている。アルジャン I 号墳は AMS によるウィグルマッチングで、紀元前 810 ± 70 年に相当するとされる (Zaitseva et al. 1998)。また、有鋌鏃は南シベリアにおいては青銅器時代末期の出現を想定できる遺物である。新疆の上記の鏃もほぼこの年代と考えて良いだろう。

第 2 期 紀元前 8 世紀 - 前 7 世紀

銅鏃の出土が増える。蓋が無凸の鏃は、平面三角形の両翼鏃 (I aB 式 1) がある。管蓋両翼鏃は I aB 式 1 に引き続き、平面が木葉形に近くなり、やや小さくなった型式 (I bB 式 2) が出土する。管蓋に逆刺がつく場合もある (I bB 式 3)。いずれも、メリューコヴァのスキタイ I 期、初期サカ文化の最初期に相当する。

有鋌鏃では、扁平鋌をもつ平面三角形の三翼鏃 (II aC 式) の出土がはじまる。

現在、メリューコヴァによるスキタイ I 期の古墳ケレルメス 31 号墳は AMS により紀元前 606 ± 24 年という数字が得られておりほぼ従来の編年と変わらない年代であった。しかし、一方で黒海北岸を中心とするスキタイ文化の開始期を紀元前 8 世紀まで溯らせる意見もあ

るという（雪嶋 2008）。また、現在南シベリアにおけるタガール文化の年代も AMS 等の年代測定の結果、埋葬形態や遺物の編年時代は変わらないものの、タガール文化の開始期が紀元前 10 世紀まで溯る意見もある（Bokovenko 2006）。

本章では、第一段階に引き続き、AMS の年代も考慮しつつ紀元前 8 - 前 7 世紀を当段階とする。

第 3 期 紀元前 6 世紀—前 5 世紀

有蓋鏃の種類が最も多くなる時期である。オタンリク II 号墓地 M9 よりまとまって出土している。無凸蓋平面葉形鏃（I aB 式 3）や、管蓋三翼鏃（I bC 式 2）、三稜鏃（I aD 式 a）、四稜鏃（I aE 式）等が出土する。扁平鋌三翼鏃も第二期に引き続き出土し、前期と比べ鋌が 1cm 前後長くなる。

第二段階と第四段階の年代から、紀元前 6 世紀を中心とする時代と考えられる。

第 4 期 紀元前 4 世紀—前 3 世紀

有蓋三稜鏃（I aD 式 b）はやや細長くなり、管蓋三稜鏃（I bD 式 a）や管蓋四稜鏃（I bE 式）等が見られる。扁平鋌三翼鏃はさらに大型化し、6cm 前後となる。また、鉄製鏃の出現もはじまる。

メリュコヴァのスキタイ III・IV 期に相当する段階である。このなかで、IV 期のソロハ古墳に対して年代測定が行われており、紀元前 355 ± 23 年とされている（雪嶋 2008）。また、ゴルノ・アルタイのパジリク古墳も最古の 2 号墳が紀元前 288 ± 1 年とされ、パジリク文化の年代が紀元前 4 - 前 3 世紀と新しくなった。

本章ではこうした結果を踏まえ、当時期を紀元前 4 - 前 3 世紀とする。

第 5 期 紀元前 2 世紀—前 1 世紀

鉄鏃が主体となる。三翼で平面が三角形、菱形の鉄鏃（II bC 式）、青銅で翼の広い三翼鏃（I aC 式 3）は、ザバイカリエや内蒙古などの匈奴墓から出土する鏃と同型式である。匈奴の鏃が新疆からも出土しているといえる。

一方で、六角形の管蓋を持つ三稜鏃（I aD 式 2）、漢文化の遺跡において出土する鏃であり、弩に使用されたと考えられる遺物である。第五段階の墓からは武帝期の五銖銭等が共伴する。本時期を前漢併行期とすることができる。

6. 結び

以上、新疆の青銅器時代から初期鉄器時代に出土する鏃についての整理を行った。全体として新疆における鏃の変遷を明らかにすることができたといえる。

また、鏃を通して見る新疆の特性、周辺地域との交流についてもいくつかの知見を得ることができた。

新疆では一つの墓から出土する鏃は数点である。数十点におよぶ鏃が一括で出土する黒海北岸のスキタイ文化やアラル海周辺のサカ文化とは、異なる出土傾向である。同様の傾

向を示すのは南シベリアのタガール文化である。地域文化における鍬の取り扱い、新疆とその北部とのつながりを見ることができた。

しかし、その一方で、新疆において数量、バリエーションが多い青銅鍬は、II aC 式とした扁平鋌三翼鍬であり、この傾向は初期サカ文化に近い。

また、時代が下り漢代併行期になると、いわゆる匈奴の鍬が出土するとともに、漢の弩に伴う鍬の出土がある。新疆における両勢力の進出を鍬の出土からもうかがうことができる。

鍬の面からも、絶え間なく周辺の草原地帯と交流し続ける、新疆の様相を明らかにできた。今後は鍬以外の遺物についても同様に集成と分類を行いその変遷を検討することで、新疆における遺物の編年網を構築していく考えである。

(註)

1 春秋戦国時代の暦年代については、林巳奈夫(1972)を参考とした。春秋時代前期は、紀元前770—前665年、中期はそこから紀元前560年まで、後期は紀元前455年まで。戦国時代前期は紀元前350年まで、中期は紀元前245年まで、後期は前漢の前半も含めた紀元前140年までとする。

引用文献

- 鄭仁盛 2002 「楽浪土城の青銅鍬」『東京大学大学院人文社会系研究科文学部考古学研究室紀要』第17号、pp. 79-112
- 林巳奈夫 1972 『中国殷周時代の武器』京都大学人文科学研究所
- 雪嶋宏一 2008 『スキタイ騎馬遊牧国家の歴史と考古』雄山閣
- 烏魯木齊文物保護管理所・新疆文物考古研究所 1999 「烏魯木齊市柴窩堡林場II号地点墓葬的発掘」『新疆文物』1999-3・4、pp. 19-29
- 韓健業 2007 『新疆的青銅器時代和早期鉄器時代文化』文物出版社
- 吉林省文物考古研究所 1987 『榆樹老河深』文物出版社
- 新疆維吾爾自治区文化庁文物処・新疆大学歴史系文博干部専修班 1989 「新疆哈密焉不拉克墓地」『考古学報』1989-3、pp. 325-362
- 新疆維吾爾自治区文管会 1982 「新疆木壘県四道溝遺址」『考古』1982-2、pp. 113-120
- 新疆維吾爾自治区文物管理事業管理局・新疆維吾爾自治区文物考古研究所・新疆維吾爾自治区博物館・新疆新天國國際經濟技術合作(集團)有限公司主編 1999 『新疆文物古跡大觀』新疆美術攝影出版社
- 新疆考古研究所 1989 「鄯善洋海、達浪坎爾古墓群清理簡報」『新疆文物』1989-4、
轉載新疆文物考古研究所編『新疆文物考古新收穫』新疆人民出版社、pp. 186-193
- 新疆考古研究所樓蘭考古隊 1988 「樓蘭古城調查与試掘簡報」『文物』1988-7、pp. 1-22
- 新疆社会科学院考古研究所 1981 「帕米爾高原古墓」『考古学報』1981-2、pp. 199-216
- 新疆社会科学院考古研究所 1986 「新疆米泉大草灘發現石堆墓」『考古与文物』1986-1、
pp. 36-38

- 新疆特克斯縣文物管理所·新疆文物考古研究所 2005「特克斯縣恰甫其海 A 區 XV 號墓地發掘簡報」『新疆文物』 2005-4、pp. 22-33
- 新疆文物考古研究所 1999「阜康市三工鄉古墓葬發掘簡報」『新疆文物』 1999-3·4、pp. 61-66
- 新疆文物考古研究所 2001『交河溝西 1994—1996 年度考古發掘報告』新疆人民出版社
- 新疆文物考古研究所編 1999『新疆察吾呼—大型氏族墓地發掘報告』東方出版社
- 水濤 1993「新疆青銅器時代諸文化的比較研究」『國學研究』 1、pp. 447-490、北京大學
- 石岩 2008『中國北方先秦時期青銅鏃研究』黑龍江大學出版社
- 石璋如 1950「小屯殷代的成套兵器」『歷史言語研究所集刊』 22、pp. 19-84
- 石河子市軍墾博物館·新疆文物考古研究所·新疆大學歷史系 1999「石河子市南山古墓葬」『新疆文物』 1999-1 pp. 1-9
- 西北大學文博學院八九級考古班他 1998「烏魯木齊柴窩堡古墓葬發掘報告」『新疆文物』 1998-1、pp. 11-31
- 田廣金·郭素新編 1986『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社
- 中國社會科學院考古研究所新疆工作隊·新疆巴音郭楞蒙古自治州文管所 1988「和靜察吾呼溝口一號墓地發掘簡報」『考古學報』 1988-1、轉載新疆文物考古研究所編『新疆文物考古新收穫』新疆人民出版社、pp. 221-243
- 中國社會科學院考古研究所新疆隊·新疆巴音郭楞蒙古自治州文管所 1990「和靜縣察吾呼溝口三號墓地發掘簡報」『考古』 1990-10、pp. 882-889
- 中國社會科學院考古研究所新疆工作隊·新疆巴音郭楞蒙古自治州文管所 1991「新疆輪台群巴克墓葬第二、三次發掘簡報」『考古』 1991-8、pp. 684-703
- 張承安·常喜恩 1998「哈密腐殖酸廠墓地調查」『新疆文物』 1998-1、pp. 36-40
- 吐魯番地區博物館·新疆文物考古研究所 2002「新疆鄯善縣蘇貝希遺跡及墓地」『考古』 2002-6、pp. 522-537
- 吐魯番地區文物局新疆文物考古研究所 2004「鄯善縣洋海一號墓地發掘簡報」『新疆文物』 2004-1、pp. 1-27
- 吐魯番博物館編 1992『吐魯番博物館』新疆美術攝影出版社
- 北京市文物研究所編 2007『軍徒山墓地』文物出版社
- 哈密地區文管所·新疆文物考古研究所 1996「新疆哈密寒氣溝墓地發掘簡報」『新疆文物』 1996-2 pp. 23-30
- 哈密地區文管所·新疆文物考古研究所 1994「哈密—巴里坤公路改線考古調查」『新疆文物』 1994-1、pp. 5-11
- 和靜縣博物館·新疆文物考古研究所 1992「新疆和靜縣察吾呼溝一號墓地」『新疆文物』 1992-4、pp. 11-64
- 和靜縣文化館·新疆考古研究所 1988「和靜縣察吾呼溝四號墓地 1987 年度發掘簡報」『新疆文物』 1988-4、pp. 1-27
- 和靜縣民族博物館新疆文物考古研究所 1999「和靜拜勒其爾石圍墓地發掘簡報」『新疆文物』 1999-3·4、pp. 30-60

- Bokovenko 2006 The emergence of the Tagar culture, *Antiquity* 80, pp. 860-879
- Rudenko S. I. 1970 *FROZEN TOMBS OF SIBERIA*, UNIVERSITY OF CALIFORNIA PRESS,
Berkeley and Los Angeles
- Zaitseva G. I. et al. 1998 A Tree-ring and 14C Chronology of the Key Sayan-Altai Monuments,
Radiocarbon, vol.40, No.1, pp. 571-580
- Akishev Акишев К. А., Кушаев Г. А. 1963 Древняя Культура Саков и Усуней Долины Реки Или,
Издательство Академии наук Казахской ССР, Алма-Ата
- Griaznov Грязнов М. П. 1980 Аржан, Наука, Москва, Ленинград
- Davydova Давыдова А. В. 1995 Иволгинский Городище, пнкт, Петербург
- Itina Итина, М.А., Яблонский, Л.Т. 1997 Саки Нижней Сырдарьи, Росспэн, Москва
- Meliukova Мелюкова, А.И. 1964 Вооружение Скифов, Наука, Москва
- Moshkova Мошкова, М.Г. 1992 Степная полоса Азиатской части СССР в Скифо-Сарматское
Время, Наука, Москва
- Smirnov Смирнов К.Ф. 1961 Вооружение Савроматов, Наука, Москва
- Chlenova Членова Н.Л. 1967 Происхождение и Ранняя История Племен Тагарской Культуры,
Наука, Москва

図版出典

- 図 40 筆者トレース、作成
- 図 41 筆者作成
- 図 42 Moshkova 1964 より筆者作成
- 図 43 Itina 1997 p. 167 рис.70 より筆者作成
- 図 44 — 1 Griaznov 1980
— 2 北京市考古研究所 2007、p. 994 图六〇六 7, 8
— 3 Chlenova 1967、p. 263 tab. 13-22
— 4 Davydova 1995
— 5 鄭 2002、p. 82 图 2-13
— 6 吉林省文物考古研究所 1987、p. 81 图七八 6
— 7 Moshkova 1992、p. 455 tab. 105-1
- 図 45 — 1 新疆文物考古研究所編 1999、p. 140 图九八 12
— 2 新疆維吾爾自治區文化庁文物処他 1989、p. 346 图二四 4
— 3 新疆社会科学院考古研究所 1981、p. 208 图一四 2
— 4, 12 烏魯木齊文物保護管理所他 1999、p. 26 图一三 5, 6
— 5, 6 新疆考古研究所 1989、p. 191 图六 5, 6
— 7 新疆文物考古研究所 1999、p. 65 图六 10
— 8 張他 1998、p. 38 图二 14
— 9 吐魯番地区文物局他 2004a、p. 23 图四三 6

- 10 中国社会科学院考古研究所新疆工作队他 1992、p. 236 图一四 9
 - 11, 15 新疆考古研究所楼兰考古队 1988、p. 394 图四 2, 8, 1
 - 13 新疆特克斯县文物管理所他 2005、p. 31 图二〇 6
 - 14 新疆维吾尔自治区文物事业管理局他 1999、p. 340 图 0954
 - 16 中国社会科学院考古研究所新疆工作队他 1991
 - 17 石河子博物馆他 1994、p. 18 图四 7
- 图 46 — 1 新疆维吾尔自治区文物事业管理局他 1999、p. 340 图 0954
- 2 和静县民族博物馆他 1999、p. 50 图二〇 10
 - 3 西北大学文博学院八九级考古班他 1998、p. 22 图一〇 11
 - 4, 5, 8, 11, 12 新疆文物考古研究所编 1999、p. 216 图一六三 2、p. 249 图一九一 8、p. 270 图二〇七 2、p. 219 图一六五 1、p. 144 图一〇〇 7, 8
 - 6 哈密地区文管所他 1994、p. 129 图二 5
 - 7 吐鲁番地区博物馆他 2002、p. 535 图一九 5
 - 9 中国社会科学院考古研究所新疆队他 1990、p. 887 图八 6
 - 10 新疆文物考古研究所 2001、p. 30 图三三 9
 - 12 新疆维吾尔自治区文管会 1982、p. 116 图八 5
 - 13 乌鲁木齐文物保护管理所他 1999、p. 27 图一四 6
 - 14 哈密地区文管所 1996、p. 28 图六 1

第7章 新疆ウイグル自治区における鉄器の受容と展開

1. はじめに

第7章の目的は、シルクロードの要衝である新疆ウイグル自治区（以下、新疆）における鉄器の受容と展開を明らかにすることである。

新疆は中国の西北端に位置し、古来よりモノやヒト、それに伴う技術や文化が交錯した土地である。漢代の「張騫の鑿空」以前より、当地に住む人々は周辺地域との交流の中で独自の青銅器文化を築き、鉄器文化を発展させていった。特に1980年代以降発掘調査の増加に伴い、紀元前1千年紀初頭とされる鉄器が報告されるようになった（陳1989）。この鉄器出現年代は中国の他の地域と比較して数世紀ほど早く、鉄をめぐるシルクロードの交流地として、また、中国へ鉄がもたらされる経路地として、新疆出土鉄器は注目されるようになった。

本章では、新疆より漢代以前に出土する鉄器を対象として分析を行う。特に、工具や武器といった刃部を備える利器の材質が青銅器から鉄器へと移行していく様相に着目して、その変遷過程を検討した。また、近隣の草原地帯の鉄器利用の状況と比較し、新疆の鉄器をめぐる交流についても考察を加えた。新疆における鉄器の受容と展開の具体的な様相を明らかにしていく。

研究略史

まず、新疆の鉄器をめぐる研究について整理する。

新疆における鉄器の総合的な研究は陳戈の1989年の研究が最初である（陳1989）。発掘調査による資料の増加をうけ、陳戈は出土鉄器の集成と年代の検討を行った。鉄器の出土がある6遺跡に対して、放射性炭素年代を参考に、「紀元前1000—前500年、すなわちわが国内地の西周から春秋に相当する時期に、新疆では既に鉄器の使用があった（陳1989 p. 427）」とする。分析は行われていないが、新疆の鉄器は、人工鉄であろうとした。

上記の陳戈の論文をうけ、90年代以降中原の初期の鉄器をめぐる論文において、新疆の出土鉄器が注目されるようになる。これまで中原の鉄器の起源に関して、独自起源を唱える説（孔他1988 p. 545）もあったが、唐際根（唐1993）は新疆の出土資料を検討し、西方からの導入説を支持している。鍛造の人工鉄器の導入については、西周から春秋併行期に新疆を経由して中原へ、その後、鑄造鉄器は、漢代併行期に中原から新疆へという逆方向の流れがあるとした。趙化成（趙1996）や劉学堂（劉2004）も同様の見解である。

さらに、中原の漢代以前の鉄器の発展や技術について総合的に研究した白雲翔は、鍛

造技術を主体とし小型の武器工具や装飾品が多い新疆の鉄器を「西北系統」、鑄造技術を主体とし農具が多い中原の鉄器を「中原系統」として、両者の系統化を行った（白 2005 pp. 47-48）。そして、新疆の遺跡の年代問題が未だ解決していない点を指摘し、中原の製鉄起源を研究する上で、辺境地域の鉄器に関する年代研究を強化する必要があるとしている（白 2005、pp. 386-387）。

こうした白雲翔の指摘を受け、郭物は新疆出土の初期の鉄器に対して年代の再検討を行い「紀元前 9 世紀以前の確実な資料はない（郭 2007、p. 84）」としている。そして、新疆出土の木製品や土器文様の類似を根拠に、西アジアとの関連性を指摘し、新疆の鉄は、紀元前 12 世紀に小アジアから鉄冶金技術が拡散した契機に伴って新疆へもたらされたとした（郭 2007）。

一方、出現期以降の新疆における鉄器の研究は、地域文化を論じる中で言及されてきたといえる。クムル（Qumul 哈密）盆地におけるヤンブラク（Yanbulaq 焉不拉克）文化（新疆維吾爾自治区文化庁文物処他 1989、陳 1991）、トルファン（Turpan 吐魯番）盆地のスバシ（Subesi 蘇貝希）文化（陳 2001a）、天山南縁のチャウフ（Charwighul 察吾呼）文化（陳 1993・2001b、呂 1999、新疆文物考古研究所編 1999）、天山西部のイリ（Ili 伊犁）河流域文化（陳 2002）が鉄器出現以降の中心となる地域文化である。各文化の特徴を詳述する際に、出土する鉄器の器種や数量、特徴などについてまとめられている。地域文化を特徴付ける一要素として鉄器は捉えられている。

また、金属学の方面からの研究も行われている。鉄器の加工技術を探るため、金属組織の顕微鏡観察に基づく分析を、北京科技大学の梅建軍、潜偉、凌勇らが中心となって行っている。

ヤンブラク墓地出土の鉄器のうち、金属組織の観察ができた遺物は、鉄製指輪と形態不明の鉄片 2 点であり、指輪は塊鍊鉄製で、鉄片 2 点は鋼であることが確認された（Qian et al. 2002）。トルファン盆地ヤンハイ 2 号墓地 265 号墓出土の鉄製刀子（実験室番号 XJ987）は、組織観察の結果、低炭素鋼であり、鍛造成形が確認された（凌他 2008）。

漢代併行期のケリヤ河流域出土の鉄器は、16 点の組織観察が行われている。保存状態の良い鉄片 2 点（実験室番号 XJ121、XJ137）が白鑄鉄であることがわかった。他は、鑄が深刻であるものの、鉄片 3 点から鍛造組織が、おなじく鉄片 9 点から鑄造組織が観察された（北京科技大学冶金与材料史研究所他 2000）。こうした分析により、唐際根（唐 1993）の指摘する新疆における初期の塊鍊鉄利用と漢代併行期における鑄鉄利用が実証されたといえる。

これまでの新疆の鉄器についての研究をまとめると以下ようになる。

- ・新疆の最初期の鉄器は、人工鉄で塊鍊鉄、鋼が出土している。
- ・新疆の最初期の鉄器は、中原の人工鉄出土例より早いとされる。
- ・最初は、西周併行期に西方から新疆を経て中原へ塊鍊鉄が伝えられ、漢代併行期になって、鑄鉄とその熱処理技術が東方の中原から新疆へ伝わったと考えられている。

・新疆内地では、ヤンブラク文化、スバシ文化、チャウフ文化、イリ河流域文化といった地域文化毎に出土鉄器はまとめられている。

・中原と比較すると新疆の出土遺物、遺構や遺跡の年代は時期幅が大きく、年代研究が必要である。

これまでの研究史をみると、新疆の鉄器は、中原との関係の上で論じられてきたといえる。そのため、最初期の鉄器の年代や技術、器種などは常に議論されるが、その後の鉄器の展開は、地域文化の一要素としてのみ捉えられているといえる。また、技術の伝播が議論の主体であり、鉄の利用の拡大と社会との関係などもあまり論じられてはいない。出土鉄器に対する全面的な集成と整理は、1989年の陳戈以降行われておらず、新疆出土の鉄器の全体像を描ききれていない点を指摘できる。

また、新疆の年代の問題がある。現状では中原と比較できる精度で年代決定を行うのは困難であるといえる。発掘された遺跡は墓が主体であり、年代は遺物の編年ではなく放射性炭素年代に依拠するところが大きい。韓建業は、標準となる土器群を抽出し、放射性炭素年代と組み合わせることで時期区分を行い、青銅器時代から初期鉄器時代である紀元前1900年から前100年までを、5期3段階に区分した（第5章、韓2005・2007）。一つの時期が約500年の幅をもつが、全体の文化の変遷は追うことができる。新疆の土器は、紀元前2千年紀前半から前1千年紀末にむかって彩陶から無紋土器へと変遷する。新疆の出土鉄器の年代は、地域文化の中で共伴する遺物や遺構の特徴から、時期的な位置づけをするのが現状では妥当である。

周辺地域の様相

次に、新疆に隣接する中国北方草原地帯と南シベリアの鉄器の状況を整理する。

・中国北方草原地帯（第2章）

春秋時代前期より甘粛省で銅柄鉄剣が出土する（劉他1981）。刃部の鉄は塊錬浸炭鋼であった（韓1998）。春秋時代中後期には内蒙古で小型工具や装飾品として鉄器が出土する（田他1986）。春秋時代後期から戦国時代にかけて、鉄器の器種や数量が北方草原地帯でも増加するが、利器の主体はやはり青銅器であった。前漢代に入り、工具武器類が鉄器化し、鑄鉄製品も出土する（田中2010b）。

・南シベリア（第3章）

最も古い鉄器は隕鉄製であり紀元前2千年紀前半のアファナシェヴォ文化の墓より、ブレスレットの連珠として出土している（Badetskaia 1986）。その後しばらくは、アンドロノヴォ文化、カラスク文化といった青銅器文化が栄える。紀元前7世紀後半になり、トゥバのアルジャン2号墳より金柄鉄剣、金象嵌鉄鏃など豪華に装飾された鉄器が出土する（Ermitazh 2004）。

そして、ミヌシンスク盆地のタガール文化サラガシュ期において鉄柄銅剣、銅柄鉄剣などが出土し、鉄矛、鉄製刀子などの鉄器利用が拡大する（Chlenova1967）。しかし、利器の

主体は青銅器であり、青銅短剣、青銅鶴嘴斧、青銅刀子の利用が続いている。そして、前2世紀のタガール文化テシ期に、工具武器類が鉄器化する(田中2010a)。引き続きタシュティク文化には鉄冶金関係の遺構も見つかっている(Sunchugashev1979)。

それでは、こうした隣接地域との関係を踏まえて、以下、新疆の鉄器の受容と展開を検討する。

材料と方法

本章では漢代併行期以前に出土する鉄器を分析の対象とし、地域ごとに出土鉄器を集成した。併せて、同一遺跡の同一時期の墓群より出土する青銅器も器種と数量をまとめ、鉄器と対比できるようグラフ化した。それを時期ごとに並べ、武器や工具における青銅から鉄への材質変化や、器種構成の変遷を検討した。取り扱った資料については、表にまとめである(表18～表20)。

2. 地域・時期区分と新疆出土の鉄器

新疆は現在、地理的、文化的要因により、チャウフ文化、イリ河流域文化といった複数の地域文化が設定されている(第5章、陳1995、水1993、呂他2001、韓2007)。それぞれの地域文化を代表する墓地については研究者間で共通しているが、各地域文化の分布範囲に見解の差があり、また、遺跡の少ないジュンガル盆地西北縁、天山北麓、ウルムチ周辺、パミール高原などの位置づけが異なる。

鉄器出現以降の地域文化を考えるならば、自然環境、土器などの器種や文様構成、埋葬形態などを基準にクムル盆地・バルクル(Barkol 巴里坤)草原地区、トルファン盆地・中部天山北麓地区、天山南縁地区、西部天山、イリ河流域地区、ジュンガル(Jungghar 准噶爾)盆地西北地区、パミール(Pamir 帕米爾)高原地区、タリム(Tarim 塔里木)盆地南縁地区、ロプノール地区に区分するのが妥当であるといえる。これらの地域を鉄器利用の発展に着目して、変遷過程を以下の5地域にまとめて説明する。

①クムル盆地・バルクル草原地区、②トルファン盆地・中部天山北麓地区、③天山南麓地区、④イリ河流域・ジュンガル盆地西北地区、⑤パミール高原・タリム盆地南縁地区である(図47)。

以下に時期区分と年代、および出土鉄器を述べる。

①クムル盆地・バルクル草原地区

当地域は新疆東部のクムル盆地とその北部天山を越えたバルクル草原を範囲とする。地理的には南北に分かれるが、土器の文様の類似などから一つの文化圏として捉えることができる。青銅器時代には、クムル市の天山北路墓地や南湾墓地など大規模な墓地が形成さ

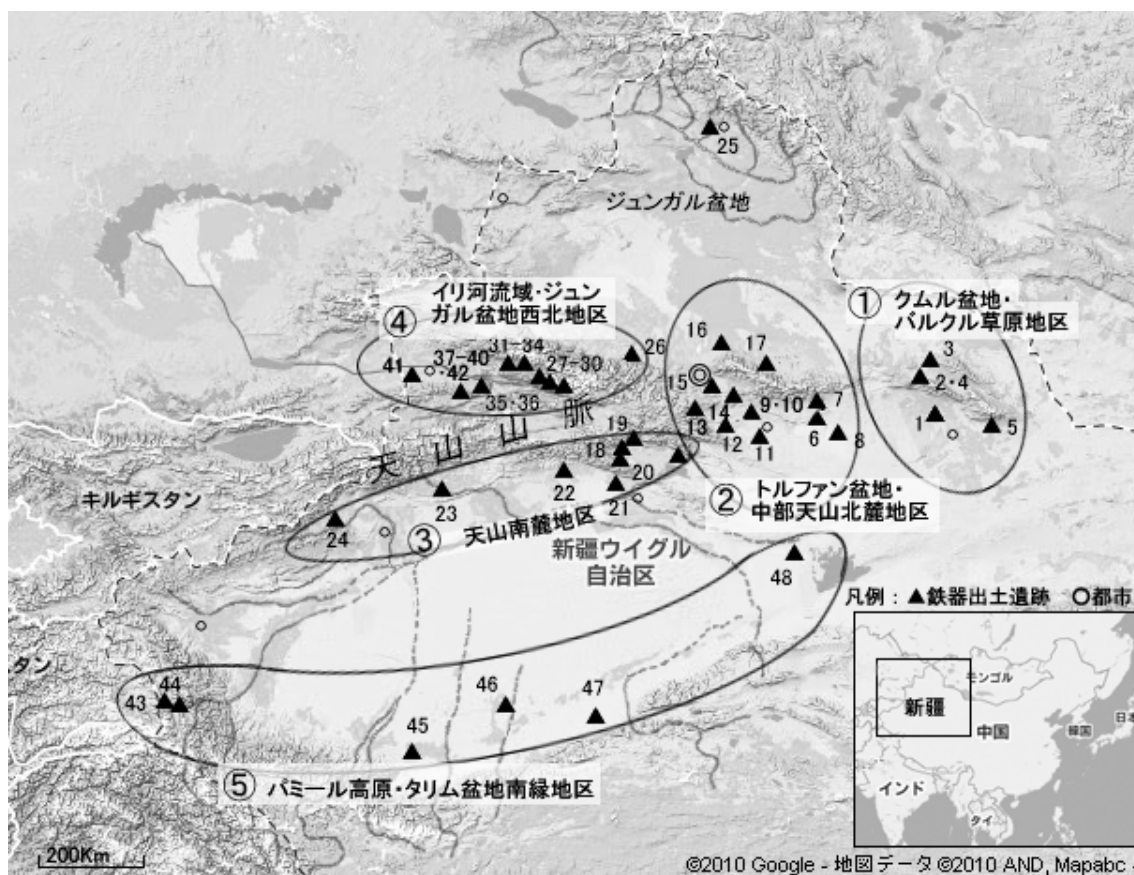


図 47 新疆ウイグル自治区における遺跡の分布と地域区分

①クムル盆地・バルクル草原地区、②トルファン盆地・中部天山北麓地区、③天山南麓地区、④イリ河流域地区、⑤パミール高原・タリム盆地南縁地区

1. ヤンブラク墓地、2. 小東溝南口墓地、3. 東黒溝墓地、4. 黒溝梁墓地、5. 上廟爾溝 I 墓地、6. ヤンハイ墓地、7. スバシ墓地、8. 三箇橋墓地、9. 交河故城溝北墓地、10. 溝西墓地、11. アイディンクル墓地、12. ボストン墓地、13. アラゴウ墓地、14. オタンリク墓地、15. ウランバイ墓地、16. 大草灘墓地、17. 大龍口墓地、18. チャウフ墓地、19. ハブチガン墓地、20. バルチル墓地、21. 上戸溝墓地、22. チュンバク墓地、23. ボズドン墓地、24. クランサリク墓地、25. クルムチ墓地、26. 南山墓地、27. 七十一団一連漁塘遺跡、28. キュネス種羊場墓地、29. 黒山頭墓地、30. トムルク墓地、31. チョンクク墓地、32. カラトパ墓地、33. チレントハイ、34. ジャルクスカイント墓地、35. イルグダイ墓地、36. 紅旗磚廠、37. イェシクリク墓地、38. 山口墓地、39. 一牧場、40. 波馬墓地、41. スドンブラク墓地、42. チブチハイ墓地、43. シャンババイ墓地、44. 下坂板墓地、45. サンプラー墓地、46. ザグシルク墓地、47. ニヤ遺跡、48. 楼蘭平台墓地

れ、呂恩国らによって4期に時期区分されている（呂他 2001）。次の時代には、クムル盆地を中心にヤンブラク墓地を標準とするヤンブラク文化が設定されている（新疆維吾爾自治区文化庁文物処他 1989、陳 1991）。

ヤンブラク文化の墓地の特徴は、日干しレンガを用いた長方形堅穴土坑墓、長方形堅穴二層台墓に、側臥屈肢葬、複数合葬が主流であるが単人葬もある。頭位は東南向きが多い。土器は夾砂紅陶と赤色のスリップに黒色顔料で文様を描く紅衣黒彩の彩陶が多く、腹耳壺や豆が特徴的である。鉢、単耳杯、単耳罐、双耳罐、碗が見られる。文様は曲線紋、鋸齒紋、水波紋、S字紋、三角紋、十字双鈎紋がある。青銅器は武器、工具が中心で、他に石器、木器などがある（陳 1995）。

ヤンブラク文化の時期区分は、標準遺跡であるヤンブラク墓地の編年に異論が多い¹ため、研究者間で違いが大きい。ヤンブラク墓地の発掘報告では、埋葬形態の変遷を根拠に3期に区分されている（新疆維吾爾自治区文化庁文物処他 1989）。しかし、埋葬形態の型式設定やその編年、また放射性炭素年代による疑問点が多く、報告書の編年とは異なる時期区分、年代が提示されている（王他 1990、李 1997、邵 2006）。現状で公表されている資料では、これ以上の論を進めることは困難である。本章では、ヤンブラク墓地を時期区分せずの一つの時期にまとめることとする。そうすると、邵秋会による文化区分の1・2期（邵 2006）、韓建業区分の第2－4期に相当することとなる（韓 2005・2007）。また、前章の第5章で検討した鍬編年では、第2期に相当する。

よって、邵秋会のヤンブラク文化1・2期に相当するヤンブラク墓地全体をクムル盆地・バルクル草原地区第一期とする。次に鉄器が出土するのは戦国から漢代併行期の小東溝南口墓地（哈密地区文管所他 1994）であり、本章では第二期とする。続いて漢代併行期のバルクル県東黒溝遺跡（西北大学文化遺産与考古学研究中心他 2007）、黒溝梁墓地（哈密地区文管所他 1994）、クムル市上廟爾溝村I号墓地（哈密地区文管所他 2004）を本章の第三期とする。上廟爾溝村I号墓地は、邵秋会のヤンブラク文化3期、第5章の第5期であり、本章の第三期と同じ時期になる。

・クムル盆地・バルクル草原第一期

新疆で最も古い鉄器出土遺跡の一つが、新疆東部クムル市のヤンブラク墓地である。1986年の調査で76基の墓が発掘調査され、8点の鉄器が出土している。75号墓の上層墓より鉄製指輪と鉄剣の先端部、鉄片が出土し、31号墓からは鉄製刀子、72号墓からは鉄片3点が報告されている（図48、新疆維吾爾自治区文化庁文物処他 1989）。金属組織の観察の結果、鉄製指輪は塊鍊鉄であり、72号墓出土の2点の鉄片には鋼組織が観察された（Qian et al. 2002 p190）。

鉄製刀子が出土する31号墓は、出土木片より放射性炭素年代を測定しており、較正年代で3240 ± 135B.P.となる。鉄器の伴出を考えると、周辺地域と比較して極端に早い年代となり、現状ではこの測定年代は保留したい。また、75号墓、72号墓からは曲柄青銅刀子が出土している（図48-5～7）。この型式の青銅刀子は、共伴する青銅器より西周中後期とされる北京市西拔子村遺跡の窖藏（図48-8, 9、北京市文物管理处 1979、p. 227）や、春秋前期の玉皇廟墓地（図48-10、北京市文物研究所山戎文化考古隊 1989）からも見つかっている。現在、放射性炭素年代を根拠に想定されているヤンブラク墓地の年代は、紀元前13－前6世紀（新疆維吾爾自治区文化庁文物処他 1989）であるが、鉄器の出土する年代は、共伴する青銅刀子などの青銅器から判断して西周中期併行、早くとも紀元前9世紀以降と考える。またこの時期にすでに鋼片が出土していることも重要である。

・クムル盆地・バルクル草原第二期

クムル市からバルクル市へと抜ける2912道路沿いに位置していた小東溝南口墓地は、石

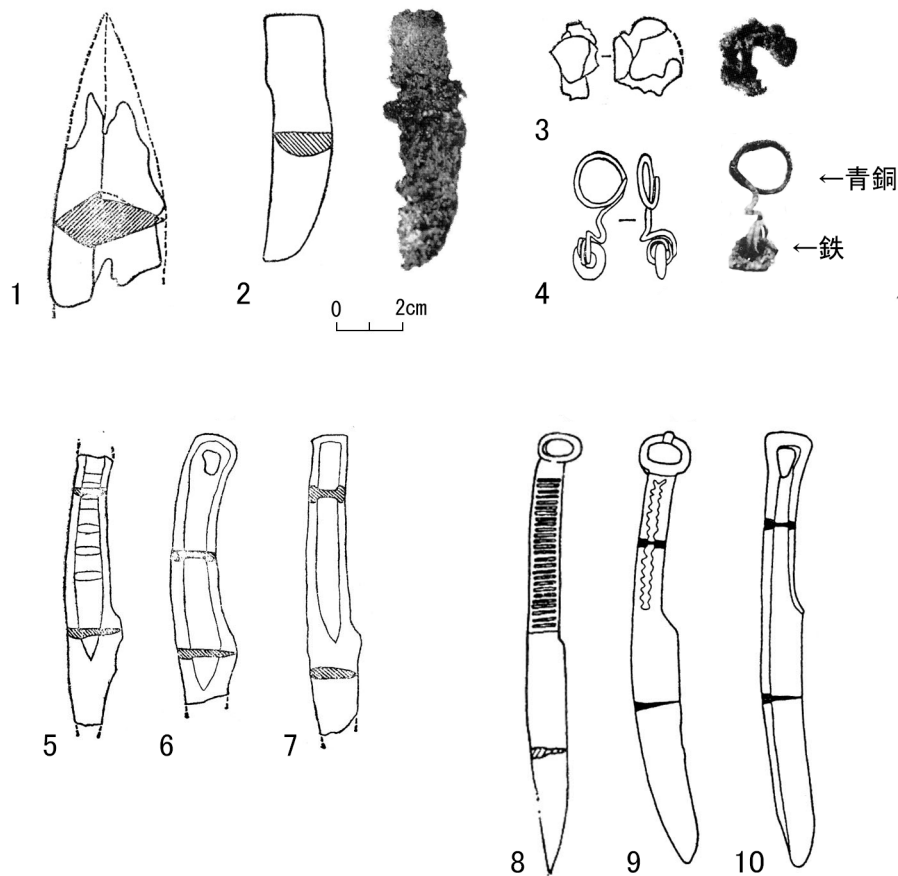


図 48 ヤンプラク墓地出土の鉄器と青銅器

1-4. ヤンプラク墓地出土鉄器：1. 鉄剣 M75:28 (残長 6.7、幅 3.3)、2. 鉄製刀子 M31:5 (残長 7.7、幅 2)、
3. 鉄製指環 M75:26 (直径 2.3)、4. 鉄製垂飾付き青銅耳環 M 31:7 (鉄環直径 1.1)、単位 cm。
5-9. 青銅刀子：5-7. ヤンプラク墓地出土 M33:1、M35:2、M75:36、8 - 10. 草原地帯の出土刀子：8. 西拔
子村出土、9, 10. 玉皇廟墓地 M86:8, M300:13

堆墓が 16 基あった。触覚式鉄製短剣や鉄銜、鉄鑣が採集されている (図 49-1 ~ 4)。鉄製短剣は、類似する格を備える環頭の鉄剣が内蒙古毛慶溝墓地から出土しており、田広金・郭素新は戦国後期から前漢としている (田他 1986、p. 14)。また、出土する両翼式で平面菱形の鉄鑣は、漢代の内蒙古補洞溝墓からも出土がある (田他 1986、p. 398)。

周辺地域との比較より、戦国後期から漢代の遺物と考えられる。

・クムル盆地・バルクル草原第三期

邵秋会ヤンプラク文化 3 期に、また第 5 章の鑣編年の第 5 期に相当する上廟爾溝村 I 号墓地や漢代併行期の東黒溝遺跡、黒溝梁墓地からは鉄製刀子や鉄錐 (図 49-5 ~ 7) や鉄鑣 (図 49-9) などの工具・武器、鉄銜などの馬具、鉄環、鉄管 (図 49-8) などの装飾品が出土している。鉄製刀子が計 9 点と多く、鉄鑣も 6 点以上見つかった。

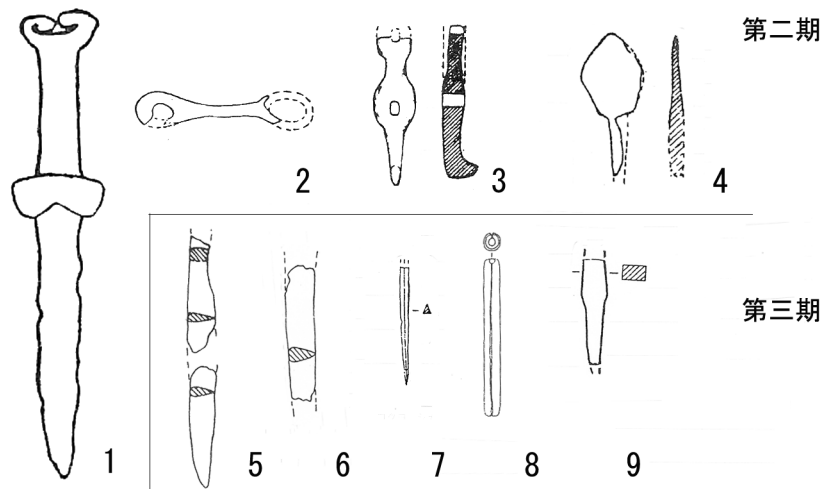


図 49 クムル盆地・バルクル草原第二・第三期の鉄器

第二期：小東溝南口墓地、1. 鉄製短剣（全長 28、刃幅 2.6、柄幅 5.5）、2. 鉄銜（残長 8.8cm）、3. 鉄（残長 7.9cm）、4. 鉄鏃（残長 7.5）

第三期：上廟爾溝村 I 号墓地、5-6. 鉄製刀子 M14:61（幅 1.4）、M14:13（残長 8.1、幅 1.8）、7. 鉄錐 M6:2（残長 4.8）、8. 鉄管 M14:56（長 9、径 1.0）、9. 鉄鏃 M14:57（残長 5.2）、縮尺不同、単位 cm

②トルファン盆地・中部天山北麓地区

トルファン盆地・中部天山北麓地区は陳戈による紀元前 1000 年から紀元前後まで続くスバシ文化（陳 2001a）や、トルファン盆地を中心とする車師文化（ニヤーズ 2007）が設定されている。地域文化の範囲として天山の中部北麓を同一文化圏に含む考え（陳 2001a、韓 2007）と、別の地域文化とする考え（安 1996、龔 1997、Mei2000）があるが、本稿では、土器文様の類似などを根拠としてスバシ文化の同一圏内とする。よって、ここでは天山山脈中部のボゴダ（Boghda 博格達）峰南北両斜面に分布する遺跡から出土する鉄器を対象とした。北部はグチュン（Guchung 奇台）県からウルムチ市、南部はトルファン盆地を包括する。

スバシ文化はピチャン（Pichan 鄯善）県スバシ墓地を標準とするが、他にヤンハイ（Yankhay 洋海）墓地など大型の墓地が存在する。スバシ文化の墓は竪穴土坑墓か竪穴偏室墓が主で、単人葬、合葬ともにあり、一次葬か二次葬か、および埋葬姿勢などは不定である。土器の主体は夾砂紅陶で彩陶も多い。彩陶は紅衣黒彩が主体で、三角紋、網格紋、渦紋、竪条紋、水波紋、鋸齒紋、弧線紋、短線紋などが描かれる。主要器種は、単耳罐、単耳杯、単耳壺、単耳豆、双耳甕、双耳釜などである。青銅器と鉄器の出土が多い（陳 2001a）。

時期については、陳戈は放射性炭素年代より紀元前 1000 年から紀元前後としているが分期は行っていない（陳 2001a）。韓建業は、スバシ文化を紀元前 1100 年～前 100 年まで 3 期に区分する（韓 2007）。本章では、前述した第 5 章の鏃編年で第 1、第 2 期となるヤンハイ I 号墓地を代表としてトルファン盆地・中部天山北麓地区第一期とする。また第 5 章鏃編年第五段階の漢代併行期のヤンハイ III 号墓地を代表として第三期とし、その間を第二

期とする。第二期は、春秋後期から戦国併行期とされる墓が主体となる。

・トルファン盆地・中部天山北麓第一期

第一期は、ピチャン県ヤンハイ I 号墓地、II 号墓地 (吐魯番地区文物局他 2004a, b) とする。

ヤンハイ墓地は、トルファン盆地東部の火焰山南麓ゴビ灘上に位置する。2003 年に I , II , III 号墓地の盗掘にともなう緊急発掘調査が行われた。

I 号墓地は 209 基が調査され、銅鉄複合器が 1 点出土している (図 50-3)。出土したのは弧状を呈する丸い鉄棒に両端と中央に青銅を飾る銅鉄複合器であり、帯扣とされる²。銅鉄複合器の出土した 5 号墓からは、曲線を呈する青銅刀子 (図 50-1) と「末端が鐙形を呈する青銅銜 (図 50-2)」が共伴する。特に青銅銜は広く草原地帯で利用された型式 (図 53-12) で、初期サカ文化の南タギスケンやタスモラ文化に類例がある (Moshkova1992)。馬具の型式から、紀元前 7 - 前 6 世紀ごろと考えられる。

続く時期のヤンハイ II 号墓地からも鉄製刀子 2 点が出土している。報告書では墓の型式分類から I 号墓地よりやや新しい時期とされる (吐魯番地区文物局他 2004b)。

・トルファン盆地・中部天山北麓第二期

第二期は、ウルムチ市オタンリク (Otanliq 柴窩堡) I、II、III、IV 号墓地 (烏魯木齊文物保護管理所他 2000・2003)、ウランバイ (Ulanbay 烏拉泊) 墓地 (新疆文物考古研究所他 1998)、ミンブラク (Minblaq 米泉) 県大草灘墓地 (新疆社会科学院考古研究所 1986)、ピチャン県スバシ I 号墓地豎穴土壙墓 (吐魯番地区文管所他 1993)・スバシ III 号墓地 (吐魯番地区博物館他 1994)、三個橋墓地 1 類墓 (鄯善県文化局他 1997)、ジムサル (Jimsar 吉木薩爾) 県大龍口墓地 (吉木薩爾県文物管理所他 1994)、トクスン (Toqsun 扎克遜) 県ボストン (Bositun 博斯坦) 墓地 (吐魯番地区文物局 1996) である。

第二期とした遺跡のうち、漢代まで継続する墓地もあるが現状での判別が難しいため、ここでは第二期に配置した。第二期の出土鉄器は、鉄製工具・武器として、刀子 (図 51-1・2)、錐、釘、針、鏃、鉄製装飾品として簪、泡、環、帯鉤、飾板などが出土する。数量、器種ともに増加している。

これらの墓は報告書中で春秋戦国期とあり、放射性炭素年代などより主として戦国時代併行期とされる。出土する青銅器をみるとオタンリク II 号墓地からは有蓋三角鏃などが出土しており、第 6 章で論じた鏃編年の第 3 期に相当する。共伴する青銅器などから、春秋

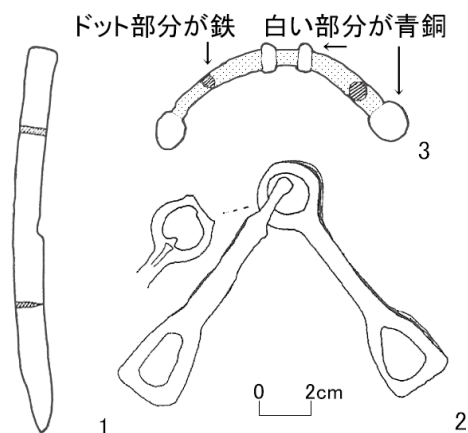


図 50 ヤンハイ I 号墓地 5 号墓出土の鉄器と青銅器

1. 青銅刀子 M5:6 (長 17、刃幅 1.4)、2. 青銅銜 M5:4 (長 22.1)、3. 銅鉄複合帯扣 M5:4 (長 9.6、直径 0.8)、単位 cm

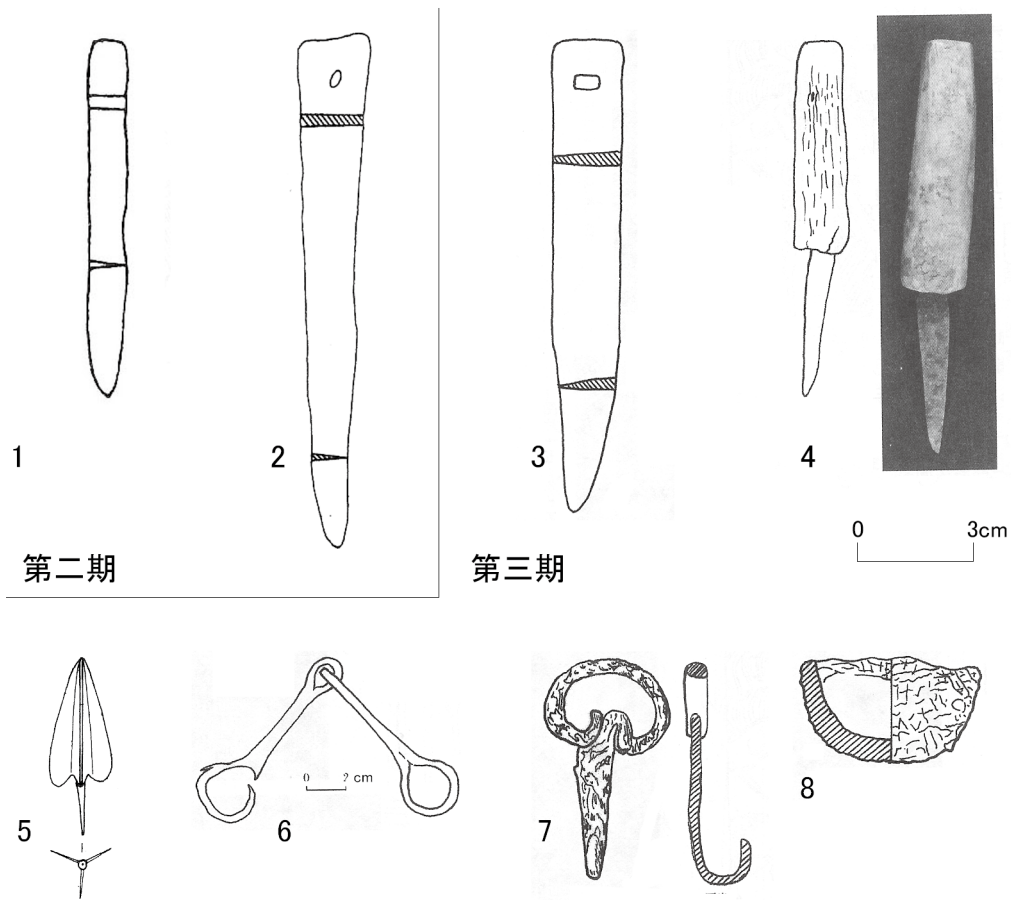


図 51 トルファン盆地出土の鉄器

第二期：スバシⅢ号墓地、1-2. 鉄製刀子 M18:3 (長 9.2、幅 1)、M13:2 (長 12、幅 1.7)

第三期：スバシⅠ号墓地、5. 鉄鋏、ヤンハイⅢ号墓地、3. 鉄製刀子 M339:9(1 長 12.2、幅 1.8)、4. 鉄錐 M376:6(全長 9.2、鉄刃部 3.7)、6. 鉄銜 M301:1(長 18.8)、7. 鉄製帯鉤 M335:7(長 5.8 幅 3.2)、8. 鉄杯 M359:5 (高 2.7、口径 4.8)、単位 cm

時代後半から戦国時代併行期とする。

・トルファン盆地・中部天山北麓第三期

第三期はスバシⅠ号墓地偏室墓、ウルムチ市アイディンクル (Ayding 艾丁湖) 墓地 (李他 1982)、ヤンハイⅢ号墓地、交河故城溝北墓地 (連合国教科文組織駐中国代表処編 1998)、溝西墓地 (新疆文物考古研究所 2001)、アラゴウ (Alghuy 阿拉溝) 木槨墓 (新疆社会科学院考古研究所 1981a) である。第三期の墓地は、無紋土器が主体となり、第 5 章で第五段階とした鉄鋏が数多く出土する。また、五銖銭の出土がみられるようになり、漢代併行期である。

第三期は、第二期同様に鉄製刀子や鉄錐などの工具類 (図 51-3、4) の出土が増加し、さらに鉄銜 (図 51-6) などの馬具類が新しく現れる。また第二期では出土のなかった鉄鋏が、第三期になると 15 点以上出土するなど著しく増加する (図 51-5)。また、鉄杯など鉄製容

器（図 51-8）が出土する。鉄鏃には三翼鏃もあり、鑄造製と考えられる。また、鉄杯も鑄造によると判断できる。この時期に鑄鉄の出土が始まる。

③天山南麓地区

天山南麓地域は天山山脈の南麓一帯に位置する。チャウフ墓地に代表される大型墓地を中心に、チャウフ文化が設定されている（新疆文物考古研究所編 1999、呂 1999、陳 2001b）。察吾呼文化の墓は地表に漏斗型の石囲いをもち、地下に石室墓がある。初期は単人葬が多いが、後に合葬墓が主体となり、仰臥屈肢葬が多い。土器は注ぎ口をそなえる帯流罐、帯流杯が主体である。夾砂紅陶のほか、彩陶も多く出土し、黄白衣紅彩が主体である。文様は連続菱形紋、網格紋、三角紋、格子紋、渦紋、横帯紋などが描かれる。青銅器の出土が、器種、数量ともに多い。チャウフ墓地は 4 期 6 段に編年され、放射性炭素年代により紀元前 9 から前 6 世紀とされている（呂他 2001、新疆文物考古研究所編 1999）。韓建業はタクラマカン砂漠南縁のザグンルク墓地やサンンプラー墓地も当文化に含めて考えているため、紀元前 800 - 前 100 年をチャウフ溝口文化として 2 期に区分している（韓 2007）。本章では、天山山脈南麓の和静県からアクチ（Aqchi 阿合奇）県までを分布範囲とする。

第一期をチャウフ文化の 1、2 期に相当する時期とする。第 5 章で言及した砲弾型の鏃や、平面が葉形の有蓋鏃が出土しており、鏃編年の第一段階となる。続くチャウフ文化 3、4 期および戦国時代併行期を第二期とする。第二期は、鏃編年の第三、四段階にみられる有鋌鏃の出土がある。無紋土器が主体となるチャウフⅢ号墓地は鏃編年の第五段階とした鉄鏃の出土がある。よって、漢代以降を第三期とする。

・天山南麓第一期

鉄器の出土がある遺跡は、チャウフⅣ号墓地 1 期・チャウフⅠ号墓地 2 期（新疆文物考古研究所編 1999）、ルンタイ（Luntai 輪台）県チュンバク（Chong bakh 群巴克）墓地（中国社会科学院考古研究所新疆工作隊他 1991）、和静県バルチル（Balchir 拜勒其爾）墓地（和静県民族博物館他 1999）である。

チャウフ墓地は天山山脈の中部南麓和静県に位置する大型墓地である。Ⅳ号墓地の 1 期の墓より鉄器の出土がある（図 52-1）。1 期の墓は 152 基あるが、その内の 98 号墓より鉄製刀子が 1 点のみ出土する。

Ⅳ号墓地 1 期の墓からは、「付属孔をともなう末端が鐙形の青銅銜（図 52-2）」と「一端が丸く膨らみ、同じ方向の三孔を持つ骨鏃（図 52-3）」が出土する。この銜と鏃の組み合わせの類例は、南シベリアのトゥバ共和国、アルジャンⅠ号墳から出土している（図 52-7・8、Gryaznov1980）。アルジャンⅠ号墳は、スキタイ式動物文様の東方起源の根拠として注目されていた墓であり、放射性炭素年代測定を行った結果、その較正年代は、95% の確率で紀元前 885 - 前 790 年の範囲にはいり、紀元前 810 年がピークである（Zaitseva et al. 1998）。青銅器などに基づく従来の年代観と齟齬がなく、紀元前 9 世紀 - 前 8 世紀前

半は信頼できる年代である。よって、チャウフIV号墓地1期は紀元前9世紀から前8世紀を含む時期であるといえる。

また、チャウフI号墓地2期の墓からも鉄器の出土がある。I号墓地からは鉄製刀子1点と形態不明の鉄片1点が出土する。ハブチガン墓地は、天山南麓に位置し、チャウフ文化に属する墓地である。42基が調査されている。鉄製耳環が1点出土している。直径2.5cmで、ラップ形を呈する(図52-1)。チャウフ墓地の初期と比較し、彩陶の数も少なく、年代はチャウフ文化第2-3期に相当するといえる。

チュンバク墓地は天山山脈南麓ゴビ灘にある。刀子を中心に、鉄器が20点以上出土している。I号墓地からは、27号墓を中心に鉄製刀子、鉄錐(図52-2)などの工具類が出土し、他に鉄鎌(図52-6)や、銅柄鉄剣(図52-8)も見つかっている。この銅柄鉄剣(I M17:28)は、剣身と長い茎が鉄製で、青銅格、青銅柄頭、青銅の柄を持つ。銅柄は、鉄の茎を差し込む形態で、透かし状になっている。全長26.5cm、刃長14.5cm、幅3.8cmである(図52-8)。こうした鉄製の茎を差し込む青銅柄をもつ銅柄鉄剣は、南シベリアのタガール文化のサラガシュ期に数多くみられ、紀元前6世紀ごろとされる(図53-10, 11, Chlenova 1967)。

また、I号墓地より出土する青銅銜(M5c:2)は、銜外環が鐙形で銜枝上に格子模様をもつ(図52-9)。類例が南タギスケンより出土する青銅銜(1組1類2型1式)にあり、紀元前7-前6世紀とされる(Itina1997 pp.54-56)。他にも中央カザフスタンのタスモラ文化にも、類似例の出土があり紀元前7-前6世紀とされる(Moshkova1992, p.134, 図52-12)。チュンバクI号墓地は放射性炭素年代より紀元前955-前585年(中国社会科学院考古研究所新疆隊他1991)とされているが、青銅器の比較により紀元前7-前6世紀と判断

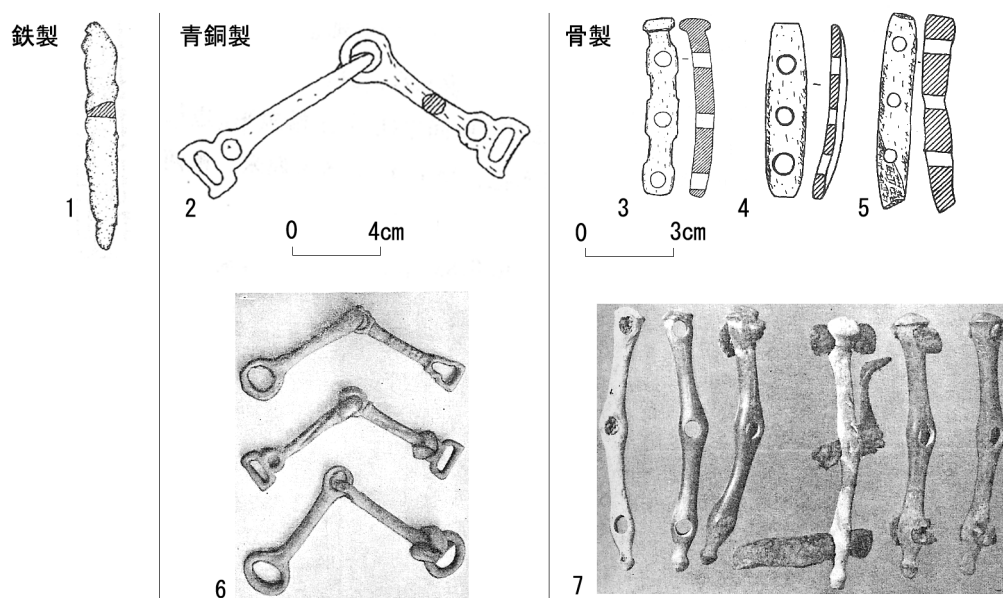


図52 チャウフIV号墓地出土鉄器と青銅器

チャウフIV号墓地出土：1. 鉄製刀子 MM98:23(残長 10.0、幅 1.4cm)、2. 青銅銜 M114:6、3-5. 骨鏢 M129:10, M93:1, M113:6

アルジャンI号墓出土：6. 青銅銜, 7. 骨鏢

する。ほぼ同時期のⅡ号墓地からも、鉄製刀子（図6.7-4,5）、鉄錐（図6.7-3）、鉄鎌（図6.7-7）の出土がある。

・天山南麓第二期

第二期は、チャウフⅠ号墓地3期、Ⅱ号墓地第3・4期、アクチ県クランサリク(Kulansariku 庫蘭薩日克)墓地（新疆文物研究所1995）である。チャウフⅠ号墓地3期、Ⅱ号墓地3・4期の墓からは鉄製刀子が出土している。しかし、青銅武器・工具が119点出土するのに対して、鉄製武器・工具は15点と、青銅器の出土量が圧倒的に多い。鉄器は器種も4器種総計17点と、新疆の他の地域と比べて少ないのが特徴的である。

・天山南麓第三期

第三期は上戸郷墓地（巴音郭楞蒙古自治州文物保護管理所1999）、温宿県ボズドン(Bozdong 包孜東)墓地（温宿県文化館他1986）、チャウフ3号墓地である。第三期の上戸郷墓地、ボズドン墓地からは、鉄製刀子が11点、鉄鍬が19点とまとめて出土するようになる。第6章鍬編年第5期にあたり、特に鉄鍬など消耗品として利用される鉄器が増加するといえる。

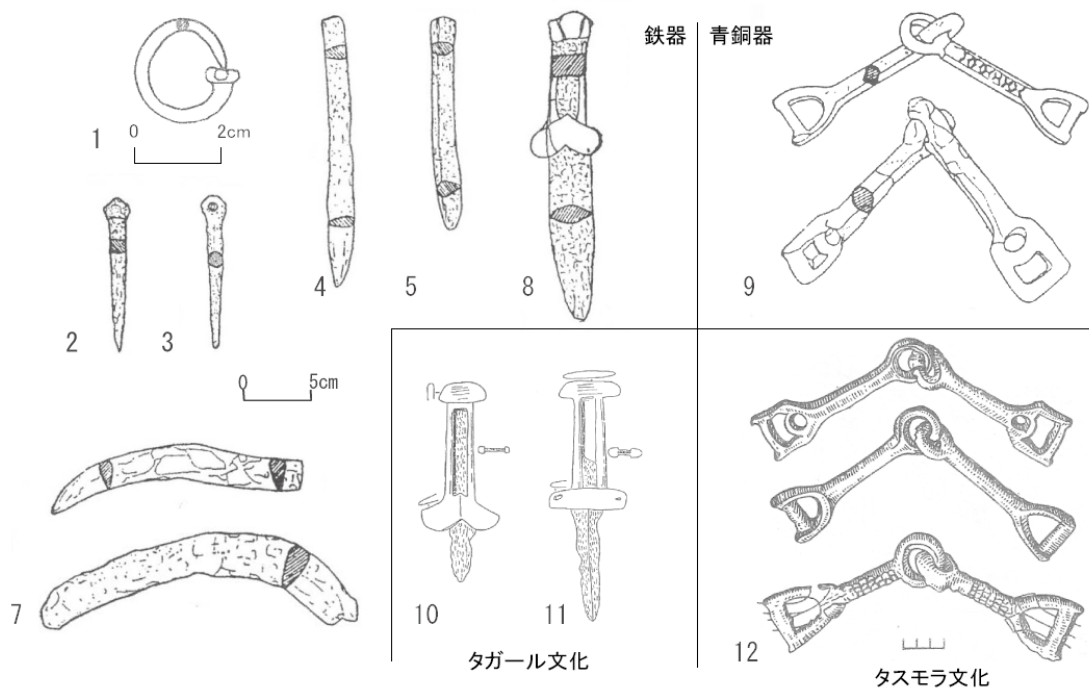


図53 チャブチガン、チュンバク墓地出土の鉄器と青銅器

1. ハブチガンⅠ：鉄製耳環 M6:2（直径2.5）、2-3. チュンバク墓地：2・3. 鉄錐Ⅰ M27A:8（長12.4、直径1.3）、Ⅱ M12:3（長13.8、直径1.5）、4・5. 鉄製刀子Ⅱ M4D:3（長23.6、幅2.2）、Ⅱ M7:28（長18.9、幅2.2）、6・7 鉄鎌Ⅰ M27A:8（長21、幅2.7）、Ⅱ M10:25（残長27.8、幅3.6）、8. 銅鉄複合短剣Ⅰ M17:28（長26.5、刃幅3.8）、9. 青銅銜Ⅰ M5C:2（長18.2）、Ⅰ M9:2（長20.8）、10・11. タガル文化出土の銅柄鉄剣、12. タスモラ文化出土の青銅銜

④イリ河流域・ジュンガル盆地西北地区

新疆西部のイリ河流域を中心とする地域である。吉林台ダムの開発により、ニルカ県で多くの墓が調査された。かつては烏孫文化とも呼ばれていたが（穆他 1983）、近年はイリ河流域文化（陳 2002）が用いられている。本章では鉄器文化の範囲として、草原地帯であるアルタイ山脈、タルバガタイ地域、ジュンガル盆地の西北部を含めた地域とする。

当文化はチョンクク（Qiongkeke 窮科克）墓地やスドンブラク（Sudongbulaq 索墩布拉克）墓地を代表とできる。墓地の特徴は共通性が高く、上部構造が石堆墓か石囲墓で、堅穴土壙墓あるいは堅穴偏室墓、頭位方向が西向きで仰臥伸展単人葬を基本形態とする。墳丘下に墓壙が1－3基ある。副葬品は少なく、被葬者の頭部付近か体の横においた土製または木製の容器上に羊の骨とともに鉄製刀子をのせている（図54-7）。土器は無耳の壺や鉢、盆が多いが、単耳罐もあり、夾砂紅陶と彩陶がある。彩陶は、白衣褐彩で三角紋、格子紋、平行線紋などの幾何学紋が主体である。

イリ河流域文化の年代は、陳戈によって放射性炭素年代を参照として紀元前800年－紀元前後に位置づけられている（陳 2002）。全期間を通じて類似性が高く、変化が少ないが、本章では土器や金属器などの副葬品、埋葬方法から時期区分を行い、彩陶が多く堅穴土壙墓が主体となる墓地を第一期、無紋土器が中心となり偏室墓が主体で、頭骨変形などの特徴のある墓を漢代以降（新疆文物考古研究所 2006a）の第二期とした。

・イリ河流域第一期

第一期はアルタイ（Altay 阿勒泰）市クルムチ（Keremchi 克爾木齊）墓地堅穴土壙墓（新疆社会科学院考古研究所 1981b）、ニルカ（Nilqa 尼勒克）県チョンクク I 号墓地堅穴偏室墓・堅穴石室墓（新疆文物考古研究所 2002）、カラトパ（Qaratopa 哈拉凶拜）墓地（王他 1988）、ジャルクスカイント（Jialekesikayinte 加勒克斯卡茵特）山北麓墓地（伊犁哈萨克自治州文物局他 2007）、チレントハイ（Qirentuohai 奇仁托海）墓地（新疆文物考古研究所 2004a）、トックズタラ（Toquztara 鞏留）県イルグダイ（Yilegedai 伊勒格代）墓地・紅旗磚廠墓地（新疆文物考古研究所 2005a）、山口墓地（新疆文物考古研究所 2006a）、チャプチャル（Chapchal 察布查爾）県スドンブラク墓地（新疆文物考古研究所 1988b）、キュネス（Kunas 新源）県黒山頭（張 1989）、トムルク（Tomruluk 鉄木里克）墓地（新疆文物考古研究所 1988a）、石河子市南山墓地（石河子市軍墾博物館他 1999）である。一部、第二期まで継続する墓地もあるが、区分が困難なため第一期に含めている。年代について、チョンクク墓地の堅穴偏室墓 M11 は放射性炭素年代で紀元前 981－前 830 年と、新疆全体の堅穴偏室墓からかけ離れて早いのでここでは保留する。スドンブラク墓地が放射性炭素年代より紀元前 5－前 3 世紀、ジャルクスカイント山北麓墓地が放射性炭素年代より紀元前 6 世紀から漢代とされる。全体として第一期の年代を、紀元前 6 世紀以降漢代より前とする。

出土鉄器は鉄製刀子が中心で、50 点以上出土する。武器は短剣が主体である。また、女性の墓からは青銅簪が出土している。

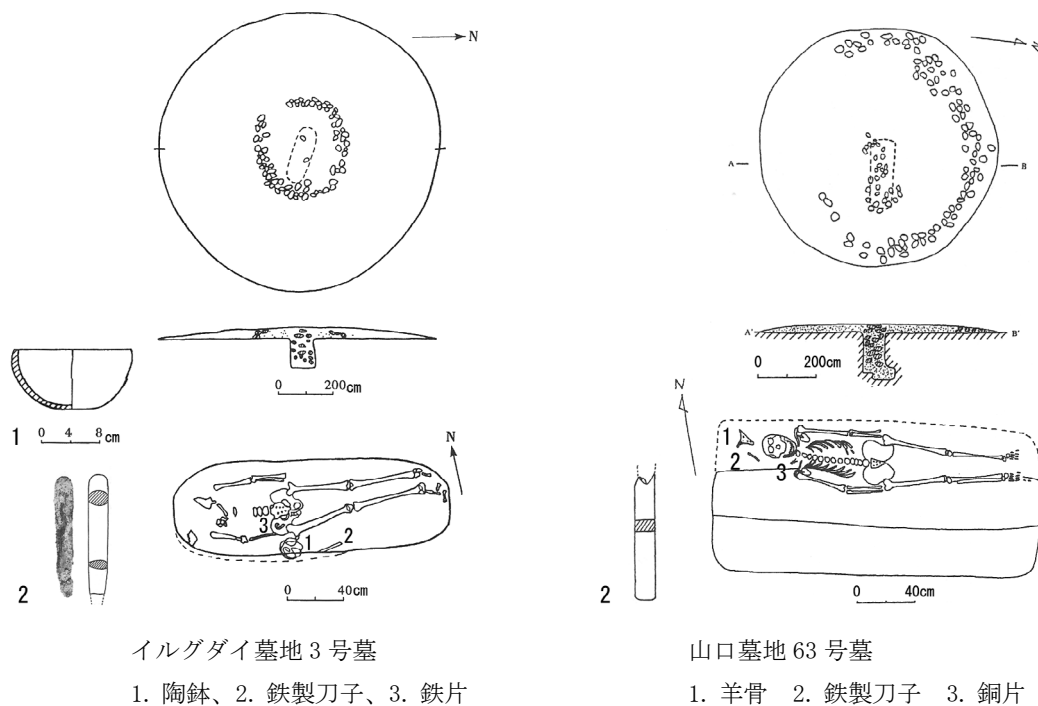


図 54 イリ河流域ジュンガル盆地西北地区の出土鉄器と遺構

・イリ河流域第二期

第二期はニルカ県チプチハイ (Qipuqihai 恰甫其海) 墓地 (新疆文物考古研究所 2006b)、テケス県七十一団一連漁塘遺址 (新疆維吾爾自治區博物館文物隊 1987)、山口墓地 (新疆文物考古研究所 2006a)、キュネス種羊場墓地 (新疆社会科学院考古研究所 1985) である。彩陶がほぼみられなくなり、また、頭骨を変形した遺骨が見つかるなど、前時期とは区別される。堅穴偏室墓が主体で漢代併行とされる。

鉄器で最も多く出土するのは、第一期同様鉄製刀子であり 30 点以上の出土がある。そのほか、工具では、鉄錐、鉄釘、鉄製手斧 (斨) などがあり、武器では鉄製短剣がある。鉄鏃の出土が見られないのが、当地域のもうひとつの特徴である。鏃は基本的に骨製である。第一期、二期を通して当地域では、鉄製刀子の出土状況が共通しており、西向き仰臥伸展単人葬に、羊の肉と刀子をセットで副葬する習慣が確立していたといえる。

⑤パミール高原・タリム盆地南縁地区

新疆西南部のパミール高原とタリム盆地南縁の墓地を対象とする。パミールの墓地については、独立した地域文化として捉える場合もあれば (韓 2005)、イリ河流域文化に含める考え (陳 2002) や、天山南麓西部の墓地と同じ類型に合わせて考える場合 (龔 1997、水 1993) もある。埋葬方法に火葬がみられる点などから、独立した地域文化と考えるが、本章では地理的要因からタクラマカン砂漠周縁地帯としてまとめる。

・パミール高原・タリム盆地南縁第一期

当地域に鉄器を出土する遺跡がみられるのは、戦国時代併行期のシャンババイ(Shanbabay 香宝宝)墓地(新疆社会科学院考古研究所 1981c)である。シャンババイ墓地からは、鉄製刀子、鉄製羊形飾板、鉄環などの鉄器が計 18 点出土している。石堆墓に火葬がみられ、新疆の中では特異な埋葬形式である。周辺地域との墓の形態比較などから紀元前 5 - 前 4 世紀とされている(新疆社会科学院考古研究所 1981c)。

・パミール高原・タリム盆地南縁第二期

その後、漢代併行期の遺跡として、下板地 M013、ザグンルク(Zagenleke 扎滾魯克) I 号、II 号墓地(且末県文管所他 1998、2002)、楼蘭平台墓地(新疆考古研究所楼蘭考古隊 1988)、サンプラー(Sampul 山普拉)墓地(新疆維吾爾自治区博物館他編 2001)がある。楼蘭平台墓地からは五銖銭の出土もあり漢代とできる。鉄製刀子や鉄針などの工具、鉄鎌などの農具のほか、鉄鏃が 10 点以上出土している(図 55-3・4)。鉄製刀子は、これまでの柄、刃部ともに鉄製の全鉄製にかわって、木製の柄を備える茎式へと形態が変化している(図 55-1・2)。ほかに鉄製装身具もあり、出土鉄器の種類や数量が増加する。

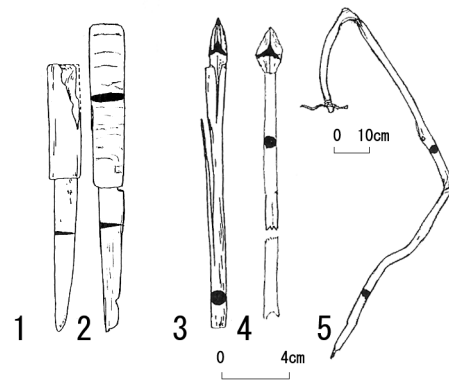


図 55 タリム盆地南縁出土の鉄器

サンプラー墓地 : 1・2. 鉄製刀子 92LS II M6:221(刃長 10.5)、92LS II M6:56(刃長 8.8、幅 1.2)、3・4. 鉄鏃 92LS II M6:362(鏃長 5.5)、84LS I M01:c64(鏃長 2.6)、5 木弓 84LS I M01:c54、単位 cm

小結

以上が新疆の漢代以前の出土鉄器である。総計 64 か所より 500 点以上の鉄器を集成できた。地域ごとの併行関係を整理する(表 16)。

新疆における鉄器出現の時期は、クムル盆地・バルクル草原地区第一期、トルファン盆地・中部天山北麓地区第一期、天山南麓地区第一期からである。鉄器の受容期であり「新疆第 1 期」とする。紀元前 9 世紀から前 6 世紀まで、西周中期 - 春秋併行期とできる。この時期に鉄器は 5 遺跡 8 ヶ所の墓地より少なくとも 36 点出土している。出土器種は、工具・武器の鉄製刀子、鉄錐、鉄製短剣があり、農具の鉄鎌のほか、小型の装飾品である鉄製指環や鉄製耳環などがあつた。特に銅鉄複合器が短剣や帯扣、耳環にみられ、その存在が注目される。

金属組織の分析では、装身具の材料に塊錬鉄が用いられ、形態不明の鉄片ではあるが鋼の出土も確認されている。材質に応じた材料の使い分けがすでになされていたのであろう。出現期に、塊錬鉄および鋼という種類の異なる材料の使用があり、おそらく周辺地域からもたらされたと考えうる。なお、鉄器の出土する各墓地はいずれも大型の墓地で埋葬例も

多く、器種、数量ともに豊富な青銅器や土器、木器、骨器が出土している。

次の段階は、クムル盆地・バルクル草原地区第二期、トルファン・天山中部北麓地区第二期、天山南麓地区第二期およびイリ河流域第一期とパミール高原・タリム盆地南麓の第一期であり、遺構や遺物の特徴から春秋後期－戦国併行期とされる。「新疆第2期」とする。第1期と比べ、鉄器の出土総数、器種が増加している。特にイリ河流域からは鉄製刀子が大量に出土し、定型化した埋葬スタイルの一要素として鉄器が現れている。続くクムル盆地バルクル草原地区第三期、トルファン・天山中部北麓地区第三期、天山南麓地区第三期およびイリ河流域第二期とパミール高原・タリム盆地南縁第二期の諸遺跡は、漢代併行期に相当する。「新疆第3期」とする。鉄器の器種と数量がさらに増加し、鉄鏃の出土量が急増する。また、鉄杯などの鑄造製品が出現するようになる。

表 16 鉄器出土遺跡の区分

	第1期	第2期	第3期		
①クムル盆地・バルクル草原地区	ヤンブラク墓地	小東溝南口墓地	上廟爾溝村墓地、東黒溝墓地、黒溝梁墓地		
②トルファン・天山中部北麓地区	ヤンハイⅠ号墓地、ヤンハイⅡ号墓地	オタンリク墓地、ウランバイ墓地、大草灘墓地、スバシⅠ・Ⅲ墓地、三個橋墓地1類墓、大龍口墓地、ボストン墓地	スバシⅠ号墓地編室墓、アイディンクル墓地、ヤンハイⅢ号墓地、交河故城溝北墓地、溝西墓地、アラゴウ木柳墓		
③天山南縁地区	チャウフⅣ号墓地1期、チャウフⅠ号墓地2期、チュンバク墓地、ハブチガン墓地	バルチル墓地、チャウフⅠ号墓地3期、チャウフⅡ号墓地第3・4期、クランサリク墓地	上戸郷墓地、ボズドン墓地、チャウフ3号墓地		
④イリ河流域・ジュンガル盆地西北地区		クルムチ墓地堅穴土壙墓、チョンクⅠ号墓地堅穴偏室墓・堅穴石室墓、カラトパ墓地、ジャルクスカイント山北麓墓地、チレントハイ墓地、イルグダイ墓地、紅旗磚廠墓地、スドンブラク墓地、黒山頭墓地、トムルク墓地、南山墓地	チクプハイ海墓地、イエシクリク墓地、山口墓地、キュネス種羊場墓地		
⑤パミール高原タリム盆地南麓		シャンババイ墓地	下板地墓地 ザグンルクⅠ・Ⅱ号墓地、楼蘭平台墓地、サンプラー墓地		
鏃編年（第6章）	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期
韓建業（韓2007）	第三期	第四期		第五期	

3. 分析と考察

それでは、上記の鉄器と青銅器を時期別に、器種、数量の面で比較し、新疆における鉄器の受容と展開を検討する（表 18～表 20）。

青銅器から鉄器への利器の変遷について（図 56）

鉄器利用の拡大を考えるために、利器（武器・工具）を対象とし、青銅器と鉄器の出土量を比較したのが図 56 である。参考として、後漢以降のチャウフⅢ号墓地、チレントハイ偏室墓、尼雅遺跡墓地を、後漢以降として付した。表中の数字は最少出土点数である。報告書によっては、出土量の記載がなく、出土する器種のみが記される場合もある。そのため、青銅利器と鉄製利器の百分率で鉄器の増加状況を示した。

第 1 期は鉄製利器の出現期である。第 2、第 3 期へと鉄器出土数が加速度的に増加していく様子が分かる。第 1 期には約 1 割が鉄器であるが、第 2 期には 4 割を占め、第 3 期にはいると、鉄器の利用の比率がほぼ 9 割に達し、その次の後漢で武器・工具類の材質は、青銅器から鉄器へと移行しているといえる。第 3 期以降の鉄器の大量消費をうかがうことができる。

鉄器の器種の変遷と青銅器の器種の変遷

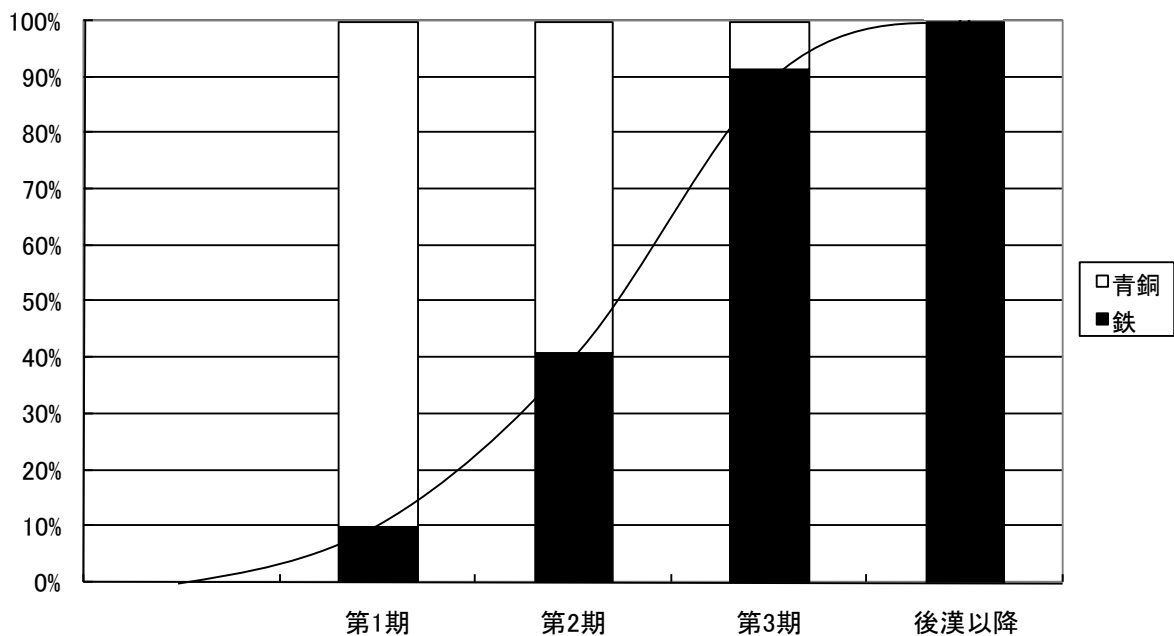


図 56 武器・工具における青銅器と鉄器の比率

次に青銅器と鉄器の器種の変遷を比較する（図 57）。また、出土鉄器の器種の出土量も示した（表 17）。

青銅器は時代が下るに従い出土総数が減少し、中でも工具武器の数が減少する（図 57-①、②）。青銅工具は第 2 期から第 3 期にむかって出土量が急下降する。青銅武器は第三期にはほとんどみられなくなる。一方、青銅器出土総数が減少するのにもかかわらず、装飾品の点数はほぼ変化がない（図 57-③）。全体に占める割合としては増加しているといえ、第 3 期にむかって青銅器の利用が装飾品に限定されていく。

鉄器は総数も器種も増加していく（図 57 右）。種類別の増加傾向をみると、鉄製工具は第 2 期に急増しているが（図 57-①）、鉄製武器は、第 3 期以降に急増する（図 57-②）。工具については、第 2 期でイリ河流域を中心に鉄製刀子の出土が増加したためである。また、武器の増加の背景には、第 3 期に新疆全域で鉄鏃が増加するからであろう（図 57）。鉄鏃は第 2 期より出土が始まり、第 3 期以降、大量に用いられるようになる。第 2 期には 4 点のみの出土であったが、第 3 期には 50 点以上の出土がある。鉄鏃の増加から、第 3 期には鉄器が消耗品として取り扱われるようになったと考えうる。

さらに第 3 期以降になると鉄製容器が出土し、鑄造製品と鑄造技術が新疆にもたらされたといえる（表 17）。また、鉄製装身具の数量は増加傾向にあり、第 2 期の全体に占める割合と第 3 期の割合は変化していない。指環や耳環、牌飾、簪などに鉄器が継続して利用

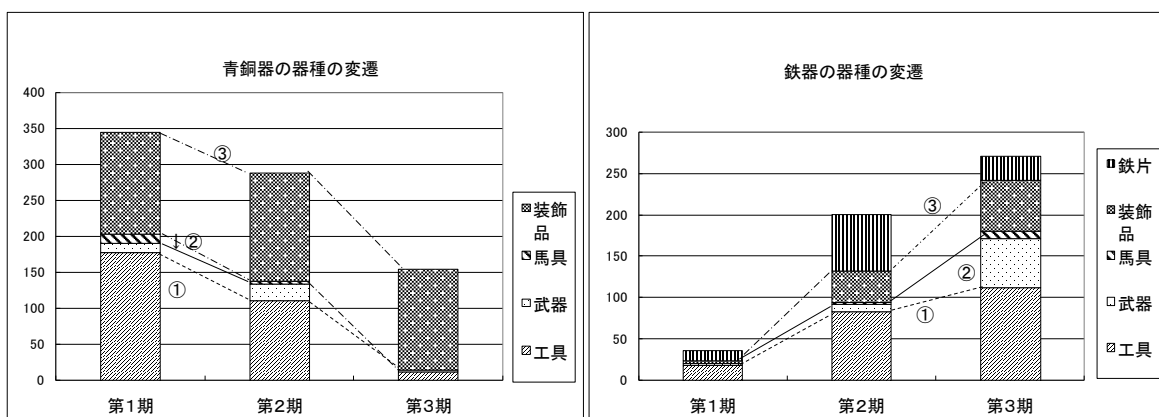


図 57 青銅器・鉄器の器種別変遷図

- ①工具：青銅器が減少する一方で、鉄器は増加する。特に第 2 期に鉄製工具が急増する。
- ②武器：青銅器は第 3 期にはほとんどみられなくなる。鉄製武器は第 3 期に急増する。
- ③装飾品：青銅装飾品の出土量は時代が変わってもあまり変化がなく全体に占める割合が増加しているといえる。第 3 期の青銅器の主な利用は装飾品へと移っていく。

表 17 鉄の器種別出土点数

	工具（農具）					武器				馬具		装身具・その他						鉄片	器種数	
	刀子	錐	釘	針	鎌	短剣	鏃	矛	鶴嘴斧	長剣	銜	鏢	簪	泡	環	帶鉤	他			杯
第 I 期	14	3			2	2								3			1		12	6
第 II 期	67	8	6	2	手斧 1	3	4	1			1	2	4	4	8	5	16		68	15
第 III 期	95	4	5	5	3	5	52		1	1	7	2	3	1	8	12	34	5	26	17

表 18 第一期の青銅器と鉄器の比較

地図 No.	遺跡	青銅										鉄										鉄片	計	文献											
		工具		武器		馬具		装身具・その他				工具(農具)		武器		馬具		装身具・その他																	
		刀子	雑	針	他	鎌	戈	銜	節	約	簪	鏡	環	飾	板	その他	刀子	雑	釘	他	短				剣	鎌	他	銜	鏡	簪	泡	環	帶	鉤	飾
1	哈密	ヤンブラク	7	3	釘2, 鏢6	6					4	13	1	銅10, 管6, 珠9, 飾件11, 紡錘車1	79	1																	4	8	考古学報 89-3
18	※1	チャウフIV 1期	70	33	6	2	3			4	3		管2, 釘7, 紡錘車1	132	1																		1	『察吾呼』	
6	※2	ヤンハイ I	7	2	斧3	2	3						鈴形飾16, 管18, 貝2	53																		1	新疆文物 04-1		
18		チャウフIV 1期	70	33	6	2	3			4	3		管2, 釘7, 紡錘車1	132	1																	1	『察吾呼』		
18	天山南麓	チャウフ I 2期	18	1	1								銅3	24	1																	1	『察吾呼』		
22		チュンバク I	2		1	2	1	2	1	2	2		帶鉤1, 紡錘車2, 飾3, 泡1, 珠1	23+	5+	1+		鎌1+	1+												7+	15+	考古 91-8		
22		チュンバク II	1										紡錘車1	5	3	1		鎌1														4	考古 91-8		
19		ハブチガン I	6	5	2						1	3	鈎5, 管2	24																	1	2	新疆文物 99-1		
6	※2	ヤンハイ II	2+											5+	3+	1+															4+	2	新疆文物 04-1		

※1 天山南麓、※2 トルファン・ウルムチ

表 19 第二期の青銅器と鉄器の比較

地図 No.	遺跡	青銅										鉄										鉄片	計	文献											
		工具		武器		馬具		装身具・その他				工具(農具)		武器		馬具		装身具・その他																	
		刀子	雑	針	他	鎌	戈	銜	節	約	簪	鏡	環	飾	板	その他	刀子	雑	釘	他	短				剣	鎌	他	銜	鏡	簪	泡	環	帶	鉤	飾
2	※1	小東溝南口													—						1	1			1	2					2		6	新疆文物 94-1	
14		オタンリク II号	2							2			鈴1, 不明器1	16																		4	6	新疆文物 99-3・4	
14		オタンリク I・III・IV号								9			塊1	2																		1	1	新疆文物 00-1・2	
14		オタンリク 93												—	1																	6	新疆文物 98-1		
16		大草灘								4				41?																		2	2	考文 86-1	
7		スパン III号												1	3																	11	新疆文物 94-2		
8		三個橋 1類墓												1	1	1	1															5	新疆文物 97-2		
15		ウランバイ	1+							1+		1+	31+	271+	11+																	15	新疆文物 98-3		
17		大龍口墓地								2				2		1																1	1	新疆文物 94-4	
12		ボストン墓群												—																		1	1	新疆文物 96-3	
7		スパン I号堅穴土坑墓												2																		2	2	新疆文物 93-4	
20		バルチル	11	2	5									18	4																	5	5	新疆文物 99-3・4	
18	天山中南麓	チャウフ I号3期	50	20	2					1			管9, 釘11, 帶鉤1, ヒ1	98	1																		1	1	『察吾呼』
18		チャウフ II号3期												2	1																		1	1	『察吾呼』
18		チャウフ II号4期	3	3	2								3	釘1, 管2片4,	21																	3	4	『察吾呼』	
24		克蘭サリク											1	泡1	3	1																	4	6	新疆文物 95-2
31		チョンク I号偏室墓	1											1	13	2																	15	15	新疆文物 02-3・4
25		グルムチ堅穴土坑墓												9	5																		5	13	考古 81-1
41		スドンブラク												6	3	2																	4	10	考古 99-8
29		黒山頭												2+	1+																	1+	1+	新疆文物 89-3	
30	イリ河	トルムク												5	1	1																	1	3	文物 88-8
39	流域	一牧場								1+		1+		41+																			1	1	新疆文物 89-1
26		南山												2	8																		9	9	新疆文物 99-1
32		カラトバ												13																			2	3	新疆文物 88-2
34		ジャルクスカイント山北麓墓地	1											15	2	2																	31	38	新疆文物 07-3
33		チレントハイ	1											8	12+																		1	14	新疆文物 04-3
35		イルグダイ	1											1	5																		5	5	新疆文物 05-1
36		紅旗磚廠												2	1																		2	4	新疆文物 05-1
43	※2	ジャンババイ												41	1																		10	18	考古学報 81-2

※1 哈密盆地、※2 バミール高原

表 20 第三期の青銅器と鉄器の比較

地図 No.	遺跡	青銅										鉄										計	文献											
		工具	武器	馬具	装身具・その他						計	工具	武器	馬具	装身具・その他						計													
		刀子	鏃	針	他	鏃	戈	銜	箭	箭	飾	板	その他	計	刀子	鏃	針	他	短	劍	他	銜	鏃	箭	泡	環	帶	鉤	飾	板	その他	計		
3	東黒溝遺跡	1	2							1		5		8	3							2			1	1					7	新疆文物 07-2		
4	黒溝梁											装身具 1+		1+											1+						2+	新疆文物 94-1		
5	上廟爾溝村 I									1	1	1	輪 4, 珠 1	9	6	1								1	1	5	2	珠 1, 管 1			23	新疆文物 04-2		
7	スパン I 編室墓													—	1				1			1									4	新疆文物 93-4		
11	アイディンクル					1				2	2	帶釦 1, 帶鉤 1, 泡 1		8	3				3						1						7	考古 82-4		
8	ヤンハイ 87													—								1	2								3	新疆文物 89-4		
8	ヤンハイ III 号										1			1+	2+				1+			1+						杯 1+		10+	新疆文物 04-1			
9	溝北墓地									2		6 五銖錢 1		10	2			1+	鶴嘴斧 1			2						杯 4, 帶釦 13		1	31	『交河故城』		
10	溝西墓地									1	1	五銖錢 10		12	4									2		4				10	24	『交河溝西』		
13	アラゴウ木柳墓											銅盤		1	1																4	文物 81-1		
21	上戸郷											1 鏃		2	4				1	7								条 2			12	文物 99-2		
23	ボズドン墓地									1	2	23 貝 17, 帶釦 2		59	7	5							1					三角器 1			31	新疆文物 86-2		
18	チャウフ III 号											2 鉤 3		8							針 1+	1	1								21	『察吾呼』		
37	イエシクリク									3	1			6	2							1									5	8	新疆文物 05-3	
28	キュネス種羊場											泡 1		2	5				1												6	考古与文物 85-2		
27	七十一団一連漁塘									1		1 破片 1		3	3													帶釦			2	6	新疆文物 87-3	
42	チブチハイ A 区 X											1		1	2	1																4	新疆文物 06-1	
38	山口水庫	5				1				1	1	3 耳勺 1, 鉤型器 1		17	19																20	新疆文物 06-1		
33	チレントハイ偏室墓 (馬殉葬) 土堆墓											1 帶釦 1		3	6					長劍 1											7	16	新疆文物 04-3	
44	下板地 M013													—	2							2										4	新疆文物 04-3	
46	ザグナルク II									1		帶釦 2, ヒ 1		4	6																	6	新疆文物 02-1・2	
48	楼蘭平台墓地									3	1	五銖錢 2		6																		2	9	文物 88-7
46	ザグナルク I 号 三期											勺 1		1																	多量	1+	新疆文物 98-4	
45	サンブラー墓地									1	1	1		3	3						鏃 2, 針 3		2					帶釦 1			11	新疆文物 89-2		
47	ニヤ墓地											4		4	3													帶釦 6			10	『尼雅』		

されていた様子をうかがうことができる。

分布の拡大について (図 58)

新疆における鉄器出土地域の拡大について示したのが図 58 である。右に地域別の武器・工具における青銅器と鉄器の出土量の比較グラフを載せた。

第 1 期は天山山脈の東部から中部にかけて鉄器が出現する。いずれの地域も青銅武器・工具の利用が主体であり、その中に少数の鉄器が現れはじめるといった状況である。特に③天山南麓地域は、青銅器の出土が圧倒的に多い。

また、①クムル盆地・バルクル草原地区からは鉄垂飾の青銅耳環が、②トルファン盆地からは銅鉄複合帯扣が、③天山南麓地域からは銅柄鉄剣が出土する。銅鉄複合製品が、鉄器出現のすべての地域で見られるのも特徴的である。

第 2 期は、鉄器出土地が、天山山脈全域に拡大する。分布域の拡大にともない、鉄器の出土状況に地域差が現れる。①クムル盆地バルクル草原地区は、第 1 期に鉄器の出土があるにもかかわらず遺跡が少ない。第 2 期の末ごろ 1 遺跡が確認されるのみである。②トルファン盆地・天山中部北麓地区は、鉄器の出土が増加しており、武器・工具における青銅器と鉄器の出土量がほぼ同じである。鉄器の利用が拡大していくと同時に青銅器も利用さ

武器工具の青銅器と鉄器の地域別出土量比較

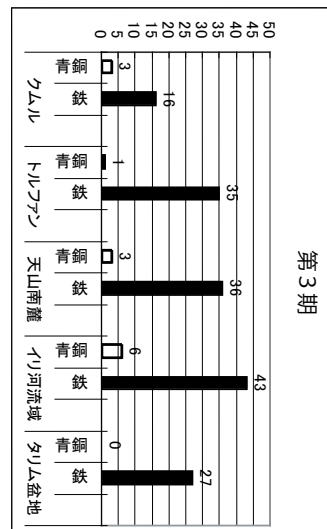
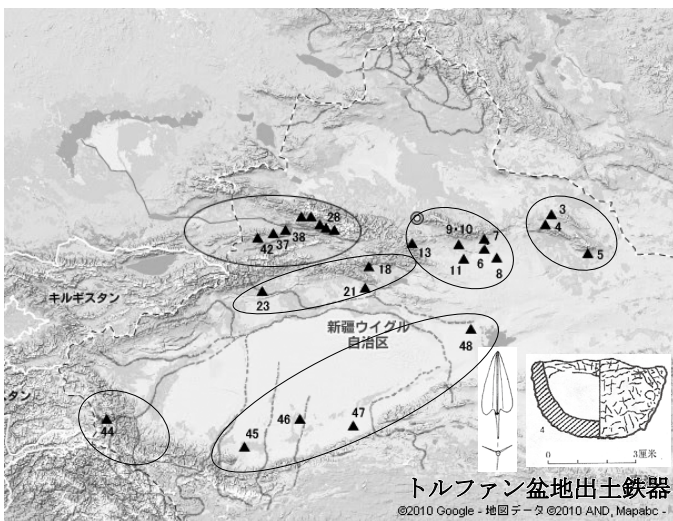
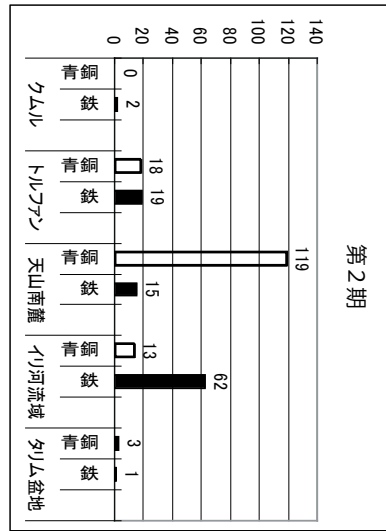
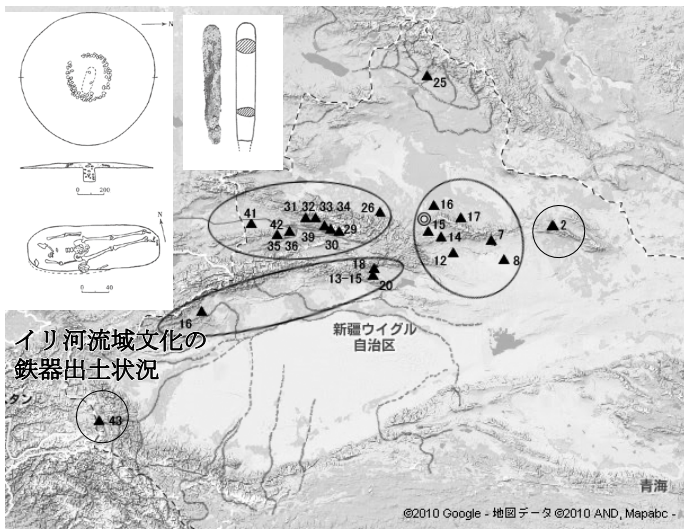
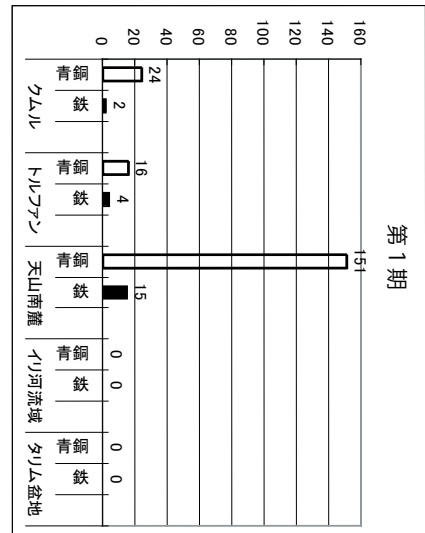
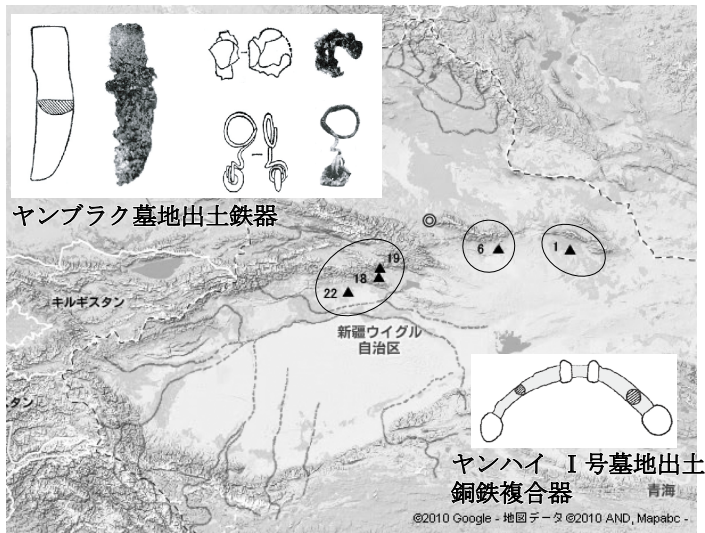


図 58 鉄器出土の変遷

れ続けた様子がわかる。③天山南麓地区は、圧倒的に青銅器が主体である。100点を越す青銅器の出土があるが、鉄器は10点あまりである。豊富な青銅器利用の背景には、チャウフ文化の隆盛を見ることができる。④イリ河流域地区は、鉄製工具・武器の出土量が早くも青銅器を上回っている。これは、鉄製刀子が墓地から羊の骨とセットで出土するという埋葬習俗によるものである。

第3期以降には、出土範囲が⑤タクラマカン砂漠の南縁地域にまで広がる。④イリ河流域は地域性を強く残すが、ほかの地域は、前段階ほど鉄器の出土状況に差がみられなくなる。新疆全域で工具・武器類において鉄器が青銅器を大きく上回っている。しかし、青銅工具も若干は出土があり鉄器化が完了するのは、後漢以降の次の段階であるといえよう。鉄鍔の増加が著しく、鉄器の量産・消費体制がこの時期に新疆全域で出来上がったと考えられる。

鉄製容器なども出土しており鑄鉄の出土が始まる。

4. 結び

以上、新疆における鉄器の受容と展開について、遺物の材質変化や器種の変遷、また遺跡の分布の拡大といった角度から検討を行った。さらに近隣の草原地域との交流も踏まえつつ、全体をまとめる（図59）。

第1期 紀元前9—前6世紀

新疆で鉄器が出現する第1期は、天山山脈の中東部南麓の墓地より、散発的に鉄器の出土がある。特に、ヤンブラク文化やチャウフ文化が設定されている大型の墓地から鉄器の初出があり、副葬品の多い豊かな墓より出土する傾向がある。器種は、鉄製刀子、鉄錐などの工具と鉄製短剣など武器、鉄製指環などの装飾品で、小型製品が多い。また、銅柄鉄剣、鉄垂飾の青銅耳環、銅鉄複合帯扣など、銅鉄複合器が新疆内の各地から出土している。

金属組織の分析の結果、ヤンブラク墓地出土の鉄製指環は塊鍊鉄製であったほか、鉄片2点が鋼製であり、異なる技術レベルの製品が同一墓地から出土していた。これは、新疆の鉄が、技術的に発達した製品を他、地域より受容した結果であると考えられる。しかし、隣接する南シベリアなどからは同時期の鉄器は出土しておらず、導入の経路等は現時点ではわからない。技術の系統から考えれば、西アジア（津本2004）から黒海沿岸（近藤2006）・ウラル地域（Koryakova 2007）を経て新疆の天山山脈周辺地域へ導入されたと推察できる。新疆の鉄器の出現とほぼ同時期に河南省の三門峡虢国墓地からも玉柄鉄剣などの銅鉄複合器が出土している（河南省文物考古研究所他1996）。新疆出土鉄器も、三門峡出土鉄器も塊鍊鉄と塊鍊浸炭鋼であり（韓1998）、鉄材料の起源は西方に求めることができるであろう。

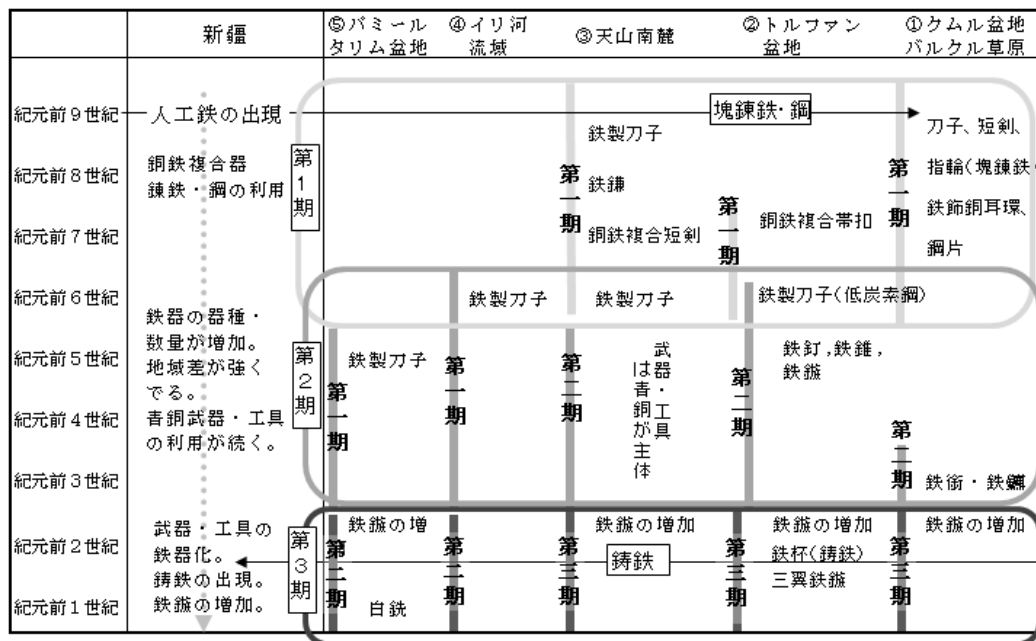


図 59 新疆ウイグル自治区における鉄器の受容と展開

また、第1期は青銅器との比較より、初期サカ文化やカラスク文化、タガール文化とも交流があった様子がうかがえる。チュンバク墓地から出土する銅柄鉄剣は、南シベリアのミスシンスク盆地のタガール文化に出土の中心があり、当地から新疆へもたらされたと考えられる。新疆と南シベリアとの鉄器をめぐる交流があったといえる。年代はこうした周辺地域との比較などから紀元前9-前6世紀、西周中期から春秋期に併行する。

新疆の第1期は鉄器が西方より導入され、受容していった時期とできる。小型の武器・工具、装飾品として、また、銅鉄複合器という形で当地に鉄器が受入れられていったといえる。

第2期 紀元前6-前3世紀

鉄器利用の第2期は展開期であり、出土する鉄器の器種や数量が増加する。分布は天山山脈の南北麓に広がる。しかし、青銅武器や青銅工具の利用が依然として続いているのが、当時期の特徴である。出土する鉄器の器種は、第1期とくらべ2倍近く増加する。出土量も4倍ほどに増えており、15器種、95点を数える。

また、第2期は新疆の鉄器利用の展開において、地域差が大きく現れる時期である。①新疆東部のクムル盆地・バルクル草原地区からは、第2期の後半に鉄器が出土するが、第1期より出土点数は少ない。②トルファン盆地・中部天山南麓地区では、武器・工具において青銅器と鉄器がほぼ同数出土する。鉄器を受容しつつも、青銅器を平行して使用していた様子がうかがえる。③天山南麓地区では、青銅器の出土量が鉄器を大きく上回っている。特に武器・工具において顕著であり、青銅製武器・工具が101点出土するのに対し、

鉄製の武器・工具は8点であり、利器の主材料は青銅であったといえよう。新疆で地域文化の発達した当地域において、かえって鉄器の利用が遅れるのは一つの興味深い特徴である。④イリ河流域地域は、第2期に青銅刀子の出土が急増する。現時点で12箇所より50点以上出土する。鉄製刀子は、石堆墓か石冢墓に、頭位西の仰臥伸展単人葬に、木製あるいは土製の容器、羊の骨に伴う埋葬習俗の一つとして、出土している。鉄器が出土しつつも、青銅器の利用が依然として続くのは、周辺の草原地帯も同様である。おそらく、鉄器の入手や熱処理による鋼化が不安定であり、青銅武器・青銅工具の実用性が高かったためと考えられる。年代は、青銅鏃の型式や放射性炭素年代より、春秋後期からはじまり戦国併行期を主体とする時期である。

第3期 紀元前2—前1世紀

第3期は、新疆において武器・工具が鉄器化する時期である。青銅製の武器・工具は出土がほぼなくなり、装飾品が青銅器の主体となる。五銖銭などが共伴し漢代併行期である。

なお、青銅利器の出土が完全になくなり、鉄器化が完了するのは後漢以降である。中国北方草原地帯や南シベリアにおいてもこの時代に武器・工具の鉄器化がすすんでおり、新疆の利器が鉄器化するのと同じタイミングである。周辺の草原地帯と、鉄器をめぐる技術や製品の活発な交流をうかがうことができる。

新疆における鉄器の出土範囲は、第3期にはタリム盆地南縁まで広がる。イリ河流域地域は、第2期にあらわれた埋葬習慣を維持しているが、その他の地域における鉄器の出土状況は差異が少なくなった。いずれの地区でも利器の主体は鉄製となる。また、出土鉄器のなかでも、鉄鏃の出土量が急増する。新疆全域において、鉄器が消耗品として取り扱われるほど豊富に利用されるようになったといえる。

さらに、鉄製容器や鉄製三翼鏃など、鑄造鉄器の出土がはじまる。同時期である内蒙古の漢代の墓などから鉄鍔が出土しており、中原の鑄鉄技術が中国の西北地区を経由して新疆へと伝えられたと考えられる。鑄造鉄器の出現は、漢の西域進出に大きく関係する遺物であるだろう。

また、生産遺跡について、亀茲地域を中心に踏査が行われており（李 2003）、漢代から唐代にかけての鍛冶炉や鉄滓が発見されている。詳細な年代や特徴などは今後の調査に期待するところであるが、この第3期は新疆で鉄器の生産がはじまる時期といえるだろう。

以上、新疆における鉄器の受容と展開について、青銅器との比較の上から述べた。約1000年の時間をかけて、周辺地域との交流の中で、地域差をもちながら鉄器の利用が拡大していった様子を明らかにすることができた。新疆で鉄器を生産し、本格的な鉄器時代を迎えるのはこの次の時代になる。

（註）

1 ヤンプラク墓地の編年については、大きく報告書の三期区分（新疆維吾爾自治區文化庁文物処他 1989）、王博らによる4期6段の区分（王他 1990）、邵秋会の2期区分（邵 2006）、李文

瑛の前期・後期区分（李 1997）がある。報告書は、墓の型式と土器の変遷を根拠とするが、報告書の図面を見る限り同一形態の墓が多型式に区分されており、非常に恣意的である。よって、王の区分も基本的に報告書の墓型式を組み替えた編年であり、信頼性に乏しい。李は埋葬人数の差を以て時期差を抽出するが、幼児墓などの意味合いの異なる墓も単人葬としており、時期区分の妥当性に欠く。邵は、従来上下二層とされていた 75 号墓を前後期に区分し、ヤンブラク墓地を前・後期に分け、ヤンブラク文化を 3 期区分した（邵 2006）。ただし、年代に放射性炭素年代を参照として前期を前 1300 年とする点には疑問が残る。

2 新疆の出土金属器の内、ひっかける機能をもつものに対して報告書中で帯鉤と帯扣が併用される。本章では、端部が鉤状に曲がる形態を帯鉤、鉤状には曲がらないが引っかけの機能を備えたと考えられるものを帯扣とした。なお、報告書で説明や図面を欠く場合は、報告書の記載通りとしている。

引用文献

- アクバル・ニヤーズ 2007 「トルファン盆地における車師遺跡の考察」『中国シルクロードの変遷』 pp. 26-40 雄山閣
- 近藤さおり 2006 『黒海北岸地域の初期鉄器文化研究 - 剣編年と鉄生産体系の再構成 - 』 東京都立大学 博士論文
- 田中裕子 2010a 「南シベリアにおける初期の鉄器受容と展開」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 55（第四分冊）、pp. 83-100
- 田中裕子 2010b 「中国北方草原地帯における初期鉄器の受容と展開」、菊池徹夫編『比較考古学の新地平』、同成社、pp. 905-915
- 津本英利 2004 「古代西アジアの鉄製品 - 銅から鉄へ」『西アジア考古学』 5、pp. 11-23
- 畠山禎 1992 「北アジアの鹿石」『古文化談叢』 27、pp. 207-226
- 安志敏 1996 「塔里木盆地及其周囲の青銅文化遺存」『考古』 1996-12 pp. 70-77
- 伊犁州文物管理所・新疆文物考古研究所 2005 「特克斯県葉什克列克墓葬発掘簡報」『新疆文物』 2005-3、pp. 20-30
- 伊犁哈萨克自治州文物局・西北大学文化遺産与考古学研究中心・新疆文物考古研究所 2007 「尼勒克県加勒克斯卡茵特墓地発掘簡報」『新疆文物』 2007-3、pp. 1-14
- 烏魯木齊文物保護管理所・新疆文物考古研究所 1998 「烏拉泊烏魯木齊市汽運公司墓葬発掘報告」『新疆文物』 1998-3、pp. 23-27
- 烏魯木齊文物保護管理所・新疆文物考古研究所 2000 「烏魯木齊市柴窩堡林場 I、III、IV 号地点墓葬発掘」『新疆文物』 2000-1・2、pp. 6-15
- 烏魯木齊文物保護管理所・新疆文物考古研究所 2003 「烏魯木齊市柴窩堡林場 II 号地点墓葬的発掘」『考古』 2003-3、pp. 27-37
- 王博・成振国 1988 「尼勒克県哈拉凶拜烏孫墓的発掘」『新疆文物』 1988-2、pp. 17-18
- 王博・覃大海 1990 「哈密焉不拉克墓葬的分期問題」『新疆文物』 1990-3、pp. 30-38
- 温宿県文化館・阿克蘇地区文管処・新疆維吾爾自治区博物館 1986 「温宿県包孜東墓葬的調査和発掘」『新疆文物』 1986-2、pp. 1-14

- 郭物 2007 「新疆及中原冶鐵術來源問題的探討」『新疆文物』2007-2、pp. 70-88
- 且末縣文管所·巴州文管所·新疆博物館 1998 「且末扎滾魯克一號墓地發掘簡報」『新疆文物』1998-4、pp. 1-54
- 且末縣文管所·巴州文管所·新疆博物館 2002 「且末扎滾魯克二號墓地發掘簡報」『新疆文物』2002-1·2、pp. 1-21
- 且末縣文物管理所·巴音郭楞蒙古自治州文物管理所·新疆維吾爾自治區博物館 2003 「1998 年扎滾魯克第三期文化墓葬發掘簡報」『新疆文物』2003-1、pp. 1-19
- 河南省文物考古研究所 1999 『三門峽虢國墓』文物出版社
- 韓建業 2005 「新疆青銅時代－早期鐵器時代文化的分期和譜系」『新疆文物』2005-3、pp. 57-99
- 韓建業 2007 『新疆的青銅時代和早期鐵器時代文化』文物出版社
- 韓汝玢 1998 「中國早期鐵器（公元前 5 世紀以前）的金相學研究」『考古』1998-2、pp. 87-96
- 龔國強 1997 「新疆地區早期銅器略論」『考古』1997-9、pp. 7-20
- 孔令平·馮國正 1988 「鐵器的起源問題」『考古』1988-6、pp. 542-546
- 吉木薩爾縣文物管理所·昌吉回族自治州文管所·新疆文物考古研究所 1994 「吉木薩爾縣大龍口古墓葬」『新疆文物』1994-4、pp. 1-11
- 邵會秋 2006 「從 M75 看焉不拉克墓地的分期」『新疆文物』2006-2、pp. 84-90
- 新疆維吾爾自治區博物館·新疆文物考古研究所編 2001 『中國新疆山普拉』新疆人民出版社
- 新疆維吾爾自治區博物館文物隊 1987 「新源縣七十一團一連漁塘遺址」『新疆文物』1987-3、pp. 16-2
- 新疆維吾爾自治區文化庁文物處·新疆大學歷史系文博幹部專修班 1989 「新疆哈密焉不拉克墓地」『考古學報』1989-3、pp. 325-362
- 新疆考古研究所 1993 「新疆鄯善縣蘇貝希考古調查」『考古與文物』1993-2、pp. 26-29
- 新疆考古研究所樓蘭考古隊 1988 「樓蘭城郊古墓群發掘簡報」『文物』1988-7、pp. 23-39
- 新疆社會科學院考古研究所 1981a 「阿拉溝豎穴木槨墓發掘簡報」『文物』1981-1、pp. 18-22
- 新疆社會科學院考古研究所 1981b 「新疆克爾木齊古墓群發掘簡報」『考古』1981-1、pp. 23-32
- 新疆社會科學院考古研究所 1981c 「帕米爾高原古墓發掘報告」『考古學報』1981-2、pp. 199-216
- 新疆社會科學院考古研究所 1985 「新源鞏乃斯種羊場發現石棺墓」『考古與文物』1985-2、pp. 21-26
- 新疆社會科學院考古研究所 1986 「米泉大草灘發現石堆墓」『考古與文物』1986-1、pp. 36-38
- 新疆特克斯縣文物管理所·新疆文物考古研究所 2006 「特克斯縣恰甫其海 A 區 X 號墓地發掘簡報」『新疆文物』2006-1、pp. 41-47
- 新疆文物考古研究所 1988a 「新疆新源鐵木里克古墓群」『文物』1988-8 pp. 59-66
- 新疆文物考古研究所 1988b 「察布查爾縣索墩布拉克古墓葬發掘簡報」『新疆文物』1988-2、pp. 19-26
- 新疆文物考古研究所 1993 「1993 年烏魯木齊市柴窩堡墓葬發掘報告」『新疆文物』1998-3、pp. 19-22
- 新疆文物考古研究所 1995 「阿合奇縣庫蘭薩日克墓地發掘簡報」『新疆文物』1995-2、pp. 20-28
- 新疆文物考古研究所 2001 『交河溝西 1994 — 1996 年度考古發掘報告』新疆人民出版社

- 新疆文物考古研究所 2002 「尼勒克縣窮科克 1 号墓地考古發掘報告」『新疆文物』2002-3·4、
pp. 13-53
- 新疆文物考古研究所 2004a 「伊犁州尼勒克縣奇仁托海墓地發掘簡報」『新疆文物』2004-3、
pp. 60-87
- 新疆文物考古研究所 2004b 「塔什庫爾干縣下坂地墓地考古發掘報告」『新疆文物』2004-3、
pp. 1-59
- 新疆文物考古研究所 2005a 「伊犁恰甫其水利樞紐工程南岸干渠考古發掘簡報」『新疆文物』
2005-1、pp. 13-32
- 新疆文物考古研究所 2005b 「塔什庫爾干縣下坂地墓地 2004 年度考古發掘簡報」『新疆文物』
2005-1、pp. 3-12
- 新疆文物考古研究所 2006a 「2005 年度伊犁州鞏留縣山口水庫墓地考古發掘報告」『新疆文物』
2006-1、pp. 1-40
- 新疆文物考古研究所 2006b 「特克斯縣恰甫其海 A 区 X 号墓地發掘報告」『新疆文物』2006-1、
pp. 41-47
- 新疆文物考古研究所 編 1999 『新疆察吾呼』東方出版社
- 水涛 1989 「新疆地区青銅文化研究現狀述評」『新疆文物』1989-4、pp. 60-63
- 水涛 1993 「新疆青銅器時代諸文化的比較研究」『国学研究』1、pp. 447-490
- 石河子市軍墾博物館·新疆大學歷史系·新疆文物考古研究所 1999 「石河子市南山古墓葬」
『新疆文物』1999-1、pp. 1-9
- 西北大學文化遺產與考古學研究中心·新疆文物考古研究所 2007 「2006 年巴里坤東黑溝遺址發掘」
『新疆文物』2007-2、pp. 32-60
- 西北大學文博學院八九級考古班·新疆文物考古研究所 1998
「烏魯木齊市柴窩堡古墓葬發掘報告」『新疆文物』1998-1、pp. 11-31
- 鄯善縣文化局·吐魯番地區博物館·新疆大學歷史系 88 級考古專業·新疆文物考古研究所 1997 「新
疆鄯善縣三個橋古墓葬的搶救清理發掘」『新疆文物』1997-2、pp. 1-21
- 中國社會科學院考古研究所實驗室 1988 「放射性炭素測定年代報告（十五）」『考古』1998-7、
pp. 658-662
- 中國社會科學院考古研究所新疆工作隊·新疆巴音郭楞蒙古自治州文管所 1991 「新疆輪台群巴克
墓葬第二、三次發掘簡報」『考古』1991-8、pp. 684-783
- 中國社會科學院考古研究所新疆隊 2006 「於田縣流水墓地考古發掘簡介」『新疆文物』2006-2、
pp. 38-43
- 中國社會科學院考古研究所新疆隊 2006 「新疆於田縣流水青銅器時代墓地」『考古』2006-7、
pp. 31-38
- 趙化成 1996 「公元前 5 世紀中葉以前中國人工鐵器的發現及其相關問題」、『考古文物研究』
pp. 289-300、三秦出版社
- 張玉忠 1989 「伊犁河谷土墩墓的發現和研究」『新疆文物』1989-3、pp. 14-15
- 陳戈 1989 「新疆出土的早期鐵器」『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』pp. 425-432、文物出版社
- 陳戈 1990 「關於新疆地区的青銅時代和早期鐵器時代文化」『考古』1990-4、pp. 366-374

- 陳戈 1991 「略論焉不拉克文化」『西域研究』1991-1、pp. 81-96
- 陳戈 1993 「新疆察吾呼溝口文化略論」『考古与文物』1993-5、pp. 42-50
- 陳戈 1995 「新疆遠古文化初論」『中亞學刊』4、pp. 5-72
- 陳戈 2001a 「新疆史前時期又一種考古學文化－蘇貝希文化試析」『蘇秉琦与当代中国考古学』、pp. 153-171
- 陳戈 2001b 「察吾呼溝口文化的類型割分和分期問題」『考古与文物』2001-5、pp. 30-39
- 陳戈 2002 「新疆伊犁河流域文化」『歐亞學刊』2002-3、pp. 1-35
- 田広金・郭素新 1986 『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社
- 唐際根 1993 「中国冶鉄術の起源問題」『考古』1993-6、pp. 556-565
- 吐魯番地区博物館・新疆文物考古研究所 1994 「鄯善蘇貝希墓群三號墓地」『新疆文物』1994-2、pp. 1-20
- 吐魯番博物館・新疆文物考古研究所 2002 「新疆鄯善縣蘇貝希遺址及墓地」『考古』2002-6、pp. 522-537
- 吐魯番地区文管所・新疆文物考古研究所 1993 「鄯善蘇貝希墓群一號墓地發掘簡報」『新疆文物』1993-4、pp. 1-13
- 吐魯番地区文物局 1996 「托克遜博斯坦墓群清理簡報」『新疆文物』1996-3、pp. 24-25
- 吐魯番地区文物局・新疆文物考古研究所 2004a 「鄯善縣洋海一號墓地發掘簡報」『新疆文物』2004-1、pp. 1-27
- 吐魯番地区文物局・新疆文物考古研究所 2004b 「鄯善縣洋海二號墓地發掘簡報」『新疆文物』2004-1、pp. 28-49
- 吐魯番地区文物局・新疆文物考古研究所 2004c 「鄯善縣洋海三號墓地發掘簡報」『新疆文物』2004-1、pp. 50-68
- 吐魯番地区文物局・新疆文物考古研究所 2004d 「新疆鄯善縣洋海墓地的考古新收穫」『考古』2004-5、pp. 3-7
- 寧夏文物考古研究所 1993 「寧夏固原楊朗青銅文化墓地」『考古學報』1993-1、pp. 13-56
- 白雲翔 2005 『先秦兩漢鉄器的考古學研究』文物出版社
- 哈密地区文管所・新疆文物考古研究所 1994 「哈密－巴里坤公路改線考古調查」『新疆文物』1994-1、pp. 5-11
- 哈密地区文管所・新疆文物考古研究所 2004 「1996 年哈密黃田上廟爾溝村 I 號墓地發掘簡報」『新疆文物』2004-2、pp. 1-28
- 巴音郭楞蒙古自治州文物保護管理所 1999 「新疆庫爾勒上戶鄉古墓地」『文物』1999-2、pp. 32-40
- 北京科技大学冶金与材料史研究所・新疆文物考古研究所 2000 「新疆克里雅河流域出土金属遺物的冶金学研究」『西域研究』2000-4、pp. 1-11
- 北京市文物管理处 1979 「北京市延慶縣西拔子村窖藏銅器」『考古』1979-3、pp. 227-230
- 北京市文物研究所山戎文化考古隊 1989 「北京延慶軍都山東周山戎部落墓地發掘紀略」『文物』1989-8、pp. 17-35
- 穆瞬英・王明哲・王炳華 1983 「建国三十年新疆考古的主要收穫」『新疆考古三十年』新疆人民出版社、pp. 1 - 26

- 李遇春·柳鳴亮 1982 「新疆吐魯番艾丁湖古墓葬」『考古』1982-4、pp. 365-37
- 李肖 2003 「古代龜茲地區鈹冶遺跡的考察與研究」『新疆文物』2003-3·4、pp. 16-26
- 李文瑛 1997 「哈密焉不拉克墓地單人葬、合葬關係及相關問題探討」『新疆文物』1997-2、
pp. 23-30
- 劉得禎·朱建唐 1981 「甘肅雷台景家莊春秋墓」『考古』1981-4、pp. 298-301
- 柳洪亮 1988 「新疆鄯善縣蘇巴什古墓葬的新發見」『考古』1988-6、pp. 502-506
- 柳洪亮·阿不里木 1984 「新疆鄯善縣蘇巴什古墓葬」『考古』1984-1、pp. 41-55
- 劉學堂 2004 「中國冶鐵術的起源」『中國文物報』2004年4月2日
- 凌勇·梅建軍·李肖·張永兵·呂恩國 2008 「新疆吐魯番地區出土金屬器的科學分析」『吐魯番學
研究』2008- 1、pp. 20-26
- 聯合國教科文組織駐中國代表處·新疆文物事業管理局·新疆文物考古研究所編 1998 『交河故城
- 1993、1994 年度考古發掘報告』東方出版社
- 呂恩國 1999 「察吾呼文化研究」『新疆文物』1999-2·3、pp. 75-86
- 呂恩國·常喜恩·王炳華 2001 「新疆青銅時代考古文化淺論」『蘇秉琦與當代中國考古學』
pp. 172-193
- 和靜縣民族博物館·新疆文物考古研究所 1999 「和靜哈布其罕一號墓地發掘簡報」『新疆文物』
1999-1、pp. 8-24
- 和靜縣民族博物館·新疆文物考古研究所 1999 「和靜拜勒其爾石圍墓發掘簡報」『新疆文物』
1999-3·4、pp. 30-60
- 和靜縣民族博物館·新疆文物考古研究所 2001 「和靜哈布其罕二號墓地發掘簡報」『新疆文物』
2001-3·4、pp. 16-22
- Vokovenko N.A. 2006 The emergence of the Tagar culture, *Antiquity* 80, pp.860-879
- Chlenova Членова Н. Л. 1967 Происхождение и ранняя история племен тагарской культуры,
Москва
- Ermitazh Эрмитаж 2004 Аржан, Санкт-Петербург
- Gryaznov Грязнов М. П. 1980 Аржан, Наука
- Itina Итина, М.А., Яблонский, Л.Т.1997 Саки Нижней Сырдарьи, Росспэн, Москва
- Koryakova, L.N. 2007. The Urals and western Siberia in the bronze and iron ages, Cambridge World
Archaeology
- Mei, Jianjun 2000 *Copper and Bronze Metallurgy in Late Prehistoric Xinjiang*, BAR International Series
865
- Moshkova Мошкова М.Г. 1992 Степная полоса Азиатской части СССР в Скифо-Сарматское
Время, Наука, Москва
- Qian,Wei. Chen,Ge. 2002 The Iron Artifacts unearthed from Yanbulake Cemetery and the Beginning of
Use of Iron in China, Proceedings of BUMA-V (發表要旨), Kyeongju in Korea,
pp.189-194
- Sunchugashev Сунчугашев Я. И. 1979 Древняя металлургия Хакасии эпоха железа, Новосибирск

Badetskaya Бадецкая Э.Б. 1986 Археологические памятники в степях среднего Енисея, Ленинград
Zaitseva, G.I. et al. 1998 A Tree-ring and 14C Chronology of the Key Sayan-Altai Monuments,
Radiocarbon, vol.40, No.1, pp.571-580

図版出典

- 図 47 google map 地形図より筆者作成
- 図 48 - 1-7 新疆維吾爾自治區文化庁文物処 1989、p. 348 図二六 1, 10, 11、p. 346 図二四 8、
p. 344 図二三 1, 2, 3
- 8 北京市文物管理処 1979、p. 229 図四 6
- 9, 10 北京市文物研究所山戎文化考古隊 1989、p. 29 図一九 2, 1
- 図 49 - 1-4 哈密地区文管所他 1994、p. 7 図二 8, 6, 9, 5
- 5-9 哈密地区文管所他 2004、p. 14 図一一 4, 6, 16, 21, 11
- 図 50 吐魯番地区文物局他 2004a、p. 23 図四二 2, 図四三 2, 5
- 図 51 - 1, 2 吐魯番地区博物館他 1994、図一八 9, 6
- 5 吐魯番博物館他 2002、p. 535 図一九 5
- 3, 4, 6-8 吐魯番地区文物局他 2004c、p. 65 図二六 1, 5, 3, 2, 4
- 図 52 - 1-5 新疆文物考古研究所編 1999、p. 151 図一〇四 12、p. 140 図九八 7、p. 144 図一〇〇
9, 11, 12
- 6-7 Gryaznov1980、p. 23 ric. 12-1、p. 30 ric. 16-5
- 図 53 - 1 和静県民族博物館他 1999、p. 21 図一三 32
- 2, 8, 7, 9 中国社会科学院考古研究所新疆隊他 1991、p. 693 図一四 17, 15, 5, 2, 3
- 3, 4, 5, 7 中国社会科学院考古研究所新疆隊他 1991、p. 701 図二四 9, 3, 5, 4
- 10, 11 Chlenova1967、p. 261 tab. 11-1, 2
- 12 Moshkova1992、p. 402 tab. 52-76, 75, 63
- 図 54 - 左：新疆文物考古研究所 2005a、p. 15 図五、p. 23 図二三 10, 図二四 2
- 右：新疆文物考古研究所 2006a、p. 27 図五五、p. 35 図六七 2
- 図 55 新疆維吾爾自治區博物館他 2001、p. 18 挿図四〇 4, 3、p. 13 挿図二八
- 図 56 筆者作成
- 図 57 筆者作成
- 図 58 筆者作成
- 図 59 筆者作成

終章 中央ユーラシア東部における初期鉄器文化の交流

新疆ウイグル自治区（以下、新疆）を中心に、中央ユーラシア東部をとりまく初期の鉄器受容とその後の展開について述べてきた。第1～第4章では、まず導入として東アジアの中心地であった中国中原について言及し（第1章）、次に新疆の周辺に位置する中国北方草原地帯（第2章）、南シベリア（第3章）、セミレチエ（第4章）における初期の鉄器の受容について、資料の収集、整理を行った。第5～第7章では、新疆についての研究動向をまとめるとともに分析対象資料である鉄器の集成を行い（第5章）、年代問題を解決する糸口として鍍の編年を行った（第6章）。そして、自然地理環境により新疆内を6地域に区分し、各地域における鉄器の受容と展開について検討した（第7章）。

各章の論考を通じて、中央ユーラシア東部の初期の鉄器をめぐる交流について以下のように結論できる。

前段階 隕鉄の利用（図 60）

まず、中央ユーラシアにおいて、もっとも早い鉄器の利用は隕鉄に始まる。新疆では該当する時期の鉄器の出土はないが、南シベリアのアファナシェヴォ期、中原の商代中期には隕鉄製品が出土がある。

南シベリアの前期青銅器文化であるアファナシェヴォ文化からは、隕鉄製の装飾品が出土する。また、中国中原地帯においても、商代中期より銅鉄複合器という形で、隕鉄の利用がある。中原においては、単体での隕鉄利用は知られていない。鉄刃銅鉞や鉄援銅内戈など、大型の武器の刃部に利用される。この隕鉄を刃部に装着する方法は、玉刃銅柄器と同様の手法が用いられており、商代の中原において、隕鉄は玉と並ぶ貴重な材料とみなされていたといえる。なお、新疆や中国北方草原地帯では、隕鉄の利用は知られておらず、また、紀元前2千年紀にさかのぼる鉄器の報告はない。

隕鉄はいずれも副葬品の豊かな大型墓から出土している。その点からみると、中央ユーラシア草原・乾燥地帯の青銅器時代である紀元前3千年紀後半～2千年紀中葉において、新疆には、突出した大型墓や、集団埋葬の中でも特に貴族とみなし得る墓の報告はない。青銅器時代前・中期の孔雀河古墓溝墓地や小河墓地はいずれも集団埋葬の墓である。

中央ユーラシア東部において、最初期の鉄利用は西アジアや中央ユーラシア西部と同様隕鉄にはじまる。集団の中でも限られた貴族の墓からのみ鉄器は出土し、装飾品が主体となる。新疆では、隕鉄の報告はない。中央ユーラシア全域においても隕鉄製品は点在した出土状況にある。隕鉄は入手が困難であり、特別な奢侈品として、各地に運ばれたと考えられる。



図 60 前段階 隕鉄利用の拡大

第 I 段階 人工鉄の出現 (図 61)

次の段階は、紀元前 1 千年紀前葉、人工鉄の出現である。新疆ウイグル自治区の第一期 (鏃編年の第 1・2 期)、セミレチエの前期サカ文化、南シベリアの初期遊牧民文化の前期末、内蒙古の隴東・寧夏南部地区第 1 期、中原での西周時代末期から春秋時代中期となる。

新疆鉄利用の第一期に相当する紀元前 9～前 8 世紀のヤンブラク墓地、ヤンハイ I 号墓地、チャウフ IV 墓地第一・二期や、紀元前 7～前 6 世紀のチュンバク墓地などから、鉄製指輪や耳環の鉄製垂飾などの装飾品、また鉄製刀子、鉄製短剣といった武器・工具類が出土している。さらに、銅鉄複合帯扣や銅柄鉄剣といった銅鉄複合器が出土していることも、第 I 段階の大きな特徴といえる。また、分析の結果、ヤンブラク墓地出土の鉄製指輪は塊鍊鉄製であった。器種不明の破片は鋼で、パーライト組織が観察されている。ヤンハイ墓地の鉄製刀子も塊鍊鉄製であった。塊鍊鉄は鍛造加工に適した鉄素材であり、指輪などの鉄製の小型装飾品は鍛造によって成形されている。

鉄器の出土するヤンブラク墓地、ヤンハイ I 号墓地、チャウフ IV 号墓地などは、いずれも新疆における地域文化の標準遺跡となる大型墓地である。大型墓地の中でも副葬品に多寡が生じているが、特にヤンブラク墓地 31 号墓やヤンハイ I 号墓地 5 号墓など、副葬品の豊富な墓から鉄器は出土している。第 I 段階の最終期になるチュンバク墓地からは銅鉄複合短剣が出土する。この短剣は柄頭と透かし彫り状柄、ハート型の鏢が青銅で、長い茎の刃部が鉄製である。これは南シベリアのタガール文化において典型的な銅鉄複合短剣である (第 3 章 5. ミヌシンスク)。青銅武器や工具、馬具から新疆と南シベリアとの交流が密接であった様子はしばしば報告されるが、鉄器利用においても両者の交流を示す資料

である。

新疆の北に位置する南シベリアにおいても、時期的に新疆より若干新しくなるが、前7世紀末のアルジャン2号墳において、金銀象嵌の鉄器や金鉄複合短剣などが出土する。南シベリアにおいても鉄製の装飾品、鉄製の武器などが主な器種である。さらに、アルジャンⅡ号墳において、鉄器が出土しているのは、墓主が安置された主体部の木槨内に限られる。周辺の殉葬墳からは、黄金製品は出土するが鉄器の出土は見られない。鉄が非常に価値の高い金属として扱われていた様子を想定できる。

中国北方草原地帯においても、新疆よりは時代が新しくなるが、春秋中晩期より短剣などの銅鉄複合器や鉄製帯鉤といった装身具としての出土がはじまる。

紀元前1千年紀に出土する鉄器は、人工鉄である。現在の中央ユーラシア東部においては、新疆の出土が最も古い。南シベリアは、紀元前7世紀末が最古となる。しかし、西シベリアや黒海北岸の中央ユーラシア西部においては中期青銅器時代に溯る人工鉄の出現が知られている。そして、新疆から出土した塊錬鉄の利用は、中央ユーラシア西部、西アジアへとつながる冶金技術の系譜上に位置する。西方からの鉄利用の拡大の中で、紀元前1千年紀初頭に新疆まで塊錬鉄製品が到達したといえる。

ただし、新疆や南シベリア、中国北方草原地帯で出土する人工鉄は、出土地の青銅器とほぼ同じ形態であり、装飾や紋様が施される場合、その地の青銅器の装飾と同一系統上にある。よって、人工鉄を受容する最初期の段階において、中央ユーラシアの東部では、材料として鉄を入手し、加工をそれぞれの地域で、青銅冶金の延長上で行ったと考えられる。その中で、各地の青銅器文化の延長上で、鉄製装飾品や銅鉄複合器を製作し、その一部は各地域文化の中でも、副葬品の豊かな王墓や貴族の墓に納められたといえる。

この時点ではその希少さから鉄が貴重品であったと考えられる。金属鉄の輝きは、青銅とは異なる光沢、色調であり、各地で珍しい金属として取り扱われたといえるだろう。新疆をはじめとする中央ユーラシア東部では、鉄が武器や工具としてだけでなく、装飾品あるいは銅鉄複合器や金鉄複合器のバイメタルとして利用されていたのが特徴的である。一方で中央ユーラシア西部の西シベリア、黒海北岸地方では鉄器の利用は武器・工具類が主体である。中央ユーラシア東部においては、西部と比較し、最初期の鉄の入手がさらに限られていたため、限定的な利用として、鉄製装飾品やバイメタル製品として用いられたといえるだろう。

第Ⅱ段階 鉄器利用の拡大 (図 61)

さらに進んで次の段階、紀元前1千年紀中葉になると、鉄器の器種と出土量が各地で増加する。新疆の第二期（鏃編年の第3・4期）、セミレチエの後期サカ文化、南シベリアの初期遊牧民文化の中期、内蒙古の隴東・寧夏南部地区第2・3期、河套・オルドス地区第1・2期、フフホト・岱海地区第1・2期である。中原での春秋時代後期以降になり、この時点より、中央ユーラシアとは発展を異にする。短剣、刀子といった鉄製の武器や工具、

前段階に引き続き、指輪や腕輪、飾板といった鉄製装飾品が新疆、南シベリア、中国北方草原地帯で出現し増加する。南シベリアのタガール文化では、鑄造製品とみなしうる鉄製短剣が出土するが、現時点では資料が少なく議論を保留したい。

また、北京科技大の分析によると、第Ⅱ段階の天山南麓に位置するパプチハン墓地、バルチル墓地、キジル墓地出土の鉄器はいずれも塊錬鉄系統に属するとされる（Qian2002）。技術の系譜は、第Ⅰ段階同様、西方由来と考えられる。現在のところ、新疆や南シベリア、北方草原地帯では明確な鉄の生産址は見つかっていない。やはり、鉄材料、鉄製品を他から取り入れ、現地で加工していたと考えるのが妥当である。

第Ⅱ段階における中央ユーラシア東部の鉄器利用において、併行して青銅武器や青銅工具の利用が続けられる点が最大の特徴である。新疆や南シベリアにおいて、青銅短剣や青銅刀子が鉄製短剣、鉄製刀子を凌ぐ量の出土が見られる。主要な利器の材質を以て時代名称とするならば、この第Ⅱ段階は青銅器時代の終末期にあたるともいえる。ただし、時代が下るに従い鉄器の占める割合は確実に増加している。その意味では、初期鉄器時代と呼ぶ方がふさわしいといえる。

なお、第Ⅱ段階内で鉄器の各器種の出現時期や出土量の増加のスピードは地域差が大きい。新疆内でもトルファン地域などのスバシ文化圏では時代が下るに従い段階的に鉄器が増加するが、天山南麓のチャウフ文化圏では、鉄器の出土量の増加は非常に緩慢で青銅器の主体的な利用が第Ⅱ段階の後半まで長く続く。

また、新疆などの例をみると鉄器の出土する墓は、副葬品は確かに豊富であるが、同一墓地内において周囲より突出した豊かな墓というわけではない。また、鉄釘や鉄針、鉄鏃などにまで鉄利用が拡大しており、第Ⅰ段階と比較し、より鉄器が実用化へと向かっている様相を窺うことができる。同様の傾向は南シベリアや中国北方草原地帯においても見られる。

ただし、第Ⅱ段階で青銅利器の利用が続く背景として、中央ユーラシア東部における青銅材料の豊富な入手の他に、鉄冶金技術の発展上での問題も指摘できる。金属学的な分析によると、第Ⅱ段階の鉄は塊錬鉄製品がみられる。塊錬鉄は炭素量が低く、鍛造性は良いが実用の面で柔らかいとされる鉄材料である。塊錬鉄を硬さとしなやかさを備える鋼の状態にするためには、炭素量の調節という精錬または、大鍛冶と呼ばれる作業が必要である。鋼は炭素量が0.02 - 2%の範囲内であり、含有する炭素が多すぎても少なすぎても、利器としての十分な性能は得られない。おそらく第Ⅱ段階の鉄器は、炭素量の調節が十分に行えていなかったのではないかと考えられる。

なお筆者はこの第Ⅱ段階に属する青銅刀子の復元実験と硬さの測定を行った。マイクロビッカース硬度計の計測結果からみると、冷間鍛造で加工硬化を持たせた青銅刀子は、塊錬鉄や焼き入れをしていない軟鋼とほぼ同程度の強度を備えていた。しかし、焼き入れした軟鋼や硬鋼と比較すると、鋼の方が約1.5 - 2倍の強度を持つことが分かった。中央ユーラシアの草原・乾燥地帯において、初期鉄器時代に使用された青銅武器や工具は、青銅の

性質を最大限に引き出して製作されており、出現当初の人工鉄を凌ぐ性能を備えた金属材料であったといえる。すなわち、中央ユーラシア東部における鉄器利用の第Ⅱ段階は、鉄の実用化が進みつつも、利器としての鉄材料は青銅に及ばない時代であったといえる。

なお、中央ユーラシア西部の西シベリアや黒海北岸地方は、この時期には武器・工具の鉄器化が完了している。中央ユーラシア西部においては、紀元前8世紀には鑄造を除く、製錬、精錬、鋼の生産、その他熱処理の鉄冶金技術がほぼそろそろとされる。中央ユーラシア西部の鉄器優位と東部青銅器優位という鉄をめぐる隔絶した状況は、既に江上波夫が指摘しているとおりである。新疆をはじめとする中央ユーラシア東部では、鉄材料の入手は可能であっても、鋼を得る精錬技術の習得までには至っていない状況を想定できる。

第Ⅲ段階 武器・工具の鉄器化（図61）

第Ⅲ段階は、中央ユーラシア東部全域で武器や工具の鉄器化が完了する。新疆ウイグル自治区の第三期（鏃編年の第5期）、セミレチエの烏孫文化、南シベリアの初期遊牧民文化の後期、内蒙古の隴東・寧夏南部地区第4期、河套・オルドス地区第3期、フフホト・岱海地区第3期となる。漢代併行期である。

第Ⅲ段階になると、新疆だけでなく南シベリアや中国北方草原地帯においても、武器や

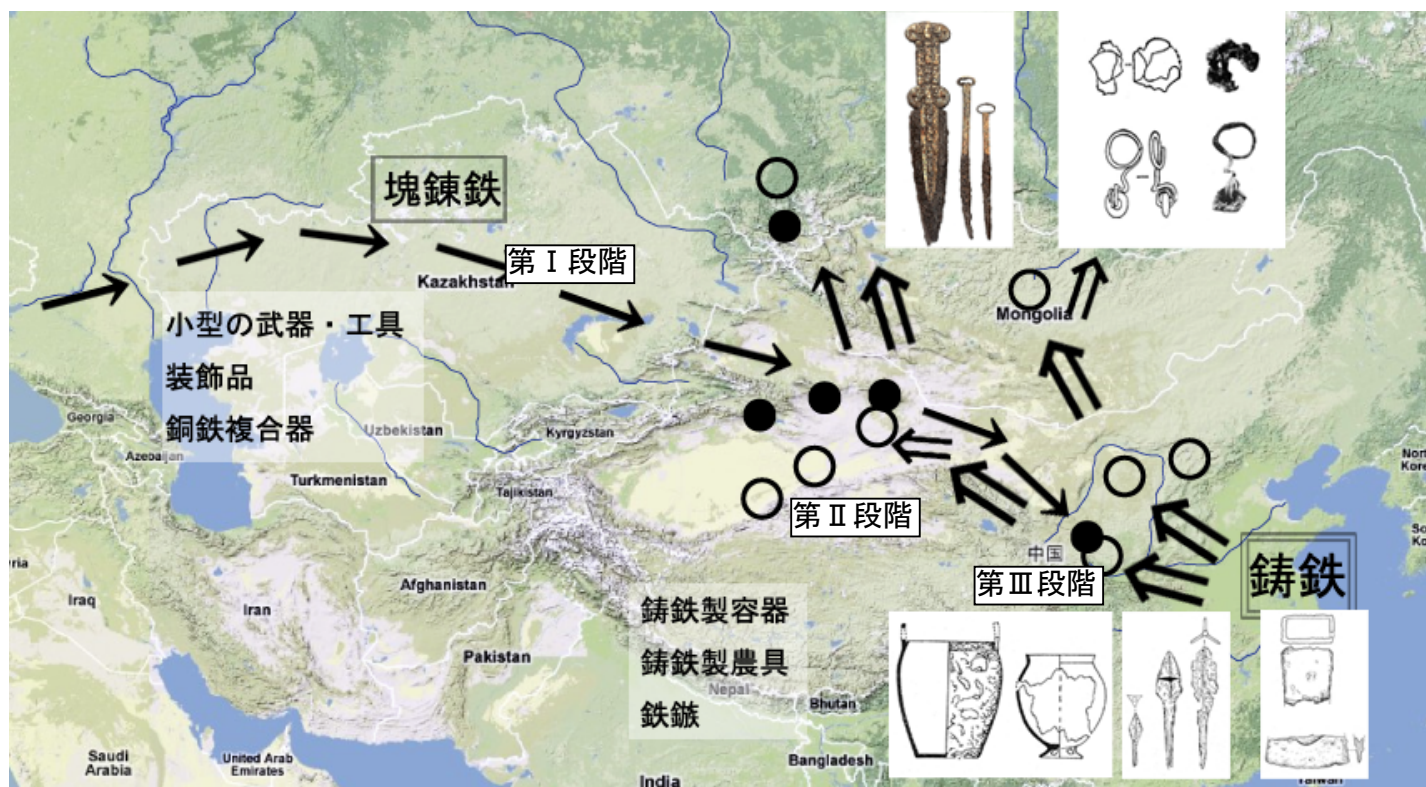


図61 中央ユーラシア東部における人工鉄をめぐる交流

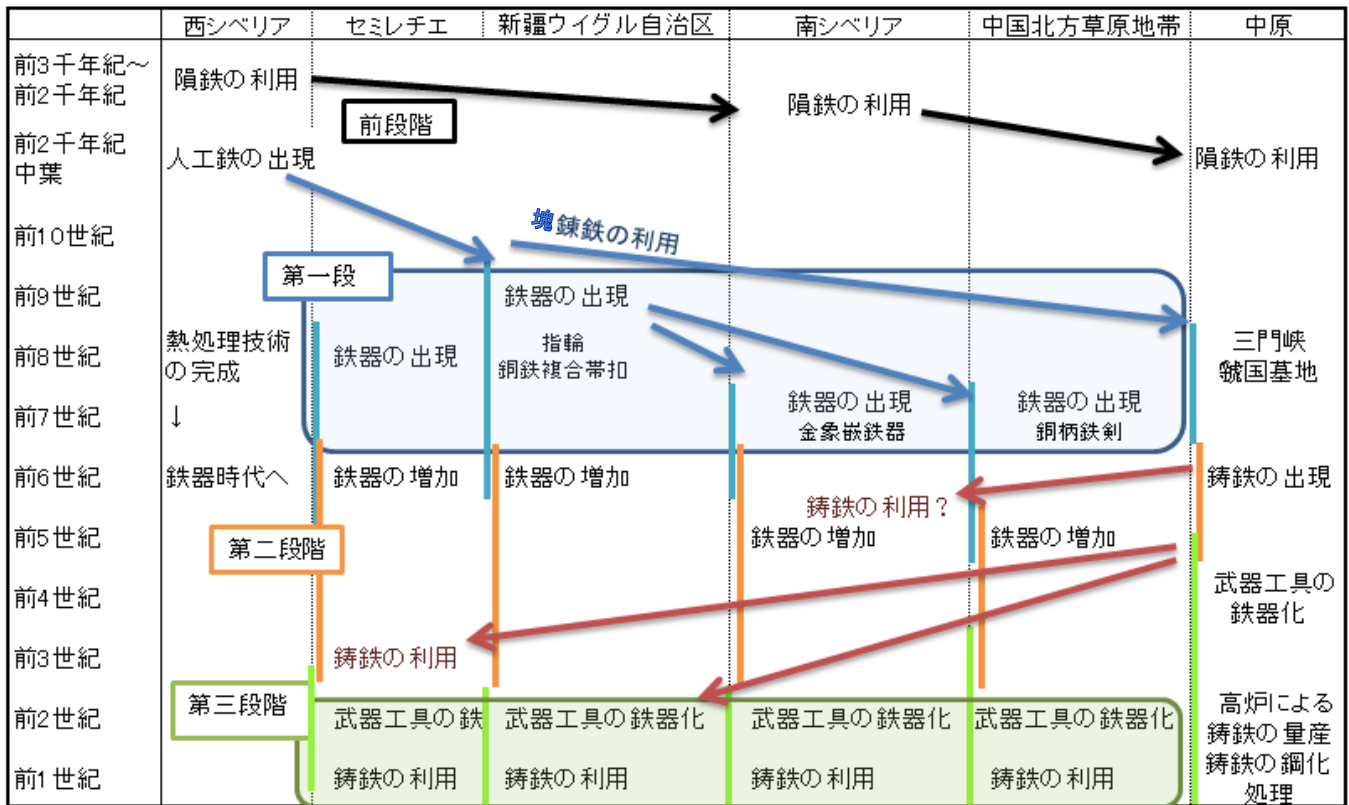


図 62 中央ユーラシア東部における初期鉄器文化の交流

工具といった利器の材質がほぼ青銅製から鉄製へと変化する。出土器種も第Ⅱ段階よりさらに増加する。特に鉄鏃の出土が急増し、第Ⅰ、第Ⅱ段階と比較し、鉄が消耗品的に量産、消費されている様子をうかがうことができる。

また、新たな出現器種として鉄製容器や、特に中国北方草原地帯では鉄製農具など铸铁製品の出土も始まる。铸铁は、中国の戦国から秦漢代に一般化した鉄冶金技術である。これまで新疆などでみられた鍛造加工に適する塊鍊鉄とは、製鉄段階から加工成形にいたるまで、完全に技術系統を異にする。漢代併行期に至ると、中央ユーラシア東部の各地ではほぼ一斉に铸铁の出現がはじまる。

また新疆などで出土する鉄鏃の中には、中原の弩に使用される铸造製の有蓋三角鉄鏃もあり、漢王朝による対外交渉とともに、漢の西域、草原地帯への進出と匈奴との抗争の影響を窺うことができるだろう。

以上、中央ユーラシア東部における鉄器の出現から鉄器化が完了する紀元前1世紀までの様相を4つの段階に分けて整理した(図62)。

図版出典

図 60 google map より筆者作成

図 61 google map より筆者作成

図 62 筆者作成